

源氏物語

桐壺

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）御代^{みよ}

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）深い御一愛寵^{あいぢょう}

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」紫のかがやく花と日の光思ひあはざる

「#地から3字上げ」ことわりもなし （晶子）

どの天皇様の御代^{みよ}であったか、女御^{にょし}とか更衣^{こうい}とかいわれる後宮^{こうきゅう}がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御一愛寵^{あいぢょう}を得ている人があった。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃^{たの}む所があつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてね

たまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬の焰を燃やさないわけもなかった。夜の御殿の宿直所から退る朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜しがらせた恨みのせいもあつたかからだが弱くなつて、心細くなつた更衣は多く実家へ下がつていがちということになると、いよいよ帝はこの人にばかり心をお引かれになるといふ御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影の一所残るようなことにもなりかねない状態になつた。高官たちも殿上役人たちも困つて、御一覚醒になるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御一寵愛ぶりであつた。唐の国でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によつて乱が醸されたなどと蔭ではいわれる。今やこの女性が一天下の煩いだとされるに至つた。馬嵬の駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとつては堪えがたいような苦しい雰囲気の中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言はもう故人であつた。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだつた。

前生の縁が深かつたか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになつた。寵姫を母とした御子を早く御覧になりたい思召しから、正規の日数が立つとすぐに更衣一母子を宮中へお招きになつた。小皇子はいかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになつた。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになつて、重い外戚が背景になつていて、疑いもない未来の皇太子と

して世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌ひぼうにならぶことがおできにならぬため、それは皇家おうけの長子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子あいしとして非常に大事がつておいでになった。更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女きじよと言つてよいほどのりっぱな女ではあつたが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになつて更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになつたりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになつて以後目に立つて重々しくお扱あつかいになつたから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかもしれぬと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持つていた。この人は帝の最もお若い時じゆだいに入内した最初の女御であつた。この女御がする批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかつた。この女御へ済まないという気も十分に持つておいでになつた。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであつた。

住んでいる御殿は御所の中の東北の隅すみのような桐壺きりつぼであつた。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊ろうを通い路みちにして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直とくいをする更衣が上がり下がりして行く桐壺であつたから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量かさんでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがさ

れて、送り迎えをする女房たちの着物の裾が一度でいたんでしまうようなことがあったりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあったり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合わせて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるようなことなどもしばしばあった。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめいらせているのを御覧になると帝はいつそう憐れを多くお加えになって、清涼殿に続いた後涼殿に住んでいた更衣をほかへお移しになって桐壺の更衣へ休息室としてお与えになった。移された人の恨みはどの後宮よりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになった時に袴着の式が行なわれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬような派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌と聡明さとが類のないものであったから、だれも皇子を悪く思うことはできなかつた。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。その年の夏のことである。御息所 皇子女の生母になった更衣はこう呼ばれるのである。はちよつとした病氣になつて、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかつた。どこかからだが悪いということはこの人の常のことになつていたら、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみたらにすがるがよい」

と言つておいでになるうちに病は重体になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな

呪詛^{じゆそ}が行なわれるかもしれない、皇子にまで禍^{わざわ}いを及ぼしてはどの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目だたぬように御息所だけが退出するのであった。この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになった。

はなやかな顔だちの美人が非常に瘦^やせてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗^{まつくら}になつた気があそばすのであつた。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうで、平生からなよなよとした人がいつそう弱々しいふうになつて寝ているのであつたから、これはどうなることであろうという不安が大御心^{おみこころ}を襲うた。更衣が宮中から輦車^{れんしゃ}で出てよい御許可の宣旨^{せんじ}を役人へお下しになったりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家^{うち}へ行つてしまふことはできないはずだ」と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非常に悲しそうにお顔を見て、

「#ここから1字下げ」

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

「#ここで字下げ終わり」

死がそれほど私に迫って来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言つて、なお帝にお言ひしたいことがあるそうであるが、まったく気力はなくなつてしまつた。死ぬのであつたらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召したが、今日から始めるはずの祈禱も高僧たちが承つていて、それもせひ今夜から始めねばなりませんというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお歸しになつた。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになつてお眠りになることが困難であつた。歸つた更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ歸つて来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去かくれになりました」

と言つて、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ歸つて来た。

更衣の死をお聞きになつた帝のお悲しみは非常で、そのまま引きこもつておいでになつた。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢けがれのやかましい宮中においでになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになつた。皇子はどんな大事があつたともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流ればかりいるのだけを不思議にお思ひになるふうであつた。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものではなかつた。

どんなに惜しい人でも遺骸いがいは遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになつて、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙に

なりたいと泣きこがれていた。そして葬送の女房の車にしいて望んでいっしょに乗って愛宕の野にいかめしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに悲しかったであろう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない私の迷いをさますために行く必要があります」

と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまいそうに泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。

宮中からお使いが葬場へ来た。更衣に三位を贈られたのである。

勅使がその宣命を讀んだ時ほど未亡人にとって悲しいことはなかった。三位は女御に相当する位階である。生きていた日に女御とも言わせなかつたことが帝には残り多く思召されて贈位を賜わつたのである。こんなことででも後宮のある人々は反感を持った。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことのできなかつた人であると、今になって桐壺の更衣の真価を思い出していた。

あまりにひどい御一殊寵ぶりであつたからその当時は嫉妬を感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。優しい同情深い女性であつたのを、帝付きの女官たちは皆恋しがっていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合のことであろうと見えた。時は人の悲しみにかかりもなく過ぎて七日七日の仏事が次々に行なわれる、そのたびに帝からはお弔いの品々が下された。

愛人の死んだのちの日がたつていくにしたがつてどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであつて、女御、更衣を宿直に召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であつて、拝見する人までがしめつばい心になる秋であつた。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ぶりね」

などと言つて、右大臣の娘の弘徽殿こうきでんの女御にょじなどは今さえも嫉妬を捨てなかつた。帝は一の皇子を御覧になつても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになつて、親しい女官や、御自身のお乳母めのとなどをその家へおつかわしになつて若宮の様子を報告させておいでになつた。

野分のわきふうに風が出て肌寒はださむの覚えられる日の夕方に、平生よりもいっそう故人がお思われになつて、鞆負ゆげいの命婦みよひづという人を使いとしてお出しになつた。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深い物思いをしておいでになつた。以前にこうした月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わつてすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠よむ歌なども平凡ではなかつた。彼女の幻は帝のお目に立ち添つて少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのである。

命婦は故一だいなごん大納言家に着いて車が門から中へ引き入れられた刹那せつなからもう言いようのない寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居すまいの外見などにもみすばらしさが無いようにと、りっぱな体裁を保つて暮らしていたのであるが、子を失つた女主人おんなあるじの無明むみょうの日が続くようになってからは、しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く高くなつた。またこのごろの野分の風でいっそう邸内が荒れた気のするのであつたが、月光だけは伸びた草にもさわらずさし込んだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにもものが言えないほどまたも悲しみに胸をいっばいにしていた。「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使いが荒ら屋はらへおいでくださるとまたいっそう自分が恥ずかしくてなりません」

と言つて、實際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへ上がりますと、またいつそうお気の毒になりました、魂も消えるようでございますと、先日一典侍なごしのおとせは陛下へ申し上げていらつしやいましたが、私のようなあさはかな人間でもほんとうに悲しさが身にしみます」

と言つてから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

「当分夢ではないであろうかというようにばかり思われましたが、ようやく落ち着くとともに、どうしようもない悲しみを感じるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめて話し合う人があればいいのですがそれありません。目だためようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見ずにいて気がかりでないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中においてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい」

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返つておいでになつて、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子がお気の毒で、ただおおよそだけを承つただけでまいりました」

と言つて、また帝のお言ことづてのほかの御消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなつておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」

未亡人はお文ふみを拝見するのであつた。

「#ここから1字下げ」

時がたてば少しは寂しさも紛れるであろうかと、そんなことを頼みにして日を送つていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困つたことである。どうしているかとばかり思いやっている小兒こども

も、そろった両親に育てられる幸福を失ったものであるから、子を失ったあなたに、せめてその子の代わりとして面倒を見てやってくれることを頼む。

「#ここで字下げ終わり」

などこまごまと書いておありになった。

「#ここから2字下げ」

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が上を思ひこそやれ

「#ここで字下げ終わり」

という御歌もあつたが、未亡人はわき出す涙が妨げて明らかには拝見することができなかった。

「長生きをするからこうした悲しい目にもあうのだと、それが世間の人の前に私をきまり悪くさせることなのでございますから、まして御所へ時々上がることなどは思いもよらぬことでございます。もつたいない仰せを伺っているのですが、私が伺候いたしますことは今後も実行はできないでございましょう。若宮様は、やはり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所へ早くおはいにになりたい御様子をお見せになりますから、私はごもつともだとおかわいそうに思っておりますということなどは、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申し上げてくださいませ。良人も早く亡くしますし、娘も死なせてしまいましたような不幸づくめの私が御いっしょにおりますことは、若宮のために縁起のよろしくないことと恐れ入っております」

などと言った。そのうち若宮ももうお寝みになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしく御様子も陛下へ御報告したいのでございますが、使いの私の帰りますのをお待ちかねでもいらっしゃいますでしょうか、それではあまりおそくなるでございましょう」

と言つて命婦は歸りを急いだ。

「子をなくしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさせていたただきたいのですから、公のお使いでなく、気楽なお気持ちでお休みがてらまたお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使いにおいでくださいましたのでしたが、こんな悲しい勅使であなたをお迎えするとは何ということでしょう。返す返す運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生まれました時から親たちに輝かしい未来の望みを持たせました子で、父の大納言だいなごんはいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思ったことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといって今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、何度も何度も遺言いたしました、確かな後援者なしの宮仕えは、かえつて娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いながら、私にいたしましたはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光でみすばらしさも隠していただいて、娘はお仕えしていたのでしようが、皆さんの御嫉妬の積もつていくのが重荷になりました、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深い御愛情がかえつて恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたしません」

こんな話をまだ全部も言わないで未亡人は涙でむせ返ってしまつ

たりしているうちにますます深更になった。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながらあまりに穩やかでないほどの愛しようをしたのも前生の約束で長くはいつしよにおられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自分らは恨めしい因縁でつながれていたのだ、自分は即位してから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかったという自信を持っていたが、あの人によって負ってならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなものを失って、悲しみにくれて以前よりももっと愚劣な者になっているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであったか知りたいとお話しになって湿っぽい御様子ばかりをお見せになっています」

「どちらも話すことにきりが無い。命婦は泣く泣く、もう非常に遅いようですから、復命は今晚のうちにいたしたいと存じますから」

「と言って、帰る仕度をした。落ちぎわに近い月夜の空が澄み切った中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すような虫の音がするのであるから帰りにくい。」

「#ここから2字下げ」

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜飽かず降る涙かな

「#ここで字下げ終わり」

車に乗ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「#ここから1字下げ」

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人
 「#ここで字下げ終わり」

かえって御訪問が恨めしいと申し上げたいほどです」
 と未亡人は女房に言わせた。意匠を凝らせた贈り物などする場合でなかったから、故人の形見ということにして、唐衣と裳の一揃えに、髪上げの用具のはいつた箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのはむろんであるが、宮中住まいをしながら、寂しく物足らず思われることが多く、お優しい帝の御様子を思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにと促すのであるが、不幸な自分がこいつしよに上がっていることも、また世間に批難の材料を与えるようなものであるうし、またそれかといって若宮とお別れしている苦痛にも堪えきれぬ自信がないと未亡人は思うので、結局若宮の宮中入りは実行性に乏しかった。

御所へ帰った命婦は、まだ宵のままで御寢室へはいつておいでにならない帝を気の毒に思った。中庭の秋の花の盛りなを愛していらつしやるふうをあそばして凡庸でない女房四、五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであった。このごろ始終帝の御覧になるものは、玄宗皇帝と楊貴妃の恋を題材にした白楽天の長恨歌を、亭子院が絵にあそばして、伊勢や貫之に歌をお詠ませになった巻き物で、そのほか日本文学でも、支那のでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みになった。帝は命婦にこまごまと大納言家の様子をお聞きになった。身にしむ思いを得て来たことを命婦は外へ声をはばかりながら申し上げた。未亡人の御返事を帝は御覧になる。

「#ここから1字下げ」

もつたいなさをどう始末いたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せを承りましても愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

「#ここから2字下げ」

荒き風防ぎし蔭かげの枯れしより小萩こはぎが上ぞしづ心無き

「#ここで字下げ終わり」

というような、歌の価値の疑わしいようなものも書かれてあるが、悲しみのために落ち着かない心で詠よんでいるのであるからと寛大に御覧になった。帝はある程度まではおさえたいねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。はじめて桐壺とうすの更衣こういの上がつて来たころのことなどまでがお心の表面に浮かび上がってきてはいっそう暗い悲しみに帝をお誘いした。その当時しばらく別れているということさえも自分にはつらかったのに、こうして一人でも生きていられるものであると思うと自分は偽り者のような気がするるとも帝はお思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦勞して実行した未亡人への酬むくいは、更衣を後宮の一段高い位置にすえることだ、そうしたいと自分はいつも思っていたが、何もかも皆夢になった」

とお言いになって、未亡人に限りない同情をしておいでになった。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日が来れば、故人きんじんに後の位を贈ることもできる。それまで生きていたいとあの夫

人は思っているだろう」

などという仰せがあつた。命婦は贈られた物を御前へ並べた。これが唐の幻術師が他界の楊貴妃に逢つて得て来た玉の簪であつたらと、帝はかないこともお思いになつた。

「#ここから2字下げ」

尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

「#ここで字下げ終わり」

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描いたものでも、絵における表現は限りがあつて、それほどすぐれた顔も持っていない。太液の池の蓮花にも、未央宮の柳の趣にもその人は似ていたであろうが、また唐の服装は華美ではあつたであろうが、更衣の持った柔らかい美、艶な姿態をそれに思い比べて御覧になると、これは花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであつた。お二人の間はいつも、天に在つては比翼の鳥、地に生まれれば連理の枝という言葉で永久の愛を誓つておいでになつたが、運命はその一人に早く死を与えてしまつた。秋風の音にも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになる時、弘徽殿の女御はもう久しく夜の御殿の宿直にもお上がりせずについて、今夜の月明に更けるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このころの帝のお心持ちをよく知っている殿上役人や帝付きの女房なども皆弘徽殿の楽音に反感を持つた。負けぎらいな性質の人で更衣の死などは眼中にないというふうをわざと見せているのであつた。

月も落ちてしまつた。

「#ここから2字下げ」

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿

「#ここで字下げ終わり」

命婦が御報告した故人の家のことをなお帝は想像あそばしながら起きておいでになった。

右近衛府の土官が宿直者の名を披露するのをもってすれば午前二時になったのであろう。人目をおはばかりになって御寢室へおはいいりになってからも安眠を得たもうことはできなかつた。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合つた昔の御追憶がお心を占めて、寵姫の在つた日も亡いのちも朝の政務はお怠りになることになる。お食欲もない。簡単な御朝食はしるしだけお取りになるが、帝王の御一朝餐として用意される大床子のお料理などは召し上がらないものになっていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態を歎いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困つたことであると歎いた。よくよく深い前生の御縁で、その当時は世の批難も後宮の恨みの声もお耳には留まらず、その人に関する事だけでは正しい判断を失つておしまひになり、また死んだあとではこうして悲しみに沈んでおいでになって政務も何もお顧みにならない、国家のためによくはないことであるといつて、支那の歴朝の例までも引き出して言う人もあつた。

幾月かのちに第二の皇子が宮中へおはいりになつた。ごく小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備わつた方であつたが、今はまたいつそう輝くほどのものに見えた。その翌年

立太子のことがあった。帝の思召おもほしめしは第二の皇子にあったが、だれという後見の人がなく、まただれもが肯定しないことであるのを悟さとつておいでになつて、かえつてその地位は若宮の前途を危険にするものであるとお思いになつて、御心中をだれにもお洩もらしにならないなかつた。東宮におなりになつたのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおできにならないのだと世間も言い、弘徽殿こうきでんの女御にょごも安心した。その時から宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかには希望もないと言つて一心に御仏みほとけの来迎らいじゆうを求めて、とうとう亡なくなつた。帝はまた若宮が祖母を失われたことでお悲しみになつた。これは皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に逢あつた時とは違い、皇子は祖母の死を知つてお悲しみになつた。今まで始終お世話を申していた宮とお別れするのが悲しいということばかりを未亡人は言つて死んだ。

それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになつた。七歳の時に書初めふみはじめの式が行なわれて学問をお始めになつたが、皇子の類るいのない聡明そうめいさに帝はお驚きになることが多かつた。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のいない
 いう点だけででもかわいがつておやりなさい」

と帝はお言いになつて、弘徽殿へ昼間おいでになる時もいっしょにおつれになつたりしてそのまま御簾みすの中にまでもお入れになつた。どんな強さ一方の武士だつても仇敵かきうてだつてもこの人を見ては笑えみが自然にわくであろうと思われる美しい少童せうどうでありになつたから、女御も愛を覚えずにはいられなかつた。この女御は東宮のほかには姫宮をお二人お生みしていたが、その方々よりも第二の皇子のほうが

おきれいであつた。姫宮がたもお隠れにならないで賢い遊び相手としてお扱いになつた。学問はもとより音楽の才も豊かであつた。言えば不自然に聞こえるほどの天才児であつた。

その時分に高麗人が来朝した中に、上手な人相見の者が混じつていた。帝はそれをお聞きになつたが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誠めがあつておできにならず、だれにも秘密にして皇子のお世話役のようになつてゐる右大弁の子のように思わせて、皇子を外人の旅宿する鴻臚館へおやりになつた。

相人は不審そうに頭をたびたび傾けた。

「国の親になつて最上の位を得る人相であつて、さてそれでよいかと拝見すると、そうなることはこの人の幸福な道でない。国家の柱石になつて帝王の輔佐をする人として見てもまた違つたようです」

と言つた。弁も漢学がよくできる官人であつたから、筆紙をもつてする高麗人との問答にはおもしろいものがあつた。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終わろうとする期に臨んで珍しい高貴の相を持つ人に逢つたことは、今さらにこの国を離れがたくすることであるというような意味の作をした。若宮も送別の意味を詩にお作りになつたが、その詩を非常にほめてゐるいろなその国の贈り物をしてたりした。

朝廷からも高麗の相人へ多くの下賜品があつた。その評判から東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高麗の相人との関係に疑いを持った。好遇された点が腑に落ちないのである。聡明な帝は高麗人の言葉以前に皇子の将来を見通して、幸福な道を選ぼうとしておいでになつた。それでほとんど同じことを占つた相人に価値をお認めになつたのである。四品以下の無品親王などで、心細い皇族として

この子を置きたくない、自分の代もいつ終わるかしれぬのであるから、将来に最も頼もしい位置をこの子に設けて置いてやらねばならぬ、臣下の列に入れて国家の柱石たらしめることがいちばんよいと、こうお決めになって、以前にもましていろいろの勉強をおさせになった。大きな天才らしい点の現われてくるのを御覧になると人臣にするのが惜しいというお心になるのであったが、親王にすれば天子に変わろうとする野心を持つような疑いを当然受けそうにお思われになった。上手な運命占いをする者にお尋ねになっても同じような答申をするので、元服後は源姓を賜わって源氏の某なにがしとしようとお決めにになった。

年月がたつても帝は桐壺の更衣との死別の悲しみをお忘れになることができなかった。慰みになるかと思召して美しい評判のある人などを後宮へ召されることもあったが、結果はこの世界には故更衣の美に準ずるだけの人もないのであるという失望をお味わいになっただけである。そうしたころ、先帝 帝の従兄いとこあるいは叔父君おじぎみの第四の内親王でお美しいことをだれも言う方で、母君のお后きさきが大事ないしのすけにしておいでになる方のことを、帝のおそばに奉仕している典侍ないしのすけは先帝の宮廷にいた人で、後の宮へも親しく出入りしていて、内親王の御幼少時代をも知り、現在でもほのかにお顔を拝見する機会を多く得ていたから、帝へお話しした。

「お亡かくれになりましたみやすとどころ御息所の御一容貌おほつらに似た方を、三代も宮廷におりました私すらまだ見たことがございませんでしたのに、後の宮様の内親王様だけがあの方に似ていらつしやいますことにはじめて気がつきました。非常にお美しい方でございます」

もしそんなことがあつたらと大御心おおみこころが動いて、先帝の後の宮へ姫

宮の御入内のことを懇切にお申し入れになった。お后は、そんな恐ろしいこと、東宮のお母様の女御が並みはずれな強い性格で、桐壺の更衣が露骨ないじめ方をされた例もあるのに、と思召して話はそのままになっていた。そのうちお后もお崩れになった。姫宮がお一人で暮らしておいでになるのを帝はお聞きになって、

「女御というよりも自分の娘たちの内親王と同じように思つて世話がしたい」

となおも熱心に入内をお勧めになった。こうしておいでになって、母宮のことばかりを思つておいでになるよりは、宮中の御生活にお歸りになつたら若いお心の慰みにもなろうと、お付きの女房やお世話係の者が言い、兄君の兵部卿親王もその説に御賛成になつて、それで先帝の第四の内親王は当帝の女御におなりになった。御殿は藤壺である。典侍の話のとおりに、姫宮の容貌も身のおとりなしも不思議なまで、桐壺の更衣に似ておいでになった。この方は御身分に批の打ち所がない。すべてごりっぱなものであつて、だれも貶める言葉を知らなかつた。桐壺の更衣は身分と御愛寵とに比例の取れぬところがあつた。お傷手が新女御の宮で癒されたともいえないであろうが、自然に昔は昔として忘れられていくようになり、帝にまた楽しい御生活がかえつてきた。あれほどのこともやはり永久不変でありえない人間の恋であつたのであろう。

源氏の君　　まだ源姓にはなつておられない皇子であるが、やがてそうおなりになる方であるから筆者はこう書く。　　はいつも帝のおそばをお離れしないのであるから、自然どの女御の御殿へも従つて行く。帝がことにしばしばおいでになる御殿は藤壺であつて、お供して源氏のしばしば行く御殿は藤壺である。宮もお馴れになつ

て隠れてばかりはおいでにならなかった。どの後宮でも容貌の自信がなく、入内した者はないのであるから、皆それぞれの美を備えた人たちであったが、もう皆だいたい年がいつていた。その中へ若いお美しい藤壺の宮が出現されてその方は非常に恥ずかしがってなるべく顔を見せぬようになすつても、自然に源氏の君が見ることになる場合もあった。母の更衣は面影も覚えていないが、よく似ておいでになると典侍が言ったので、子供心に母に似た人として恋しく、いつも藤壺へ行きたくなくて、あの方と親しくなりたいという望みが心にあつた。帝には二人とも最愛の妃であり、最愛の御子であつた。

「彼を愛しておやりなさい。不思議なほどあなたとこの子の母とは似ているのです。失礼だと思わずにかわいがってやってください。この子の目つき顔つきがまたよく母に似ていますから、この子とあなたとを母と子と見てもよい気がします」

など帝がおとりなしになると、子供心にも花や紅葉もみぢの美しい枝は、まずこの宮へ差し上げたい、自分の好意を受けていただきたいというこんな態度をとるようになった。現在の弘徽殿の女御の嫉妬しつとの對象は藤壺の宮であつたからそちらへ好意を寄せる源氏に、一時忘れられていた旧怨きゅうえんも再燃して憎しみを持つことになった。女御が自慢にし、ほめられてもおいでになる幼内親王方の美を遠くこえた源氏の美貌びぼうを世間の人は言い現わすために光の君ひかるきみと言つた。女御として藤壺の宮の御一寵愛ちちつあひが並びないものであつたから対句のように作つて、輝く日の宮と一方を申していた。

源氏の君の美しい童形ちやうけいをいつまでも変えたくないように帝は思召したのであつたが、いよいよ十二とじの歳に元服をおさせになることに

なつた。その式の準備も何も帝御自身でお指図さしずになつた。前に東宮の御元服の式を紫宸殿ししんでんであげられた時の派手はでやかさに落とさず、その日官人たちが各階級別々にさずかる饗宴きやうえんの仕度したくを内蔵寮くらじょう、穀倉院などでするのはつまり公式の仕度で、それでは十分でないと思召して、特に仰せがあつて、それらも華麗をきわめたものにされた。

清涼殿は東面しているが、お庭の前のお座敷に玉座いすの椅子がすえられ、元服される皇子の席、加冠役の大臣の席がそのお前にできていた。午後四時に源氏の君が参つた。上で二つに分けて耳の所で輪にした童形の礼髪を結つた源氏の顔つき、少年の美、これを永久に保存しておくことが不可能なのであろうかと惜しまれた。理髪役は大蔵卿おおくらきやうである。美しい髪を短く切るのを惜しく思うふうであつた。帝は御息所みやすどころがこの式を見たならばと、昔をお思い出しになることによつて堪えがなくなる悲しみをおさえておいでになつた。加冠が終つて、いったん休息所きゆうそくじょに下がり、そこで源氏は服を変えて庭上の拜をした。参列の諸員は皆小さい大宮人の美に感激の涙をこぼしていた。帝はまして御自制なされがたい御感情があつた。藤壺の宮をお得になつて以来、紛れておいでになることもあつた昔の哀愁が今一度にお胸へかえつて来たのである。まだ小さくて大人おとなの頭の形になることは、その人の美を損じさせはしないかという御懸念もおありになつたのであるが、源氏の君には今驚かれるほどの新彩が加わつて見えた。加冠の大臣には夫人の内親王との間に生まれた令嬢があつた。東宮から後宮にとお望みになつたのをお受けせずにお返辞へんじを躊躇ちゆうちよしていたのは、初めから源氏の君の配偶者に擬していたからである。大臣は帝の御意向をも伺つた。

「それでは元服したのちの彼を世話する人もいることであるから、

その人をいっしょにさせればよい」

という仰せであつたから、大臣はその実現を期していた。

今日の侍所たむごころになつてゐる座敷で開かれた酒宴に、親王方の次の席へ源氏は着いた。娘の件を大臣がほのめかしても、きわめて若い源氏は何とも返辞をすることができないのであつた。帝のお居間のほうから仰せによつて内侍ないしが大臣を呼びに来たので、大臣はすぐに御前へ行つた。加冠役としての下賜品はおそばの命婦が取り次いだ。白い大袿おおきに帝のお召し料のお服がひとかさね一襲で、これは昔から定まつた品である。酒杯を賜わる時に、次の歌を仰せられた。

「#ここから2字下げ」

いときなき初元結ひに長き世を契る心は結びこめつや

「#ここで字下げ終わり」

大臣の女むすめとの結婚にまでお言い及ぼしになつた御製は大臣を驚かした。

「#ここから2字下げ」

結びつる心も深き元結ひに濃き紫の色しあせずば

「#ここで字下げ終わり」

と返歌を奏上してから大臣は、清涼殿せいりょうでんの正面の階段かたはしを下がつて拝礼をした。左馬寮ひだりまじょうの御馬と蔵人所くらにんじょうの鷹たかをその時に賜わつた。そのあとで諸員が階前に出て、官等に従つてそれぞれの下賜品を得た。この日の御一饗宴ききうえんの席の折り詰めのお料理、籠詰めかごの菓子などは皆一

右大弁^{うだいべん}が御命令によつて作つた物であつた。一般の官吏に賜う弁当の數、一般に下賜される絹を入れた箱の多かつたことは、東宮の御元服の時以上であつた。

その夜源氏の君は左大臣家へ婿になつて行つた。この儀式にも善美は尽くされたのである。高貴な美少年の婿を大臣はかわいく思つた。姫君のほう少し年上であつたから、年下の少年に配されたことを、不似合いに恥ずかしいことに思つていた。この大臣は大きい勢力を持った上に、姫君の母の夫人は帝の御同胞であつたから、あくまでもはなやかな家である所へ、今度また帝の御愛子の源氏を婿に迎えたのであるから、東宮の外祖父で未来の関白と思われている右大臣の勢力は比較にならぬほど氣押^{けお}されていた。左大臣は何人かの妻妾^{さいせつ}から生まれた子供を幾人も持つていた。内親王腹のは今一蔵^{くら}人少将^{うと}であつて年少の美しい貴公子であるのを左右大臣の仲はよくないのであるが、その蔵人少将をよその者に見ていることができず、大事にしている四女の婿にした。これも左大臣が源氏の君をたいせつがるのに劣らず右大臣から大事な婿君としてかしずかれていたのはよい一対のうるわしいことであつた。

源氏の君は帝がおそばを離しにくくあそばすので、ゆつくりと妻の家に行つてゐることもできなかつた。源氏の心には藤壺^{ふじつぼ}の宮の美が最上のものに思われてあのような人を自分も妻にしたい、宮のような女性はもう一人とないであろう、左大臣の令嬢は大事にされて育つた美しい貴族の娘とだけはうなずかれるがと、こんなふうに思われて単純な少年の心には藤壺の宮のことばかりが恋しくて苦しいほどであつた。元服後の源氏はもう藤壺の御殿^{みす}の中へは入れていただけなかつた。琴や笛の音^ねの中にその方がお弾^ひきになる物の

声を求めるとか、今はもう物越しにより聞かれぬほのかなお声を聞くとかが、せめてもの慰めになって宮中の宿直ばかりが好きだった。五、六日御所にいて、二、三日大臣家へ行くなど絶え絶えの通い方を、まだ少年期であるからと見て大臣はとがめようとも思わず、相も変わらず婿君のかしずき騒ぎをしていた。新夫婦付きの女房はことにすぐれた者をもっていたり、気に入らぬ遊びを催したり、一所懸命である。御所では母の更衣のものと桐壺を源氏の宿直所にお与えになって、御息所に侍していた女房をそのまま使わせておいでになった。更衣の家のほうは修理の役所、内匠寮などへ帝がお命じになって、非常なりっぱなものに改築されたのである。もともと築山のあるよい庭のついた家であったが、池なども今度はずっと広くされた。二条の院はこれである。源氏はこんな気に入った家に分の理想どおりの妻と暮らすことができたらと思っただけで始終一歎息を
 していた。

光の君という名は前に鴻臚館へ来た高麗人が、源氏の美貌と天才をほめてつけた名だとそのころ言われたそうである。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年4月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

帚木

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例） 皐月さつき

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例） 皆一宿直とのいする

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例） 「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」中川の皐月さつきの水に人似たりかたればむ

「#地から3字上げ」せびよればわななく （晶子）

光源氏ひかるげんじ、すばらしい名で、青春を盛り上げてできたような人が思われる。自然奔放な好色生活が想像される。しかし実際はそれよりずっと質素じみな心持ちの青年であった。その上恋愛という一つのこと
で後世へ自分が誤って伝えられるようになってはと、異性との交渉

をずいぶん内輪にしていたのであるが、ここに書く話のような事が伝わっているのは世間がおしゃべりであるからなのだ。自重してまじめなふうの源氏は恋愛風流などには遠かった。好色小説の中の交野の少将などには笑われていたであろうと思われる。

中将時代にはおもに宮中の宿直所に暮らして、時たまにしか舅の左大臣家へ行かないので、別に恋人を持っているかのような疑いを受けていたが、この人は世間にざらにあるような好色男の生活はきらいであつた。まれには風変わりな恋をして、たやすい相手でない人に心を打ち込んだりする欠点はあつた。

梅雨のころ、帝の御謹慎日が幾日かあつて、近臣は家へも帰らずに皆一宿直する、こんな日が続いて、例のとおりに源氏の御所住まいが長くなつた。大臣家ではこうして途絶えの多い婿君を恨めしくは思っていたが、やはり衣服その他一贅沢を尽くした新調品を御所の桐壺へ運ぶのに倦むことを知らなんだ。左大臣の子息たちは宮中の御用をするよりも、源氏の宿直所への勤めのほうが大事なふうだつた。そのうちでも宮様腹の中将は最も源氏と親しくなつていて、遊戯をするにも何をするにも他の者の及ばない親交ぶりを見せた。大事がる舅の右大臣家へ行くことはこの人もきらいで、恋の遊びのほうが好きだつた。結婚した男はだれも妻の家で生活するが、この人はまだ親の家のほうにりっぱに飾った居間や書齋を持っていて、源氏が行く時には必ずついて行って、夜も、昼も、学問をするのも、遊ぶのもいっしょにしていた。謙遜もせず、敬意を表することも忘れるほどびったりと仲よしになつていた。

五月雨がその日も朝から降つていた夕方、殿上役人の詰め所もあり人影がなく、源氏の桐壺も平生より静かな気のする時に、灯を

近くともしているいろいろな書物を見てみると、その本を取り出した置き柵だなにあつた、それぞれ違った色の紙に書かれた手紙の殻からの内容を頭中將ウチノボウシウは見たがつた。

「無難なのを少しは見せてもいい。見苦しいのがありますから」と源氏は言っていた。

「見苦しくないかと気になさるのを見せていただきたくたいのですよ。平凡な女の手紙なら、私には私相当に書いてよこされるのがありませんからいいんです。特色のある手紙ですね、怨みを言っているとか、ある夕方に来てほしそうに書いて来る手紙、そんなのを拝見できたらおもしろいだろうと思うのです」

と恨まれて、初めからほんとうに秘密な大事の手紙などは、だれが盗んで行くか知れない柵などに置くわけもない、これはそれほどの物でないのであるから、源氏は見てもよいと許した。中將は少しずつ読んで見て言う。

「いろんなのがありますね」

自身の想像だけで、だれとか彼とか筆者を当てようとするのであつた。上手じょうずに言い当てるのもある、全然見当違いのことを、それであろうと深く追究したりするものもある。そんな時に源氏はおかしく思いながらあまり相手にならぬようにして、そして上手に皆を中將から取り返してしまつた。

「あなたこそ彼女の手紙はたくさん持っているでしょう。少し見せてほしいものだ。そのあとなら柵だなを全部見せてもいい」

「あなたの御覧になる価値のある物はないでしょうよ」

こんな事から頭中將は女についての感想を言い出した。

「これならば完全だ、欠点がないという女は少ないものであると私

は今やっと気がつきました。ただ上^{うわ}つつらな感情で達者な手紙を書いたり、こちらの言うことに理解を持っていくような利巧^{りこう}らしい人はずいぶんあるでしょうが、しかもそこを長所として取るうとすれば、きっと合格点にはいるという者はなかなかありません。自分が少し知っていることで得意になって、ほかの人を軽蔑^{けいべつ}することのできる厭味^{いやみ}な女が多いんですよ。親がついていて、大事にして、深窓に育っているうちは、その人の片端だけを知って男は自分の想像で十分補って恋をすることになるといふようなこともあるのですね。

顔がきれいで、娘らしくおおようで、そしてほかに用がないのですから、そんな娘には一つくらいの芸の上達が望めないこともありませんからね。それができると、仲に立った人間がいいことだけを話して、欠点は隠して言わないものですから、そんな時にそれはうそだなどと、こちらも空で断定することは不可能でしょう、真実だろうと思つて結婚したあとで、だんだんあらが出てこないわけはありません」

中將がこう言つて歎息^{たんそく}した時に、そんなありきたりの結婚失敗者ではない源氏も、何か心にうなずかれることがあるか微笑をしていった。

「あなたが今言つた、一つくらいの芸ができるというほどのとりえね、それもできない人があるだろうか」

「そんな所へは初めからだれもだまされて行きませんよ、何もとりえのないのと、すべて完全であるのとは同じほどに少ないものでしよう。上流に生まれた人は大事にされて、欠点も目だたないで済みますから、その階級は別ですよ。中の階級の女によつてはじめてわれわれはあざやかな、個性を見せてもらうことができるのだと思ひ

ます。またそれから一段下の階級にはどんな女がいるのだから、まあ私にはあまり興味が持てない」

こう言つて、通を振りまく中将に、源氏はもう少しその観察を語らせたく思つた。

「その階級の別はどんなふうにつけるのですか。上、中、下を何で決めるのですか。よい家柄でもその娘の父は不遇で、みじめな役人で貧しいのと、並み並みの身分から高官に成り上がつていて、それが得意で贅沢な生活をして、初めからの貴族に負けないふうでいる家の娘と、そんなのはどちらへ属させたらいいのだろう」

こんな質問をしている所へ、左馬頭と藤式部丞とが、源氏の謹慎日を共にしようとして出て来た。風流男という名が通つていような人であつたから、中将は喜んで左馬頭を問題の中へ引き入れた。不謹慎な言葉もそれから多く出た。

「いくら出世しても、もとの家柄が家柄だから世間の思わくだつてやはり違う。またもとはいいい家でも逆境に落ちて、何の昔の面影もないことになつてみれば、貴族的な品のいいやり方で押し通せるものではなし、見苦しいことも人から見られるわけだから、それはどちらも中の品ですよ。受領といつて地方の政治にばかり関係している連中の中にもまたいろいろ階級がありましてね、いわゆる中の品として恥ずかしくないのがありますよ。また高官の部類へやつとはいれたくらいの家よりも、参議にならない四位の役人で、世間からも認められていて、もとの家柄もよく、富んでのんきな生活のできている所などはかえつて朗らかなものですよ。不足のない暮らしができるのですから、儉約もせず、そんな空気の家に育つた娘に軽蔑のできないものがたくさんあるでしょう。宮仕えをして思いがけな

い幸福のもとを作ったりする例も多いのですよ」

左馬頭がこう言う。

「それではまあ何でも金持ちでなければならぬんだね」

と源氏は笑っていた。

「あなたらしくないことをおっしゃるものじゃありませんよ」

中将はたしなめるように言った。左馬頭はなお話し続けた。

「家柄も現在の境遇も一致している高貴な家のお嬢さんが凡庸であった場合、どうしてもこんな人ができたのかと情けないことだろうと思います。そうじゃなくて地位に相応なすぐれたお嬢さんであったら、それはたいして驚きませんね。当然ですもの。私らにはよくわからない社会のことですから上の品は省くことにしましょう。こんなこともありません。世間からはそんな家のあることなども無視されているような寂しい家に、思いがけない娘が育てられていたとしたら、発見者は非常にうれしいでしょう。意外であったということも十分に男の心を引く力になります。父親がもういいかげん年寄りで、醜く肥った男で、風采ふうさいのよくない兄を見ても、娘は知れたものだと軽蔑している家庭に、思い上がった娘がいて、歌も上手であったりなどしたら、それは本格的なものではないにしても、ずいぶん興味が持てるでしょう。完全な女の選にははいりにくいでしょうがね」

と言いながら、同意を促すように式部丞のほうを見ると、自身の妹たちが若い男の中で相当な評判になっていることを思っ、それを暗に言っているのだと取って、式部丞は何も言わなかった。そんなに男の心を引く女がいるであろうか、上の品にはいるものらしい女の中にだって、そんな女はなかなか少ないものだと思っにはわかってるがと源氏は思っているらしい。柔らかい白い着物を重ねた

上に、袴はかまは着けずに直衣のうしだけをおおように掛けて、からだを横にしている源氏は平生よりもまた美しくて、女性であつたらどんなにきれいな人だろうと思われた。この人の相手には上の上の品の中から選んでも飽き足りないことであろうと見えた。

「ただ世間の人として見れば無難でも、実際自分の妻にしようとする、合格するものは見つからないものですよ。男だつて官吏になつて、お役所のお勤めというところまでは、だれもできますが、実際適所へ適材が行くということとはむずかしいものですからね。しかしどんなに聡明そうめいな人でも一人や二人で政治はできないのですから、上官は下僚に助けられ、下僚は上に従つて、多数の力で役所の仕事は済みますが、一家の主婦にする人を選ぶのには、ぜひ備えさせねばならぬ資格がいろいろと幾つも必要なのです。これがよくてもそれには適しない。少しは譲歩してもまだなかなか思うような人はない。世間の多数の男も、いろいろな女の間係を作るのが趣味ではなくても、生涯せいごうの妻を捜す心で、できるなら一所懸命になつて自分で妻の教育のやり直しをしたりなどする必要のない女はないかとだれも思うのでしょうか。必ずしも理想に近い女ではなくても、結ばれた縁に引かれて、それと一生を共にする、そんなのはまじめな男に見え、また捨てられない女も世間体がよいことになります。しかし世間を見ると、そう都合よくはいっていませんよ。お二方のような貴公子にはまして対象になる女があるものですか。私などの気楽な階級の者の中にも、これと打ち込んでいいのはありませんからね。見苦しくもない娘で、それ相応な自重心を持つていて、手紙を書く時にはあしで蘆手のような簡単な文章を上手に書き、墨色のほのかな文字で相手を引きつけて置いて、もつと確かな手紙を書かせたいと男を

あせらせて、声が聞かれる程度に接近して行つて話そうとしても、息よりも低い声で少ししかものを言わないというようなのが、男の正しい判断を誤らせるのですよ。なよなよとしていて優し味のある女だと思つと、あまりに柔順すぎたりして、またそれが才気を見せれば多情でないかと不安になります。そんなことは選定の最初の関門ですよ。妻に必要な資格は家庭を預かることですから、文学趣味とかおもしろい才気などはなくてもいいようなものですが、まじめ一方で、なりふりもかまわないで、額髪ひたいがみをうるさがつて耳の後ろへはさんでばかりいる、ただ物質的な世話だけを一所懸命にやいてくれる、そんなのではね。お勤めに出れば出る、帰れば帰るで、役所のこと、友人や先輩のことなどで話したいことがたくさんあるんですから、それは他人には言えません。理解のある妻に話さないではつまりません。この話を早く聞かせたい、妻の意見も聞いて見たい、こんなことを思つていとそとでも独笑ひとりえみが出ますし、一人で泣くまれもします。また自分のことでないことに公憤を起こしまして、自分の心にだけ置いておくことに我慢のできぬような時、けれども自分の妻はこんなことのわかる女でないのだと思つと、横を向いて一人で思い出し笑いをしたり、かわいそうなものなどと独言ひとりごとを言うようになります。そんな時に何なんですかと突つ慳貪けんどんに言つて自分の顔を見る細君などはたまらないではありませんか。ただ一概に子供らしくておとなしい妻を持った男はだれでもよく仕込むことに苦心するものです。たよりなくは見えても次第に養成されていく妻に多少の満足を感じるものです。一緒にいっしょいる時は可憐さが不足を補つて、それでも済むでしょうが、家を離れている時に用事を言つてやりましても何ができましよう。遊戯も風流も主婦としてすること

も自発的には何もできない、教えられただけの芸を見せるにすぎないような女に、妻としての信頼を持つことはできません。ですからそんなのもまただめです。平生はしつくりといかぬ夫婦仲で、淡い憎しみも持たれる女で、何かの場合によい妻であることが痛感されるのもあります」

こんなふうな通な左馬頭にも決定的なことは言えないと見えて、深い歎息ためいきをした。

「ですからもう階級も何も言いません。容貌かみじようもどうでもいいとします。片よつた性質でさえなければ、まじめで素直な人を妻にすべきだと思います。その上に少し見識でもあれば、満足して少しの欠点はあるにしてもよいことにするのですね。安心のできる点が多ければ、趣味の教育などはあとからできるものですよ。上品ぶって、恨みを言わなければならぬ時も知らぬ顔で済ませて、表面は賢女らしくしていても、そんな人は苦しくなってしまうと、凄文句すこもんくや身にしませる歌などを書いて、思い出してもらえる材料に残して、遠い郊外とか、まったく世間と離れた海岸とかへ行ってしまう。子供の時に女房などが小説を読んでいるのを聞いて、そんなふうの女主人公に同情したものでしてね、りっぱな態度だと涙までもこぼしたものです。今思うとそんな女のやり方は軽佻けいちょうで、わざとらしい。自分を愛していた男を捨てて置いて、その際にちよつとした恨めしいことがあっても、男の愛を信じないように家を出たりなどして、無用の心配をかけて、そうして男をためそうとしているうちに取り返しのならぬはめに至ります。いやなことです。りっぱな態度だなどとはめたてられると、図に乗ってどうかすると尼なんかにもなります。その時はきたない未練は持たずに、すっかり恋愛を清算した

気でいますが、まあ悲しい、こんなにまであきらめておしまいになつてなどと、知つた人が訪問して言い、真底から憎くはなつていない男が、それを聞いて泣いたという話などが聞こえてくると、召使や古い女房などが、殿様はあんなにあなたを思つていらつしやいますのに、若いおからだを尼になどしておしまいになつて惜しい。こんなことを言われる時、短くして後ろ梳すきにしてしまつた額髪に手が行つて、心細い気になると自然に物思ものいをするようになります。忍んでももう涙を一度流せばあとは始終泣くことになります。御弟みで子こになつた上でこんなことでは仏様も未練をお憎みになるでしょう。俗であつた時よりもそんな罪は深くて、かえつて地獄へも落ちるよおとうに思われます。また夫婦の縁が切れずに、尼にはならず、良人に連れもどされて来ても、自分を捨てて家出をした妻であることを良人に忘れてもらうことはむずかしいでしょう。悪くてもよくてもいっしょにいて、どんな時もこんな時も許し合つて暮らすのがほんとうの夫婦でしょう。一度そんなことがあつたあとでは真実の夫婦愛がかえつてこないものです。また男の愛がほんとうにさめている場合に家出をしたりすることは愚かですよ。恋はなくなつていても妻であるからと思つていっしょにいてくれた男から、これを機会に離縁を断行されることにもなります。なんでも穏やかに見て、男にほかの恋人ができた時にも、全然知らぬ顔はせずに感情を傷つけない程度の怨うらみを見せれば、それでまた愛を取り返すことにもなるものです。浮気うわきな習慣は妻次第でなおつていくものです。あまりに男に自由を与えすぎる女も、男にとっては気楽で、その細君の心がけがかわいく思われそうではありますが、しかしそれもですね、ほんとうは感心のできかねる妻の態度です。つながれない船は浮き歩くと

いうことになるじゃありませんか、ねえ」

中将はうなずいた。

「現在の恋人で、深い愛着を覚えていながらその女の愛に信用が持てないということはよくない。自身の愛さえ深ければ女のあやふやな心持ちも直して見せることができるはずだが、どうだろうかね。」

方法はほかにありませんよ。長い心で見えていくだけですな」

と頭中将は言つて、自分の妹と源氏の中はこれに当たっているはずだと思うのに、源氏が目を閉じたままで何も言わぬのを、物足らずも口惜しくも思った。左馬頭は女の品定めさまのかみの審判者であるというような得意な顔をしていた。中将は左馬頭にもつと語らせたい心があつてしきりに相槌あいづちを打っているのであつた。

「まあほかのことにして考えてごらんなさい。指物師さしものしがいろいろな製作をしましても、一時的な飾り物で、決まった形式を必要としなものものは、しゃれた形をこしらえたものなどに、これはおもしろいと思わせられて、いろいろなものものが、次から次へ新しい物がいいように思われますが、ほんとうにそれがなければならぬ道具道具というような物を上手じょうずにこしらえ上げるのは名人でなければできないことです。また絵所えどころに幾人も画家がいますが、席上の絵の描き手かに選ばれておおぜいで出ます時は、どれがよいのか悪いのかちよつとわかりませんが、非写実的な蓬萊山ほうらいさんとか、荒海の大魚とか、唐からにしかない恐ろしい獣の形とかを描く人は、勝手ほうだいに誇張したもので人を驚かせて、それは実際に遠くてもそれで通ります。普通の山の姿とか、水の流れとか、自分たちが日常見ている美しい家や何かの図を写生的におもしろく混ぜて描き、われわれの近くにあるあまり高くない山を描き、木をたくさん描き、静寂な趣を出したり、あ

るいは人の住む邸やしきの中を忠実に描くような時に上手じょうずと下手へたの差がよくわかるものです。字でもそうです。深味がなくて、あちこちの線を長く引いたりするのに技巧を用いたものは、ちよつと見がおもしろいようでも、それと比べてまじめに丁寧に書いた字で見栄えみばのせぬものも、二度目によく比べて見れば技巧だけで書いた字よりもよく見えるものです。ちよつとしたことでもそうなんです、まして人間の問題ですから、技巧でおもしろく思わせるような人には永久の愛が持てないと私は決めています。好色がましい多情な男に思いになるかもしれませんが、以前のことを少しお話しいたしましょう」

と言つて、左馬頭は膝ひざを進めた。源氏も目をさまして聞いていた。中將は左馬頭の見方を尊重するといふふうを見せて、頬杖ほおづえをついて正面から相手を見ていた。坊様が過去未来の道理を説法する席のようで、おかしくないこともないのであるが、この機会に各自の恋の秘密を持ち出されることになった。

「ずつと前で、まだつまらぬ役をしていた時です。私に一人の愛人がございました。容貌ようぼうなどはとても悪い女でしたから、若い浮気うわきな心には、この人とだけで一生を暮らそうとは思わなかつたのです。妻とは思っていましたが物足りなくて外に情人も持つていました。それでとても嫉妬しつとをするものですから、いやで、こんなふうでなく穏やかに見ていてくれればよいのと思ひながらも、あまりにやかましく言われますと、自分のような者をどうしてそんなにまで思うのだらうとあわれむような気になる時もあった、自然身持ちが修まつていくようでした。この女というのは、自身にできぬものでも、この人のためにはと努力してかかるのです。教養の足りなさも自身

でつとめて補って、恥のないようにと心がけるたちで、どんなにも
 行き届いた世話をしてくれまして、私の機嫌きげんをそこねまいとする心
 から勝ち気もあまり表面に出さなくなり、私だけには柔順な女にな
 っ、醜みにくい容貌けいようなんぞも私にきらわれまいとして化粧に骨を折りま
 すし、この顔で他人に逢あっては、良人おとこの不名誉になると思っては、
 遠慮して来客にも近づきませんし、とにかく賢妻にできていました
 から、同棲どうせいしているうちに利巧りこうさに心が引かれてもいきましたが、
 ただ一つの嫉妬しつと癢かゆ、それだけは彼女自身すらどうすることもできな
 い厄介やっかいなものでした。当時私はこう思ったのです。とにかくみじめ
 なほど私に参っている女なんだから、懲らすような仕打ちに出てお
 どして嫉妬やみもちを改造してやろう、もうその嫉妬やみもちぶりに堪えられない、
 いやでならないという態度に出たら、これほど自分を愛している女
 なら、うまく自分の計画は成功するだろうと、そんな気で、ある時
 にわざと冷酷に出まして、例のとおり女がおこり出している時、『
 こんなあさましいことを言うあなたなら、どんな深い縁で結ばれた
 夫婦の中でも私は別れる決心をする。この関係を破壊してよいのな
 ら、今のような邪推でも何でももつとするがいい。将来まで夫婦で
 ありたいなら、少々つらいことはあっても忍んで、気にかけないよ
 うにして、そして嫉妬のない女になったら、私はまたどんなにあな
 たを愛するかしれない、人並みに出世してひとかどの官吏になる時
 分にはあなたがりっぱな私の正夫人でありうるわけだ』などと、う
 まいものだと自分で思いながら利己的な主張をしたものです。女
 は少し笑って、『あなたの貧弱な時代を我慢して、そのうち出世も
 できるだろうと待っていることは、それは待ち遠しいことであって
 も、私は苦痛とも思いません。あなたの多情たしなさを辛抱こらして、よい良

人になつてくださるのを待つことは堪えられないことだと思ひますから、そんなことをお言いになることになつたのは別れる時になつたわけです』そう口惜くちおしそうに言つてこちらを憤慨させるのです。女も自制のできない性質で、私の手を引き寄せて一本の指にかみついてしまいました。私は『痛い痛い』とたいそうに言つて、『こんな傷までもつけられた私は社会へ出られない。あなたに侮辱された小役人はそんなことではいよいよ人並みに上がつてゆくことはできない。私は坊主にでもなることにするだろう』などとおどして、『じゃあこれがいよいよ別れだ』と言つて、指を痛そうに曲げてその家を出て来たのです。

「#ここから1字下げ」

『手を折りにて相見しことを数ふればこれ一つやは君がうきふし

「#ここで字下げ終わり」

言いぶんはないでしょう』と言つと、さすがに泣き出して、

「#ここから1字下げ」

『うき節を心一つに数へきてこや君が手を別るべきをり』

「#ここで字下げ終わり」

反抗的に言つたりもしましたが、本心ではわれわれの関係が解消されるものでないことをよく承知しながら、幾日も幾日も手紙一つやらずに私は勝手かたてな生活をしていたのです。加茂かもの臨時祭りの調楽ちようがくが御所であつて、更ふけて、それは曇みぞれが降る夜なのです。皆が退散す

る時に、自分の帰って行く家庭というものを考えるとその女の所よ
りないので。御所の宿直室で寝るのもみじめだし、また恋を風流
遊戯にしている局つばねの女房を訪ねて行くことも寒いことだろうと思わ
れるものですから、どう思っているのだろうと様子も見がてらに雪
の中を、少しきまりが悪いのですが、こんな晩に行つてやる志で女
の恨みは消えてしまふわけだと思つて、はいつて行くと、暗い灯ひを
壁のほうに向けて据すえ、暖かそうな柔らかい、綿のたくさんはいつ
た着物を大きな炙あぶり籠かごに掛けて、私が寢室へはいる時に上げる几帳きちょう
のきれも上げて、こんな夜にはきつと来るだろうと待つていたふう
が見えます。そう思つていたのだと私は得意になりましたが、妻自
身はいません。何人かの女房だけが留守るすをしていまして、父親の家
へちようどこの晩移つて行つたというのです。艶えんな歌も詠よんで置か
ず、気のきいた言葉も残さずに、じみにすつと行つてしまつたので
すから、つまらない気がして、やかましく嫉妬をしたのも私にきら
わせるためだったのかもしれないなどと、むしゃくしゃするもので
すからありうべくもないことまで忖度そんたくしましたものです。しかし考
えてみると用意してあつた着物なども平生以上によくできています
し、そういう点では実にありがたい親切が見えるのです。自分と別
れた後のことまでも世話していつたのですからね、彼女がどうして
別れうるものかと私は慢心して、それからのち手紙で交渉を始めま
したが、私へ帰る気がないでもないようだし、まったく知れない所
へ隠れてしまおうともしませんし、あくまで反抗的態度を取ろうと
もせず、『前のようなふうでは我慢ができない、すっかり生活の態
度を変えて、一夫一婦の道を取ろうとお言いになるのなら』と言つ
ているのです。そんなことを言つても負けて来るだろうという自信

を持って、しばらく懲らしてやる気で、一婦主義になるとも言わず、話を長引かせていますうちに、非常に精神的に苦しんで死んでしまいましたから、私は自分が責められてなりません。家の妻というものは、あれほどの者でなければならぬと今でもその女が思い出されます。風流ごとにも、まじめな問題にも話し相手にすることができましたし、また家庭の仕事はどんなことにも通じておりました。染め物の立田姫にもなれたし、七夕たなばたの織姫にもなれたわけですからと語った左馬頭は、いかにも亡なき妻が恋しそうであつた。

「技術上の織姫でなく、永久の夫婦の道を行っている七夕姫だったらよかったですね。立田姫もわれわれには必要な神様だからね。男にまずい服装をさせておく細君はだめですよ。そんな人が早く死ぬんだから、いよいよ良妻は得がたいということになる」

中將は指をかんだ女をほめちぎった。

「その時分にまたもう一人の情人がありましたね、身分もそれは少しいいし、才女らしく歌を詠よんだり、達者に手紙を書いたりしますし、音楽のほうも相当なものだったようです。感じの悪い容貌きりようでもありませんでしたから、やきもち焼きのほうを世話女房にして置いて、そこへはおりおり通って行ったところにはおもしろい相手でしたよ。あの女が亡くなりましたあとでは、いくら今さら愛惜しても死んだものはしかたがなくて、たびたびもう一人の女の所へ行くようになりますと、なんだか体裁屋で、風流女を標榜ひょうぼうしている点が気に入らなくて、一生の妻にしてもよいという気はなくなりました。あまり通わなくなつたところに、もうほかに恋愛の相手ができたらしいのですね、十一月ごろのよい月の晩に、私が御所から帰ろうとする時、ある殿上役人が来て私の車へいっしょに乗りました。私はその

晩は父の大納言だいなごんの家へ行つて泊まろうと思つていたのです。途中でその人が、『今夜私を待つてゐる女の家のあつて、そこへちよつと寄つて行つてやらないでは気が済みませんから』と言つのです。私の女の家は道筋に当たつてゐるのですが、こわれた土塀どべいから池が見えて、庭に月のさしてゐるのを見ると、私も寄つて行つてやつていいという気になつて、その男の降りた所で私も降りたものです。その男のはいつて行くのはすなわち私の行こうとしてゐる家なのです。初めから今日の約束があつたのでしよう。男は夢中のように、のぼせ上がったふうで、門から近い廊ろうの室の縁側に腰を掛けて、氣どつたふうに月を見上げてゐるんですね。それは實際白菊が紫をぼかした庭へ、風で紅葉もみじがたくさん降つてくるのですから、身にしむように思つのも無理はないのです。男は懐中から笛を出して吹きながら合あい間に『飛鳥井あすかゐに宿りはすべし蔭かげもよし』などと歌うと、中ではいい音のする倭琴やまとこをきれいに弾ひいて合わせるのです。相当なものなんですね。律の調子は女の柔らかに弾くのが御簾みすの中から聞こえるものなはなやかな氣のするものですから、明るい月夜にはしっくり合あつてゐます。男はたいへんおもしろがつて、琴を弾いてゐる所の前へ行つて、『紅葉の積もり方を見るとだれもおいでになつた様子はありませんね。あなたの恋人はなかなか冷淡なようですね』などといやがらせを言つてゐます。菊を折つて行つて、『琴の音も菊もえならぬ宿ながらつれなき人を引きやとめける。だめですね』などと言つてまた『いい聞き手のおいでになつた時にはもつとうんと弾いてお聞かせなさい』こんな嫌味いやみなことを言つと、女は作り声をして『こがらしに吹きあはすめる笛の音を引きとどむべき言の葉ぞなき』などと言つてふざけ合つてゐるのです。私がのぞいていて憎らしが

っているのも知らないで、今度は十三一絃げんを派手はでに弾き出しました。才女でないことはありませんがきざな気がしました。遊戯的の恋愛をしている時は、宮中の女房たちとおもしろおかしく交際していて、それだけでいいのですが、時々にもせよ愛人として通って行く女がそんなふうではおもしろくないと思ひまして、その晩のことを口実にして別れましたがね。この二人の女を比べて考えますと、若い時でさえもあとの風流女のほうは信賴のできないものだと思つていました。もう相当な年配になつてゐる私は、これからはまたそのころ以上にそうした浮華なものがきらいになるでしょう。いたいたしい萩はぎの露つゆや、落ちそうな笹ささの上の霰あられなどにたとえていいような艶えんな恋人を持つのがいいように今あなたがたはお思ひになるでしょうが、私の年齢まで、まあ七年もすればよくおわかりになりますよ、私が申し上げておきますが、風流好みな多情な女には氣をおつけなさい。三角關係を發見した時に良人おとこの嫉妬しつとで問題を起こしたりするものです」

左馬頭は二人の貴公子に忠言を呈した。例のように中將はうなずく。少しほえんだ源氏も左馬頭の言葉に眞理がありそうだと思つらしい。あるいは二つともばかばかしい話であると笑つていたのかもしれない。

「私もばか者の話を一つしよう」

中將は前置きをして語り出した。

「私がひそかに情人にした女というのは、見捨てずに置かれる程度のものでね、長い關係になろうとも思はずにかかつた人だったので、馴なれていくとよい所ができて心が惹ひかれていった。たまにしか行かないのだけれど、とにかく女も私を信賴するようになった。

愛しておれば恨めしさの起こるわけのこちらの態度だがと、自分のことだけれど気のとがめる時があっても、その女は何も言わない。久しく間を置いて逢つても始終来る人といえるようにするので、気の毒で、私も将来のことであるんな約束をした。父親もない人だったから、私だけに頼らなければと思つてしている様子が何かの場合に見えて可憐な女でした。こんなふうには穏やかなものだから、久しく訪ねて行かなかつた時分に、ひどいことを私の妻の家のほうから、ちよつとまたそのほうへも出入りする女の知人を介して言わたのです。私はあとで聞いたことなんだ。そんなかわいそうなことがあつたと知らず、心の中では忘れていながら手紙も書かず、長く行きもしないでいると、女はずいぶん心細がつて、私との間に小さな子なんかもあつたもんですから、煩悶した結果、撫子の花を使いを持たせてよこしましたよ」

中将は涙ぐんでいた。

「どんな手紙」

と源氏が聞いた。

「なに、平凡なものですよ。『山がつの垣は荒るともをりをりに哀れはかけよ撫子の露』ってね。私はそれで行く気になつて、行つて見ると、例のとおり穏やかなものなんです、少し物思いのある顔をして、秋の荒れた庭をながめながら、そのころの虫の声と同じよくな力のないふうでいるのが、なんだか小説のようでしたよ。『咲きまじる花は何れとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき』子供のことは言わずに、まず母親の機嫌を取つたのですよ。『打ち払ふ袖も露けき常夏に嵐吹き添ふ秋も来にけり』こんな歌をはかなそうに言つて、正面から私を恨むふうもありません。うっかり涙をこぼし

ても恥ずかしそうに紛らしてしまふのです。恨めしい理由をみずか
 ら追究して考えていくことが苦痛らしかったから、私は安心して帰
 っ来て、またしばらく途絶えているうちに消えたようにいなくな
 ってしまったのです。まだ生きておれば相当に苦勞をしているでし
 よう。私も愛していたのだから、もう少し私をしつかり離さずにつ
 かねでいてくれたなら、そうしたみじめな目に逢あいはしなかったの
 です。長く途絶えて行かないというようなこともせず、妻の一人と
 して待遇のしようもあつたのです。撫子の花と母親の言つた子もか
 わい子でしたから、どうかして捜し出したいと思つていますが、
 今に手がかりがありません。これはさっきの話のたよりない性質の
 女にあたるでしょう。素知らぬ顔をしていて、心で恨めしく思つて
 いたのに気もつかず、私のほうではあくまでも愛していたというの
 も、いわば一種の片恋と言えますね。もうぼつぼつ今は忘れかけて
 いますが、あちらではまだ忘れられずに、今でも時々はつらい悲し
 い思いをしているだろうと思われます。これなどは男に永久性の愛
 を求めようとせぬ態度に出るもので、確かに完全な妻にはなれませ
 んね。だからよく考えれば、左馬頭のお話の嫉妬しつと深い女も、思い出
 としてはいいでしょうが、今いつしよにいる妻であつてはたまらな
 い。どうかすれば断然いやになつてしまふでしょう。琴の上手うまいな才
 女というのも浮氣うわきの罪がありますね。私の話した女も、よく本心の
 見せられない点に欠陥があります。どれがいちばんよいとも言えな
 いことは、人生の何のこともそうですがこれも同じです。何人かの
 女からよいところを取つて、悪いところの省かれたような、そんな
 女はどこにもあるものですか。吉祥天女きちじょうてんを恋人にしようと思つと、
 それでは仏法くさくなくなつて困るということになるだろうからしかた

がない」

中將がこう言ったので皆笑った。

「式部の所にはおもしろい話があるだろう、少しずつでも聞きたいものだね」

と中將が言い出した。

「私どもは下の下の階級なんですよ。おもしろくお思になるようなことがどうしてございますものですか」

式部しきぶのじょうぶ丞は話をことわっていたが、頭中將かぶちゅうじょうが本気になって、早く早くと話を責めるので、

「どんな話をいたしましたましてよろしいか考えましたが、こんなことがございます。まだ文章もんじょう生時代せいじだいのことですが、私はある賢女おんなの良人りょうじんになりました。さっきの左馬頭さまのかみのお話のように、役所の仕事の相談相手にもなりますし、私の処世じょせいの方法なんかについても役だつことを教えていてくれました。学問などはちよつとした博士はかせなどは恥ずかしいほどのもので、私なんかは学問のことなどでは、前で口がきけるものじゃありませんでした。それはある博士の家へ弟子でしになって通っておりますました時分に、先生に娘がおおぜいあることを聞いていたものですから、ちよつとした機会をとらえて接近してしまつたのです。親の博士が二人の関係を知るとすぐに杯を持ち出して白樂天の結婚の詩などを歌ってくれましたが、実は私はあまり気が進みませんでした。ただ先生への遠慮でその関係はつながっております。先方では私をたいへんに愛して、よく世話をしまして、夜分やす一寝んでいる時にも、私に学問のつくような話をしたり、官吏としての心得方などを言ってくれたりいたすのです。手紙は皆きれいな字の漢文です。仮名かななんか一字だつて混じつておりません。よい文章など

をよこされるものですから別れかねて通っていたのでございます。

今でも師匠の恩というようなものをその女に感じますが、そんな細君を持つのは、学問の浅い人間や、まちがいだらけの生活をしている者にはたまらないことだとその当時思っておりまして。またお二方のようなえらい貴公子方にはそんなずうずうしい先生細君なんかの必要はございません。私どもにしましても、そんなのとは反対に齒がゆいような女でも、気に入っておればそれでいいのですし、前生の縁というものもありますから、男から言えばあるがままの女でいいのでございます」

これで式部丞しきぶのじやうが口をつぐもうとしたのを見て、頭中將は今の話の続きをさせようとして、

「とてもおもしろい女じゃないか」

と言うと、その気持ちがあつていながら式部丞は、自身をばかにしたふうで話す。

「そういたしましたして、その女の所へずっと長く参らないでいました時分に、その近辺に用のごさいましたついでに、寄つて見ますと、平生の居間の中へは入れないのです。物越しに席を作つてすわらせません。嫌味いやみを言おうと思つているのか、ばかばかしい、そんなことでもすれば別れるのにいい機会がとらえられるというものだと私は思つていましたが、賢女ですもの、軽々しく嫉妬しつとなどをするものではありません。人情にもよく通じていて恨んだりなんかもしやしません。しかも高い声で言うのです。『月来づつこ、風病ふうびやう重しづきに堪えかねこ極熱なつの草薬を服しました。それで私はくさいのでようお目にかかりません。物越しでも何か御用があれば承りましょう』つてもっともらしいのです。ばかばかしくて返辞ができるものですか、私はただ

「承知いたしました」と言つて帰ろうとしました。でも物足らず思つたのですか。『このにおいのなくなるころ、お立ち寄りください』とまた大きな声で言いますから、返辞をしないで来るのは気の毒ですが、ぐずぐずもしてはいられません。なぜかという草薬くさやくの蒜ひるなるものの臭気がいっぱいなんですから、私は逃げて出る方角を考えながら、『ささがにの振舞ふるまひするき夕暮れにひるま過ぐせと言ふがあやなき。何の口実なんだか』と言うか言わないうちに走つて来ますと、あとから人を追いかけて返歌をくれました。『逢あふことの夜をし隔てぬ中ならばひるまも何か眩まぼゆからまし』というのです。歌などは早くできる女なんでしょう。」

式部丞の話はしずしずと終わった。貴公子たちはあきれて、

「うそだろう」

と爪つまはじ弾きをして見せて、式部をいじめた。

「もう少しよい話をしたまえ」

「これ以上珍しい話があるものですか」

式部丞は退さがつて行つた。

「総体、男でも女でも、生かじりの者はそのわずかな知識を残らず人に見せようとするから困るんですよ。三史五経の学問を始終引き出されてはたまりませんよ。女も人間である以上、社会百般のことについてまったくの無知識なものはないわけです。わざわざ学問はしなくても、少し才のある人なら、耳からでも目からでもいろいろなことは覚えられていきます。自然男の知識に近い所へまでいつている女はつい漢字をたくさん書くことになって、女どうしで書く手紙にも半分以上漢字が混じっているのを見ると、いやなことだ、あの人にこの欠点がなければという気がします。書いた当人はそれほ

どの気で書いたのではなくても、読む時に音が強くて、言葉の舌ざわりがなめらかでなく嫌味になるものです。これは貴婦人もするまぢがった趣味です。歌一詠みだといわれている人が、あまりに歌にとらわれて、むずかしい故事なんかを歌の中へ入れておいて、そんな相手になっっている暇のない時などに詠みかけてよこされるのはいやになっってしまうことです、返歌をせねば礼儀でなし、またようしないでは恥だし困ってしまいますね。宮中の節会の日なんぞ、急いで家を出る時は歌も何もあつたものではありません。そんな時に菖蒲に寄せた歌が贈られる、九月の菊の宴に作詩のことを思つて一所懸命になつてゐる時に、菊の歌。こんな思いやりのないことをしないで場合さえよければ、真価が買ってもらえる歌を、今贈つては目にも留めてくれないということがわからないでよこしたりされる、ついその人が軽蔑されるようになります。何にでも時と場合があるのに、それに気がつかないほどの人間は風流ぶらないのが無難ですね。知つてゐることも知らぬ顔をして、言いたいことがあつても機会を一、二度ははずして、そのあとで言えばよいだらうと思ひますね」

こんなことがまた左馬頭によつて言われている間にも、源氏は心の中でただ一人の恋しい方のことを思い続けていた。藤壺の宮は足りない点もなく、才気の見えすぎる方でもないりっぱな貴女であるとうなずきながらも、その人を思うと例のとおり胸が苦しみでいっぱいになった。いずれがよいのか決められずに、ついには筋の立たぬものになつて朝まで話し続けた。

やっと今日は天気が直つた。源氏はこんなふう宮中にばかりいることも左大臣家の人に気の毒になつてそこへ行つた。一糸の乱れ

も見えぬというような家であるから、こんなのがまじめということ
を第一の条件にしていた、昨夜の談話者たちには気に入るところだ
ろうと源氏は思いながらも、今も初めどおりに行儀をくずさぬ、打
ち解けぬ夫人であるのを物足らず思つて、中納言の君、中務など
という若いよい女房たちと冗談を言いながら、暑さに部屋着だけにな
っている源氏を、その人たちは美しいと思ひ、こうした接触が得ら
れる幸福を覚えていた。大臣も娘のいるほうへ出かけて来た。部屋
着になっているのを知つて、几帳を隔てた席について話そうとする
のを、

「暑いのに」

と源氏が顔をしかめて見せると、女房たちは笑つた。

「静かに」

と言つて、脇息に寄りかかった様子にも品のよさが見えた。

暗くなつてきたころに、

「今夜は中神のお通り路になつておりまして、御所からすぐここ
へ来てお寝みになつてはよろしくございません」

という、源氏の家従たちのしらせがあつた。

「そう、いつも中神は避けることになっているのだ。しかし二条の
院も同じ方角だから、どこへ行つてよいかわからない。私はもう疲
れていて寝てしまいたいのにな」

そして源氏は寝室にはいった。

「このままになすつてはよろしくございません」

また家従が言つて来る。紀伊守で、家従の一人である男の家のこ
とが上申される。

「中川辺でございますがこのごろ新築いたしまして、水などを庭へ

引き込んでございまして、そこならばお涼しかろうと思ひます」

「それは非常によい。からだが大儀だから、車のままではいれる所にしたたい」

と源氏は言っていた。隠れた恋人の家は幾つもあるはずであるが、久しぶりに帰ってきて、方角一除けにほかの女の所へ行つては夫人に済まぬと思つてゐるらしい。呼び出して泊まりに行くことを紀伊守に言つと、承知はして行つたが、同輩のいる所へ行つて、

「父の伊予守　伊予は太守の国で、官名は介になつてゐるが事実上の長官である　の家の方にこのごろ障りがありました、家族たちが私の家へ移つて来てゐるのです。もとから狭い家なんですから失礼がないかと心配です」と迷惑げに言つたことがまた源氏の耳にはいると、

「そんなふうにな人がたくさんいる家がうれしいのだよ、女の人の居所が遠いような所は夜がこわいよ。伊予守の家族のいる部屋の几帳の後ろでいいのだからね」

冗談混じりにまたこう言させたものである。

「よいお泊まり所になればよろしいが」

と言つて、紀伊守は召使を家へ走らせた。源氏は微行で移りたかつたので、まもなく出かけるのに大臣へも告げず、親しい家従だけをつれて行つた。あまりに急だと言つて紀伊守がこぼすのを他の家従たちは耳に入れないで、寝殿の東向きの座敷を掃除させて主人へ提供させ、そこに宿泊の仕度が出来た。庭に通した水の流れなどが地方官級の家としては凝つてできた住宅である。わざと田舎の家らしい柴垣が作つてあつたりして、庭の植え込みなどもよくできていた。涼しい風が吹いて、どこでもなく虫が鳴き、蛩がたくさん飛

んでいた。源氏の従者たちは渡殿わたどのの下をくぐって出て来る水の流れに臨んで酒を飲んでいた。紀伊守が主人をよりよく待遇するために奔走している時、一人でいた源氏は、家の中をながめて、前夜の人たちが階級を三つに分けたその中の品の列にはいる家であろうと思いい、その話を思い出し出していた。思いついた娘だという評判の伊予守の娘、すなわち紀伊守の妹であったから、源氏は初めからそれに興味を持っていて、どの辺の座敷にいるのであろうと物音に耳を立てていると、この座敷の西に続いた部屋で女の衣摺きぬずれが聞こえ、若々しい、媚めかしい声で、しかもさすがに声をひそめてものを言ったりしているのに気がついた。わざとらしいが悪い感じもなかった。初めその前の縁の格子こうしが上げたままになっていたのを、不用意だといって紀伊守がしかって、今は皆戸がおろされてしまったので、その室の灯影ほかげが、襖子からかみの隙間すきまから赤くこちらへさしていた。源氏は静かにそこへ寄って行って中が見えるかと思つたが、それほど隙間はない。しばらく立つて聞いていると、それは襖子の向こうの中央の間に集まつてしているらしい低いさざめきは、源氏自身が話題にされているらしい。

「まじめらしく早く奥様をお持ちになつたのですからお寂しいわけですわね。でもずいぶん隠れてお通いになる所があるんですって」
 こんな言葉にも源氏ははっとした。自分の作っているあるまじい恋を人が知って、こうした場合に何とか言われていたらどうだろうと思つたのである。でも話はただ事ばかりであつたから皆を聞こうとするほどの興味が起こらなかつた。式部卿しきぶけいの宮の姫君に朝顔を贈つた時の歌などを、だれかが得意そうに話してもいた。行儀がなく、会話の中に節をつけて歌を入れたがる人たちだ、中の品がおも

しろいといっても自分には我慢のできぬこともあるだろうと源氏は思った。

紀伊守が出て来て、灯籠とうろうの数をふやさせたり、座敷ざしきの灯ひを明るくしたりしてから、主人には遠慮をして菓子だけを献じた。

「わが家とはばり帳ちやうをも掛けたればって歌ね、大君来ませ婿にせんってね、そこへ気がつかないでは主人の手落ちかもしれぬ」

「通人でない主人でございまして、どうも」

紀伊守は縁側でかしまつていた。源氏は縁に近い寝床で、仮臥かりねのように横になっていた。随行者たちももう寝たようである。紀伊守は愛らしい子供を幾人も持つていた。御所の侍童を勤めて源氏の知った顔もある。縁側などを往来ゆききする中には伊予守の子もあつた。何人かの中に特別に上品な十二、三の子もある。どれが子で、どれが弟かなどと源氏は尋ねていた。

「ただ今通りました子は、亡なくなりましたえもんのかみ衛門督の末の息子むすこで、かわいがられていたのですが、小さいうちに父親に別れまして、姉の縁でこうして私の家にいるのでございます。将来のためにもなりま

すから、御所の侍童を勤めさせたいようですが、それも姉の手だけでははかばかしく運ばないのでございましょう」

と紀伊守が説明した。

「あの子の姉さんが君の継母なんだね」

「そうでございます」

「似つかわしくないお母さんを持ったものだね。その人のことは陛下もお聞きになつていらつして、宮仕えに出したいと衛門督が申していたが、その娘はどうなったのだらうって、いつかお言葉があつた。人生はだれがどうなるかわからないものだね」

老成者らしい口ぶりである。

「不意にそうなったのでございます。まあ人というものは昔も今も意外なふうにも変わってゆくものですが、その中でも女の運命ほどはかないものはございません」

などと紀伊守は言っていた。

「伊予介は大事にするだろう。主君のように思うだろうな」

「さあ。まあ私生活の主君でございますかな。好色すぎると私はじめ兄弟はにがにがしがっております」

「だって君などのような当世男に伊予介は譲ってくれないだろう。あれはなかなか年は寄ってもりっぱな風采ふうさいを持っているのだからね」

などと話しながら、

「その人どちらにいるの」

「皆しもや一下屋しもやのほうへやってしまったのですが、間にあいませんで一部分だけは残っているかもしれませぬ」

と紀伊守は言った。

深く酔った家従たちは皆夏の夜を板敷で仮寝してしまつたのであるが、源氏は眠れない、一人一ね臥ねをしていると思うと目がさめがちであつた。この室の北側の襖子からかみの向こうに人のいるらしい音のする所は紀伊守の話した女のそつとしている室であろうと源氏は思った。かわいそうな女だとその時から思っていたのであつたから、静かに起きて行って襖子越しに物声を聞き出そうとした。その弟の声で、

「ちよいと、どこにいらっしやるの」

と言う。少しか酒かれたきれいな声である。

「私はここで寝やすんでいるの。お客様はお寝やすみになつたの。ここと近

くてどんなに困るかと思つていたけれど、まあ安心した」

と、寢床から言う声もよく似ているので姉弟であることがわかつた。

「廂ひさしの室でお寝になりましたよ。評判のお顔を見ましたよ。ほんとうにお美しい方だった」

一段声を低くして言っている。

「昼だったら私ものぞくのだけれど」

睡ねむそうに言つて、その顔は蒲団ふとんの中へ引き入れたらしい。もう少し熱心に聞けばよいのにと源氏は物足りない。

「私は縁の近くのほうへ行つて寝ます。暗いなあ」

子供は燈心を掻かき立てたりするものらしかった。女は襖子の所からすぐ斜すじいにあたる辺で寝ているらしい。

「中将はどこへ行つたの。今夜は人がそばにいてくれないと何だか心細い気がする」

低い下の室のほうから、女房が、

「あの人ちようどお湯にはいりに参りまして、すぐ参ると申しました」

と言つていた。源氏はその女房たちも皆寢静まつたところに、掛鉄かけがねをはずして引いてみると襖子はさつとあいた。向こう側には掛鉄がなかつたわけである。そのきわに几帳きちょうが立ててあつた。ほのかな灯の明りで衣服箱などがごたごたと置かれてあるのが見える。源氏はその中を分けるようにして歩いて行つた。

小さな形で女が一人寝ていた。やましく思いながら顔を掩おほつた着物を源氏が手で引きのけるまで女は、さっき呼んだ女房の中將が来たのだと思つていた。

「あなたが中將を呼んでいらっしやったから、私の思いが通じたのだと思つて」

と源氏の宰相中將は言いかけたが、女は恐ろしがって、夢に襲われていたようなふうである。「や」と言つつもりがあるが、顔に夜着がさわつて声にはならなかつた。

「出来心のようにあなたは思うでしょう。もつともだけれど、私はそうじゃないのですよ。ずっと前からあなたを思っていたのです。それを聞いていたきたいのでこんな機会を待っていたのです。だからすべて皆一前生の縁が導くのだと思つてください」

柔らかい調子である。神様だつてこの人には寛大であらねばならぬだろうと思われる美しさで近づいているのであるから、露骨に、

「知らぬ人がこんな所へ」

とものしることができない。しかも女は情けなくてならないのである。

「人まちがえでいらっしやるのでしよう」

やっと、息よりも低い声で言つた。当惑しきつた様子が柔らかい感じであり、可憐でもあつた。

「違つたわけがないじゃありませんか。恋する人の直覚であなただと思つて来たのに、あなたは知らぬ顔をなさるのだ。普通の好色者がするような失礼を私はしません。少しだけ私の心を聞いていただければそれでよいのです」

と言つて、小柄な人であつたから、片手で抱いて以前の襖子の所へ出て来ると、さつき呼ばれていた中將らしい女房が向こうから来た。

「ちよいと」

と源氏が言ったので、不思議がって探り寄って来る時に、薰き込めた源氏の衣服の香が顔に吹き寄ってきた。中將は、これがだれであるかも、何であるかもわかった。情けなくて、どうなることかと心配でならないが、何とも異論のはさみようがない。並み並みの男であつたならできるだけ力の抵抗もしてみるはずであるが、しかもそれだつて荒だてて多数の人に知らせることは夫人の不名誉になることであつて、しないほうがよいのかもしれない。こう思つて胸をとどろかせながら従つてきたが、源氏の中將はこの中將をまったく無視していた。初めの座敷へ抱いて行つて女をおろして、それから襖子をしめて、

「夜明けにお迎えに来るがいい」

と言つた。中將はどう思うであろうと、女はそれを聞いただけでも死ぬほどの苦痛を味わつた。流れるほどの汗になつて悩ましそうな女に同情は覚えながら、女に対する例の誠実な調子で、女の心が当然動くはずだと思われるほどに言つても、女は人間の掟おきてに許されていない恋に共鳴してこない。

「こんな御無理を承ることが現実のことであろうとは思われません。卑しい私ですが、輕蔑けいべつしてもよいものだというあなたのお心持ちは、私は深くお恨みに思います。私たちの階級とあなた様たちの階級とは、遠く離れて別々のものなのです」

こう言つて、強さで自分を征服しようとしている男を憎いと思う様子は、源氏を十分に反省さす力があつた。

「私はまだ女性に階級のあることも何も知らない。はじめての経験なんです。普通の多情な男のようにお取り扱いになるのを恨めしく思います。あなたの耳にも自然はいつているでしょう、むやみな恋

の冒険などを私はしたこともありません。それにもかかわらず前生の因縁は大きな力があつて、私をあなたに近づけて、そしてあなたからこんなにはずかしめられています。ごもつともだとあなたになつて考えれば考えられますが、そんなことをするまでに私はこの恋に盲目になつています」

まじめになつていろいろと源氏は説くが、女の冷ややかな態度は変わつていくけしきもない。女は、一世の美男であればあるほど、この人の恋人になつて安んじている自分にはなれない、冷血的な女だと思われてやむのが望みであると考えて、きわめて弱い人が強さをしいてつけているのは弱竹なよたけのようで、さすがに折ることはできなかった。真からあさましいことだと思ふうに泣く様子などが可憐かれんであつた。気の毒ではあるがこのままで別れたらのちのちまでも後悔が自分を苦しめるであろうと源氏は思つたのであつた。

もうどんなに勝手な考え方をしても救われない過失をしてしまつたと、女の悲しんでいるのを見て、

「なぜそんなに私が憎くばかり思われるのですか。お嬢さんか何かのようにあなたの悲しむのが恨めしい」

と、源氏が言うと、

「私の運命がまだ私を人妻にしません時、親の家の娘でございました時に、こうしたあなたの熱情で思われしましたのなら、それは私の迷いであつても、他日に光明のあるようなことも思つたでございませうが、もう何もだめでございます。私には恋も何もいりませんですからせめてなかつたことだと思つてしまつてください」

と言う。悲しみに沈んでいる女を源氏ももつともだと思つた。真心から慰めの言葉を発しているのであつた。

鶏とりの聲がしてきた。家従たちも起きて、

「寝坊をしたものだ。早くお車の用意をせい」

そんな命令も下していた。

「女の家かたがへ方違えかたがにおいでになった場合とは違いますよ。早くお帰りになる必要は少しもないじゃありませんか」

と言っているのは紀伊守であった。

源氏はもうまたこんな機会が作り出せそうでないことと、今後どうして文通をすればよいか、どうもそれが不可能らしいことで胸を痛くしていた。女を行かせようとしてもまた引き留める源氏であった。

「どうしてあなたと通信をしたらいいでしょう。あくまで冷淡なあなたへの恨みも、恋も、一通りでない私が、今夜のことだけをいつまでも泣いて思っていなければならぬのですか」

泣いている源氏が非常に艶えんに見えた。何度も鶏とりが鳴いた。

「#ここから2字下げ」

つれなさを恨みもはてぬしのめにとりあへぬまで驚かすらん

「#ここで字下げ終わり」

あわただしい心持ちで源氏はこうささやいた。女は己おのれを省みると、不似合ふにがひいという晴がましさを感ぜずにいられない源氏からどんなに熱情的に思われても、これをうれしいこととすることができないのである。それに自分としては愛情の持てない良人おとこのいる伊予の国が思われて、こんな夢を見てはいないだろうかと考えると恐ろしかった。

「#ここから2字下げ」

身の憂さを歎くにあかで明くる夜はとり重ねても音ぞ泣かれける

「#ここで字下げ終わり」

と言った。ずんずん明るくなってゆく。女は襖子の所へまで送って行った。奥のほうの人も、こちらの縁のほうの人も起き出して来たんでざわついた。襖子をしめてもとの席へ帰って行く源氏は、一重の襖子が越えがたい隔ての関のように思われた。

直衣などを着て、姿を整えた源氏が縁側の高欄によりかかっているのが、隣室の縁低い衝立の上のほうから見えるのをのぞいて、源氏の美の放つ光が身の中へしみ通るように思っている女房もあつた。残月のあるところで落ち着いた空の明かりが物をさわやかに照らしていた。変わったおもしろい夏の曙である。だれも知らぬ物思いを、心に抱いた源氏であるから、主観的にひどく身にしむ夜明けの風景だと思つた。言づて一つする便宜がないかと思つて願みがちに去つた。

家へ帰つてからも源氏はすぐに眠ることができなかつた。再会の至難である悲しみだけを自分はしているが、自由な男でない人妻のあの人はこのほかにもいろいろな煩悶があるはずであると思いやつていた。すぐれた女ではないが、感じのよさを十分に備えた中の品だ。だから多くの経験を持った男の言うことには敬服される点があると、品定め夜の話を思い出していた。

このごろはずっと左大臣家に源氏はいた。あれきり何とも言つてやらないことは、女の身にとってどんなに苦しいことだろうと中川

の女のことであわれまれて、始終心にかかつて苦しいはてに源氏は紀伊守を招いた。

「自分の手もとへ、この間見た中納言の子供をよこしてくれないか。かわいい子だったからそばで使おうと思う。御所へ出すことも私からしてやろう」

と言うのであった。

「結構なことでございます。あの子の姉に相談してみましよう」

その人が思わず引き合いに出されたことだけでも源氏の胸は鳴った。

「その姉さんは君の弟を生んでいるの」

「それでもございませぬ。この二年ほど前から父の妻になつていますが、死んだ父親が望んでいたことでないような結婚をしたと思うのでしよう。不満らしいということでございます」

「かわいそうだね、評判の娘だったが、ほんとうに美しいのか」

「さあ、悪くもないのでございませう。年のいった息子むすこと若い継母は親しくせぬものだと申しますから、私はその習慣に従つておりまして何も詳しいことは存じませぬ」

と紀伊守きののかみは答えていた。

紀伊守は五、六日してからその子供をつれて来た。整った顔といふのではないが、艶えんな風采ふうさいを備えていて、貴族の子らしいところがあつた。そばへ呼んで源氏は打ち解けて話してやった。子供心に美しい源氏の君の恩顧を受けうる人になれたことを喜んでいた。姉のことも詳しく源氏は聞いた。返辞のできることだけは返辞をして、つつしみ深くしている子供に、源氏は秘密を打ちあけにくかった。けれども上手じょうずに嘘うそまじりに話して聞かせると、そんなことがあつた

のかと、子供心におぼろげにわかればわかるほど意外であったが、子供は深い穿鑿せんさくをしようもしない。

源氏の手紙を弟が持って来た。女はあきれて涙さえもこぼれてきた。弟がどんな想像をするだろうと苦しんだが、さすがに手紙は読むつもりらしくて、きまりの悪いのを隠すように顔の上でひろげた。さつきからからだは横にしていたのである。手紙は長かった。終わりに、

「#ここから2字下げ」

見し夢を逢あふ夜ありやと歎なげく間に目さへあはでぞ頃ころも経へにける

「#ここから1字下げ」

安眠のできる夜がないのですから、夢が見られないわけです。

「#ここで字下げ終わり」

とあった。目もくらむほどの美しい字で書かれてある。涙で目が曇くもつて、しまいには何も読めなくなって、苦しい思いの新しく加えられた運命を思い続けた。

翌日源氏の所から小君こぎみが召された。出かける時に小君は姉に返事をくれと言った。

「ああしたお手紙をいただくはずの人がありませんと申し上げればいい」

と姉が言った。

「まちがわないように言っていらっしつたのにそんなお返辞はできない」

そう言うのから推おせば秘密はすっかり弟に打ち明けられたものら

しい、こう思うと女は源氏が恨めしくてならない。

「そんなことを言うものじゃない。大人の言うようなことを子供が言つてはいけない。お断わりができればお邸やしきへ行かなければいい」

無理なことを言われて、弟は、

「呼びにおよこしになつたのですもの、伺わないでは」

と言つて、そのまま行つた。好色な紀伊守はこの継母が父の妻であることを惜しがつて、取り入りたい心から小君にも優しくしてつれて歩きもするのだった。小君が来たといつので源氏は居間へ呼んだ。

「昨日きのうも一日おまえを待つていたのに出て来なかつたね。私だけが
おまえを愛していても、おまえは私に冷淡なんだね」

恨みを言われて、小君は顔を赤くしていた。

「返事はどこ」

小君はありのままに告げるほかに術すべはなかつた。

「おまえは姉さんに無力なんだね、返事をくれないなんて」

そう言つたあとで、また源氏から新しい手紙が小君に渡された。

「おまえは知らないだろうね、伊予の老人よりも私はさきに姉さんの恋人だつたのだ。頸くびの細い貧弱な男だからといつて、姉さんはあの不恰好ぶかっこうな老人を良人おとこに持つて、今だつて知らないなど言つて私を軽蔑けいべつしているのだ。けれどもおまえは私の子になつておれ。姉さんがたよりにしている人はさきが短いよ」

と源氏がでたらめを言つと、小君はそんなこともあつたのか、濟まないことをする姉さんだと思つた。小君は始終源氏のそばに置かれて、御所へもいつしよに連れられて行

つたりした。源氏は自家の衣裳係いしやうがかりに命じて、小君の衣服を新調させたりして、言葉どおり親代わりらしく世話をしていた。女は始終源氏から手紙をもらった。けれども弟は子供であつて、不用意に自分の書いた手紙を落とすようなことをしたら、もとから不運な自分あまりに自分がみじめであるという考えが根底になつていて、恋を得るといふことも、こちらにその人の対象になれる自信のある場合にだけあることで、自分などは光源氏の相手になれる者ではないと思ふ心から返事をしないのであつた。ほのかに見た美しい源氏を思い出さないわけではなかつたのである。眞実の感情を源氏に知らせてもさて何にもなるものでないと、苦しい反省をみずから強いている女であつた。源氏はしばらくの間もその人が忘れなかつた。気の毒にも思い恋しくも思つた。女が自分とした過失に苦しんでいる様子が目から消えない。本能のおもむくままに忍んであいに行くことも、人目の多い家であるからそのことが知れては困ることになる、自分のためにも、女のためにもと思つては煩悶はんもんをしていた。

例のようにまたずっと御所にいた頃、源氏は方角の障さわりになる日を選んで、御所から来る途中でにわかにかがつかうふうをして紀伊守の家へ来た。紀伊守は驚きながら、

「前裁せんさいの水の名誉でございます」

こんな挨拶あいさつをしていた。小君こぎみの所へは昼のうちからこんな手はずにすると源氏は言つてやつてあつて、約束ができていたのである。

始終そばへ置いてある小君であつたから、源氏はさっそく呼び出した。女のほうへも手紙は行つていた。自身に逢おうとして払われ苦心は女の身にうれしいことではあつたが、そうかといつて、源

氏の言うままになって、自己が何であるかを知らないように恋人として逢う気にはならないのである。夢であつたと思うこともできる過失を、また繰り返すことになつてはならぬとも思つた。妄想で源氏の恋人気どりになつて待つてゐることは自分にできないと女は決めて、小君が源氏の座敷のほうへ出て行くとすぐに、

「あまりお客様の座敷に近いから失礼な気がする。私は少しからだ
が苦しくて、腰でもたたいてほしいのだから、遠い所のほうが都合
がよい」

と言つて、渡殿わたのどのに持つてゐる中将という女房の部屋へやへ移つて行つた。初めから計画的に來た源氏であるから、家従たちを早く寝させて、女へ都合を聞かせに小君をやつた。小君に姉の居所がわからなかつた。やつと渡殿の部屋を捜しあてて來て、源氏への冷酷な姉の態度を恨んだ。

「こんなことをして、姉さん。どんなに私が無力な子供だと思われ
るでしょう」

もう泣き出しそうになつてゐる。

「なぜおまえは子供のくせによくない役なんかするの、子供がそんなことを頼まれてするのはとてもいけないことなのだよ」

としかつて、

「気分が悪くて、女房たちをそばへ呼んで介抱かいほうしてもらつていま
すつて申せばいいだろう。皆が怪しがりますよ、こんな所へまで來
てそんなことを言つていて」

取りつくしまもないように姉は言うのであつたが、心の中では、
こんなふうな運命が決まらないころ、父が生きていたころの自分の
家へ、たまさかでも源氏を迎えることができたなら自分は幸福だつた

であろう。しいて作るこの冷淡さを、源氏はどんなにわが身知らずの女だと思いいになることだろうと思つて、自身の意志でしていることであるが胸が痛いようにさすがに思われた。どうしてもこうしても人妻という束縛は解かれないのであるから、どこまでも冷ややかな態度を押し通して変えまいという気に女はなっていた。

源氏はどんなふうに計らつてくるだろうと、頼みにする者が少年であることを気がかりに思いながら寝ているところへ、ためであるという報せしらを小君が持つて来た。女のあさましいほどの冷淡さを知つて源氏は言った。

「私はもう自分が恥ずかしくつてならなくなつた」

気の毒なふうであつた。それきりしばらくは何も言わない。そして苦しそつに吐息といきをしてからまた女を恨んだ。

「#ここから2字下げ」

帚木ははきぎの心を知らでその原の道にあやなくまどひぬるかな

「#ここで字下げ終わり」

今夜のこの心持ちはどう言つていいかわからない、と小君に言つてやった。女もさすがに眠れないで悶もたえていたのである。それで、

「#ここから2字下げ」

数ならぬ伏屋ふせやにおふる身のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

「#ここで字下げ終わり」

という歌を弟に言させた。小君は源氏に同情して、眠がらずに往い

ったり来たりしているのを、女は人が怪しまないかと気にしていた。

いつものように酔った従者たちはよく眠っていたが、源氏一人はあさましくて寝入れない。普通の女と変わった意志の強さのますます明確になってくる相手が恨めしくて、もうどうでもよいとちよつとの間は思うがすぐにまた恋しさがかえってくる。

「どうだろう、隠れている場所へ私をつれて行ってくれないか」

「なかなか開き^あそうにもなく戸じまりがされていますし、女房もたくさんおります。そんな所へ、もったいないことだと思えます」

と小君が言った。源氏が気の毒でたまらないと小君は思っていた。

「じゃあもういい。おまえだけでも私を愛してくれ」

と言って、源氏は小君をそばに寝させた。若い美しい源氏の君の横に寝ていることが子供心に非常にうれいらしいので、この少年のほうが無情な恋人よりもかわいいと源氏は思った。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)

で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司、小林繁雄

2003年4月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

空蝉

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）馴な

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）もう一度—逢あえる

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」うつせみのわがうすころも風流男に馴な

「#地から3字上げ」れてぬるやとあぢきなきころ（晶子）

眠れない源氏は、

「私はこんなにまで人から冷淡にされたことはこれまでにないのだから、今晚はじめて人生は悲しいものだ」と教えられた。恥ずかしくて生きていられない気がする」

などと言うのを小君こぎみは聞いて涙さえもこぼしていた。非常にかわいく源氏は思った。思いなしか手あたりの小柄なからだ、そう長くは感じなかったあの人の髪もこれに似ているように思われてなつかしい気がした。この上しいて女を動かそうとすることも見苦しいことに思われたし、また真から恨めしくもなっている心から、それきり言ことづてをすることもやめて、翌朝早く帰って行ったのを、小君は気の毒な物足りないことに思った。女も非常にすまないと思っていたが、それからはもう手紙も来なかった。お憤おこりになったのだと思うとともに、このまま自分が忘れられてしまうのは悲しいという気がした。それかといって無理な道をしいてあの方が通ろうとなさることの続くのはいやである。それを思うとこれで結末になってもよいのであると思つて、理性では是認しながら物思いをしていた。

源氏は、ひどい人であると思ひながら、このまま成り行きにまかせておくことはできないような焦慮を覚えた。

「あんな無情な恨めしい人はないと私は思つて、忘れようとしても自分の心が自分の思うようにならないから苦しんでいるのだよ。もう一度一逢あえるようないい機会をおまえが作つてくれ」

こんなことを始終小君は言われていた。困りながらこんなことでも自分を源氏が必要な人物にしてくれるのがうれしかった。子供心に機会をねらっていたが、そのうちに紀伊守きいのかみが任地へ立つたりして、残っているのは女の家族だけになったところのある日、夕方の物の見分けの紛まぎれやすい時間に、自身の車に源氏を同乗させて家へ来た。なんととっても案内者は子供なのであるからと源氏は不安な気はしたが、慎重になどしてかかれることでもなかった。目だたぬ服装をして紀伊守家の門のしめられないうちにと急いだのである。少

年のことであるから家の侍などが追従して出迎えたりはしないのでまずよかった。東側の妻戸の外に源氏を立たせて、小君自身は縁を一回りしてから、南の隅の座敷の外から元気よくたたいて戸を上げさせて中へはいった。女房が、

「そんなにしては人がお座敷を見ます」

と小言を言っている。

「どうしたの、こんなに今日は暑いのに早く格子をおろしたの」

「お昼から西の対寝殿の左右にある対の屋の一つのお嬢様

が来ていらっしつて暮を打っていらっしやるのです」

と女房は言った。

源氏は恋人とその継娘が暮盤を中にして対い合っているのをのぞいて見ようと思つて開いた口からはいつて、妻戸と御簾の間へ立つた。小君の上げさせた格子がまだそのままになっていて、外から夕明かりがさしているから、西向きにずっと向こうの座敷までが見えた。こちらの室の御簾のそばに立てた屏風も端のほう都合よく畳まれているのである。普通ならば目ざわりになるはずの几帳なども今日の暑さのせいで垂れは上げて棹にかけられている。灯が人の座に近く置かれていた。中央の室の中柱に寄り添つてすわったのが恋しい人であろうかと、まずそれに目が行つた。紫の濃い綾の単衣襲の上に何かの上着をかけて、頭の恰好のほっそりとした小柄な女である。顔などは正面にすわった人からも全部が見られないように注意をしているふうだった。痩せつぼちの手はほんの少しより袖から出ていない。もう一人は顔を東向きにしていたからすっかり見えた。白い薄衣の単衣襲に淡藍色の小袿らしいものを引きかけて、紅い袴の紐の結び目の所までも着物の襟がはだけて胸が出ていた。きわめ

て行儀のよくないふうである。色が白くて、よく肥えていて頭の形と、髪のかかった額つきが美しい。目つきと口もとに愛嬌あいぎょうがあつて派手はでな顔である。髪は多くて、長くはないが、二つに分けて顔から肩へかかったあたりがきれいで、全体が朗らかな美人と見えた。源氏は、だから親が自慢にしているのだと興味がそそられた。静かな性質を少し添えてやりたいとちよつとそんな気がした。才走つたところはあつらしい。暮が終わつて駄目石だめいしを入れる時など、いかにも利巧りこうに見えて、そして蓮葉はすつばに騒ぐのである。奥のほうの人は静かにそれをおさえるようにして、

「まあお待ちなさい。そこは両方ともいっしよの数でしょう。それからここにもあなたのほうの目がありますよ」

などと言うが、

「いいえ、今度は負けましたよ。そうそう、この隅の所を勘定しなくては」

指を折つて、十、二十、三十、四十と数えるのを見ていると、無数だという伊予の温泉の湯桁ゆげたの数もこの人にはすぐわかるだろうと思われる。少し下品である。袖で十二分に口のあたりを掩おほうて隙見すきみ男とこに顔をよく見せないが、その今一人に目をじつとつけていると次第によくわかつてきた。少し腫はれぼつたい目のようで、鼻などもよく筋が通つていゝとは見えない。はなやかなところはどこもなく、一つずついゝえば醜いほうの顔であるが、姿態がいかにもよくて、美しい今一人よりも人の注意を多く引く価値があつた。派手はでな愛嬌あいぎょうのある顔を性格からあふれる誇りに輝かせて笑うほうの女は、普通の見方をもつてすれば確かに美人である。軽佻けいちやうだと思ひながらも若い源氏はそれにも関心が持てた。源氏のこれまで知っていたのは、皆

正しく行儀よく、つつましく装った女性だけであつた。こうしただらしなくしている女の姿を隙見したりしたことははじめての経験であつたから、隙見男のいることを知らない女はかわいそうでも、もう少し立っていたく思った時に、小君が縁側へ出て来そうになつたので静かにそこを退いた。そして妻戸の向かいになつた渡殿わたどのの入り口のほうに立っていると小君が来た。濟まないような表情をしている。

「平生いない人が来ていまして、姉のそばへ行かれないのです」

「そして今晚のうちに帰すのだろうか。逢えなくてはつまらない」

「そんなことはないでしょう。あの人が行つてしまひましたら私がよくいたします」

と言つた。さも成功の自信があるようなことを言う、子供だけれど目はしがよく利きくのだからよくいくかもしれないと源氏は思つていた。暮の勝負がいよいよ終わったのか、人が分かれ分かれに立つて行くような音がした。

「若様はどこにいらつしやいますか。このお格子はしめてしまひますよ」

と言つて格子をことごとと中から鳴らした。

「もう皆寝るのだらう、じゃあはいつて行って上手にやれ」

と源氏は言つた。小君もきまじめな姉の心は動かせそうではないのを知つて相談はせず、そばに人の少ない時に寢室へ源氏を導いて行くかと思つていたのである。

「紀伊守の妹もこちらにいるのか。私に隙見すきみさせてくれ」

「そんなこと、格子には几帳きちょうが添えて立ててあるのですから」

と小君が言う。そのとおりだ、しかし、そうだけれど源氏はお

かしく思ったが、見たとは知らずまい、かわいそうだと考えて、ただ夜ふけまで待つ苦痛を言っていた。小君は、今度は横の妻戸をあけさせては行って行った。

女房たちは皆寝てしまった。

「この敷居の前で私は寝る。よく風が通るから」

と言つて、小君は板間に上敷をひろげて寝た。女房たちは東南の隅の室に皆はいつて寝たようである。小君のために妻戸をあけに出て来た童女もそこへはいつて寝た。しばらく空寝入りをして見せたあとで、小君はその隅の室からさしている灯の明りのほうを、ひろげた屏風で隔ててこちらは暗くなった妻戸の前の室へ源氏を引き入れた。人目について恥をかきそうな不安を覚えながら、源氏は導かれるままに中央の母屋の几帳の垂絹をはねて中へはいろいろとした。

それはきわめて細心に行なっていることであつたが、家の中が寝静まつた時間には、柔らかな源氏の衣摺れの音も耳立った。女は近ごろ源氏の手紙の来なくなつたのを、安心のできることに思おうとするのであつたが、今も夢のようなあの夜の思い出をなつかしがつて、毎夜安眠もできなくなっているころであつた。

人知れぬ恋は昼は終日物思いをして、夜は寝ざめがちな女にこの人をしていた。暮の相手の娘は、今夜はこちらで泊まるといつて若々しい屈託のない話をしながら寝てしまった。無邪気に娘はよく睡っていたが、源氏がこの室へ寄つて来て、衣服の持つ薫物の香が流れてきた時に気づいて女は顔を上げた。夏の薄い几帳越しに人のみじろぐのが暗い中にもよく感じられるのであつた。静かに起きて、薄衣の単衣を一つ着ただけでそつと寝室を抜けて出た。

はいつて来た源氏は、外にだれもいず一人で女が寝ていたのに安

心した。帳台から下の所に二人ほど女房が寝ていた。上に被^{かす}いた着物をのけて寄って行った時に、あの時の女よりも大きい気がしてまだ源氏は恋人だとばかり思っていた。あまりによく眠っていることなどに不審が起こってきて、やっと源氏にその人でないことがわかった。あきれるとともにくやしくてならぬ心になったが、人違いであるといつてここから出て行くことも怪しがられることで困ったと源氏は思った。その人の隠れた場所へ行っても、これほどに自分から逃げようとするのに一心である人は快く自分に逢^あうはずもなく、ただ侮^ぶ蔑^つされるだけであろうという気がして、これがあの美人であつたら今夜の情人にこれをしておいてもよいという心になった。これでつれない人への源氏の恋も何ほどの深さかと疑われる。

やっと目がさめた女はあさましい成り行きにただ驚いているだけで、真から気の毒なような感情が源氏に起こつてこない。娘であつた割合には蓮^{はす}葉^はな生意気なこの人はあわてもしない。源氏は自身でないようにしてしまいたかつたが、どうしてこんなことがあつたかと、あとで女を考えてみる時に、それは自分のためにはどうでもよいことであるが、自分の恋しい冷ややかな人が、世間をあんなにはばかっていたのであるから、このことで秘密を暴露させることになつてはかわいそうであると思つた。それでたびたび方^{かた}違^{たが}えにこの家を選んだのはあなたに接近したためだつたと告げた。少し考えてみる人には継母との関係がわかるであろうが、若い娘心はこんな生意気な人ではあつてもそれに思い至らなかつた。憎くはなくても心の惹^ひかれる点のない気がして、この時でさえ源氏の心は無情な人の恋しさでいっぱいだった。どこの隅にはいつて自分の思い詰め方を笑っているのだろう、こんな真実心というものはざらにあるもので

もないのにと、あざける気になってみても真底はやはりその人が恋しくてならないのである。

しかし何の疑いも持たない新しい情人も可憐かれんに思われる点があつて、源氏は言葉上手ことばじょうずにのちのちの約束をしたりしていた。

「公然の関係よりもこうした忍んだ中のほうが恋を深くするものと昔から皆言ってます。あなたも私を愛してくださいよ。私は世間への遠慮がないでもないのだから、思ったとおりの行為はできないのです。あなたの側でも父や兄がこの関係に好意を持ってくれそんなことを私は今から心配している。忘れずにまた逢いに來る私を待っていてください」

などと、安っぽい浮気男うわきの口ぶりでものを言っていた。

「人にこの秘密を知らせたくありませんから、私は手紙もようあげません」

女は素直すなおに言っていた。

「皆に怪しがられるようにしてはいけませんが、この家の小さい殿上人てんじょうじんね、あれに託して私も手紙をあげよう。気をつけなくてはいけませんよ、秘密をだれにも知らせないように」

と言い置いて、源氏は恋人がさつき脱いで行ったらしい一枚の薄衣うすぎを手ものに持って出た。

隣の室に寝ていた小君こぎみを起こすと、源氏のことを気がかりに思いながら寝ていたので、すぐに目をさました。小君が妻戸を静かにあけると、年の寄った女の声で、

「だれですか」

おおげさに言った。めんどろうだと思ひながら小君は、

「私だ」

と言う。

「こんな夜中にどこへおいでになるんですか」

小賢こさかしい老女がこちらへ歩いて来るふうである。小君は憎らしく思つて、

「ちよつと外へ出るだけだよ」

と言いながら源氏を戸口から押し出した。夜明けに近い時刻の明るい月光が外にあつて、ふと人影を老女は見た。

「もう一人の方はどなた」

と言つた老女が、また、

「民部みんぶさんでしょう。すばらしく背の高い人だね」

と言う。朋輩ほうばいの背高女のことをいうのである。老女は小君と民部がいつしよに行くのだと思つていた。

「今にあなたも負けない背丈せたいになりますよ」

と言いながら源氏たちの出た妻戸から老女も外へ出て来た。困りながらも老女を戸口へ押し返すこともできずに、向かい側の渡殿わたどのの入り口に添つて立っていると、源氏のそばへ老女が寄つて来た。

「あんた、今夜はお居間に行つていたの。私はお腹なかの具合ぐあいが悪くて部屋へやのほうで休んでいたのですがね。不用心だから来いと言つて呼び出されたもんですよ。どうも苦しくて我慢ができませんよ」

こぼして聞かせるのである。

「痛い、ああ痛い。またあとで」

と言つて行つてしまった。やつと源氏はそこを離れることができた。冒険はできないと源氏は懲こらりた。

小君を車のあとに乗せて、源氏は二条の院へ帰つた。その人に逃げられてしまった今夜の始末を源氏は話して、おまえは子供だ、や

はりだめだと言い、その姉の態度があくまで恨めしいふうに語った。気の毒で小君は何とも返辞をすることができなかった。

「姉さんは私をよほどきらっているらしいから、そんなにきらわれる自分がいやになった。そうじゃないか、せめて話すことぐらいはしてくれてもよさそうじゃないか。私は伊予介よりつまらない男に違いない」

恨めしい心から、こんなことを言った。そして持って来た薄い着物を寝床の中へ入れて寝た。小君をすぐ前に寝させて、恨めしく思うことも、恋しい心持ちも言っていた。

「おまえはかわいいけれど、恨めしい人の弟だから、いつまでも私の心がおまえを愛しうるかどうか」

まじめそうに源氏がこう言うのを聞いて小君はしおれていた。しばらく目を閉じていたが源氏は寝られなかった。起きるとすぐに硯すずりを取り寄せて手紙らしい手紙でなく無駄書きむだのようにして書いた。

「#ここから2字下げ」

空蝉うつせみの身をかへてける木このもとになほ人からのなつかしきかな

「#ここで字下げ終わり」

この歌を渡された小君は懐ふところの中へよくしまった。あの娘へも何か言っつてやらねばと源氏は思ったが、いろいろ考えた末に手紙を書いて小君に託たくすることはやめた。

あの薄衣うすものは小桂こいづちだった。なつかしい気のする匂においが深くついているのを源氏は自身のそばから離はなそうとしなかった。

小君が姉のところへ行つた。空蝉は待っていたようにきびしい小

言を言った。

「ほんとうに驚かされてしまった。私は隠れてしまったけれど、だれがどんなことを想像するかもしれないじゃないの。あさはかなことばかりするあなたを、あちらではかえって軽蔑けいべつなさらないかと心配する」

源氏と姉の中に立って、どちらからも受ける小言の多いことを小君は苦しく思いながらことづかった歌を出した。さすがに中をあけて空蝉は読んだ。抜け殻がらにして源氏に取られた小桂が、見苦しい着古しになっていなかっただろうかななど思いながらもその人の愛が身に沁しんだ。空蝉のしている煩悶はんもんは複雑だった。

西の対の人も今朝けさは恥はずかしい気持ちで帰って行ったのである。一人の女房すらも気のつかなくった事件であつたから、ただ一人で物思いをしていた。小君が家の中を往来ゆききする影を見ても胸をおどらせることが多いにもかかわらず手紙はもらえなかつた。これを男の冷淡さからとはまだ考えることができないのであるが、蓮葉はすじはな心にも愁うれいを覚える日があつたであろう。

冷静を装まつていながら空蝉も、源氏の真実が感ぜられるにつけて、娘の時代であつたならとかえらぬ運命が悲しくばかりなつて、源氏から来た歌の紙の端に、

「#ここから2字下げ」

うつせみの羽はに置く露この木隠れて忍しのび忍しのびに濡ぬる袖そでかな

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を書いていた。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年4月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夕顔

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）うき夜半よはの

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）長い間—かいふく恢復しない

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」うき夜半よはの悪夢と共になつかしきゆめ

「#地から3字上げ」もあとなく消えにけるかな（晶子）

源氏が六条に恋人を持っていたころ、御所からそこへ通う途中で、だいぶ重い病気をし尼になった大式だいにの乳母めのとを訪ねようとして、五条辺のその家へ来た。乗ったままで車を入れる大門がしめてあったので、従者に呼び出させた乳母の息子むすこの惟光これみつの来るまで、源氏はりっ

ばでないその辺の町を車からながめていた。惟光の家の隣に、新しい檜垣ひがきを外囲いにして、建物の前のほうは上げ格子こうしを四、五間ずつと上げ渡した高窓式になっていて、新しく白い簾すだれを掛け、そこから若いきれいな感じのする額を並べて、何人かの女が外をのぞいている家があった。高い窓に顔が当たっているその人たちは非常に背の高いもののように思われてならない。どんな身分の者の集まっている所だろう。風変わりな家だと源氏には思われた。今日は車も簡素なものにして目だたせない用意がしてあって、前駆の者にも人払いの声を立てさせなかったから、源氏は自分のだれであるかに町の人も気はつくまいという気楽な心持ちで、その家を少し深くのぞこうとした。門の戸も葎風しとみふうになっていて上げられてある下から家の全部が見えるほどの簡単なものである。哀れに思ったが、ただ飯の世の相であるから宮も葎屋わらやも同じことという歌が思われて、われわれの住居すまいだって一所いっしょだとも思えた。端隠はなかくのような物に青々とした蔓草つるくさが勢いきほいよくかかっている、その白い花だけがその辺で見ると何よりもうれしそうな顔で笑っていた。そこに白く咲いているのは何の花かという歌を口ずさんでいると、中將の源氏につけられた近衛このえの隨身しんが車の前に膝ひざをかがめて言った。

「あの白い花を夕顔と申します。人間のような名でございまして、こうした卑しい家の垣根かきねに咲くものでございます」

その言葉どおりで、貧しげな小家がちのこの通りのあちら、こちら、あるものは倒れそうになった家の軒などにもこの花が咲いていた。

「気の毒な運命の花だね。一枝折ってこい」

と源氏が言うと、葎風しとみふうの門のある中へはいつて隨身は花を折った。

ちよつとしゃれた作りになっている横戸の口に、黄色の生絹すずしの袴はかまを長めにはいた愛らしい童女が出て来て隨身を招いて、白い扇を色のつくほど薰物たきもので燻くもらしたのを渡した。

「これへ載せておあげなさいまし。手で提さげては不恰好ぶかっこうな花ですもの」

隨身は、夕顔の花をちよつどこの時門をあけさせて出て来た惟光の手から源氏へ渡してもらった。

「鍵かぎの置き所がわかりませんでして、たいへん失礼をいたしました。よいも悪いも見分けられない人の住む界わいではございましたも、見苦しい通りにお待たせいたしましたして」

と惟光は恐縮していた。車を引き入れさせて源氏の乳母めのとの家へ下りた。惟光の兄の阿闍梨あじやり、乳母の婿むかひの三河守みかわのかみ、娘などが皆このごろはここに來ていて、こんなふうに源氏自身で見舞いに來てくれたことを非常にありがたがっていた。尼も起き上がっていた。

「もう私は死んでもよいと見られる人間なんでしょうが、少しこの世に未練を持っておりましたのはこうしてあなた様にお目にかかるということがあの世ではできませんからでございます。尼になりました功德くどくで病気が楽になりました、こうしてあなた様の御前へも出られたのですから、もうこれで阿弥陀様あみだのお迎えも快くお待ちすることができましょう」

などと言って弱々しく泣いた。

「長い間一恢復かいふくしないあなたの病気を心配しているうちに、こんなふうになんてなってしまうから残念です。長生きをして私の出世する時を見てください。そのあとで死ねば九品蓮台くほんれんたいの最上位にだつて生まれることができますでしょう。この世に少しでも飽き足りない

心を残すのはよくないということだから」

源氏は涙ぐんで言っていた。欠点のある人でも、乳母というような関係でその人を愛している者には、それが非常にりっぱな完全なものに見えるのであるから、まして養君やしなごがこの世のだれよりもすぐれた源氏の君であつては、自身までも普通の者でないような誇りを覚えていた彼女であつたから、源氏からこんな言葉を聞いてはただうれし泣きをするばかりであつた。息子むすこや娘は母の態度を飽き足りない齒がゆいもののように思つて、尼になつていながらこの世への未練をお見せするようなものである、俗縁のあつた方に惜しんで泣いていただくのはともかくもだがというような意味を、肱ひじを突いたり、目くばせをしたりして兄弟どうしで示し合つていた。源氏は乳母を憐あわれんでいた。

「母や祖母を早く失なくした私のために、世話する役人などは多数にあつても、私の最も親しく思われた人はあなただつたのだ。大人おとなになつてからは少年時代のように、いつもいっしょにすることができず、思い立つ時にすぐに訪たずねて来るようなこともできないのですが、今でもまだあなたと長く逢あわなないでいると心細い気がするほどなんだから、生死の別れというものがなければよいと昔の人が言つたよ
うなことを私も思う」

しみじみと話して、袖そでで涙を拭ふいている美しい源氏を見ては、この方の乳母でありえたわが母もよい前生ぜんじょうの縁を持った人に違ちがいないという気がして、さつきから批難がましくしていた兄弟たちも、しみりとした同情を母へ持つようになった。源氏が引き受けて、もつと祈きと禱とうを頼むことなどを命じてから、帰ろうとする時に惟光これみつに蠟ろう燭そくを点とませて、さつき夕顔の花の載せられて来た扇を見た。よく使

い込んであつて、よい薰物の香のする扇に、きれいな字で歌が書かれてある。

「#ここから2字下げ」

心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

「#ここで字下げ終わり」

散らし書きの字が上品に見えた。少し意外だった源氏は、風流遊戯をしかけた女性に好感を覚えた。惟光に、

「この隣の家にはだれが住んでいるのか、聞いたことがあるか」と言うと、惟光は主人の例の好色癖が出てきたと思つた。

「この五、六日母の家におりますが、病人の世話をしておりますので、隣のこととはまだ聞いておりません」

惟光が冷淡に答えると、源氏は、

「こんなことを聞いたのでおもしろく思わないんだね。でもこの扇が私の興味をひくのだ。この辺のことに詳しい人を呼んで聞いてもらん」

と言つた。はいつて行つて隣の番人と逢つて来た惟光は、

「地方庁の介の名だけをいただいている人の家でございました。主人は田舎へ行つていゝるそうで、若い風流好きな細君がいて、女房勤めをしているその姉妹たちがよく出入りすると申します。詳しいことは下人で、よくわからないのでございましょう」

と報告した。ではその女房をしているという女たちなのであろうと源氏は解釈して、いい気になつて、物馴れた戯れをしかけたものだと思ひ、下の品であるうが、自分を光源氏と見て詠んだ歌をよこ

されたのに対して、何か言わねばならぬという気がした。というのは女性にはほだされやすい性格だからである。懐紙ふところがみに、別人のような字体で書いた。

「#ここから2字下げ」

寄りてこそそれかとも見め黄昏たそがれにほのぼの見つる花の夕顔

「#ここで字下げ終わり」

花を折りに行った隨身に持たせてやった。夕顔の花の家の人は源氏を知らなかったが、隣の家の主人筋らしい貴人はそれらしく思われて贈った歌に、返事のないのにきまり悪さを感じていたところへ、わざわざ使いに返歌を持たせてよこされたので、またこれに対して何か言わねばならぬなどと皆で言い合っただであろうが、身分をわきまえないしかただと反感を持っていた隨身は、渡す物を渡したただけですぐに帰って来た。

前駆の者が馬上で掲げて行く松明たいまつの明りがほのかにしか光らないで源氏の車は行った。高窓はもう戸がおろしてあった。その隙間すきまから蛍ほたる以上にかすかな灯ひの光が見えた。

源氏の恋人の六条一貴女きじよの邸やしきは大きかった。広い美しい庭があつて、家の中は気高けだかく上手じょうずに住み馴ならしてあった。まだまったく源氏の物とも思わせない、打ち解けぬ貴女を扱うのに心を奪われて、もう源氏は夕顔の花を思い出す余裕を持っていなかったのである。早朝の帰りが少しおくれて、日のさしそめたところに出かける源氏の姿には、世間から大騒しとみふうぎされるだけの美は十分に備わっていた。

今朝けさも五条の蔀風しとみふうの門の前を通った。以前からの通り路みちではある

が、あのちよつとしたことに興味を持つてからは、行き来のたびにその家が源氏の目についた。幾日かして惟光が出て来た。

「病人がまだひどく衰弱しているものでございますから、どうしてもそのほうの手が離せませんで、失礼いたしました」

こんな挨拶をしたあとで、少し源氏の君の近くへ膝を進めて惟光朝臣は言った。

「お話がございましたあとで、隣のことによく通じております者を呼び寄せまして、聞かせたのでございますが、よくは話さないのでございます。この五月ごろからそつと来て同居している人があるようです。どなたなのか、家の者にもわからせないようにしてますと申すのです。時々私の家との間の垣根から私はのぞいて見るのですが、いかにもあの家には若い女の人たちがいるらしい影が簾から見えます。主人がいなければつけない裳を言いわけほどにでも女たちがつけておりますから、主人である女が一人いるに違いございません。昨日夕日がすつかり家の中へさし込んでいました時に、すわつて手紙を書いている女の顔が非常にきれいでした。物思いがあるふうでございましたよ。女房の中には泣いている者も確かにありました」

源氏はほほえんでいたが、もつと詳しく知りたいと思うふうである。自重をなさらなければならぬ身分は身分でも、この若さと、この美の備わった方が、恋愛に興味をお持ちにならないでは、第三者が見ていても物足らないことである。恋愛をする資格がないように思われているわれわれでさえもずいぶん女のことでは好奇心が動くのであるからと惟光は主人をながめていた。

「そんなことから隣の家の内の秘密がわからないものでもないと思

いまして、ちょっとした機会をとらえて隣の女へ手紙をやってみました。するとすぐに書き馴れた達者な字で返事がまいりました、相当によい若い女房もいるらしいのです」

「おまえは、なおどしどし恋の手紙を送ってやるのだね。それがよい。その人の正体が知れないではなんだか安心ができない」

と源氏が言った。家は下の下に属するものと品定めの人たちに言われるはずの所でも、そんな所から意外な趣のある女を見つけ出すことがあればうれしに違いないと源氏は思うのである。

源氏は空蝉の極端な冷淡さをこの世の女の心とは思われないと考えると、あの女が言うままになる女であったなら、気の毒な過失をさせたということだけで、もう過去へ葬ってしまったかもしれないが、強い態度を取り続けられるために、負けたくないと反抗心が起こるのであるとこんなふうに使われて、その人を忘れていた時は少ないのである。これまでは空蝉階級の女が源氏の心を引くようなこともなかったが、あの雨夜の品定めを聞いて以来好奇心はあらゆるものに動いて行った。何の疑いも持たずに一夜の男を思っているもう一人の女を憐まないのではないが、冷静にしている空蝉にそれを知れるのを、恥ずかしく思っていて、いよいよ望みのないことのわかる日までとは思ってそれきりにしてあるのであったが、そこへ伊予介が上京して来た。そして真先に源氏の所へ伺候した。長い旅をして来たせいで、色が黒くなりやつれた伊予の長官は見栄も何もなかった。しかし家柄もいいものであったし、顔だちなどに老いてもなお整ったところがあって、どこか上品なところのある地方官とは見えただ。任地の話などをしたので、湯の郡の温泉話も聞きたい気はあったが、何ゆえとなしにこの人を見るとときまりが悪くなって、源氏

の心に浮かんでくることは数々の罪の思い出であつた。まじめな生一本の男と対つていて、やましい暗い心を抱くとはけしからぬことである。人妻に恋をして三角関係を作る男の愚かさを左馬頭の言つたのは真理であると思うと、源氏は自分に対して空蝉の冷淡なのは恨めしいが、この良人のためには尊敬すべき態度であると思うようになった。

伊予介が娘を結婚させて、今度は細君を同伴して行くという噂は、二つとも源氏が無関心で聞いていられないことだつた。恋人が遠国へつれられて行くと聞いては、再会を気長に待っていていられなくなつて、もう一度だけ逢うことはできぬかと、小君を味方にして空蝉に接近する策を講じたが、そんな機会を作るということは相手の女も同じ目的を持っている場合だつても困難なのであるのに、空蝉のほうでは源氏と恋をすることの不似合いを、思い過ぎるほどに思つていたのであるから、この上罪を重ねようとはしないのであつて、とつてい源氏の思うようにはならないのである。空蝉はそれでも自分が全然源氏から忘れられるのも非常に悲しいことだと思つて、おりの手紙の返事などに優しい心を見せていた。なんでもなく書く簡単な文字の中に可憐な心が混じつていたり、芸術的な文章を書いたりして源氏の心を惹くものがあつたから、冷淡な恨めしい人であつて、しかも忘れられない女になつていた。もう一人の女は他人と結婚をしても思いどおりに動かしうる女だと思つていたから、いろいろな噂を聞いても源氏は何とも思わなかつた。秋になつた。このごろの源氏はある発展を遂げた初恋のその続きの苦悶の中にいて、自然左大臣家へ通うことも途絶えがちになつて恨めしがられていた。六条の貴女との関係も、その恋を得る以前ほどの熱をまた持つこと

のできない悩みがあった。自分の態度によって女の名誉が傷つくことになつてはならないと思うが、夢中になるほどその人の恋しかつた心と今の心とは、多少一懸隔へたたりのあるものだった。六条の貴女はあまりにもものを思い込む性質だった。源氏よりは八歳上やっつの二十五であつたから、不似合いな相手と恋に墮ちおて、すぐにまた愛されぬ物思いに沈む運命なのだろうかと、待ち明かしてしまふ夜などには煩悶はんもんすることが多かつた。

霧の濃くおりた朝、帰りをそそのかされて、睡ねむそうなふうで歎たん息そくをしながら源氏が出て行くのを、貴女の女房の中將が格子こうしを一問だけ上げて、女主人おんなあるじに見送らせるために几帳きちょうを横へ引いてしまった。それで貴女は頭を上げて外をながめていた。いろいろに咲いた植え込みの花に心が引かれるようで、立ち止まりがちに源氏は歩いて行く。非常に美しい。廊のほうへ行くのに中將が供をして行つた。この時節にふさわしい淡紫たんしの薄物もの装もをきれいに結びつけた中將の腰つきが艶えんであつた。源氏は振り返つて曲がり角かどの高欄たからんの所へしばらく中將を引き据すえた。なお主従の礼をくずさない態度も額髪ひたいがみのかかりぎわのあざやかさもすぐれて優美な中將だった。

「#ここから1字下げ」

「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎうき今朝けさの朝顔

「#ここで字下げ終わり」

どうすればいい」

こう言つて源氏は女の手を取つた。物馴ものなれたふうで、すぐに、

「#ここから2字下げ」

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

と言う。源氏の焦点をはずして主人の侍女としての挨拶をしたのである。美しい童侍わらわざむらひの恰好がっこうのよい姿をした子が、指貫さしぬきの袴はかまを露ぬで濡らしながら、草花の中へはいつて行って朝顔の花を持って来たりもするのである、この秋の庭は絵にしたいほどの趣があつた。源氏を遠くから知っているほどの人でもその美を敬愛しない者はない、情趣を解しない山の男でも、休み場所には桜かげの蔭かげを選ぶようなわけで、その身分身分によつて愛している娘を源氏の女房にさせたいと思つたり、相当な女であると思つ妹を持った兄が、ぜひ源氏の出入りする家の召使にさせたいとか皆思つた。まして何かの場合には優しい言葉を源氏からかけられる女房、この中将のような女はおろそかにこの幸福を思っていない。情人になろうなどとは思ひも寄らぬことで、女主人の所へ毎日おいでになればどんなにうれしいであろうと思つていたのであつた。

それから、あの惟光これみみつの受け持ちの五条の女の家を探る件、それについて惟光はいろいろな材料を得てきた。

「まだだれであるかは私にわからない人でございます。隠ひまれていることの知れないようにとずいぶん苦心する様子です。閑暇ひまなものですから、南のほうの高い窓のある建物のほうへ行つて、車の音がすると若い女房などは外をのぞくようですが、その主人らしい人も時にはそちらへ行つてゐることがございます。その人は、よくは見ませんがずいぶん美人らしゅうございます。この間先払いの声を立て

させて通る車がございましたが、それをのぞいて女の童わらわが後ろの建物のほうへ来て、『右近うこんさん、早くのぞいてごらんなさい、中将さんが通りをいらつしやいます』と言いますと相当な女房が出て来まして、『まあ静かになさいよ』と手でおさえるようにしながら、『まあどうしてそれがわかったの、私のがぞいて見ましよう』と言って前の家のほうへ行くのですね、細い渡り板が通路なんですから、急いで行く人は着物の裾すそを引っかけて倒れたりして、橋から落ちそうになって、『まあいやだ』などと大騒ぎで、もうのぞきに出る気もなくなりそうなんです。車の人は直衣のうし姿で、隨身たちもおりました。だれだれも、だれだれもと数えている名は頭中將かみちゆうじょうの隨身しんじんや少年侍の名でございました。

などと言った。

「確かにその車の主が知りたいものだ」

もしかすればそれは頭中將が忘られないように話した常夏とこなげの歌の女ではないかと思つた源氏の、もしよく探りたいらしい顔色を見た惟光これみつは、

「われわれ仲間の恋と見せかけておきまして、実はその上に御主人のいらつしやることもこちらは承知しているのですが、女房相手の安価な恋の奴やつこになりすましております。向こうでは上手うまいに隠せていると思ひまして私が訪ねて行つてる時などに、女の童わらわなどがうっかり言葉をすべらしたりいたしますと、いろいろに言い紛らしまして、自分たちだけだというふうを作ろうといたします」

と言つて笑つた。

「おまえの所へ尼さんを見舞いに行つた時に隣をのぞかせてくれ」と源氏は言つていた。たとえ仮住まいであつてもあの五条の家に

いる人なのだから、下の品の女であろうが、そうした中におもしろい女が発見できればと思うのである。源氏の機嫌きげんを取ろうと一所懸命の惟光であつたし、彼自身も好色者で他の恋愛にさえも興味を持つほうであつたから、いろいろと苦心をした末に源氏を隣の女の所へ通わせるようにした。

女のだれであるかをぜひ知ろうともしないとともに、源氏は自身の名もあらわさずに、思いきり質素なふうをして多くは車にも乗らずに通つた。深く愛しておらねばできぬことだと惟光は解釈して、自身の乗る馬に源氏を乗せて、自身は徒歩で供をした。

「私から申し込みを受けたあすこの女はこの態ていを見たら驚くでしょう」

などとこぼしてみせたりしたが、このほかには最初夕顔の花を折りに行つた隨身と、それから源氏の召使であるともあまり顔を知られていない小侍だけを供にして行つた。それから知れることになつてはとの気づかいから、隣の家へ寄るようなこともしない。女のほうでも不思議でならない気がした。手紙の使いが来るとそつと人をつけてやつたり、男の夜明けの帰りに道を窺うかがわせたりしても、先方は心得こころえていてそれらをはぐらかしてしまつた。しかも源氏の心は十分に惹ひかれて、一時的な関係にとどめられる気はしなかつた。これを不名誉だと思ふ自尊心に悩みながらしばしば五条通いをした。恋愛問題ではまじめな人も過失をしがちなものであるが、この人だけはこれまで女のことと世間の批難を招くようなことをしなかつたのに、夕顔の花に傾倒してしまつた心だけは別だつた。別れ行く間も昼の間もその人をかたわらに見がたい苦痛を強く感じた。源氏は自身で、氣違きちがいじみたことだ、それほどの価値がどこにある恋人かな

どと反省もしてみるのである。驚くほど柔らかかでおおような性質で、
 深味のあるような人でもない。若々しい一方の女であるが、処女で
 あったわけでもない。貴婦人ではないようである。どこがそんなに
 自分を惹きつけるのであろうと不思議でならなかった。わざわざ平
 生の源氏に用のない狩衣かりぎぬなどを着て変装した源氏は顔なども全然見
 せない。ずっと更ふけてから、人の寝静まったあとで行ったり、夜の
 うちに帰ったりするのであるから、女のほうでは昔の三輪みわの神の話
 のような気がして気味悪く思われなくてはなかった。しかしどんな
 人であるかは手の触覚からでもわかるものであるから、若い風流男
 以外な者に源氏を観察していかない。やはり好色な隣の五位ごいが導いて
 来た人に違これいと惟光これみつを疑たずっているが、その人はまったく気がつ
 かぬふうで相変わらず女房の所へ手紙を送って来たり、訪たずねて来た
 りするので、どうしたことかと女のほうでも普通の恋の物思いとは
 違はんもんった煩悶はんもんをしていた。源氏もこんなに真実を隠し続ければ、自分
 も女のだれであるかを知りようがない、今の家が仮すまいの住居であるこ
 とは間違まちがいのないことらしいから、どこかへ移うつって行ってしまった
 時に、自分は呆然ほうぜんとするばかりであろう。行くえを失うつてもあきら
 めがすぐつくものならよいが、それは断然不可能である。世間をは
 ばかって間あを空ける夜などは堪たえられない苦痛を覚えるのだと源氏
 は思おもって、世間へはだれとも知らせないで二条の院へ迎えよう、そ
 れを悪く言われても自分はそうなる前生の因縁だと思おもうほかはない、
 自分ながらもこれほど女に心こゝろを惹ひかれた経験が過去にないことを思
 うと、どうしても約束事と解釈するのが至当である、こんなふう
 に源氏は思おもって、

「あなたもその気におなりなさい。私は気楽な家へあなたをつれて

行つて夫婦生活がしたい」こんなことを女に言い出した。

「でもまだあなたは私を普通には取り扱っていらつしやらない方な
んですから不安で」

若々しく夕顔が言う。源氏は微笑された。

「そう、どちらかが狐きつねなんだろうね。でも欺だまされていらつしやれば
いいじゃない」

なつかしいふうに源氏が言うと、女はその気になつていく。どんな欠点があるにしても、これほど純な女を愛せずにはいられないではないかと思つた時、源氏は初めからその疑いを持つていたが、頭こづの中将ちゆうじやうの常夏とこなつの女はいよいよこの人らしいという考えが浮かんだ。しかし隠しているのはわけのあることであろうかと思つて、しいて聞く気にはなれなかつた。感情を害した時などに突然そむいて行つてしまうような性格はなさそうである、自分が途絶えがちになつたりした時には、あるいはそんな態度に出るかもしれないが、自分ながら少し今の情熱が緩和された時にかえつて女のよさがわかるのではないかと、それを望んでもできないのだから途絶えの起こつてくるわけではない、したがつて女の気持ちに不安に思ふ必要はないのだと知つていた。

八月の十五夜であつた。明るい月光が板屋根の隙間すきまだらけの家中へさし込んで、狭い家の中の物が源氏の目に珍しく見えた。もう夜明けに近い時刻なのであろう。近所の家々で貧しい男たちが目をさまして高声で話すのが聞こえた。

「ああ寒い。今年ことしこそもう商売のうまくいく自信が持てなくなった。地方廻りもできそうでないんだから心細いものだ。北隣さん、まあお聞きなさい」

などと言っているのである。哀れなその日その日の仕事のために
 起き出して、そろそろ労働を始める音なども近い所でするのを女は
 恥ずかしがっていた。氣どった女であれば死ぬほどきまりの悪さを
 感じる場所に違いない。でも夕顔はおおようにしていた。人の恨め
 しさも、自分の悲しさも、体面の保たれぬきまり悪さも、できるだ
 け思ったとは見せまいとするふうで、自分自身は貴族の子らしく、
 娘らしくて、ひどい近所の会話の内容もわからぬようであるのが、
 恥じ入られたりするよりも感じがよかった。ごほごほと雷以上の恐
 い音をさせる唐臼からうすなども、すぐ寢床のそばで鳴るように聞こえた。
 源氏もやかましいとこれは思った。けれどもこの貴公子も何から起
 こる音とは知らないのである。大きなたまらぬ音響のする何かだと
 思っていた。そのほかにもまだ多くの騒がしい雑音が聞こえた。白
 い麻布を打つ砧きぬたのかすかな音もあちこちにした。空を行く雁かりの声も
 した。秋の悲哀がしみじみと感じられる。庭に近い室であつたから、
 横の引き戸を開けて二人で外をながめるのであつた。小さい庭にし
 やれた姿の竹が立っていて、草の上の露はこんなところのも二条の
 院せんざいの前裁せんざいのに変わらずきらきらと光つている。虫もたくさん鳴いて
 いた。壁の中で鳴くといわれて人間の居場所に最も近く鳴くもの
 になっている蟋蟀こおろぎでさえも源氏は遠くの声だけしか聞いていなかっ
 たが、ここではどの虫も耳のそばへとまって鳴くような風変わりな情
 趣だと源氏が思うのも、夕顔を深く愛する心が何事も悪くは思わせ
 ないのであろう。白い袷あわに柔ならかい淡紫たんむらさを重ねたはなやかな姿では
 ない、ほっそりとした人で、どこかきわだつて非常によいという
 ころはないが繊細な感じのする美人で、ものを言う様子に弱々しい
 可憐かれんさが十分にあつた。才気らしいものを少しこの人に添えたらと

源氏は批評的に見ながらも、もつと深くこの人を知りたい気がして、
 「さあ出かけましょう。この近くのある家へ行つて、気楽に明日ま
 で話しましょう。こんなふうでいつも暗い間に別れていかなければ
 ならないのは苦しいから」

と言うと、

「どうしてそんなに急なことをお言い出しになりますの」

おおように夕顔は言っていた。変わらぬ恋を死後の世界にまで続
 けようと源氏の誓うのを見ると何の疑念もはさまずに信じてよろこ
 ぶ様子などのうぶさは、一度結婚した経験のある女とは思えないほ
 ど可憐であった。源氏はもうだれの思わくもはばかる気がなくなつ
 て、右近つごんに隨身を呼ばせて、車を庭へ入れることを命じた。夕顔の
 女房たちも、この通う男が女主人を深く愛していることを知ってい
 たから、だれともわからずにいながら相当に信頼していた。

ずっと明け方近くなってきた。この家に鶏とりの声は聞こえないで、
 現世一利益りやくの御岳教みだけきょうの信心なのか、老人らしい声で、起たつたりすわ
 つたりして、とても忙しく苦しそうにして祈る声が聞かれた。源氏
 は身にしむように思つて、朝露と同じように短い命を持つ人間が、
 この世に何の慾よくを持って祈祷きとうなどをするのだらうと聞いているうち
 に、

「南無なむ当来の導師」

と阿弥陀如来あみだにょらいを呼びかけた。

「そら聞いてごらん。現世利益だけが目的じゃなかった」
 とほめて、

「#ここから2字下げ」

優婆塞が行なふ道をしるべにて来ん世も深き契りたがふな

「#ここで字下げ終わり」

とも言った。玄宗と楊貴妃の七月七日の長生殿の誓いは実現されない空想であつたが、五十六億七千万年後の弥勒菩薩出現の世までも変わらぬ誓いを源氏はしたのである。

「#ここから2字下げ」

前の世の契り知らるる身のうさに行く末かけて頼みがたさよ

「#ここで字下げ終わり」

と女は言った。歌を詠む才なども豊富であろうとは思われぬ。

月夜に出れば月に誘惑されて行って帰らないことがあるということ
を思つて出かけるのを躊躇する夕顔に、源氏はいろいろに言つて同
行を勧めているうちに月もはいつてしまつて東の空の白む秋のし
のめが始まつてきた。

人目を引かぬ間にと思つて源氏は出かけるのを急いだ。女から
だを源氏が軽々と抱いて車に乗せ右近が同乗したのであつた。五条
に近い帝室の後院である某院へ着いた。呼び出した院の預かり役の
出て来るまで留めてある車から、忍ぶ草の生い茂つた門の廂が見上
げられた。たくさんにある大木が暗さを作っているのである。霧も
深く降つていて空気の湿っぽいのに車の簾を上げさせてあつたから
源氏の袖もそのうちべつたりと濡れてしまつた。

「私にははじめての経験だが妙に不安なものだ。」

「#ここから2字下げ」

いにしへもかくやは人の惑ひけんわがまだしらぬしののめの道

「#ここで字下げ終わり」

前にこんなことがありましたか」

と聞かれて女は恥ずかしそうだった。

「#ここから1字下げ」

「山の端はの心も知らず行く月は上うはの空にて影や消えなん

「#ここで字下げ終わり」

心細うございます、私は」

凄すこさに女がおびえてもいるように見えるのを、源氏はあの小さい家におおぜい住んでいた人なのだから道理であると思っておかしかった。

門内へ車を入れさせて、西の対たいに仕度したくをさせている間、高欄に車の柄を引っかけて源氏らは庭にいた。右近は艶えんな情趣を味わいながら女主人の過去の恋愛時代のある場面なども思い出されるのであった。預かり役がみずから出てする客人の扱いが丁寧きわまるものであることから、右近にはこの風流男の何者であるかがわかった。物の形がほのぼの見えるところに家へはいった。にわかな仕度ではあったが体裁よく座敷がこしらえてあった。

「だれというほどの人がお供しておらないなどは、どうもいやはや」

などといって預かり役は始終出入りする源氏の下家司しもけいしでもあったから、座敷の近くへ来て右近に、

「御家司をどなたかお呼び寄せしたものでございましょうか」と取り次がせた。

「わざわざだれにもわからない場所にここを選んだのだから、おまえ以外の者にはすべて秘密にしておいてくれ」

と源氏は口留めをした。さつそくに調えられた粥かゆなどが出た。給仕も食器も間に合わせを忍ぶよりほかはない。こんな経験を持たぬ源氏は、一切を切り放して気にかげぬこととして、恋人とはばからず語り合う愉楽に酔おうとした。

源氏は昼ごろに起きて格子を自身で上げた。非常に荒れていて、人影などは見えずにはるばると遠くまでが見渡される。向こうのほうの木立ちは気味悪く古い大木に皆なっていた。近い植え込みの草や灌木かんぼくなどには美しい姿もない。秋の荒野の景色けしきになっている。池も水草でうずめられた凄すしいものである。別れた棟むねのほうに部屋へやなどを持って預かり役は住むらしいが、そこそこことはよほど離れている。

「気味悪い家になっている。でも鬼なんかだって私だけはどうともしなからう」

と源氏は言った。まだこの時までには顔を隠していたが、この態度を女が恨めしがっているのを知って、何たる錯誤だ、不都合なのは自分である、こんなに愛していながらと気がついた。

「#ここから1字下げ」

「夕露にひもとく花は玉銚たまぼこのたよりに見えし縁えにこそありけれ

「#ここで字下げ終わり」

あなたの心あてにそれかと思うと言った時の人の顔を近くに見て
幻滅が起こりませんか」

と言う源氏の君を後目しりめに女は見上げて、

「#ここから2字下げ」

光ありと見し夕顔のうは露は黄昏時たそがれどきのそら目なりけり

「#ここで字下げ終わり」

と言った。冗談じょうだんまでも言う気になったのが源氏にはうれしかった。
打ち解けた瞬間から源氏の美はあたりに放散した。古くさく荒れた
家との対照はまして魅惑的だった。

「いつまでも真実のことを打ちあけてくれないのが恨めしくって、
私もだれであるかを隠し通したのだが、負けた。もういいでしょう、
名を言ってください、人間離れがあまりしすぎます」

と源氏が言っても、

「家も何もない女ですもの」

と言つてそこまではまだ打ち解けぬ様子も美しく感ぜられた。

「しかたがない。私が悪いのだから」

と怨うらんでみたり、永久の恋の誓いをし合ったりして時を送った。

惟光これみつが源氏の居所を突きとめてきて、用意してきた菓子などを座
敷へ持たせてよこした。これまで白しろばくれていた態度を右近うこんに恨ま
れるのがつらくて、近い所へは顔を見せない。惟光は源氏が人騒が
せに居所を不明にして、一日を犠牲にするまで熱心になりうる相手

の女は、それに価する者であるらしいと想像をして、当然自己のものになしうるはずの人を主君にゆずった自分は広量なものだと嫉妬しつとに似た心で自嘲じちやうもし、羨望せんぼうもしていた。

静かな静かな夕方の空をながめていて、奥のほうは暗くて気味が悪いと夕顔が思うふうなので、縁の簾すだれを上げて夕映ゆうばえの雲をいっしよに見て、女も源氏とただ二人で暮らしえた一日に、まだまったく落ち着かぬ恋の境地とはいえ、過去に知らない満足が得られたらしく、少しずつ打ち解けた様子が可憐かれんであった。じつと源氏のそばへ寄って、この場所がこわくてならぬふうであるのがいかにも若々しい。格子こうしを早くおろして灯ひをつけさせてからも、

「私のほうにはもう何も秘密が残っていないのに、あなたはまだそうでないのだからいけない」

などと源氏は恨みを言っていた。陛下はきつと今日も自分をお召しになったに違いないが、捜す人たちはどう見当をつけてどこへ行っているだろう、などと想像をしながらも、これほどまでにこの女を溺愛できあいしている自分を源氏は不思議に思った。六条の貴女きじよもどんなに煩悶はんもんをしていることだろう、恨まれるのは苦しいが恨むのは道理である、恋人のことはこんな時にもまず気にかかった。無邪気に男を信じていっしょにいる女に愛を感じるとともに、あまりにまで高い自尊心にみずから煩わづらわされている六条の貴女が思われて、少しその点を取り捨てたならと、眼前の人に比べて源氏は思うのであった。

十時過ぎに少し寝入った源氏は枕まくらの所に美しい女がすわっているのを見た。

「私がどんなにあなたを愛しているかしのれないのに、私を愛さない

で、こんな平凡な人をつれていらっしつて愛撫あいぶなさるのはあまりにひどい。恨めしい方」

と言つて横にいる女に手をかけて起こそうとする。こんな光景を見た。苦しい襲われた気持ちになつて、すぐ起きると、その時に灯ひが消えた。不気味なので、太刀たちを引き抜いて枕もとに置いて、それから右近を起こした。右近も恐ろしくてならぬというふうで近くへ出て来た。

「渡殿わたどのにいる宿直とのいの人を起こして、蝟燭ろうそくをつけて来るように言うがいい」

「どうしてそんな所へまで参れるものでございますか、暗くらうて」
「子供らしいじゃないか」

笑つて源氏が手をたたくとそれが反響になつた。限りない気味悪さである。しかもその音を聞きつけて来る者はだれもない。夕顔は非常にこわがつてふるえていて、どうすればいいだろうと思つてふうである。汗をずつぷりとかいて、意識のありなしも疑わしい。

「非常に物恐れをなさいます御性質ですから、どんなお気持ちなさるのでございましょうか」

と右近も言つた。弱々しい人で今日の昼間も部屋へやの中を見まわすことができずに空をばかりながめていたのであるからと思うと、源氏はかわいそうでならなかつた。

「私が行つて人を起こそう。手をたたくと山彦やまひこがしてうるさくてならない。しばらくの間ここへ寄つていてくれ」

と言つて、右近を寢床のほうへ引き寄せておいて、両側の妻戸の口へ出て、戸を押しあけたのと同時に渡殿についていた灯も消えた。風が少し吹いている。こんな夜に侍者は少なく、しかもありたけ

の人は寝てしまっていた。院の預かり役の息子で、平光源氏が手もとで使っていた若い男、それから侍童が一人、例の隨身、それだけが宿直とらひをしていたのである。源氏が呼ぶと返辞をして起きて来た。

「蠟燭ろうそくをつけて参れ。隨身に弓の絃つる打ちをして絶えず声を出して魔性に備えるように命じてくれ。こんな寂しい所で安心をして寝ていいわけではない。先刻せんこく惟光これみつが来たと言っていたが、どうしたか」

「参っておりますが、御用事もないから、夜明けにお迎えに参ると申して帰りましてございます」

こう源氏と問答をしたのは、御所の滝口に勤めている男であったから、専門家的に弓絃ゆづるを鳴らして、

「火一危あぶなし、火危し」

と言いながら、父である預かり役の住居すまいのほうへ行つた。源氏はこの時刻の御所を思った。殿上てんじやうの宿直役人が姓名を奏上する名対面はもう終わっているだろう、滝口の武士の宿直の奏上があるころである、こんなことを思ったところを見ると、まだそう深更でなかったに違いない。寢室へ帰って、暗がりの中を手で探ると夕顔はもとのままの姿で寝ていて、右近がそのそばでうつ伏せになっていた。

「どうしたのだ。気違いじみたこわがりようだ。こんな荒れた家などというものは、狐きつねなどが人をおどしてこわがらせるのだよ。私がおればそんなものにおどかさねはしないよ」

と言って、源氏は右近を引き起こした。

「とても気持ちが悪うございますので下を向いておりました。奥様はどんなお気持ちでいらっしやいますことでしょうか」

「そうだ、なぜこんなにばかりして」

と言つて、手で探ると夕顔は息もしていない。動かしてみてもなよなよとして気を失っているふうであつたから、若々しい弱い人であつたから、何かの物怪もののけにこうされているのであるうと思つと、源氏は歎息たんそくされるばかりであつた。蠟燭ろうそくの明りが来た。右近には立つて行くだけの力がありそうもないので、闇やみに近い几帳きちょうを引き寄せてから、

「もつとこちらへ持つて来い」

と源氏は言つた。主君の寢室の中へはいるというまつたくそんな不謹慎な行動をしたことがない滝口は座敷の上段になつた所へもよる来ない。

「もつと近くへ持つて来ないか。どんなことも場所によることだ」

灯ひを近くへ取つて見ると、この闇の枕の近くに源氏が夢で見たとおりの容貌ようぼうをした女が見えて、そしてすつと消えてしまった。昔の小説などにはこんなことも書いてあるが、実際にあるとは思つと源氏は恐ろしくてならないが、恋人はどうなつたかという不安が先に立つて、自身がどうされるだろうかという恐れはそれほどなくて横へ寝て、

「ちよいと」

と言つて不気味な眠りからさませようとするが、夕顔のからだは冷えはてていて、息はまったく絶えているのである。頼りにできる相談相手もない。坊様などはこんな時の力になるものであるがそんな人もむろんここにはいない。右近に対して強がつて何かと言つた源氏であつたが、若いこの人は、恋人の死んだのを見ると分別も何もなくなつて、じつと抱いて、

「あなた。生きてください。悲しい目を私に見せないで」

と言っていたが、恋人のからだはますます冷たくて、すでに人ではなく遺骸であるという感じが強くなっていく。右近はもう恐怖心も消えて夕顔の死を知って非常に泣く。紫宸殿に出て来た鬼は貞信公を威嚇したが、その人の威に押されて逃げた例などを思い出して、源氏はしいて強くなるうとした。

「それでもこのまま死んでしまうことはないだろう。夜というものは声を大きく響かせるから、そんなに泣かないで」

と源氏は右近に注意しながらも、恋人との歡会がたちまちにこうなったことを思うと呆然となるばかりであった。滝口を呼んで、

「ここに、急に何かに襲われた人があって、苦しんでいるから、すぐに惟光朝臣の泊まっている家に行つて、早く来るように言えとだれかに命じてくれ。兄の阿闍梨がそこに来ているのだつたら、それもいっしょに来るようにと惟光に言わせるのだ。母親の尼さんなどが聞いて気にかけるから、たいそうには言わせないように。あれは私の忍び歩きなどをやかましく言つて止める人だ」

こんなふう順序を立ててものを言いながらも、胸は詰まるように、恋人を死なせることの悲しさがたまらないものに思われるのといっしょに、あたりの不気味さがひしひしと感ぜられるのであった。もう夜中過ぎになつていらい。風がさつきより強くなつてきて、それに鳴る松の枝の音は、それらの大木に深く囲まれた寂しく古い院であることを思わせ、一風変わった鳥がかれ声で鳴き出すのを、梟とはこれであろうかと思われた。考えてみるとどこへも遠く離れて人声もしないこんな寂しい所へなぜ自分は泊まりに来たのであるかと、源氏は後悔の念もしきりに起こる。右近は夢中になつて夕顔のそばへ寄り、このまま慄え死にをするのでないかと思われた。そ

れがまた心配で、源氏是一所懸命に右近をつかまえていた。一人は死に、一人はこうした正体もないふうで、自身一人だけが普通の人間なのであると思うと源氏はたまらない気がした。灯はほのかに瞬またたいて、中央の室との仕切りの所に立てた屏風びよぶの上とか、室の中の隅々すみとか、暗いところの見えるここへ、後ろからひしひしと足音をさせて何か寄って来る気がしてならない、惟光が早く来てくれればよいとばかり源氏は思った。彼は泊まり歩く家を幾軒も持った男であったから、使いはあちらこちらと尋ねまわっているうちに夜がぼつぼつ明けてきた。この間の長さは千夜にもあたるように源氏には思われたのである。やっとはるかな所で鳴く鶏の声がしてきたのを聞いて、ほっとした源氏は、こんな危険な目にどうして自分はあうのだろう、自分の心ではあるが恋愛についてはもつたいたい、思うべからざる人を思った報いに、こんな後あとにも前さきにもない例となるようなみじめな目にあうのであろう、隠してもあつた事實はすぐに噂うわさになるであろう、陛下おほしめの思召しをはじめとして人が何と批評することだろう、世間の嘲笑ちやうしやうが自分の上に乗ることであろう、とうとうついにこんなことで自分は名誉を傷つけるのだなと源氏は思っていた。

やっこれみと惟光が出て来た。夜中でも暁でも源氏の意のままに従って歩いた男が、今夜に限ってそばにおらず、呼びにやってもすぐの間に合わず、時間のおくれたことを源氏は憎みながらも寢室へ呼んだ。孤独の悲しみを救う手は惟光にだけあることを源氏は知っている。惟光をそばへ呼んだが、自分が今言わねばならぬことがあまりにも悲しいものであることを思うと、急には言葉が出ない。右近は隣家の惟光が来た気配けはいに、亡なき夫人と源氏との交渉の最初の時から今日

までが連続的に思い出されて泣いていた。源氏も今までは自身一人が強い人になって右近を抱きかかえていたのであったが、惟光の来たのにほっとすると同時に、はじめて心の底から大きい悲しみが湧き上がってきた。非常に泣いたのちに源氏は躊躇しながら言い出した。

「奇怪なことが起こったのだ。驚くという言葉では現わせないような驚きをさせられた。人のからだにこんな急変があったりする時には、僧家へ物を贈って読経をしてもらうものだそうだから、それをさせよう、願を立てさせようと思って阿闍梨も来てくれと言ったのだが、どうした」

「昨日叡山へ帰りましたのでございます。まあ何ということでもございましょう、奇怪なことでございます。前から少しはおからだが悪かったのでございますか」

「そんなこともなかった」

と言って泣く源氏の様子に、惟光も感動させられて、この人までが声を立てて泣き出した。老人はめんどろなものとされているが、こんな場合には、年を取っていて世の中のいろいろな経験を持っている人が頼もしいのである。源氏も右近も惟光も皆若かった。どう処置をしていいのか手が出ないのであったが、やっと惟光が、

「この院の留守役などに真相を知らせることはよくございません。当人だけは信用ができましたも、秘密の洩れやすい家族を持っていましようから。ともかくもここを出ていらっしやいませ」

と言った。

「でもここ以上に人の少ない場所はほかにないじゃないか」

「それはそうでございます。あの五条の家は女房などが悲しがって

大騒ぎをするでしょう、多い小家の近所隣へそんな声が聞こえますとたちまち世間へ知れてしまいます、山寺と申すものはこうした死人などを取り扱い馴なれておりましようから、人目を紛らすには都合がよいように思われます」

考えるふうだった惟光は、

「昔知っております女房が尼になって住んでいる家が東山にございますから、そこへお移しいたしましょう。私の父の乳母めのとをしておりまして、今は老人としよりになつてゐる者の家でございます。東山ですから人がたくさん行く所のようにございますが、そこだけは閑静です」

と言つて、夜と朝の入り替わる時刻の明暗の紛れに車を縁側へ寄せさせた。源氏自身が遺骸いがいを車へ載せることは無理らしかつたから、莫塵こさに巻いて惟光これみつが車へ載せた。小柄な人の死骸からは悪感を受けないできわめて美しいものに思われた。残酷に思われるような扱ひ方を遠慮して、確かにも巻かなんだから、莫塵の横から髪が少しこぼれていた。それを見た源氏は目がくらむような悲しみを覚えて煙になる最後までも自分がついていたいという気になつたのであるが、

「あなた様はさつそく二条の院へお帰りなさいませ。世間の者が起き出しませんうちに」

と惟光は言つて、遺骸には右近を添えて乗せた。自身の馬を源氏に提供して、自身は徒歩で、袴はかまのくくりを上げたりして出かけたのであった。ずいぶん迷惑な役のようにも思われたが、悲しんでいる源氏を見ては、自分のことなどはどうでもよいという気に惟光はなつたのである。

源氏は無我夢中で二条の院へ着いた。女房たちが、

「どちらからのお帰りなんでしょう。御気分がお悪いようですよ」
 などと言っているのを知っていたが、そのまま寢室へはいつて、
 そして胸をおさえて考えてみると自身が今経験していることは非常
 な悲しいことであるということがわかった。なぜ自分はその車に乗
 って行かなかったのだろう、もし蘇生することがあったらあの人は
 どう思うだろう、見捨てて行ってしまったと恨めしく思わないだろ
 うか、こんなことを思うと胸がせき上がってくるようで、頭も痛く、
 からだには発熱も感ぜられて苦しい。こうして自分も死んでしま
 うのであると思われるのである。八時ごろになっても源氏が起きぬ
 ので、女房たちは心配をしまして、朝の食事を寢室の主人へ勧めて
 みたが無駄だった。源氏は苦しくて、そして生命の危険が迫って
 くるような心細さを覚えていると、宮中のお使いが来た。帝は昨日も
 お召しになった源氏を御覧になれなかったことで御心配をあそばさ
 れるのであった。左大臣家の子息たちも訪問して来たがそのうちの
 頭中将にだけ、

「お立ちになったままでちよつとこちらへ」

と言わせて、源氏は招いた友と御簾を隔てて対した。

「私の乳母の、この五月ごろから大病をしていました者が、尼にな
 ったりなどしたものですから、その効験でか一時一快くなっていま
 したが、またこのごろ悪くなりました、生前にもう一度だけ訪問を
 してくれなどと言ってきているので、小さい時から世話になった者
 に、最後に恨めしく思わせるのは残酷だと思って、訪問しましたと
 ころがその家の召使の男が前から病気をされていて、私のいるうちに
 亡くなつたのです。恐縮して私に隠して夜になってからそつと遺骸

を外へ運び出したということ。私は気がついたのです。御所では神事に関する御用の多い時期ですから、そうした穢れけがに触れた者は御遠慮すべきであると思つて謹慎をしているのです。それに今朝方けさがたからなんだか風邪かぜにかかったのですか、頭痛がして苦しいものですか、こんなふうで失礼します」

などと源氏は言うのであつた。中将は、

「ではそのように奏上しておきましょう。昨夜も音楽のありました時に、御自身でお指図さしずをなさいました。あちこちとあなたをお捜させになつたのですが、おいでにならなかつたので、御機嫌しきげんがよろしくありませんでした」

と言つて、帰ろうとしたがまた歸つて来て、

「ねえ、どんな穢れけがにおあいになつたのですか。さつきから伺つたのはどうもほんとうとは思われぬ」

と、頭中將から言われた源氏ははつとした。

「今お話ししたようにこまかにではなく、ただ思いがけぬ穢れけがにありましたと申し上げてください。こんなので今日は失礼します」

素知らず顔には言つていても、心にはまた愛人の死が浮かんで、源氏は気分も非常に悪くなつた。だれの顔も見るのが物憂ものうかつた。お使いの蔵人くらんどの弁べんを呼んで、またこまごまと頭中將に語つたよゆうな行触れゆきぶの事情を帝へ取り次いでもらった。左大臣家のほうへもそんなことで行かれぬという手紙が行つたのである。

日が暮れてから惟光これみつが来た。行触れゆきぶの件を発表したので、二条の院への来訪者は皆庭から取り次ぎをもつて用事を申し入れて歸つて行くので、めんどろな人はだれも源氏の居間にいなかつた。惟光を見て源氏は、

「どうだった、だめだったか」

と言うと同時に袖を顔へ当てて泣いた。惟光も泣く泣く言う、
 「もう確かにお亡れになったのでございます。いつまでお置きして
 もよくないことでございますから、それにちようど明日は葬式によ
 い日でしたから、式のことなどを私の尊敬する老僧がありまして、
 それとよく相談をして頼んでまいりました」

「いっしょに行つた女は」

「それがまたあまりに悲しがりまして、生きていられないというふ
 うなので、今朝は溪へ飛び込むのでないかと心配されました。五条
 の家へ使いを出すというのですが、よく落ち着いてからにしなければ
 いけないと申して、とにかく止めてまいりました」

惟光の報告を聞いているうちに、源氏は前よりもいっそう悲しく
 なつた。

「私も病気になつたようで、死ぬのじゃないかと思う」

と言つた。

「そんなふうにまでお悲しみになるのでございますか、よろしくご
 ざいませぬ。皆運命でございます。どうかして秘密のうちに処置を
 したいと思ひまして、私も自身でどんなこともしているのでござい
 ますよ」

「そうだ、運命に違ひない。私もそう思うが軽率な恋愛一漁りから、
 人を死なせてしまったという責任を感じるのだ。君の妹の少将の命
 婦などにも言うなよ。尼君なんかはまたいつもあいつたふうのこ
 とをよくないよくないと小言に言うほうだから、聞かれては恥ずか
 しくてならない」

「山の坊さんたちにもまるで話を変えてしてございます」

と惟光が言うので源氏は安心したようである。主従がひそひそ話をしているのを見た女房などは、

「どうも不思議ですね、行触れだとお言いになって参内もなさらないし、また何か悲しいことがあるようにあんなふうにして話していらつしやる」

腑に落ちぬらしく言っていた。

「葬儀はあまり簡単な見苦しいものにしないほうがよい」

と源氏が惟光に言った。

「それでもございませぬ。これは大層にいたしてよいことではございませぬ」

と否定してから、惟光が立つて行こうとするのを見ると、急にまた源氏は悲しくなった。

「よくないことだとおまえは思うだろうが、私はもう一度一遺骸を見たいのだ。それをしないではいつまでも憂鬱が続くように思われるから、馬でも行こうと思うが」

主人の望みを、とんでもない軽率なことであると思いつつも惟光は止めることができなかった。

「そんなに思召すのならしかたがございませぬ。では早くいらつしやいまして、夜の更けぬうちにお帰りなさいませ」

と惟光は言った。五条通いの変装のために作らせた狩衣に着更えなどして源氏は出かけたのである。病苦が朝よりも加わったこともわかつていて源氏は、軽はずみにそうした所へ出かけて、そこまたどんな危険が命をおびやかすかもしれない、やめたほうがいいのではないかとも思ったが、やはり死んだ夕顔に引かれる心が強くて、この世での顔を遺骸で見てもおかなければ今後の世界でそれは見られ

ないのであるという思いが心細さをおさえて、例の惟光と隨身を従えて出た。非常に路のはかがゆかぬ気がした。十七日の月が出てきて、加茂川の河原を通るころ、前駆の者の持つ松明の淡い明りに鳥辺野のほうが見えるというこんな不気味な景色にも源氏の恐怖心はもう麻痺してしまっていた。ただ悲しみに胸が掻き乱されたふうで目的地に着いた。凄^{すこ}い気のする所である。そんな所に住居の板屋があつて、横に御堂が続いているのである。仏前の燈明の影がほのかに戸からすいて見えた。部屋の中には一人の女の泣き声がして、その室の外と思われる所では、僧の二、三人が話しながら声を多く立てぬ念仏をしていた。近くにある東山の寺々の初夜の勤行も終わつたところで静かだった。清水の方角にだけ灯がたくさんに見えて多くの参詣人の気配も聞かれるのである。主人の尼の息子の僧が尊い声で経を読むのが聞こえてきた時に、源氏はからだじゅうの涙がことごとく流れて出る気もした。中へはいつて見ると、灯をあちら向きに置いて、遺骸との間に立てた屏風のこちらに右近は横になつていた。どんなに侘しい気のすることだろうと源氏は同情して見た。遺骸はまだ恐ろしいという気のしない物であつた。美しい顔をしていて、まだ生きていた時の可憐さと少しも変わっていないかつた。

「私にもう一度、せめて声だけでも聞かせてください。どんな前生の縁だったかわずかな間の関係であつたが、私はあなたに傾倒した。それなのに私をこの世に捨てて置いて、こんな悲しい目をあなたは見せる」

もう泣き声も惜しまずはばからぬ源氏だった。僧たちもだれとはわからぬながら、死者に断ちがたい愛着を持つらしい男の出現を見て、皆涙をこぼした。源氏は右近に、

「あなたは二条の院へ来なければならぬ」

と言ったのであるが、

「長い間、それは小さい時から片時もお離れしませんでお世話になりました御主人ににわかにお別れいたしましたして、私は生きて帰ろうと思う所がございません。奥様がどうおなりになったかということ、どうほかの人に話ができません。奥様をお亡くしましたほかに、私はまた皆にどう言われるかということも悲しゅうございます」

こう言つて右近は泣きやまない。

「私も奥様の煙といっしょにあの世へ参りとうございます」

「もつともだがしかし、人世とはこんなものだ。別れというものに悲しくないものはないのだ。どんなことがあつても寿命のある間には死ねないのだよ。気を静めて私を信頼してくれ」

と言う源氏が、また、

「しかしそういう私も、この悲しみでどうなつてしまふかわからぬい」

と言うのであるから心細い。

「もう明け方に近いころだと思われませぬ。早くお帰りにならなければいけません」

惟光これみつがこう促すので、源氏は顧みばかりがされて、胸も悲しみにふさがらせたまま帰途についた。露の多い路みちに厚い朝霧が立って、このままこの世でない国へ行くような寂しさが味わわれた。某院なやの圍なやにいたままのふうで夕顔が寝ていたこと、その夜上に掛けて寝た源氏自身の紅ひとえの単衣ひとえにまだ巻かれていたこと、などを思つて、全体あの人と自分はどんな前生の因縁があつたのであろうと、こん

なことを途々源氏は思った。馬をはかばかしく御して行けるふうでもなかったから、惟光が横に添って行った。加茂川堤に来てとうとう源氏は落馬したのである。失心したふうで、

「家の中でもないこんな所で自分は死ぬ運命なんだろう。二条の院まではとうてい行けない気がする」

と言った。惟光の頭も混乱状態にならざるをえない。自分が確とした人間だったら、あんなことを源氏がお言いになっても、軽率にこんな案内はしなかったはずだと思つたと悲しかった。川の水で手を洗つて清水の観音を拝みながらも、どんな処置をとるべきだろうと煩悶した。源氏もしいて自身を励まして、心の中で御仏を念じ、そして惟光たちの助けも借りて二条の院へ行き着いた。

毎夜続いて不規則な時間の出入りを女房たちが、

「見苦しいことです、近ごろは平生よりもよく微行をなさる中でも昨日はたいへんお加減が悪いふうだったでしょう。そんなでおありになってまたお出かけになったりなさるのですから、困ったことです」

こんなふうに歎息をしていた。

源氏自身が予言をしたとおりに、それきり床について煩つたのである。重い容体が二、三日続いたあとはまた甚しい衰弱が見えた。

源氏の病気を聞こし召した帝も非常に御心痛あそばされてあちらでもこちらでも間断なく祈祷が行なわれた。特別な神の祭り、祓い、修法などである。何にもすぐれた源氏のような人はあるいは短命で終わるのではないかといつて、一天下の人がこの病気に關心を持つようにさえなつた。

病床にいながら源氏は右近を二条の院へ伴わせて、部屋なども近

い所へ与えて、手もとで使う女房の一人にした。惟光これみつは源氏の病の重いことに顛倒てんとうするほどの心配をしながら、じつとその気持ちをおさえて、馴染なじみのない女房たちの中へはいった右近のたよりなさそうなのに同情してよく世話をしてやった。源氏の病の少し楽に感ぜられる時などには、右近を呼び出して居間の用などをさせていたから、右近はそのうち二条の院の生活に馴なれてきた。濃い色の喪服を着た右近は、容貌ようぼうなどはよくもないが、見苦しくも思われぬ若い女房の一人と見られた。

「運命があの人に授けた短い夫婦の縁から、その片割れの私ももう長くは生きていないのだろう。長い間たよりにしてきた主人に別れたおまえが、さぞ心細いだろうと思うと、せめて私に命があれば、あの人の代わりの世話をしたいと思ったこともあったが、私もあの人のあとを追うらしいので、おまえには気の毒だね」

と、ほかの者へは聞かせぬ声で言つて、弱々しく泣く源氏を見る右近は、女主人に別れた悲しみは別として、源氏にもしましたそんなことがあれば悲しいことだろうと思った。二条の院の男女はだれも静かな心を失って主人の病を悲しんでいるのである。御所のお使いは雨の脚あしよりもしげく参入した。帝の御心痛が非常なものであることを聞く源氏は、もったいなくて、そのことによつて病から脱しようと思わずから励むようになった。左大臣も徹底的に世話をした。大臣自身が二条の院を見舞わない日もないのである。そしていろいろな医療や祈祷きとうをしたせいでか、二十日ほど重態だったあとに余病も起こらないで、源氏の病気は次第に回復していくように見えた。行ゆき触ぶれの遠慮の正規の日数もこの日で終わる夜であったから、源氏は違あいたく思召おぼしめす帝みかどの御心中を察して、御所の宿直所とのいどころにまで出かけた。

退出の時は左大臣が自身の車へ乗せて邸やしきへ伴った。病後の人の謹慎のしかたなども大臣がきびしく監督したのである。この世界でない所へ蘇生そせいした人間のように当分源氏は思った。

九月の二十日ごろに源氏はまったく回復して、瘦やせるには瘦せたがかえって艶えんな趣の添った源氏は、今も思いをよくして、またよく泣いた。その様子に不審を抱く人もあつて、物怪もののけが憑ついているのであろうとも言っていた。源氏は右近を呼び出して、ひまな静かな日の夕方に話をして、

「今でも私にはわからぬ。なぜだれの娘であるということをごまでも私に隠したのだろう。たとえどんな身分でも、私があればほどの熱情で思っていたのだから、打ち明けてくれていいわけだと思つて恨めしかった」

とも言った。

「そんなにどこまでも隠そうなどとあそばすわけはございません。そうしたお話をなさいます機会がなかったのじゃございませんか。最初があんなふうでございましたから、現実の関係のように思われないとお言いになって、それでもまじめな方ならいつまでもこのふうで進んで行くものでもないから、自分は一時的な対象にされていくにすぎないのだとお言いになっては寂しがつていらつしやいました」

右近がこう言う。

「つまらない隠し合いをしたものだ。私の本心ではそんなにまで隠そうとは思っていないかった。ああいった関係は私に経験のないことだったから、ばかに世間がこわかったのだ。御所の御注意もあるし、そのほかいろいろんな所に遠慮があつてね。ちよつとした恋をしても、

それを大問題のように扱われるうるさい私が、あの夕顔の花の白かった日の夕方から、むやみに私の心はあの人へ惹かれていくようになったて、無理な関係を作るようになったのもしばらくしかない二人の縁だったからだと思われる。しかしまた恨めしくも思うよ。こんなに短い縁よりないのなら、あれほどにも私の心を惹いてくれなければよかつたとね。まあ今でもよいから詳しく話してくれ、何も隠す必要はなからう。七日七日に仏像を描かせて寺へ納めても、名を知らないではね。それを表に出さないでも、せめて心の中でだれの菩提のためにと思いたいじゃないか」

と源氏が言った。

「お隠しなど決してしようとは思っておりません。ただ御自分の口からお言いにならなかつたことを、お亡れになつてからおしゃべりするのには済まないような気がただけでございます。御両親はずっと前にお亡くなりになつたのでございます。殿様は三位中将でいらつしやいました。非常にかわいがつていらつしやいまして、それにつけても御自身の不遇をもどかしく思召したでしょうが、その上寿命にも恵まれていらつしやいまして、お若くてお亡くなりになりましたあとで、ちよつとしたことが初めて頭中将がまだ少将でいらつしたところに通つておいでになるようになったのでございます。三年間ほどは御愛情があるふうで御関係が続いていましたが、昨年の秋ごろに、あの方の奥様のお父様の右大臣の所からおどすようなことを言つてまいりましたのを、気の弱い方でございましたから、むやみに恐ろしがつておしまいになりました、西の右京のほうに奥様の乳母が住んでおりました家へ隠れて行っていらつしやいました。が、その家もかなりひどい家でございますからお困りになつて、

郊外へ移ろうとお思いになりましたが、今年は方角が悪いので、方角一避けにあの五条の小さい家へ行っておいでになりましたことから、あなた様がおいでになるようなことになりました、あの家がある家でございますから侘しがっておいでになったようでございます。普通の人とはまるで違うほど内気で、物思いをしていると人から見られるだけでも恥ずかしくてならないようにお思いになりました、どんな苦しいことも寂しいことも心に納めていらしたようでございます

「います」

右近のこの話で源氏は自身の想像が当たったことで満足ができたとともに、その優しい人がますます恋しく思われた。

「小さい子を一人一行方不明にしたと言って中將が憂鬱ゆううつになつていたが、そんな小さい人があつたのか」

と問うてみた。

「さようでございます。一昨年の春お生まれになりました。お嬢様で、とてもおかわいらしい方でございます」

「で、その子はどこにいるの、人には私が引き取ったと知らせないようにして私にその子をくれないか。形見も何もなくて寂しくばかり思われるのだから、それが実現できたらいいね」

源氏はこう言って、また、

「頭中將にもいずれば話をするが、あの人をあした所で死なせてしまったのが私だから、当分は恨みを言われるのがつらい。私の從兄いとの中將の子である点からいっても、私の恋人だった人の子である点からいっても、私の養女にして育てていいわけだから、その西の京の乳母にも何かほかのことにして、お嬢さんを私の所へつれて来てくれないか」

と言った。

「そうになりましたらどんなに結構なことでございましょう。あの西の京でお育ちになつてはあまりにお気の毒でございます。私ども若い者ばかりでしたから、行き届いたお世話ができないということであつちへお預けになつたのでございます」

と右近は言っていた。静かな夕方の空の色も身にしむ九月だった。庭の植え込みの草などがうら枯れて、もう虫の声もかすかにしかなかった。そしてもう少しずつ紅葉の色づいた絵のような景色を右近はながめながら、思いもよらぬ貴族の家の女房になつていることを感じた。五条の夕顔の花の咲きかかった家は思い出すだけでも恥ずかしいのである。竹の中で家鳩という鳥が調子はずれに鳴くのを聞いて源氏は、あの某院でこの鳥の鳴いた時に夕顔のこわがった顔が今も可憐に思い出されてならない。

「年は幾つだったの、なんだか普通の若い人よりもずっと若いようなふうに見えたのも短命の人だったからだね」

「たしか十九におなりになつたのでございましょう。私は奥様のもう一人のほうの乳母の忘れ形見でございましたので、三位様がかわいがつてくださいますして、お嬢様といっしょに育ててくださいますたものでございます。そんなことを思いますと、あの方のお亡くなるになりましたあとで、平気でよくも生きているものだと恥ずかしくなるのでございます。弱々しいあの方をただ一人のたよりになる御主人と思つて右近は参りました」

「弱々しい女が私はいちばん好きだ。自分が賢くないせい、あまり聡明で、人の感情に動かされないような女はいやなものだ。どうかすれば人の誘惑にもかかりそうな人でありながら、さすがに慎ま

しくて恋人になった男に全生命を任せているというような人が私は好きで、おとなしいそうした人を自分の思うように教えて成長させていければよいと思う」

源氏がこう言うと、

「その好みには遠いように思われません方の、お亡れかくになったことが残念で」

と右近は言いながら泣いていた。空は曇って冷ややかな風が通っていた。

寂しそうに見えた源氏は、

「#ここから2字下げ」

見し人の煙を雲とながむれば夕ゆふの空もむつまじきかな

「#ここで字下げ終わり」

と独言ひとりごとのように言っているにも、返しの歌は言い出されないうで、右近は、こんな時に二人そろっておいでになつたらという思いで胸の詰まる気がした。源氏はうるさかった砧きぬたの音を思い出してもその夜が恋しくて、「八月九月一まさにながきよ正長夜、千声万声無止時せんせいばんせいやむとぎなし」と歌っていた。

今も伊予介いよのすけの家の小君こぎみは時々源氏の所へ行つたが、以前のように源氏から手紙を託されて来るようなことがなかった。自分の冷淡さに懲りておしまいになつたのかと思つて、空蝉うつせみは心苦しかったが、源氏の病気をしていることを聞いた時にはさすがに歎なげかれた。それに良人おとこの任国へ伴われる日が近づいてくるのも心細くて、自分を忘れておしまいになつたかと試みる気で、

「#ここから1字下げ」

このごろの御様子を承り、お案じ申し上げてはおりますが、それを私がどうしてお知らせすることができましよう。

「#ここから2字下げ」

問はぬをもなどかと問はで程ふるにいかばかりかは思ひ乱るる

「#ここから1字下げ」

苦しかるらん君よりもわれぞ益田ますだのいける甲斐かひなきという歌が思われます。

「#ここで字下げ終わり」

こんな手紙を書いた。

思いがけぬあちからの手紙を見て源氏は珍しくもうれしくも思った。この人を思う熱情も決して醒さめていたのではないのである。

「#ここから1字下げ」

生きがいがないとはだれが言いたい言葉でしょう。

「#ここから2字下げ」

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

「#ここから1字下げ」

はかないことです。

「#ここで字下げ終わり」

病後の慄ふるえの見える手で乱れ書きをした消息は美しかった。蝉せみの脱殻ぬけがらが忘れずに歌われてあるのを、女は気の毒にも思い、うれしく

も思えた。こんなふうには手紙などでは好意を見せながらも、これより深い交渉に進もうという意思は空蝉になかった。理解のある優しい女であったという思い出だけは源氏の心に留めておきたいと願っているのである。もう一人の女は蔵人少将と結婚したという噂を源氏は聞いた。それはおかしい、処女でない新妻を少将はどう思うだろうと、その良人に同情もされたし、またあの空蝉の継娘はどんな気持ちでいるのだろうと、それを知りたさに小君を使いにして手紙を送った。

「#ここから1字下げ」

死ぬほど煩悶している私の心はわかりますか。

「#ここから2字下げ」

ほのかにも軒ばの荻をむすばずば露のかごとを何にかけまし

「#ここで字下げ終わり」

その手紙を枝の長い荻につけて、そつと見せるようにとは言ったが、源氏の内心では粗相して少将に見つかった時、妻の以前の情人の自分であることを知ったら、その人の気持ちは慰められるであろうという高ぶった考えもあった。しかし小君は少将の来ていないひまをみて手紙の添った荻の枝を女に見せたのである。恨めしい人ではあるが自分を思い出して情人らしい手紙を送って来た点では憎くも女は思わなかった。悪い歌でも早いのが取柄であろうと書いて小君に返事を渡した。

「#ここから2字下げ」

ほのめかす風につけても下萩したきぎの半は霜なかばにむすほほれつつ

「#ここで字下げ終わり」

下手へたであるのを洒落しゃれた書き方で紛らしてある字の品の悪いものだった。灯ひの前にいた夜の顔も連想れんそうされるのである。碁盤いを中にして慎み深く向かい合ったほうの人の姿態にはどんなに悪い顔だちであるにもせよ、それによって男の恋の減じるものでないよさがあつた。一方は何の深味もなく、自身の若い容貌ようぼうに誇つたふうだったと源氏は思い出して、やはりそれにも心の惹ひかれるのを覚えた。まだ軒端のの萩との情事は清算されたものではなさそうである。

源氏は夕顔のの四十九日の法要をそつと叡山えいざんの法華堂ほっけどうで行なわせることにした。それはかなり大層なもので、上流の家の法会ほっえとしてあるべきものは皆用意させたのである。寺へ納める故人の服も新調したし寄進のものも大きかった。書写の経巻にも、新しい仏像の装飾にも費用は惜しまれてなかった。惟光これみつの兄あじやじりの阿闍梨あじやじりは人格者だといわれている僧で、その人が皆引き受けてしたのである。源氏の詩文の師をしている親しい某一もんじょうはかせ文章博士を呼んで源氏は故人を仏に頼む願文がんもんを書かせた。普通の例と違って故人の名は現わさずに、死んだ愛人を阿弥陀あみたぶつ仏にお託しするという意味を、愛のこもつた文章で下書きをして源氏は見せた。

「このままで結構でございます。これに筆を入れるところはございません」

博士はこう言った。激情はおさえているがやはり源氏の目からは涙がこぼれ落ちて堪えがたいように見えた。その博士は、

「何という人なのだろう、そんな方のお亡なくなりになったことなど

話も聞かないほどの人なのに、源氏の君があんなに悲しまれるほど愛されていた人というのはよほど運のいい人だ」

とのちに言った。作らせた故人の衣裳いしやうを源氏は取り寄せて、袴はかまの腰に、

「#ここから2字下げ」

泣く泣くも今日けふはわが結ゆふ下紐したひもをいづれの世にか解けて見るべき

「#ここで字下げ終わり」

と書いた。四十九日の間はなおこの世界にさまよっているという
 靈魂は、支配者によって未来のどの道みちへ赴むかかせられるのであろうと、
 こんなことをいろいろと想像しながら般若心經はんにゃしんぎょうの章句を唱えること
 ばかりを源氏はしていた。頭中將に逢あうといつも胸騒ぎがして、あ
 の故人が撫子なでしこにたとえたという子供の近ごろの様子などを知らせて
 やりたく思ったが、恋人を死なせた恨みを聞くのがつらくて打ちい
 でにくかった。

あの五条の家では女主人の行くえが知れないのを捜す方法もなか
 った。右近うこんまでもそれきり便たよりをして来ないことを不思議に思いな
 がら絶えず心配をしていた。確かなことではないが通つて来る人は
 源氏の君ではないかといわれていたことから、惟光になんらかの消
 息を得ようとしたが、まったく知らぬふうで、続いて今も女房の
 所へ恋の手紙が送られるのであったから、人々は絶望を感じて、主
 人を奪われたことを夢のようにばかり思った。あるいは地方官むすの息
 子などの好色男が、頭中將を恐れて、身の上を隠したままで父の任
 地へでも伴って行ってしまったのではないかといにはこんな想像

をするようになった。この家の持ち主は西の京の乳母めのとの娘だった。

乳母の娘は三人で、右近だけが他人であつたから便りを聞かせる親切がないのだと恨んで、そして皆夫人を恋しがつた。右近のほうでは夫人を頓死とんしさせた責任者のように言われるのをつらくも思つていたし、源氏も今になつて故人の情人が自分であつた秘密を人に知らせたくないと思うふうであつたから、そんなことで小さいお嬢さんの消息も聞けないままになつて不本意な月日が両方の間にたつていった。

源氏はせめて夢にでも夕顔を見たいと、長く願つていたが比叡ひえいで法事をした次の晩、ほのかではあつたが、やはりその人のいた場所は某それがしの院で、源氏が枕まくらもとにすわつた姿を見た女もそこに添つた夢を見た。このことで、荒廢した家などに住む妖怪あやかしが、美しい源氏に恋をしたがために、愛人を取り殺したのであると不思議が解決されたのである。源氏は自身もずいぶん危険だつたことを知つて恐ろしかった。

伊予介いよのすけが十月の初めに四国へ立つことになつた。細君をつれて行くことになつていたので、普通の場合よりも多くの餞別品せんべつが源氏から贈られた。またそのほかにも秘密な贈り物があつた。ついでに空蝉せみの脱殻ぬけがらと言つた夏の薄衣うすものも返してやつた。

「#ここから2字下げ」

逢あふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖そでの朽ちにけるかな

「#ここで字下げ終わり」

細々こまこましい手紙の内容は省略する。贈り物の使いは帰つてしまつた

が、そのあとで空蝉は小君こぎみを使いにして小桂こづきの返歌だけをした。

「#ここから2字下げ」

蝉の羽もたち変へてける夏ごろもかへすを見ても音ねは泣かれけり

「#ここで字下げ終わり」

源氏は空蝉を思うと、普通の女性のとりえない態度をとり続けた女ともこれで別れてしまうのだと歎なげかれて、運命の冷たさというよ
うなものが感ぜられた。

今日きょうから冬の季にはいる日は、いかにもそれらしく、時雨しぐれがこぼ
れたりして、空の色も身に沁しんだ。終日源氏は物思いをしていて、

「#ここから2字下げ」

過ぎにしも今日別るも二みちに行くかた方知らぬ秋の暮くれかな

「#ここで字下げ終わり」

などと思っていた。秘密な恋をする者の苦しさが源氏にわかった
であろうと思われる。

こうした空蝉とか夕顔とかいうようなはなやかでない女と源氏の
した恋の話は、源氏自身が非常に隠していたことがあるからと思っ
て、最初は書かなかったのであるが、帝王の子だからといって、そ
の恋人までが皆完全に近い女性で、いいことばかりが書かれている
ではないかといって、仮作したもののように言う人があったから、
これらを補って書いた。なんだか源氏に済まない気がする。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：小林繁雄、鈴木厚司

2003年4月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

若紫

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例） 癩病わらわやみ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例） 某一僧都そつず

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例） 「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」春の野のうらわか草に親しみていとお

「#地から3字上げ」ほどかに恋もなりぬる （晶子）

源氏は癩病わらわやみにかかっていた。いろいろとまじないもし、僧の加持かじも受けていたが効験ききんがなくて、この病の特徴で発作的にたびたび起こってくるのをある人が、

「北山の某なにかという寺に非常に上手じょうずな修験僧しゆげんそうがおります、去年の夏こ

の病気がはやりました時など、まじないも効果がなく困っていた人がずいぶん救われました。病気をこじらせますと癒りにくくなりま
すから、早くためしてごらんになったらいいでしょう」

こんなことを言つて勧めたので、源氏はその山から修験者を自邸
へ招こうとした。

「老体になっておりまして、岩窟を一步出ることにもむずかしいので
すから」

僧の返辞はこんなだった。

「それではしかたがない、そつと微行で行つてみよう」

こう言つていた源氏は、親しい家司四、五人だけを伴つて、夜明
けに京を立て出かけたのである。郊外のやや遠い山である。これ
は三月の三十日だった。京の桜はもう散つていたが、途中の花はま
だ盛りで、山路を進んで行くにしたがつて溪々をこめた霞にも都の
霞にない美があつた。窮屈な境遇の源氏はこうした山歩きの経験が
なくて、何事も皆珍しくおもしろく思われた。修験僧の寺は身にし
むような清さがあつて、高い峰を負つた巖窟の中に聖人ははいつて
いた。

源氏は自身のだれであるかを言わず、服装をはじめ思い切つて簡
単にして来ているのであるが、迎えた僧は言つた。

「あ、もつたいたない、先日お召しになりました方様でいらつしやい
ましよう。もう私はこの世界のことは考えないものですから、修験
の術も忘れておりますのに、どうしてまあわざわざおいでくださつ
たのでしょうか」

驚きながらも笑を含んで源氏を見ていた。非常に偉い僧なのであ
る。源氏を形どつた物を作つて、瘡病をそれに移す祈祷をした。加

持などをしてしている時分にはもう日が高く上っていた。

源氏はその寺を出て少しの散歩を試みた。その辺をながめると、ここは高い所であつたから、そこここに構えられた多くの僧坊が見渡されるのである。螺旋状になつた路のついたこの峰のすぐ下に、それもほかの僧坊と同じ小柴垣ではあるが、目だつてきれいに廻らされていて、よい座敷風の建物と廊とが優美に組み立てられ、庭の作りようなどもきわめて凝つた一構えがあつた。

「あれはだれの住んでいる所なのかね」

と源氏が問うた。

「これが、某一僧都がもう二年ほど引きこもつておられる坊でございます」

「そうか、あのりっぱな僧都、あの人の家なんだね。あの人に知れてはきまりが悪いね、こんな体裁で来ていて」

などと、源氏は言った。美しい侍童などがたくさん庭へ出て来て仏の闕伽棚に水を盛つたり花を供えたりしているのもよく見えた。

「あすこの家に女がおりますよ。あの僧都がよもや隠し妻を置いてはいらっしゃらないでしょうが、いったい何者でしょう」

こんなことを従者が言った。崖を少しおりて行つてのぞく人もある。美しい女の子や若い女房やら召使の童女やらが見えると言つた。

源氏は寺へ帰つて仏前の勤めをしながら昼になるともう発作が起ころころであるがと不安だつた。

「気をお紛らしになつて、病氣のことをお思いにならないのがいちばんよろしゅうございますよ」

などと人が言うので、後ろのほうの山へ出て今度は京のほうをな

がめた。ずっと遠くまで霞かすんでいて、山の近い木立ちなどは淡く煙かすって見えた。

「絵によく似ている。こんな所に住めば人間の穢きたない感情などは起こしようがないだろう」

と源氏が言うと、

「この山などはまだ浅いものでございます。地方の海岸の風景や山の景色をお目にかけたら、その自然からお得えになるところがあるって、絵がずいぶん御上達なさいますでしょうと思います。富士、それから何々山」

こんな話をする者があつた。また西のほうの国々のすぐれた風景を言つて、浦々の名をたくさん並べ立てる者もあつたりして、だれも皆病への関心から源氏を放そうと努めているのである。

「近い所では播磨はりまの明石あかしの浦がよろしゅうございます。特別に変わったよさはありませんが、ただそこから海のほうをながめた景色はどこよりもよく纏まとつております。前播磨守入道まきのが大事な娘を住ませたある家はたいしたものでございます。二代ほど前は大臣だった家筋で、もつと出世すべきはずの人なんです。変わり者で仲間の交際なんかをもきらつて近衛このえの中將を捨てて自分から願つて出てなつた播磨守なんです。国の者に反抗されたりして、こんな不名誉な事になつては京へ帰れないと言つて、その時に入道した人ですが、坊様になつたのなら坊様らしく、深い山のほうへでも行つて住めばよさそうなものですが、名所の明石の浦などに邸宅を構えております。播磨にはずいぶん坊様に似合つた山なんかが多いのですがね、変わり者をてらつてそうするかというところにも訳はあるのです。若い妻子が寂しがらうという思いやりなのです。そんな意味で

ずいぶん贅沢ぜいたくに住居すまいなども作ってございます。先日父の所へまいりました節、どんなふうに行っているかも見たいので寄ってみました。

京にいますうちは不遇なようでしたが、今の住居などはすばらしいもので、何といつても地方長官をしておりますうちに財産ができていたのですから、生涯しょうがいの生活に事を欠かない準備は十分にしておいて、そして一方では仏弟子ぶつでしとして感心に修行も積んでいるようです。あの人だけは入道してから真価が現われた人のように見受けます」

「その娘というのはどんな娘」

「まず無難な人らしゅうございます。あとの代々の長官が特に敬意を表して求婚するのですが、入道は決して承知いたしません。

自分の一生は不遇だったのだから、娘の未来だけはこうありたいという理想を持っている。自分が死んで実現が困難になり、自分の希望しない結婚でもしなければならなくなった時には、海へ身を投げてしまえと遺言をしているそうです」

源氏はこの話の播磨の海への変わり者の入道の娘がおもしろく思えた。

「竜宮りゅうぐうの王様おんみかのお后おきさきになるんだね。自尊心の強いつたらないね。困り者だ」

などと冷評する者があって人々は笑っていた。話をした良清よしきよは現在の播磨守の息子むすこで、さきには六位くろゐの蔵人くらんどをしていたが、位が一階上がって役から離れた男である。ほかの者は、

「好色な男なのだから、その入道の遺言を破りうる自信を持っているのだらう。それでよく訪問に行ったりするのだよ」

とも言っていた。

「でもどうかね、どんなに美しい娘だといわれていても、やはり田いな

舎者らしきろうよ。小さい時からそんな所に育つし、頑固がんこな親に教育されているのだから」

こんなことも言う。

「しかし母親はりっぱなのだろう。若い女房や童女など、京のよい家にいた人などを何かの縁故からたくさん呼んだりして、たいそうなことを娘のためにしているらしいから、それでただの田舎娘ができ上がったら満足していられないわけだから、私などは娘も相当な価値のある女だろうと思うね」

だれかが言う。源氏は、

「なぜお后にしなければならぬのだろうね。それでなければ自殺させるという凝り固まりでは、ほかから見てもよい気持ちはしないだろうと思う」

などと言いながらも、好奇心が動かないようでもなさそうである。平凡でないことに興味を持つ性質を知っている家司けいしたちは源氏の心持ちをそう観察していた。

「もう暮れに近うなっておりますが、今日は御病きょう気が起こらないで済むのでございましょう。もう京へお帰りになりましたら」

と従者は言ったが、寺では聖人が、

「もう一晩静かに私に加持をおさせになってからお帰りになるのがよろしゅうございます」

と言った。だれも皆この説に賛成した。源氏も旅で寝ることははじめてなのでうれしくて、

「では帰りは明日に延ばそう」

こう言っていた。山の春の日はことに長くてつれづれでもあったから、夕方になって、この山が淡霞つすがすみに包まれてしまった時刻に、午

前にながめた小柴垣こしばがきの所へまで源氏は行つて見た。ほかの従者は寺へ帰して惟光これみつだけを供につれて、その山荘をのぞくとこの垣根のすぐ前になつてゐる西向きの座敷じぶつに持仏じぶつを置いてお勤めをする尼がいた。簾すだれを少し上げて、その時に仏前へ花が供えられた。室の中央の柱に近くすわつて、脇息きょうそくの上に経巻を置いて、病苦のあるふうでそれを読む尼はただの尼とは見えない。四十ぐらいで、色は非常に白くて上品に痩せてはいるが頬ほおのあたりはふっくりとして、目つきの美しいのと同時に、短く切り捨ててある髪かみの裾すそのそろつたのが、かえつて長い髪よりも艶えんなものであるという感じを与えた。きれいな中年の女房が二人いて、そのほかにこの座敷を出たりはいつたりして遊んでいる女の子が幾人かあつた。その中に十歳とおぐらいに見えて、白の上に淡黄うすきの柔らかい着物を重ねて向こうから走つて来た子は、さつきから何人も見た子供とはいつしよに言うことのできない麗質を備えていた。将来はどんな美しい人になるだろうと思われるところがあつて、肩の垂れ髪たの裾が扇をひろげたようにたくさんでゆらゆらとしていた。顔は泣いたあとのようで、手でこすつて赤くなつてゐる。尼さんの横へ来て立つと、

「どうしたの、童女たちのことで憤おこつてゐるの」

こう言つて見上げた顔と少し似たところがあるので、この人の子なのであろうと源氏は思った。

「雀すずめの子を犬君いぬぎが逃がしてしまいましたの、伏籠ふせこの中に置いて逃げないようになつてあつたのに」

たいへん残念そうである。そばにいた中年の女が、

「またいつもの粗相そそうやさんがそんなことをしてお嬢様にしかられるのですね、困つた人ですね。雀はどちらのほうへ参りました。だい

ぶ馴^なれてきてかわゆうございましたのに、外へ出ては山の鳥に見つかってどんな目にあわされますか」

と言いながら立つて行つた。髪^{かみ}のゆらゆらと動く後ろ姿も感じのよい女である。少納言^{しょうなごん}の乳母^{めのと}と他の人が言っているから、この美しい子供の世話役なのであろう。

「あなたはまあいつまでも子供らしくて困つた方ね。私の命がもう今日明日^{きょうあす}かと思われるのに、それは何とも思わないで、雀^{すずめ}のほう^{ほう}が惜しいのだね。雀を籠^{かご}に入れておいたりすることは仏様のお喜びにならないことだと私はいつも言っているのに」

と尼君は言つて、また、

「ここへ」

と言うと美しい子は下へすわつた。顔つきが非常にかわいくて、眉^{まゆ}のほのかに伸びたところ、子供らしく自然に髪^{かみ}が横撫^{よこな}でになつている額^{ぬか}にも髪^{かみ}の性質にも、すぐれた美^{うつくし}がひそんでいると見えた。大人^{おとな}になつた時を想像してすばらしい佳人の姿も源氏の君は目に描いてみた。なぜこんなに自分の目がこの子に引き寄せられるのか、それは恋しい藤壺^{ふじつぼ}の宮によく似ているからであると感じた刹那^{せつな}にも、その人への思慕^{しぼ}の涙^{なみだ}が熱く頬^{ほお}を伝^{つた}つた。尼君は女の子の髪^{かみ}をなでながら、

「梳^すかせるのもうるさがるけれどよい髪^{かみ}だね。あなたがこんなふうにあまり子供らしいことで私は心配している。あなたの年になればもうこんなふうでない人もあるのに、亡^なくなつたお姫さんは十二でお父様に別れたのだけれど、もうその時には悲しみも何もよくわかる人になっていましたよ。私が死んでしまったあとであなたはどのようなのだらう」

あまりに泣くので隙見すきみをしている源氏までも悲しくなった。子供心にもさすがにじっとしばらく尼君の顔をながめ入って、それからうつむいた。その時に額からこぼれかかった髪がツヤツヤと美しく見えた。

「#ここから2字下げ」

生おひ立たんありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

「#ここで字下げ終わり」

一人の中年の女房が感動したふうで泣きながら、

「#ここから2字下げ」

初草の生ひ行く末も知らぬまにいかでか露の消えんとすらん

「#ここで字下げ終わり」

と言った。この時に僧都そうずが向こうの座敷のほうから来た。

「この座敷はあまり開あけひろげ過ぎています。今日に限ってこんなに端のほうにおいでになったのですね。山の上の聖人の所へ源氏の中將が瘡病わづいぢやみのまじないにおいでになったという話を私は今はじめて聞いたのです。ずいぶん微行でいらっしゃったので私は知らないで、同じ山にいながら今まで伺候もしてませんでした」

と僧都は言った。

「たいへん、こんな所をだれか御一行の人がのぞいたかもしれない」

尼君のこう言うのが聞こえて御簾みすはおろされた。

「世間で評判の源氏の君のお顔を、こんな機会に見せていただいたらどうですか、人間生活と絶縁している私らのような僧でも、あの方のお顔を拝見すると、世の中の歎なげかわしいことなどは皆忘れることができ、長生きのできる気をするほどの美貌ひばうですよ。私はこれからまず手紙で御挨拶ごあいさつをすることにしましょう」

僧都がこの座敷を出て行く気配けはいがするので源氏も山上の寺へ帰った。源氏は思った。自分は可憐な人を発見することができた、だから自分といっしょに來ている若い連中は旅というものをしたがるのである、そこで意外な収穫を得るのだ、たまさかに京を出て來ただけでもこんな思いがけないことがあると、それで源氏はうれしかった。それにしても美しい子である、どんな身分の人なのであろう、あの子を手もとに迎えて逢あいがたい人の恋しさが慰められるものならぜひそうしたいと源氏は深く思ったのである。

寺で皆が寢床についていると、僧都の弟子でしが訪問して來て、惟光これみつに逢いたいと申し入れた。狭い場所であつたから惟光へ言う事が源氏にもよく聞こえた。

「手前どもの坊の奥の寺へおいでになりましたことを人が申しますのでただ今承知いたしました。すぐに伺うべきでございますが、私がこの山におりますことを御承知のあなた様が素通りをあそばしたのは、何かお氣に入らないことがあるかと御遠慮をする心もございません。御宿泊の設けも行き届きませんでも当坊でさせていただきますものでございます」

と言うのが使いの伝える僧都の挨拶だった。

「今月の十幾日ごろから私は瘧病わづりやまにかかっておりましたが、たびたびの発作で堪えられなくなりまして、人の勧めどおりに山へ参つて

みましたが、もし効験ききめが見えませんでした時には一人の僧の不名譽になることですから、隠れて来ておりました。そちらへも後刻伺うつもりです」

と源氏は惟光に言わせた。それから間もなく僧都が訪問して来た。尊敬される人格者で、僧ではあるが貴族出のこの人に軽い旅装で逢うことを源氏はきまり悪く思った。二年越しの山籠りやましめの生活を僧都は語ってから、

「僧の家というものはどうせ皆寂しい貧弱なものです、ここよりは少しきれいな水の流れなども庭にはできておりますから、お目にかけたいと思うのです」

僧都は源氏の来宿を乞こうてやまなかつた。源氏を知らないあの女の人たちにたいそうな顔の吹聴ふいぢやうなどをされていたことを思うと、しりごみもされるのであるが、心を惹ひいた少女のことも詳しく知りたいたいと思つて源氏は僧都の坊へ移つて行つた。主人の言葉どおりに庭の作り一つをいつてもここは優美な山荘であつた、月はないころであつたから、流れのほとりに籬かがりを焚たかせ、燈籠とうろうを吊つらせなどしてある。南向きの室を美しく裝飾して源氏の寝室ができていた。奥の座敷から洩もれてくる薫香くんかうのにおいと仏前に焚かれる名香の香が入り混じつて漂もっている山荘に、新しく源氏の追い風が加わつたこの夜を女たちも晴れがましく思つた。

僧都は人世の無常さと来世の頼もしさを源氏に説いて聞かせた。源氏は自身の罪の恐ろしさが自覚され、来世で受ける罰の大きさを思うと、そうした常ない人生から遠ざかつたこんな生活に自分もはいつてしまいたいなどと思ひながらも、夕方に見た小さい貴女きじよが心にかかつて恋しい源氏であつた。

「ここへ来ていらっしやるのはどなたなんですか、その方たちと自分とが因縁のあるというような夢を私は前に見たのですが、なんだか今日こちらへ伺って謎なぞの糸口を得た気がします」

と源氏が言うと、

「突然な夢のお話ですね。それがだれであるかをお聞きになっても興がおさめになるだけでございましょう。前の按察使大納言はもうずっと早く亡なくなったのでございますからご存じはありますまい。

その夫人が私の姉です。未亡人になってから尼になりました、それがこのごろ病気なものですから、私が山にこもったきりになっているので心細がつてこちらへ来ています」

僧都の答えはこうだった。

「その大納言にお嬢さんがおありになるということでしたが、それはどうなすつたのですか。私は好色から伺うのじゃありません、まじめにお尋ね申し上げるのです」

少女は大納言の遺子であろうと想像して源氏が言うと、

「ただ一人娘がございました。亡くなりましてもう十年余りになりますでしょうか、大納言は宮中へ入れたいように申して、非常に大事にして育てていたのですがそのまま死にますし、未亡人が一人で育てていますうちに、だれがお手引きをしたのか兵部卿つとむらの宮が通つていらっしやるようになりまして、それを宮の御本妻はなかなか権力のある夫人で、やかましくお言いになって、私の姪めいはそんなことからいろいろ苦労が多くて、物思いはかりをしたあげく亡くなりまして。物思いで病気が出るものであることを私は姪を見てよくわかりました」

などと僧都は語った。それではあの少女は昔の按察使大納言の姫

君と兵部卿の宮の間にできた子であるに違いないと源氏は悟ったのである。藤壺の宮の兄君の子であるがためにその人に似ているのであろうと思うといっそう心の惹かれるのを覚えた。身分のきわめてよいのがうれしい、愛する者を信じようとせず疑いの多い女でなく、無邪気な子供を、自分が未来の妻として教養を与えていくことは楽しいことであらう、それを直ちに実行したいという心に源氏はなった。

「お気の毒なお話ですね。その方には忘れ形見がなかったのですか」
 なお明確に少女のだれであるかを知ろうとして源氏は言うのである。

「亡くなりますところに生まれました。それも女です。その子供が姉の信仰生活を静かにさせません。姉は年を取ってから一人の孫娘の将来ばかりを心配して暮らしております」

聞いている話に、夕方見た尼君の涙を源氏は思い合わせた。

「妙なことを言い出すようですが、私にその小さいお嬢さんを、託していただけませんかとお話ししてくださいませんか。私は妻について一つの理想がありまして、ただ今結婚はしていますが、普通の夫婦生活なるものは私に重荷に思えまして、まあ独身もののような暮らし方ばかりをしているのです。まだ年がつり合わぬなどと常識的に判断をなすって、失礼な申し出だと思召すでしょうか」

と源氏は言った。

「それは非常に結構なことですが、まだまだとても幼稚なものでございますから、仮にもお手もとへなど迎えていただけるものではありません。まあ女というものは良人のよい指導を得て一人

前になるものなのですから、あながち早過ぎるお話とも何とも私は申されません。子供の祖母と相談をいたしましてお返辞をするといたしましょう」

こんなふうにてきばき言う人が僧形の厳めしい人であるだけ、若い源氏には恥ずかしくて、望んでいることをなお続けて言うことができなかった。

「阿弥陀様がいらつしやる堂で用事のある時刻になりました。初夜の勤めがまだしてございません。済ませましてまた」

こう言つて僧都は御堂のほうへ行つた。

病後の源氏は気分もすぐれなかった。雨がすこし降り冷ややかな山風が吹いてそのころから滝の音も強くなつたように聞かれた。そしてやや眠そうな読経の音が絶え絶えに響いてくる、こうした山の夜はどんな人にも物悲しく寂しいものであるが、まして源氏はいろいろな思いに悩んでいて、眠ることはできないのであつた。初夜だと言つたが実際はその時刻よりも更けていた。奥のほうの室にいる人たちも起きたままであるのが気配で知れていた。静かにしようと思つたが、数珠が脇息に触れて鳴る音などがして、女の起居の衣摺れもほのかになつかしい音に耳へ通ってくる。貴族的なよい感じである。

源氏はすぐ隣の室でもあつたからこの座敷の奥に立ててある二つの屏風の合わせ目を少し引きあけて、人を呼ぶために扇を鳴らした。先方は意外に思つたらしいが、無視しているように思わせたくなかと思つて、一人の女が膝行寄つて来た。襖子から少し遠いところで、

「不思議なこと、聞き違えかしら」

と言うのを聞いて、源氏が、

「仏の導いてくださる道は暗いところもまちがいなく行きうるというのですから」

という声の若々しい品のよさに、奥の女は答えることもできない気はしたが、

「何のお導きでございましょう、こちらでは何もわかっておりませんが」

と言った。

「突然ものを言いかけて、失敬だと思いになるのはごもつともですが、

「#ここから2字下げ」

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

「#ここで字下げ終わり」

と申し上げてくださいませんか」

「そのようなお言葉を頂戴あそばす方がいらっしやらないことはご存じのようですが、どなたに」

「そう申し上げるわけがあるのだとお思いになつてください」

源氏がこう言うので、女房は奥へ行つてそう言った。

まあ艶な方らしい御挨拶である、女王さんがもう少し大人になっているように、お客様は勘違いをされていられるのではないか、それにしても若草にたとえた言葉がどうして源氏の耳にはいったのである。しかし返歌のろうと思つて、尼君は多少不安な気もするのである。しかし返歌のおそくなることだけは見苦しいと思つて、

「#ここから1字下げ」

「枕結まくらむすふ今宵こよひばかりの露つゆけさを深山みやまの苔こけにくらべざらなん

「#ここで字下げ終わり」

とてもかわく間などはございませんのに」

と返辞をさせた。

「こんなお取り次ぎによつての会談は私に経験のないことです。失礼ですが、今夜こちらで御厄介ごやくかいになりましたのを機会にまじめに御相談のしたいことがございます」

と源氏が言う。

「何をまちがえて聞いていらつしやるのだらう。源氏の君にもの言うような晴れがましいこと、私には何もお返辞なんかできるものではない」

尼君はこう言っていた。

「それでも冷淡なお扱いをされるとお思いになるのでございましょうから」

と言つて、人々は尼君の出るのを勧めた。

「そうだね、若い人こそ困るだらうが私など、まあよい。丁寧に言つていらつしやるのだから」

尼君は出て行つた。

「出来心的な軽率な相談を持ちかける者だとお思いになるのがかえつて当然なような、こんな時に申し上げるのは私のために不利なんです、誠意をもつてお話しいたそうとしておりますことは仏様がご存じでしょう」

と源氏は言ったが、相当な年配の貴女が静かに前にいることを思うと急に希望の件が持ち出されないのである。

「思いがけぬ所で、お泊まり合わせになりました。あなた様から御相談を承りますのを前生ぜんせいに根ねを置いていないこととどうして思えましょう」

と尼君は言った。

「お母様をお亡なくしになりましたお気の毒な女王さんを、お母様の代わりとして私へお預けくださいませんか。私も早く母や祖母に別れたものですから、私もじつと落ち着いた気持ちもなく今日に至りました。女王さんも同じような御境遇なんですから、私たちが将来結婚することを今から許して置いていただきたいと、私はこんなことを前から御相談したかったので、今は悪くおとりになるかもしれない時である、折おりがよろしくないと思いながら申し上げてみます」

「それは非常にうれしいお話でございますが、何か話をまちがえて聞いておいでになるのではないかと思ひますと、どうお返辞を申し上げてよいかに迷います。私のような者一人をたよりにしてあります子供が一人おりますが、まだごく幼稚なもので、どんなに寛大なお心でも、将来の奥様にお擬しになることは無理でございますから、私のほうで御相談に乗せていただきようもございません」

と尼君は言うのである。

「私は何もかも存じております。そんな年齢の差などはお考えにならずに、私がどれほどそうなるのを望むかという熱心の度を御覽ください」

源氏がこんなに言っても、尼君のほうでは女王の幼齡なことを知

らないでいるのだと思う先入見があつて源氏の希望を問題にしようとはしない。僧都そうずが源氏の部屋へやのほうへ来るらしいのを機会に、
 「まあよろしいです。御相談にもう取りかかったのですから、私は実現を期します」

と言つて、源氏は屏風びようぶをもとのように直して去つた。もう明け方になつていた。法華ほっけの三昧さんまいを行なう堂の尊い懺法ぜんぽうの音が山おろしの音に混じり、滝がそれらと和する響きを作っているのである。

「#ここから2字下げ」

吹き迷ふ深山みやまおろしに夢さめて涙催す滝の音かな

「#ここで字下げ終わり」

これは源氏の作。

「#ここから1字下げ」

「さしぐみに袖一濡ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはする

「#ここで字下げ終わり」

もう馴なれ切つたものですよ」

と僧都は答えた。

夜明けの空は十二分に霞んで、山の鳥声がどこで啼なくとなしに多く聞こえてきた。都人みやこびとには名のわかりにくい木や草の花が多く咲き多く地に散つていた。こんな深山の錦にしきの上へ鹿しかが出て来たりするの
 も珍しいながめで、源氏は病苦からまったく解放されたのである。

聖人は動くことも容易でない老体であつたが、源氏のために僧都の

坊へ来て護身の法を行なったりしていた。嘔々な所々が消えるような声で経を読んでいるのが身にしみもし、尊くも思われた。経は陀羅尼である。

京から源氏の迎えの一行が山へ着いて、病気の全快された喜びが述べられ、御所のお使いも来た。僧都は珍客のためによい菓子を種々作らせ、溪間へまでも珍しい料理の材料を求めに人を出して饗応に骨を折った。

「まだ今年じゅうは山籠りのお誓いがしてあって、お帰りの際に京までお送りしたいのができませんから、かえって御訪問が恨めしく思われるかもしれません」
 などと言いながら僧都は源氏に酒をすすめた。

「山の風景に十分愛着を感じているのですが、陛下に御心配をおかけ申すのももったいないことですから、またもう一度、この花の咲いているうちに参りましょう、」

「#ここから2字下げ」

宮人に行きて語らん山ざくら風よりさきに来ても見るべく」

「#ここで字下げ終わり」

歌の発声も態度もみごとな源氏であった。僧都が、

「#ここから2字下げ」

優曇華の花まち得たるここちして深山桜に目こそ移らね

「#ここで字下げ終わり」

と言うと源氏は微笑しながら、

「長い間にまれに一度咲くという花は御覧になることが困難でしょう。私とは違います」

と言っていた。巖窟の聖人は酒杯を得て、

「#ここから2字下げ」

奥山の松の戸ほそを稀まれに開あけてまだ見ぬ花の顔を見るかな

「#ここで字下げ終わり」

と言って泣きながら源氏をながめていた。聖人は源氏を護まもる法ほのこめられてある独ど鉦こを献上した。それを見て僧都は聖徳太子が百くだら済の国からお得になつた金剛こんごう子の数すう珠じゆに宝玉の飾りのついたのを、その当時のいかにも日本の物らしくない箱に入れたままで薄物の袋に包んだのを五葉の木の枝につけた物と、紺瑠璃こんるりなどの宝石の壺つぼへ薬を詰めた幾個かを藤ふじや桜の枝につけた物と、山寺の僧都の贈り物らしい物を出した。源氏は巖窟の聖人をはじめとして、上の寺で経を讀んだ僧たちへの布施の品々、料理の詰め合わせなどを京へ取りにやつてあつたので、それらが届いた時、山の仕事を下級労働者までが皆相当な贈り物を受けたのである。なお僧都の堂どうで誦す経きやうをしてもらうための寄進もして、山を源氏の立つて行く前に、僧都は姉の所に行つて源氏から頼まれた話を取り次ぎしたが、

「今のところでは何ともお返辞の申しようがありません。御縁がもしありましたならもう四、五年して改めておっしゃってくださいすつたら」

と尼君は言うだけだった。源氏は前夜聞いたのと同じような返辞

を僧都から伝えられて自身の気持ちの理解されないことを歎いた。
手紙を僧都の召使の小童に持たせてやった。

「#ここから2字下げ」

夕まぐれほのかに花の色を見て今朝は霞の立ちぞわづらふ

「#ここで字下げ終わり」

という歌である。返歌は、

「#ここから2字下げ」

まことにや花のほとりは立ち憂きと霞むる空のけしきをも見ん

「#ここで字下げ終わり」

こうだった。貴女らしい品のよい手で飾りけなしに書いてあった。

ちょうど源氏が車に乗ろうとするころに、左大臣家から、どこへ
行くともなく源氏が京を出かけて行ったので、その迎えとして家司
の人々や、子息たちなどがおおぜい出て来た。頭中将、左中弁また
そのほかの公達もいっしょに来たのである。

「こうした御旅行などにはぜひお供をしようと思っっていますのに、
お知らせがなくて」

などと恨んで、

「美しい花の下で遊ぶ時間が許されないのですぐにお帰りのお供をす
るのは惜しくてならないことですな」

とも言っていた。岩の横の青い苔の上に新しく来た公達は並んで、

また酒盛りが始められたのである。前に流れた滝も情趣のある場所だった。頭中將は懐ふとこに入れてきた笛を出して吹き澄ましていた。弁は扇拍子をとって、「葛城かつらぎの寺の前なるや、豊浦とよらの寺の西なるや」という歌を歌っていた。この人たちは決して平凡な若い人ではないが、悩ましそうに岩へよりかかっている源氏の美に比べてよい人はだれもなかった。いつも篳篥ひちじきを吹く役にあたる隨身がそれを吹き、またわざわざ笙しやうの笛を持ち込んで来た風流好きもあつた。僧都が自身で琴きん（七一絃げんの唐風の楽器）を運んで来て、

「これをただちよつとだけでもお弾ひきくだすつて、それによつて山の鳥に音楽の何であるかを知らせてやつていただきたい」

こう熱望するので、

「私はまだ病気に疲れています」

と言いながらも、源氏が快く少し弾いたのを最後として皆帰つて行つた。名残惜なごりしく思つて山の僧俗は皆涙をこぼした。家の中では年を取つた尼君主従がまだ源氏のような人に出逢であつたことのない人たちばかりで、その天才的な琴の音をも現実の世のものでないと評し合つた。僧都も、

「何の約束事やくそくでこんな末世にお生まれになつて人としてのうるさい束縛や干渉をお受けにならなければならぬかと思つてみると悲しくてならない」

と源氏の君のことを言つて涙をぬぐつていた。兵部卿ひょうぶきやうの宮の姫君は子供心に美しい人であると思つて、

「宮様よりも御様子がごりつぱね」

などとほめていた。

「ではあの方のお子様におなりなさいまし」

と女房が言うとうなずいて、そうなくてもよいと思う顔をしていた。それから人形遊びをしても絵をかいても源氏の君というのをこしらえて、それにはきれいな着物を着せて大事がった。

帰京した源氏はすぐに宮中へ上がって、病中の話をいろいろと申し上げた。ずいぶん痩やせてしまったと仰おほせられて帝みかどはそれをお気におかけあそばされた。聖人の尊敬すべき祈きとう禱力などについての御下問もあつたのである。詳しく申し上げると、

「阿あじやり闍梨にもなつていいだけの資格がありそうだね。名譽を求めないで修行一方で来た人なんだろう。それで一般人に知られなかったのだ」

と敬意を表しておいでになった。左大臣も御所に来合わせていて、「私もお迎えに参りたく思つたのですが、御おし微行のびの時にはかえつて御迷惑かとも思いました。遠慮をしました。しかしまだ一日二日は静かにお休みになるほうがよろしいでしょう」

と言って、また、

「ここからのお送りは私がいたしましょう」

とも言つたので、その家へ行きたい気もなかったが、やむをえず源氏は同道して行くことにした。自分の車へ乗せて大臣自身はからだを小さくして乗つて行つたのである。娘のかわいさからこれほどまでに誠意を見せた待遇を自分にしてくれるのだと思うと、大臣の親心なるものに源氏は感動せずにはいられなかった。

こちらへ退出して来ることを予期した用意が左大臣家にできていた。しばらく行って見なかつた源氏の目に美しいこの家がさらに磨き上げられた気もした。源氏の夫人は例のとおりにはほかの座敷へは

いってしまったって出て来ようとしな。大臣がいろいろとなだめてや
つと源氏と同席させた。絵にかいた何かの姫君というようにきれいに
飾り立てられていて、身動きすることも自由でないようにきちん
とした妻であったから、源氏は、山の二日の話をするすればすぐ
に同感を表してくれるような人であれば情味が覚えられるであろう、
いつまでも他人に対する羞恥しうちと同じものを見せて、同棲いせの歳月は重
なってもこの傾向がますます目だってくるばかりであると思うと苦
しくて、

「時々普通の夫婦らしくしてください。ずいぶん病気で苦しんだ
のですから、どうだったかというぐらひは問うてくださいっていいの
に、あなたは問わない。今はじめてのことではないが私としては恨
めしいことですよ」

と言った。

「問われないのは恨めしいものでしょうか」

こう言つて横に源氏のほうを見た目つきは恥ずかしそうで、そし
て気高けだかい美が顔に備わっていた。

「たまに言つてくださることがそれだ。情けないじゃありませんか。
訪うて行かぬなどという間柄は、私たちのような神聖な夫婦の間柄
とは違うのですよ。そんなことといっしよにして言うものじゃあり
ません。時がたてばたつほどあなたは私を露骨けいこつに軽蔑けいめつするようにな
るから、こうすればあなたの心持が直るか、そうしたら効果ききめがあ
るだろうかと私はいろんな試みをしているのですよ。そうすればす
るほどあなたはよそよそしくなる。まあいい。長い命さえあればよ
くわかつてもらえるでしょう」

と言つて源氏は寢室のほうへはいったが、夫人はそのままとの

座にいた。就寝を促してみても聞かぬ人を置いて、歎息たんそくをしながら源氏は枕についていたというのも、夫人を動かすことにそう骨を折る気にはなれなかったのかもしれない。ただくたびれて眠いというふうを見せながらもいろいろな物思いをしていた。若草と祖母に歌われていた兵部卿の宮の小王女の登場する未来の舞台がしきりに思われる。年の不つりあいから先方の人たちが自分の提議を問題にしようとしなかったのも道理である。先方がそうでは積極的には出られない。しかし何らかの手段で自邸へ入れて、あの愛らしい人を物思いの慰めにながめていたい。兵部卿の宮は上品な艶えんなお顔ではあるがはなやかな美しさなどはおありにならないのに、どうして叔母君にそっくりなように見えたのだろう、宮と藤壺の宮とは同じお后おのきからお生まれになったからであろうか、などと考えるだけでもその子と恋人との縁故の深さがうれしくて、ぜひとも自分の希望は実現させないではならないものであると源氏は思った。

源氏は翌日北山へ手紙を送った。僧都そんずへ書いたものにも女王じようおうの問題をほのめかして置かれたに違いない。尼君のには、

「#ここから1字下げ」

問題にしてくださいませんでしたあなた様に気おくれがいたしまして、思っておりますこともことごとくは言葉に現わせませんでした。こう申しますだけでも並み並みでない執心のほどをおくみ取りくださいましたらうれしいでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

などと書いてあった。別に小さく結んだ手紙が入れてあって、

「#ここから1字下げ」

「面^{おも}かけは身をも離れず山ざくら心の限りとめてこしかど

「#ここで字下げ終わり」

どんな風が私の忘れることのできない花を吹くかもしれないと思
うと気がかりです」

内容はこうだった。源氏の字を美しく思ったことは別として、老
人たちは手紙の包み方などにさえ感心していた。困ってしまう。こ
んな問題はどうぞお返事すればいいことかと尼君は当惑していた。

「#ここから1字下げ」

あのお話は遠い未来のことでしたから、ただ今何とも
申し上げませんがと存じておりましたのに、またお手紙で仰せに
なりましたので恐縮いたしております。まだ手習いの難^{なに}波津^{わづ}の歌さ
えも続けて書けない子供でございますから失礼をお許しくださいま
せ、それにいたしましたしても、

「#ここから2字下げ」

嵐^{あらし}吹く尾上^{おのへ}のさくら散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

「#ここから1字下げ」

こちらこそたよりない気がいたします。

「#ここで字下げ終わり」

というのが尼君からの返事である。僧都の手紙にしるされたこと
も同じようであったから源氏は残念に思つて二、三日たつてから惟^{これ}
光^{みつ}を北山へやろうとした。

「少^{せう}納言^{なつげん}の乳母^{めのと}という人がいるはずだから、その人に逢^あつて詳しく

私のほうの心持ちを伝えて来てくれ」

などと源氏は命じた。どんな女性にも関心を持つ方だ、姫君はま
だきわめて幼稚であったようだと惟光は思つて、真正面から見
たのではないが、自身がいつしよに隙見すきみをした時のことを思つてみ
たりもしていた。

今度は五位の男を使いにして手紙をもらったことに僧都は恐縮し
ていた。惟光は少納言に面会を申し込んで逢つた。源氏の望んでい
ることを詳しく伝えて、そのあとで源氏の日常生活ぶりなどを語
つた。多弁な惟光は相手を説得する心で上手うまいにいろいろ話したが、
僧都も尼君も少納言も稚おさない女王への結婚の申し込みはどう解釈すべ
きであろうとあきれているばかりだった。手紙のほうにもねんごろ
に申し入れが書かれてあつて、

「#ここから1字下げ」

一つずつ離してお書きになる姫君のお字をぜひ私に見せていただき
たい。

「#ここで字下げ終わり」

ともあつた。例の中に封じたほうの手紙には、

「#ここから2字下げ」

浅香山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらん

「#ここで字下げ終わり」

この歌が書いてある。返事、

「#ここから2字下げ」

汲み初めてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき

「#ここで字下げ終わり」

尼君が書いたのである。惟光これみつが聞いて来たのもその程度の返辞であつた。

「尼様の御容体が少しおよろしくなりましたら京のお邸やしきへ帰りますから、そちらから改めてお返事を申し上げることにいたします」

と言っていたというのである。源氏はたよりない気がしたのであつた。

藤壺の宮が少しお病氣におなりになつて宮中から自邸へ退出して来ておいでになつた。帝みかどが日々恋しく思召す御様子に源氏は同情しながらも、稀まれにしかないお実家住まいの機会をとらえないではまたいつ恋しいお顔が見られるかと夢中になつて、それ以来どの恋人の所へも行かず宮中の宿直所とのだいしるでも、二条の院でも、昼間は終日物思いに暮らして、王命婦おうみやうぶに手引きを迫ることのほかは何もしなかつた。王命婦がどんな方法をとつたのか与えられた無理なわずかな達瀬せの中にいる時も、幸福が現実の幸福とは思えないで夢としか思われないのが、源氏はみずから残念であつた。宮も過去のある夜の思いがけぬ過失の罪悪感が一生忘れられないもののように思つておいでになつて、せめてこの上の罪は重ねまいと深く思召したのであるのに、またもこうしたことを他動的に繰り返すことになつたのを悲しくお思いになつて、恨めしいふうでおありになりながら、柔らかな魅力があつて、しかも打ち解けておいでにならない最高の貴女の態度が美しく思われる源氏は、やはりだれよりもすぐれた女性である、なぜ一所でも欠点を持つておいでにならないのであろう、それ

であれば自分の心はこうして死ぬほどにまで惹かれないうと、楽であるうと思つと源氏はこの人の存在を自分に知らせた運命さえも恨めしく思われるのである。源氏の恋の万分の一も告げる時間のあるわけではない。永久の夜が欲しいほどであるのに、逢わない時よりも恨めしい別れの時が至つた。

「#ここから2字下げ」

見てもまた逢ふ夜一稀なる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな

「#ここで字下げ終わり」

涙にむせ返つて言う源氏の様子を見ると、さすがに宮も悲しくて、

「#ここから2字下げ」

世語りに人やつたへん類ひなく憂き身をさめぬ夢になしても

「#ここで字下げ終わり」

とお言いになつた。宮が煩悶しておいでのなるのも道理なこと、恋にくらんだ源氏の目にももつたいなく思われた。源氏の上着などは王命婦がかき集めて寢室の外へ持つてきた。源氏は二条の院へ帰つて泣き寝に一日を暮らした。手紙を出しても、例のとおり御覽にならぬという王命婦の返事以外には得られないのが非常に恨めしくて、源氏は御所へも出ず二、三日引きこもっていた。これをまた病気のように解釈あそばして帝がお案じになるに違いないと思つともつたいなく空恐ろしい気ばかりがされるのであつた。

宮も御自身の運命をお歎なげきになつて煩悶が続き、そのために御病気の経過もよろしくないのである。宮中のお使いが始終来て御所へお帰りになることを促されるのであつたが、なお宮は里居あたを続けておいでになつた。宮は実際おからだが悩ましくて、しかもその悩ましさの中に生理的な現象らしいものもあるのを、宮御自身だけには思いあたることがないのではなかつた。情けなくて、これで自分は子を産むのであろうかと煩悶をしておいでになつた。まして夏の暑い間は起き上がることもできずにお寝みになつたきりだつた。御妊娠が三月であるから女房たちも気がついてきたようである。宿命の恐ろしさを宮はお思いになつても、人は知らぬことであつたから、こんなに月が重なるまで御内奏もあそばされなかつたと皆驚いてささやき合つた。宮の御入浴のお世話などもきまつてしていた宮の乳母の娘である弁とか、王命婦とかだけは不思議に思うことはあつても、この二人の間でさえ話し合うべき問題ではなかつた。命婦は人間がどう努力しても避けがたい宿命というものの力に驚いていたのである。宮中へは御病気やら物怪もののけやらで気のつくことのおくれたように奏上したはずである。だれも皆そう思つていた。帝はいつその熱愛を宮へお寄せになることになつて、以前よりもおつかわしになるお使いの度数の多くなつたことも、宮にとっては空恐ろしくお思われになることだつた。煩悶の合い間というものがなくなつた源氏の中将も変わった夢を見て夢解きを呼んで合わさせてみたが、及びもない、思いもかけぬ占いをした。そして、

「しかし順調にそこへお達しにならうとするにはお慎みにならなければならぬ故障が一つございます」

と言つた。夢を現実にまざまざ続いたことのように言われて、源

氏は恐怖を覚えた。

「私の夢ではないのだ。ある人の夢を解いてもらったのだ。今の占いが真実性を帯びるまではだれにも秘密にしておけ」

とその男に言ったのであるが、源氏はそれ以来、どんなことがおこってくるのかと思っていた。その後、源氏は藤壺の宮の御懐妊を聞いて、そんなことがあの占いの男に言われたことなのではないかと思うと、恋人と自分の間に子が生まれてくるということに若い源氏は昂奮して、以前にもまして言葉を尽くして逢瀬を望むことになったが、王命婦も宮の御懐妊になって以来、以前に自身が、はげしい恋に身を亡しかねない源氏に同情してとった行為が重大性を帯びていることに気がついて、策をして源氏を宮に近づけようとすることを避けたのである。源氏はたまさかに宮から一行足らずのお返事の得られたこともあるが、それも絶えてしまった。

初秋の七月になって宮は御所へおはいりになった。最愛の方が懐妊されたのであるから、帝のお志はますます藤壺の宮にそそがれるばかりであった。少しお腹がふつくりとなつて悪阻の悩みに顔の少しお痩せになった宮のお美しさは、前よりも増したのではないかと見えた。以前もそうであったように帝は明け暮れ藤壺にばかり来ておいでになって、もう音楽の遊びをするのにも適した季節にもなつていたから、源氏の中将をも始終そこへお呼び出しになって、琴や笛の役をお命じになった。物思わしさを源氏は極力おさえていたが、時々には忍びがたい様子もうかがわれるのを、宮もお感じになつて、さすがにその人にまつわるものの愁わしさをお覚えになつた。

北山へ養生に行っていた按察使大納言の未亡人は病が快くなつて京へ帰つて来ていた。源氏は惟光などに京の家を訪ねさせて時々手

紙などを送っていた。先方の態度は春も今も変わったところがないのである。それも道理に思えることであつたし、またこの数月間というものは、過去の幾年間にもまさつた恋の煩悶はんもんが源氏にあつて、ほかのことは何一つ熱心にしようとは思われないのであつたりして、より以上積極性を帯びていくようでもなかつた。

秋の末になつて、恋する源氏は心細さを人よりも深くしみじみと味わっていた。ある月夜にある女の所を訪ねる氣にやつとなつた源氏が出かけようとするときとさつと時雨しぐれがした。源氏の行く所は六条の京極辺であつたから、御所から出て来たのではやや遠い氣がする。荒れた家の庭の木立ちが大家たいけらしく深いその土塀どべいの外を通る時に、例の傍去そばらずの惟光が言つた。

「これが前の按察使大納言の家でございます。先日ちよつとこの近くへ来ました時に寄つてみますと、あの尼さんからは、病氣に弱つてしまつていまして、何も考えられませんかという挨拶あいさつがありました」

「氣の毒だね。見舞いに行くのだった。なぜその時にそう言つてくれなかつたのだ。ちよつと私が訪問に来たがと言つてやれ」

源氏がこう言うので惟光は従者の一人をやつた。この訪問が目的で来たと最初言わせたので、そのあとでまた惟光がはいつて行って、

「主人が自身でお見舞いにおいでになりました」

と言つた。大納言家では驚いた。

「困りましたね。近ごろは以前よりもずっと弱つていらつしやるから、お逢いにはなれないでしょうが、お断わりするのはもつたいないことですから」

などと女房は言つて、南向きの縁座敷をきれいにして源氏を迎えたのである。

「見苦しい所でございますが、せめて御厚志のお礼を申し上げますんではと存じまして、思召おぼしめしてもございませんでしょうが、こんな部屋へやなどにお通しいたしまして」

という挨拶あいさつを家の者がした。そのとおりで、意外な所へ来ているという気が源氏にはした。

「いつも御訪問をしたく思っているのですが、私のお願いをとつぴなものか何かのようにこちらではお扱いになるので、きまりが悪かつたのです。それで自然御病気もこんなに進んでいることを知りませんでした」

と源氏が言った。

「私は病気であることが今では普通なようになっております。しかしもうこの命の終わりに近づきましたとおりから、かたじけないお見舞いを受けました喜びを自分で申し上げません失礼をお許しくださいます。あの話は今後もお忘れになりませんでしたら、もう少し年のゆきました時にお願ひいたします。一人ぼっちになりますあの子に残る心が、私の参ります道の障さわりになることかと思われます」

取り次ぎの人に尼君が言いつけている言葉が隣室であつたから、その心細そうな声も絶え絶え聞こえてくるのである。

「失礼なことでございます。孫がせめてお礼を申し上げる年になつておればよろしいのでございますのに」

とも言う。源氏は哀れに思つて聞いていた。

「今さらそんな御挨拶ごあいさつはなさらないでください。通り一遍な考えでしたなら、風変わりな酔狂者すいきやう者のと誤解されるのも構わずに、こんな御

相談は続きません。どんな前生の因縁でしょうか、女王さんをちょっとお見かけいたしました時から、女王さんのことをどうしても忘れられないようなことになりましたのも不思議なほどで、どうしてもこの世界だけのことでない、約束事としか思われません」

などと源氏は言つて、また、

「自分を理解していただけない点で私は苦しんでおります。あの小さい方が何か一言お言いになるのを伺えればと思うのですが」

と望んだ。

「それは姫君は何もご存じなしに、もうお寝^{やす}みになってしまつて」

女房がこんなふうと言つている時に、向こうからこの隣室へ来る足音がして、

「お祖母様、あのお寺にいらつした源氏の君が来ていらつしやるのですよ。なぜ御覽にならないの」

と女王は言つた。女房たちは困つてしまつた。

「静かにあそばせよ」

と言つていた。

「でも源氏の君を見たので病気がよくなつたと言つていらしたからよ」

自分の覚えているそのことが役に立つ時だと女王は考えている。

源氏はおもしろく思つて聞いていたが、女房たちの困りきつたふうが気の毒になつて、聞かない顔をして、まじめな見舞いの言葉を残して去つた。子供らしい子供らしいというのはほんとうだ、けれども自分はよく教えていける気がすると源氏は思つたのであつた。

翌日もまた源氏は尼君へ丁寧に見舞いを書いて送つた。例のように小さくしたほうの手紙には、

「#ここから2字下げ」

いはけなき鶴たづの一声聞きしより葦間あしまになづむ船ぞえならぬ

「#ここから1字下げ」

いつまでも一人の人を対象にして考えているのですよ。

「#ここで字下げ終わり」

わざわざ子供にも読めるふうに書いた源氏のこの手紙の字もみことなものであったから、そのまま姫君の習字の手本にしたらいいと女房らは言った。源氏の所へ少納言が返事を書いてよこした。

「#ここから1字下げ」

お見舞いくださいました本人は、今日も危あぶないようでございまして、ただ今から皆で山の寺へ移ってまいるところでございます。

かたじけないお見舞いのお礼はこの世界で果たしませんでもまた申し上げる時がございましょう。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。秋の夕べはまして人の恋しさがつのって、せめてその人に縁故のある少女を得られるなら得たいという望みが濃くなつていくばかりの源氏であった。「消えん空なき」と尼君の歌つた晩春の山の夕べに見た面影が思い出されて恋しいとともに、引き取つて幻滅を感じるのではないかと危あやぶむ心も源氏にはあった。

「#ここから2字下げ」

手に摘みていつしかも見ん紫の根に通ひける野辺のべの若草

「#ここで字下げ終わり」

このころの源氏の歌である。

この十月に朱雀院すざくへ行幸があるはずだった。その日の舞楽には貴族の子息たち、高官、殿上役人などの中の優秀な人が舞い人に選ばれていて、親王方、大臣をはじめとして音楽の素養の深い人はそのために新しい稽古けいこを始めていた。それで源氏の君も多忙であった。北山の寺へも久しく見舞わなかったことを思つて、ある日わざわざ使いを立てた。山からは僧都そうずの返事だけが来た。

「#ここから1字下げ」

先月の二十日にととう姉は亡なくなりました、これが人生の掟おきてであるのを承知しながらも悲しんでおります。

「#ここで字下げ終わり」

源氏は今さらのように人間の生命の脆もろさが思われた。尼君が気がかりでならなかつたらしい小女王はどうしているだろう。小さいのであるから、祖母をどんなに恋しがってばかりいることであろうと想像しながらも、自身の小さくて母に別れた悲哀も確かに覚えなかりに思われるのであった。源氏からは丁寧な弔慰品が山へ贈られたのである。そんな場合にはいつも少納言が行き届いた返事を書いて来た。

尼君の葬式のあとのこととが済んで、一家は京の邸やしきへ帰つて来ているということであつたから、それから少しあとに源氏は自身で訪問した。凄すこいように荒れた邸に小人数で暮らしているのであつたから、小さい人などは怖おそしい気がするであろうと思われた。以前の座敷へ迎えて少納言が泣きながら哀れな若草を語つた。源氏も涙のこぼれるのを覚えた。

「宮様のお邸へおつれになることになっておりますが、お母様の御生前にいろんな冷酷なことをなさいました奥さまがいらっしやるのでございますから、それがいつそずっとお小さいとか、また何でもおわかりになる年ごろになっていらっしやるとかすればいいのでございませうが、中途一はんば半端なお年で、おおせいお子様のいらっしやる中で軽い者にお扱われになることになってはと、尼君も始終それを苦勞になさいましたが、宮様のお内のことを聞きますと、まったく取り越し苦勞でなさそうなんでございませうから、あなた様のお気まぐれからおっしゃってくださいませうことも、遠い将来にまでにはたとえどうなりますにしましても、お救いの手に違いないと私どもは思われますが、奥様になどは想像も許されませんようなお子供らしさでございまして、普通のあの年ごろよりもっともあかさと赤様なのでございます」

と少納言が言った。

「そんなことはどうでもいいじゃありませんか、私が繰り返し繰り返し返しこれまで申し上げてあることをなぜ無視しようとなさるのですか。その幼稚な方を私が好きでたまらないのは、こればかりはせんじょう前生の縁に違いないと、それを私が客観的に見ても思われます。許してくださいすって、この心持ちを直接女王さんに話させてくださいませうか。

「#ここから2字下げ」

あしわかかたの浦にみるめは難くともこは立ちながら帰る波かは

「#ここで字下げ終わり」

私をお見くびりになってはいけません」

源氏がこう言うと、

「それはもうほんとうにもったいなく思っているのです。ごさいます。」

「#ここから2字下げ」

寄る波の心も知らで和歌の浦に玉藻たまもなびかんほどぞ浮きたる

「#ここで字下げ終わり」

このことだけは御信用ができませんけれど」

物一馴なれた少納言の応接のしように、源氏は何を言われても不快には思われなかった。「年を経てなど越えざらん逢坂あふさかの関」という古歌を口ずさんでいる源氏の美音に若い女房たちは酔ったような気持ちになっていた。女王は今夜もまた祖母を恋しがって泣いていた時に、遊び相手の童女が、

「直衣のうしを着た方が来ていらっしやいますよ。宮様が来ていらっしやるのでしよう」

と言ったので、起きて来て、

「少納言、直衣着た方どちら、宮様なの」

こう言いながら乳母めのとのそばへ寄って来た声がかわいかった。これは父宮ではなかったが、やはり深い愛を小女王に持つ源氏であったから、心がときめいた。

「こちらへいらっしやい」

と言ったので、父宮でなく源氏の君であることを知った女王は、さすがにうっかりとしたことを言ってしまったと思うふうで、乳母のそばへ寄って、

「さあ行こう。私は眠いのだもの」と言う。

「もうあなたは私に御遠慮などしないでいいんですよ。私の膝の上へお寝みなさい」

と源氏が言った。

「お話しいたしましたとおりでございましょう。こんな赤様なのでございます」

乳母に源氏のほうへ押し寄せられて、女王はそのまま無心にすわっていた。源氏が御簾の下から手を入れて探してみると柔らかい着物の上に、ふさふさとかかった端の厚い髪が手に触れて美しさが思いやられるのである。手をとらえると、父宮でもない男性の近づいてきたことが恐ろしくて、

「私、眠いと言っているのに」

と言って手を引き入れようとするのについて源氏は御簾の中へはいって来た。

「もう私だけがあなたを愛する人なんですよ。私をお憎みになっちはいけない」

源氏はこう言っている。少納言が、

「よろしくございません。たいへんでございます。お話しになりまして何の効果もございませんでしょうの」

と困ったように言う。

「いくら何でも私はこの小さい女王さんを情人にしようとはしない。まあ私がどれほど誠実であるかを御覧なさい」

外には雲が降っていて凄惨な夜である。

「こんなに小人数でこの寂しい邸にどうして住めるのですか」

と言つて源氏は泣いていた。捨てて歸つて行けない気がするのであつた。

「もう戸をおろしておしまいなさい。こわいような夜だから、私が宿直とのいの男になりましょう。女房方は皆一女王にょおうさんの室へ来ていらつしやい」

と言つて、馴なれたことのように女王さんを帳台の中へ抱いてはいつた。だれもだれも意外なことにあきれていた。乳母は心配をしながらも普通のちんにゅうしや闖入者を扱うようにはできぬ相手に歎息たんそくをしながら控えていた。小女王は恐ろしがつてどうするのかと慄ふるえているので肌はだも毛穴が立っている。かわいく思う源氏はささやかな異性を単衣ひとえに巻きくるんで、それだけを隔てに寄り添っていた。この所作がわれながら是認しがたいものとは思いながらも愛情をこめていろいろと話していた。

「ねえ、いらつしやいよ、おもしろい絵がたくさんある家で、お雛ひな様遊びなんかのよくできる私の家うちへね」

こんなふうに小さい人の氣に入るような話をしてくれる源氏の柔らかな調子に、姫君は恐ろしさから次第に解放されていった。しかし不気味であることは忘れずに、眠り入ることはなくて身じろぎしながら寝ていた。この晩は夜通し風が吹き荒れていた。

「ほんとうにお客様がお泊まりにならなかつたらどんなに私たちは心細かつたでしょう。同じことなら女王様がほんとうの御結婚のできるお年であればね」

などと女房たちはささやいていた。心配でならない乳母は帳台の近くに侍していた。風の少し吹きやんだ時はまだ暗かったが、帰る源氏はほんとうの恋人のもとを別れて行く情景に似ていた。

「かわいそうな女王さんとこんなに親しくなってしまった以上、私はしばらくの間もこんな家へ置いておくことは気がかりでたまらない。私の始終住んでいる家へお移ししよう。こんな寂しい生活をばかりしていらっしやうては女王さんが神経衰弱におなりになるから」

と源氏が言った。

「宮様もそんなにおっしゃいますが、あちらへおいでになることも、四十九日が済んでからがよろしかろうと存じております」

「お父様のお邸ではあつても、小さい時から別の所でお育ちになつたのだから、私に対するお気持ちと親密さはそう違わないでしょう。今からいつしよにいたことが将来の障りになるようなことは断じてない。私の愛が根底の深いものになるだけだと思つ」

と女王の髪を撫でながら源氏は言つて顧みながら去つた。深く霧に曇つた空も艶であつて、大地には霜が白かつた。ほんとうの恋の忍び歩きにも適した朝の風景であると思つと、源氏は少し物足りなかつた。近ごろ隠れて通つている人の家が途中にあるのを思い出して、その門をたたかせたが内へは聞こえないらしい。しかたがなくて供の中から声のいい男を選んで歌わせた。

「#ここから2字下げ」

朝ぼらけ霧立つ空の迷ひにも行き過ぎがたき妹が門かな

「#ここで字下げ終わり」

二度繰り返させたのである。気のきいたふうをした下仕えの女中を出して、

「#ここから2字下げ」

立ちとまり霧の籬まがきの過ぎつくば草の戸ざしこまに障りしもせじ

「#ここで字下げ終わり」

と言わせた。女はすぐに門へはいつてしまった。それきりだれも出て来ないので、帰ってしまうのも冷淡な気がしたが、夜がどんどん明けてきそうので、きまりの悪さに二条の院へ車を進めさせた。

かわいかった小女王を思い出して、源氏は独り笑へみえをしながら又寝ねをした。朝おそくなって起きた源氏は手紙をやるうとしたが、書く文章も普通の恋人扱いにはされないのので、筆を休め休め考えて書いた。よい絵なども贈った。

今日は按察使大納言家へ兵部卿ひょうぶけいの宮が来ておいでになった。以前よりもずっと邸が荒れて、広くて古い家に小人数でいる寂しさが宮のお心を動かした。

「こんな所にしばらくでも小さい人がいられるものではない。やはり私の邸のほうへつれて行こう。たいしたむずかしい所ではないのだよ。乳母めのとは部屋へやをもらって住んでいけばいいし、女王は何人も若い子がいるからいっしょに遊んでいれば非常にいいと思う」

などとお言いになった。そばへお呼びになった小女王の着物には源氏の衣服の匂においが深く沁しんでいた。

「いい匂いだね。けれど着物は古くなっているね」

心苦しく思召おぼしめす様子だった。

「今までからも病身な年寄りとはかりいっしょにいるから、時々は邸のほうへよこして、母と子の情合いのできるようにするほうがよ

いと私は言ったのだけれど、絶対的にお祖母^{おば}さんはそれをおさせにならなかつたから、邸のほうでも反感を起こしていた。そしてついにその人が亡^なくなつたからといってつれて行くのは濟まないような気もする」

と宮がお言いになる。

「そんなに早くあそばす必要はございませんでしょう。お心細くても当分はこうしていらつしやいますほうがよろしゅうございませう。少し物の理解がおできになるお年ごろになりましてからおつれなさいますほうがよろしいかと存じます」

少納言はこう答えていた。

「夜も昼もお祖母^{おば}様が恋しくて泣いてばかりいらつしやいまして、召し上がり物なども少のうございます」

とも歎^{なげ}いていた。実際姫君は瘦^やせてしまつたが、上品な美しさがかえつて添つたかのように見える。

「なぜそんなにお祖母様のことばかりをあなたはお思いになるの、亡^なくなつた人はしかたがないんですよ。お父様がおればいいのだよ」

と宮は言つておいでになつた。日が暮れるとお帰りになるのを見て、心細がつて姫君が泣くと、宮もお泣きになつて、

「なんでもそんなに悲しがつてはしかたがない。今日明日にでもお父様の所へ来られるようにしよう」

などと、いろいろになだめて宮はお帰りになつた。母も祖母も失つた女の将来の心細さなどを女王は思うのでなく、ただ小さい時から片時の間も離れず付き添つていた祖母が死んだと思うことだけが非常に悲しいのである。子供ながらも悲しみが胸をふさいでいる気

がして遊び相手はいても遊ぼうとしなかった。それでも昼間は何かと紛れているのであったが、夕方ごろからめいりこんでしまう。こんなことで小さいおからだがどうなるかと思つて、乳母も毎日泣いていた。その日源氏の所からは惟光これみつをよこした。

「#ここから1字下げ」

何うはずですが宮中からお召しがあるので失礼します。おかわいそつに拝見した女王さんのことが気になつてなりません。

「#ここで字下げ終わり」

源氏からの挨拶あいさつはこれで惟光が代わりの宿直とらひをするわけである。

「困つてしまう。将来だれかと御結婚をなさらなければならぬ女王様を、これではもう源氏の君が奥様になすつたような形をお取りになるのですもの。宮様がお聞きになつたら私たちの責任だと言つておしかりになるでしょう」

「ねえ女王様、お気をおつけになつて、源氏の君のことは宮様がいらつしゃいました時にうっかり言つておしまいにならないようになさいませぬ」

と少納言が言つても、小女王は、それが何のためにそうしなければならぬかがわからないのである。少納言は惟光の所へ来て、身にしむ話をした。

「将来あるいはそうおなりあそばす運命かもしれませんが、ただ今のところはどうしてもこれは不つりあいなお間柄だと私らは存じますのに、御熱心に御縁組のことをおっしゃるのですもの、御酔興が何かと私どもは思つばかりでございます。今日も宮様がおいでになりまして、女の子だからよく気をつけてお守りをせい、うっかり油断をしてはいけぬなどとおっしゃいました時は、私ども何だ

か平気でいられなく思われました。昨晚のことなんか思い出すものですから」

などと言いながらも、あまりに歎いて見せては姫君の処女であることをこの人に疑わせることになる用心もしていた。惟光もどんな関係なのかわからない気がした。帰って惟光が報告した話から、源氏はいろいろとその家のことが哀れに思いやられてならないのであったが、形式的には良人らしく一泊したあとであるから、続いて通って行かねばならぬが、それはさすがに躊躇された。酔興な結婚をしたように世間が批評しそうな点もあるので、心がおけて行けないのである。二条の院へ迎えるのが良策であると源氏は思った。手紙は始終送った。日が暮れると惟光を見舞いに出した。

「#ここから1字下げ」

やむをえぬ用事があって出かけられないのを、私の不誠実さからだとお思いにならぬかと不安です。

「#ここで字下げ終わり」

などという手紙が書かれてくる。

「宮様のほうから、にわかには明日迎えに行くと言っておよこしになりましたので、取り込んでおります。長い馴染の古いお邸を離れま

すのも心細い気のことと私どもめいめい申し合っております」

と言葉数も少なく言って、大納言家の女房たちは今日はゆっくりと話し相手になっていなかった。忙しそうに物を縫ったり、何かを仕度したりする様子がよくわかるので、惟光は帰って行った。源氏は左大臣家へ行っていたが、例の夫人は急に出て来て逢おうともしなかつたのである。面倒な気がして、源氏は東琴（和琴に同じ）を手すさびに弾いて、「常陸には田をこそ作れ、仇心かぬとや君が山

を越え、野を越え雨夜来ませる」という田舎めいた歌詞を、優美な声で歌っていた。惟光が来たというので、源氏は居間へ呼んで様子を聞こうとした。惟光によつて、女王が兵部卿の宮邸へ移転する前夜であることを源氏は聞いた。源氏は残念な気がした。宮邸へ移つたあとで、そういう若い人に結婚を申し込むということも物好きに思われることだろう。小さい人を一人盗んで行つたという批難を受けるほうがまだよい。確かに秘密の保ち得られる手段を取つて二条の院へつれて来ようと源氏は決心した。

「明日夜明けにあすこへ行つてみよう。ここへ来た車をそのままにして置かせて、隨身を一人か二人仕度させておくようにしてくれ」という命令を受けて惟光は立つた。源氏はそののちもいろいろと思ひ悩んでいた。人の娘を盗み出した噂の立てられる不名誉も、もう少しあの人が大人で思い合つた仲であればその犠牲も自分は払つてよいわけであるが、これはそうでもないのである。父宮に取りもどされる時の不体裁も考えてみる必要があると思つたが、その機会をはずすことはどうしても惜しいことであると考えて、翌朝は明け切らぬ間に出かけることにした。

夫人は昨夜の気持ちのまままだ打ち解けてはいなかつた。

「二条の院にぜひしなければならぬことのあつたのを私は思い出したから出かけます。用を済ませたらまた来ることにしましょう」と源氏は不機嫌な妻に告げて、寢室をそつと出たので、女房たちも知らなかつた。自身の部屋になつてゐるほうで直衣などは着た。

馬に乗せた惟光だけを付き添いにして源氏は大納言家へ来た。門をたたくと何の気なしに下男が門をあけた。車を静かに中へ引き込ませて、源氏の伴つた惟光が妻戸をたたいて、しわぶきをすると、少

納言が聞きつけて出て来た。

「来ていらっしやるのです」

と言うと、

「女王様はやすんでいらっしやいます。どちらから、どうしてこんなにお早く」

と少納言が言う。源氏が人の所へ通って行った帰途だと解釈しているのである。

「宮様のほうへいらっしやるそうですから、その前にちょっと一言お話をしておきたいと思って」

と源氏が言った。

「どんなことごさいます。まあどんなに確かなお返辞がおできになりますことやら」

少納言は笑っていた。源氏が室内へは行って行こうとするので、この人は当惑したらしい。

「不行儀に女房たちがやすんでおりまして」

「まだ女王さんはお目ざめになっていないのでしょうか。私がお起こししましょう。もう朝霧がいつぱい降る時刻なのに、寝ているというのは」

と言いながら寝室へはいる源氏を少納言は止めることもできなかつた。源氏は無心によく眠っていた姫君を抱き上げて目をさまさせた。女王は父宮がお迎えにおいでになったのだと、まだまったくさめない心では思っていた。髪を撫なでて直したりして、

「さあ、いらっしやい。宮様のお使いになって私が来たのですよ」

と言う声を聞いた時に姫君は驚いて、恐ろしく思うふうに見えた。

「いやですね。私だって宮様だって同じ人ですよ。鬼などであるものですか」

源氏の君が姫君をかかえて出て来た。少納言と、惟光これみつと、外の女房とが、

「あ、どうなさいます」

と同時に言った。

「ここへは始終来られないから、気楽な所へお移ししようと言っただけれど、それには同意をなさらないで、ほかへお移りになることになったから、そちらへおいでになつてはいろいろ面倒めんどうだから、それでなのだ。だれか一人ついておいでなさい」

こう源氏の言うのを聞いて少納言はあわててしまった。

「今日では非常に困るかと思ひます。宮様がお迎えにおいになりました節、何とも申し上げようがないではございませんか。ある時間たちがましてから、ごいっしょにおなりになる御縁があるものでございましたら自然にそうなることとございましょう。まだあまりに御幼少でいらつしやいますから。ただ今そんなことは皆の者の責任になることとございますから」

と言うと、

「じゃいい。今すぐについて来られないのなら、人はあとで来るがよい」

こんなふうに言って源氏は車を前へ寄せさせた。姫君も怪しくなつて泣き出した。少納言は止めようがないので、昨夜縫った女王の着物を手にさげて、自身も着がえをしてから車に乗った。

二条の院は近かったから、まだ明るくならないうちに着いて、西の対に車を寄せて降りた。源氏は姫君を軽そくに抱いて降ろした。

「夢のような気でここまでは参りましたが、私はどうしたら」

少納言は下車するのを躊躇した。

「どうでもいいよ。もう女王さんがこちらへ来てしまったのだから、君だけ帰りたければ送らせよう」

源氏が強かった。しかたなしに少納言も降りてしまった。このにわかの変動に先刻から胸が鳴り続けているのである。宮が自分をどうお責めになるだろうと思うことも苦勞の一つであった。それにしても姫君はどうなっておしまいになる運命なのであるうと思つて、ともかくも母や祖母に早くお別れになるような方は紛れもない不幸な方であることがわかると思つと、涙がとめどなく流れそうであったが、しかもこれが姫君の婚家へお移りになる第一日であると思つと、縁起悪く泣くことは遠慮しなくてはならないと努めていた。

ここは平生あまり使われない御殿であつたから帳台なども置かれてなかつた。源氏は惟光を呼んで帳台、屏風などをその場所場所に据えさせた。これまで上へあげて掛けてあつた几帳の垂れ絹はおるせばいいだけであつたし、畳の座なども少し置き直すだけで済んだのである。東の対へ夜着類を取りにやつて寝た。姫君は恐ろしがつて、自分をどうするのだらうと思つと慄えが出るのであつたが、さすがに声を立てて泣くことはしなかつた。

「少納言の所で私は寝るのよ」

子供らしい声で言う。

「もうあなたは乳母などと寝るものではありませんよ」

と源氏が教えると、悲しがつて泣き寝をってしまった。乳母は眠ることもできず、ただむやみに泣かれた。

明けてゆく朝の光を見渡すと、建物や室内の装飾はいうまでもな

くりつぱで、庭の敷き砂なども玉を重ねたもののように美しかった。少納言は自身が貧弱に思われてきまりが悪かったが、この御殿には女房がいなかった。あまり親しくない客などを迎えるだけの座敷になつていたので、男の侍だけが縁の外で用を聞くだけだった。そうした人たちは新たに源氏が迎え入れた女性のあるのを聞いて、
「だれだろう、よほど好きな方なんだろう」

などとささやいていた。源氏の洗面の水も、朝の食事もこちらへ運ばれた。遅おそくなってから起きて、源氏は少納言に、

「女房たちがいないでは不自由だろうから、あちらにいた何人かを夕方ごろに迎えにやればいい」

と言つて、それから特に小さい者だけが来るようにと東の対たいのほうへ童女を呼びにやった。しばらくして愛らしい姿の子が四人来た。女王は着物にくるまつたまままだ横になつていたので源氏は無理に起こして、

「私に意地悪をしてはいけませんよ。薄情な男は決してこんなものじゃありませんよ。女は気持ちの柔らかかなのがいいのですよ」

もうこんなふうに教え始めた。姫君の顔は少し遠くから見ている時よりもずっと美しかった。気に入るような話をしたり、おもしろい絵とか遊び事をする道具とかを東の対へ取りにやるとかして、源氏は女王の機嫌きげんを直させるのに骨を折った。やっと起きて喪服のやや濃い鼠ねずみの服の着古して柔らかになつたのを着た姫君の顔に笑えみが浮かぶようになると、源氏の顔にも自然笑みが上つた。源氏が東の対へ行つたあとで姫君は寢室を出て、木立ちの美しい築山つきやまや池のほうなどを御簾みすの中からのぞくと、ちょうど霜枯れ時の庭の植え込みが描かいた絵のようによく、平生見ることの少ない黒の正装をした

四位や、赤を着た五位の官人がまじりまじりに出はいりしていた。源氏が言っていたようにほんとうにここはよい家であると女王は思った。屏風にかかれたおもしろい絵などを見てまわって、女王はたよりない今日の心の慰めに行っているらしかった。

源氏は二、三日御所へも出ずにこの人をなつけるのにな所懸命だった。手本帳に綴じさせるつもりや絵をいろいろに書いて見せたりしていた。皆美しかった。「知らねどもむさし野と云へばこたれぬよしやさこそは紫の故」という歌の紫の紙に書かれたことによくできた一枚を手にとって姫君はながめていた。また少し小さい字で、

「#ここから2字下げ」

ねは見ねど哀れとぞ思ふ武蔵野の露分けわぶる草のゆかりを

「#ここで字下げ終わり」

とも書いてある。

「あなたも書いてごらんなさい」

と源氏が言うと、

「まだよくは書けませんの」

見上げながら言う女王の顔が無邪気でかわいかったから、源氏は微笑をして言った。

「まずくても書かないのはよくない。教えてあげますよ」

からだをすぼめるようにして字をかこうとする形も、筆の持ち方の子供らしいのもただかわいくばかり思われるのを、源氏は自分の心ながら不思議に思われた。

「書きそこねたわ」

と言って、恥ずかしがって隠すのをしいて読んでみた。

「#ここから2字下げ」

かこつべき故を知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

「#ここで字下げ終わり」

子供らしい字ではあるが、将来の上達が予想されるような、ふつくりとしたものだった。死んだ尼君の字にも似ていた。現代の手本を習わせたならもつとよくなるだろうと源氏は思った。難^{ひな}なども屋根のある家などもたくさんに作らせて、若紫の女王と遊ぶことは源氏の物思いを紛らすのに最もよい方法のようだった。

大納言家に残っていた女房たちは、宮がおいでになった時に御挨拶^{ごあいさつ}のしようがなくて困った。当分は世間へ知らせずにおこうと、源氏も言っていたし、少納言もそれと同感なのであるから、秘密にすることをくれぐれも言っ^つてやって、少納言がどこかへ隠したように申し上げさせたのである。宮は御落胆あそばされた。尼君も宮邸へ姫君の移って行くことを非常に嫌^{きら}っていたから、乳母の出すぎた考えから、正面からは拒^{こば}まずにおいて、そつと勝手に姫君をつれ出してしまったのだとお思^いになつて、宮は泣く泣くお帰りになつたのである。

「もし居所がわかつたら知らせてよこすように」

宮のこのお言葉を女房たちは苦しい気持ちで聞いていたのである。宮は僧都^{そうず}の所へも捜しにおやりになつたが、姫君の行くえについては何も得る所がなかった。美しかった小女王の顔をお思^い出しにな

つて宮は悲しんでおいでになつた。夫人はその母君をねたんでいた心も長い時間に忘れていつて、自身の子として育てるのを楽しんでいたことが水泡すいほうに帰したのを残念に思つた。

そのうち二条の院の西の対に女房たちがそろつた。若紫のお相手の子供たちは、大納言家から来たのは若い源氏の君、東の対のはきれいな女王といつしよに遊べるのを喜んだ。若紫は源氏が留守るすになつたりした夕方などには尼君を恋しがつて泣きもしたが、父宮を思ひ出すふうもなかつた。初めから稀々まれまれにしか見なかつた父宮であつたから、今は第二の父と思つている源氏にばかり馴染なじんでいった。外から源氏の帰つて来る時は、自身がだれよりも先に迎えてかわいいふうにいろいろな話をして、懐ふとこの中に抱かれて少しもきまり悪くも恥ずかしくも思わない。こんな風変わりな交情がここにだけ見られるのである。

大人の恋人との交渉には微妙な面倒めんどうがあつて、こんな障害で恋までもそこねられるのではないかと我ながら不安を感じることがあつたり、女のほうはまた年じゅう恨み暮らしに暮らすことになつて、ほかの恋がその間に芽ばえてくることにもなる。この相手にはそんな恐れは少しもない。ただ美しい心の慰めであるばかりであつた。娘というものも、これほど大きくなれば父親はこんなにも接近して世話ができず、夜も同じ寝室にはいることは許されないわけであるから、こんなおもしろい間柄まがらというものはないと源氏は思つていらしいのである。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：Juki、多羅尾伴内

2003年6月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

末摘花

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）我妹子わぎもこ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）毎日一閑暇ひまが

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」皮ごろも上に着たれば我妹子わぎもこは聞くこ

「#地から3字上げ」とのみな身に沁しまぬらし （晶子）

源氏の君の夕顔を失った悲しみは、月がたち年が変わっても忘れることができなかつた。左大臣家にいる夫人も、六条の貴女きじよも強い思い上がりで源氏の他の愛人を寛大に許すことのできない気むずかしさがあって、扱あつかいにくいことによつても、源氏はあの気楽な自由

な気持ちを与えてくれた恋人ばかりが追慕されるのである。どうかしてたいそんな身分のない女で、可憐で、そして世間的にあまり恥ずかしくもないような恋人を見つけたいと懲りもせず思っている。少しよいらしく言われる女にはすぐに源氏の好奇心は向く。さて接近して行こうと思うのにはまず短い手紙などを送るが、もうそれだけで女のほうからは好意を表してくる。冷淡な態度を取りうる者はあまりなさそうなのに源氏はかえって失望を覚えた。ある場合条件どおりなのがあつても、それは頭に欠陥のあるのとか、理智一方の女であつて、源氏に対して一度は思い上がった態度に出ても、あまりにわが身知らずのようであるとか思い返してはつまらぬ男と結婚をしてしまつたりするものもあつたりして、話をかけたままになつてゐる向きも多かつた。空蟬が何かのおりおりに思い出されて敬服するに似た気持ちもおこるのであつた。軒端の菝へは今も時々手紙が送られることと思われる。灯影に見た顔のきれいであつたことを思い出しては情人としておいてよい気が源氏にするのである。源氏の君は一度でも関係を作つた女を忘れて捨ててしまふようなことはなかつた。

左衛門の乳母といつて、源氏からは大貳の乳母の次にいたわられていた女の、一人娘は大輔の命婦といつて御所勤めをしていた。王氏の兵部大輔である人が父であつた。多情な若い女であつたが、源氏も宮中の宿直所では女房のようにして使っていた。左衛門の乳母は今筑前守と結婚して、九州へ行ってしまったので、父である兵部大輔の家を実家として女官を勤めているのである。常陸の太守であつた親王（兵部大輔はその息である）が年をおとりになつてからお持ちになつた姫君が孤児になつて残つてゐることを何かのつ

いでに命婦が源氏へ話した。気の毒な気がして源氏は詳しくその人のことを尋ねた。

「どんな性質でいらつしやるとか御容貌のこととか、私はよく知らないでございます。内気なおとなしい方ですから、時々は何帳越しくらいのことでお話をいたします。琴がいちばんお友だちらしゅうございます」

「それはいいことだよ。琴と詩と酒を三つの友というのだよ。酒だけはお嬢さんの友だちにはいけないがね」

こんな冗談を源氏は言ったあとで、

「私にその女王さんの琴の音を聞かせないか。常陸の宮さんは、そうした音楽などのよくできた方らしいから、平凡な芸ではなからうと思われぬ」

と言った。

「そんなふうにお召してお聞きになります価値がございますか、どうか」

「思わせぶりをしないでいいじゃないか。このごろは朧月があるからね、そつと行ってみよう。君も家へ退つていてくれ」

源氏が熱心に言うので、大輔の命婦は迷惑になりそうなのを恐れながら、御所も御用のひまな時であったから、春の日永に退出をした。父の大輔は宮邸には住んでいないのである。その継母の家へ出入りすることをきらつて、命婦は祖父の宮家へ帰るのである。

源氏は言っていたように十六夜の月の朧ろに霞んだ夜に命婦を訪問した。

「困ります。こうした天気は決して音楽に適しませんのですもの」「まあいいから御殿へ行つて、ただ一声でいいからお弾かせしてく

れ。聞かれないで帰るのではあまりつまらないから」

と強いて望まれて、この貴公子を取り散らした自身の部屋へ置いて行くことを済まなく思いながら、命婦が寝殿へ行ってみると、まだ格子をおろさないで梅の花のおう庭を女王はながめていた。よいところであると命婦は心で思った。

「琴の音が聞かせていただけましたらと思うような夜分でございますから、部屋を出てまいりました。私はこちらへ寄せていただいています。いつも時間が少なくて、伺わせていただく間のないのが残念でなりません」

と言うと、

「あなたのような批評家がいれば手が出せない。御所に出ている人などに聞いてもらえる芸なものですか」

こう言いながらも、すぐに女王が琴を持って来させるのを見ると、命婦がかえってはつとした。源氏の聞いていることを思うからである。女王はほのかな爪音を立てて行った。源氏はおもしろく聞いていた。たいした深い芸ではないが、琴の音というものは他の楽器の持たない異国風な声であったから、聞きにくくは思わなかった。この邸は非常に荒れているが、こんな寂しい所に女王の身分を持っていて、大事がられた時代の名残もないような生活をするのでは、どんなに味気ないことが多かろう。昔の小説にもこんな背景の前によく佳人が現われてくるものなどと源氏は思って今から交渉の端緒を作ろうかとも考えたが、ぶしつけに思われることが恥ずかしくて座を立ちかねていた。

命婦は才気のある女であったから、名手の域に遠い人の音楽を長く源氏に聞かせておくことは女王の損になると思った。

「雲が出て月が見えないがちの晩でございますわね。今夜私のほうへ訪問してくださるお約束の方がございましたから、私がおりませんとわざと避けたようにも当たりますから、またゆるりと聞かせていただきます。お格子をおろして行きましょう」

命婦は琴を長く弾かせないで部屋へ帰った。

「あれだけでは聞かせてもらいがいもない。どの程度の名手なのかわからなくてつまらない」

源氏は女王に好感を持つらしく見えた。

「できるなら近いお座敷のほうへ案内して行ってくれて、よそながらでも女王さんの衣摺れの音のようなものを聞かせてくれないか」と言った。命婦は近づかせないで、よりよい想像をさせておきたかった。

「それはだめでございますよ。お気の毒なお暮らしをして、めいりこんでいらつしやる方に、男の方を御紹介することなどはできません」

と命婦の言うのが道理であるように源氏も思った。男女が思いがけなく会合して語り合うというような階級にははまらない、ともかくも貴女なんであるからと思ったのである。

「しかし、将来は交際ができるように私の話をしておいてくれ」

こう命婦に頼んでから、源氏はまた今夜をほかに約束した人があ
るのか帰って行こうとした。

「あまりにまじめ過ぎるからと陛下がよく困るようにおっしゃっていらつしやいますのが、私にはおかしくてならないことがおりおりございます。こんな浮気なお忍び姿を陛下は御覧になりませんからね」

と命婦が言うと、源氏は二足三足帰って来て、笑いながら言う。

「何を言うのだね。品行方正な人間でも言うように。これを浮気と言つたら、君の恋愛生活は何なのだ」

多情な女だと源氏が決めていて、おりおりこんなことを面と向かつて言われるのを命婦は恥ずかしく思つて何とも言わなかつた。

女暮らしの家の座敷の物音を聞きたいように思つて源氏は静かに庭へ出たのである。大部分は朽ちてしまつたあとの少し残つた透垣すいがきのからだか隠せるほどの蔭かげへ源氏が寄つて行くと、そこに以前から立っていた男がある。だれであろう女王に恋をする好色男があるのだと思つて、暗いほうへ隠れて立っていた。初めから庭にいたのは頭中将くさねのちゆうじやうなのである。今日けふも夕方御所を同時に退出しながら、源氏が左大臣家へも行かず、二条の院へも帰らないで、妙に途中で別れて行つたのを見た中将が、不審を起こして、自身のほうにも行く家があつたのを行かずに、源氏のあとについて来たのである。わざと貧弱な馬に乗つて狩衣姿かりぎぬをしていた中将に源氏は気づかなかつたのであつたが、こんな思いがけない邸やしきへはいつたのがまた中将の不審を倍にして、立ち去ることができなかつたところに、琴を弾く音ねがしてきたので、それに心も惹ひかれて庭に立ちながら、一方では源氏の出て来るのを待つていた。源氏はまだだれであるかに気がつかないで、顔を見られまいとして抜き足をして庭を離れようとする時にその男が近づいて来て言った。

「私をお撒まきになつたのが恨めしくて、こうしてお送りしてきたのですよ。

「#ここから2字下げ」

もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいざよひの月」

「#ここで字下げ終わり」

さも秘密を見現わしたように得意になって言うのが腹だたしかつたが、源氏は頭中将であったことに安心もされ、おかしくなりもした。

「そんな失敬なことをする者はあなたのほかにありませんよ」

憎らしがりながらまた言った。

「#ここから1字下げ」

「里分かぬかげを見れども行く月のいるさの山を誰かたづぬる

「#ここで字下げ終わり」

こんなふうに私が始終あなたについて歩いたらお困りになるでしょう、あなたはね」

「しかし、恋の成功はよい隨身をつれて行くか行かないかで決まることもあるでしょう。これからはごいっしょにおつれください。お一人歩きは危険ですよ」

頭中将はこんなことを言った。頭中将に得意がられていることを源氏は残念にも思ったが、あの撫子の女が自身のものになったことを中将が知らないことだけが内心には誇らしかった。源氏にも頭中将にも第二の行く先は決まっていたが、戯談を言い合っていることがおもしろくて、別れられずに一つの車に乗って、朧月夜の暗くなつた時分に左大臣家に来た。前駆に声も立てさせずに、そつとはいって、人の来ない廊の部屋で直衣に着かえなどしてから、素知らぬ

顔で、今来たように笛を吹き合いながら源氏の住んでいるほうへ来たのである。その音ねに促されたように左大臣は高麗こまぶえ笛を持って来て源氏へ贈った。その笛も源氏は得意であつたからおもしろく吹いた。合奏のために琴も持ち出されて女房の中でも音楽のできる人たちが選ばれて弾ひき手になつた。琵琶びわが上手じょうずである中将という女房は、頭中将に恋をされながら、それにはなびかないで、このたまさかにしか来ない源氏の心にはたやすく従つてしまつた女であつて、源氏との関係がすぐに知れて、このごろは大臣の夫人の内親王様も中将を快くお思いにならなくなつたのに悲観して、今日も仲間から離れて物蔭ものかげで横になつていた。源氏を見る機会のない所へ行つてしまつたのもさすがに心細くて、煩悶はんもんをしているのである。楽音の中にいながら二人の貴公子はあの荒れ邸の琴の音を思い出していた。ひどくなつた家もおもしろいもののようにばかり思われて、空想がさまざまに伸びていく。可憐かれんな美人が、あの家の中で埋没されたようになつて暮らしていたあとで、発見者の自分の情人にその人がなつたら、自分はまたその人の愛におぼれてしまふかもしれない。それで方々で物議が起こることになつたらまたちよつと自分は困るであろうなどとまで頭中将は思った。源氏が決してただの気持ちであの邸を訪問したのではないことだけは確かである。先を越すのはこの人であるかもしれないと思うと、頭中将は口惜くちおしくて、自身の期待あぶなが危あぶかしいようにも思われた。

それからのち二人の貴公子が常陸ひたちの宮の姫君へ手紙を送つたことは想像するにかたくない。しかしどちらへも返事は来ない。それが気になつて頭中将は、いやな態度だ、あんな家に住んでいるような人は物の哀れに感じやすくなつていねばならないはずだ、自然の木

や草や空のながめにも心と一致するものを見いだしておもしろい手紙を書いてよこすようではなければならぬ、いくら自尊心のあるのはよいものでも、こんなに返事をよこさない女には反感が起ころなごと思つていらいらとするのだつた。仲のよい友だちであつたから頭中将は隠し立てもせずその話を源氏にするのである。

「常陸の宮の返事が来ますか、私もちよつとした手紙をやつたのだけれど何にも言つて来ない。侮辱された形ですね」

自分の想像したとおりだ、頭中将はもう手紙を送つてゐるのだと思つと源氏はおかしかつた。

「返事を格別見たいと思わない女だからですか、来たか来なかつたかよく覚えていませんよ」

源氏は中将をじらす気なのである。返事の来ないことは同じなのである。中将は、そこへ行きこちらへは来ないのだと口惜くちおしがつた。源氏はたいした執心を持つのでない女の冷淡な態度に厭いや気がして捨て置く氣になつていたが、頭中将の話聞いてからは、口上くちじやう手な中将のほうに女は取られてしまふであろう、女はそれで好い氣になつて、初めの求婚者のことなどは、それは止よしてしまつたと冷ややかに自分を見くびるであろうと思つと、あるもどかしさを覚えたのである。それから大輔たゆうの命婦みよづにまじめに仲介を頼んだ。

「いくら手紙をやつても冷淡なんだ。私がただ一時的な浮う氣わで、そつしたことを言つてゐるのだと解釈してゐるのだね。私は女に対して薄情なことのできる男じゃない。いつも相手のほうが氣短に私からそむいて行くことから悪い結果にもなつて、結局私が捨ててしまつたように言われるのだよ。孤独の人で、親や兄弟が夫婦の中を干渉するようならささいこともない、氣楽な妻が得られたら、私は十

分に愛してやることができるのだ」

「いいえ、そんな、あなた様が十分にお愛しになるようなお相手にあの方はなられそうもない気がします。非常に内気で、おとなしい点はちょっと珍らしいほどの方ですが」

命婦は自分の知っているだけのことを源氏に話した。

「貴婦人らしい聡明そうめいさなどが見られないのだろう、いいのだよ、無邪気でおっとりとしていれば私は好きだ」

命婦に逢あえばいつもこんなふうに源氏は言っていた。その後源氏は癩病わらわやみになったり、病気がなおると少年時代からの苦しい恋の悩みに世の中に忘れてしまうほどに物思いをしたりして、この年の春と夏とが過ぎてしまった。秋になって、夕顔の五条の家で聞いた砧きぬたの耳についてうるさかったことさえ恋しく源氏に思い出されるころ、源氏はしばしば常陸の宮の女王へ手紙を送った。返事のないことは秋の今も初めに変わらなかつた。あまりに人並みはずれな態度をとる女だと思つと、負けたくないというような意地も出て、命婦へ積極的に取り持ちを迫ることが多くなつた。

「どんなふうに思っているのだろう。私はまだこんな態度を取り続ける女に出逢つたことはないよ」

不快そうに源氏の言うのを聞いて命婦も気の毒がつた。

「私は格別この御縁はよろしくございませんとも言つておりませんよ。ただあまり内気過ぎる方で男の方との交渉に手が出ないのでしようと、お返事の来ないことを私はそう解釈しております」

「それがまちがつているじゃないか。とても年が若いとか、また親がいて自分の意志では何もできないというような人たちこそ、それがもつともだとは言えるが、あんな一人ぼつちの心細い生活をして

いる人というものは、異性の友だちを作つて、それから優しい慰めを言われたり、自分のことも人に聞かせたりするのがよいことだと思つがね。私はもう面倒な結婚なんかどうでもいい。あの古い家を訪問して、気の毒なような荒れた縁側へ上がつて話すだけのことをさせてほしいよ。あの人がよいと言わなくても、ともかくも私をあの人に接近させるようにしてくれないか。気短になつて取り返しのならないような行為に出るようなことは断じてないだろう」

などと源氏は言うのであつた。女の噂を関心も持たないように聞いていながら、その中のある者に特別な興味を持つような癖が源氏にできたころ、源氏の宿直所のつれづれな夜話に、命婦が何の気なしに語つた常陸の宮の女王のことを始終こんなふうに責任のあるものように言われるのを命婦は迷惑に思つていた。女王の様子を思つてみると、それが似つかわしいこととは仮にも思えないのであつたから、よけいな媒介役を勤めて、結局女王を不幸にしてしまうのではないかとも思えたが、源氏がきわめてまじめに言い出していることであつたから、同意のできない理由もまたない気がした。常陸の太守の宮が御在世中でも古い御代の残りの宮様として世間は扱つて、御生活も豊かでなかつた。お訪ねする人などはその時代から皆無といつてよい状態だつたのだから、今になつてはまして草深い女王の邸へ出入りしようとする者はなかつた。その家へ光源氏の手紙が来たのであるから、女房らは一陽来復の夢を作つて、女王に返事を書くことも勧めたが、世間のあらゆる内気の人の中の最も引つ込み思案の女王は、手紙に語られる源氏の心に触れてみる気も何もなかつたのである。命婦はそんなに源氏の望むことなら、自分が手引きして物越しにお逢わせしよう、お氣に入らなければそれきりにす

ればいいし、また縁があつて情人関係になつても、それを干渉して止める人は宮家にないわけであるなどと、命婦自身が恋愛を軽いものとして考えつけている若い心に思つて、女王の兄にあたる自身の父にも話しておこうとはしなかつた。

八月の二十日過ぎである。八、九時にもまだ月が出ずに星だけが白く見える夜、古い邸やしきの松風が心細くて、父宮のことなどを言い出して、女王は命婦といつて泣いたりしていた。源氏に訪ねて来させるのによいおりであると思つた命婦のしらせが行つたか、この春のようにそつと源氏が出て来た。その時分になつて昇のぼつた月の光が、古い庭をいつそう荒涼たるものに見せるのを寂しい気持ちで女王がながめてしていると命婦が勧めて琴を弾かせた。まずくはない、もう少し近代的の光沢が添つたらいいだろうなどと、ひそかなことを企てて心の落ち着かぬ命婦は思つていた。人のあまりいない家であつたから源氏は気楽に中へはいつて命婦を呼ばせた。命婦ははじめて知つて驚くというふうに見せて、

「いらつしたお客様つて、それは源氏の君なんですよ。始終御交際をする紹介役をするようにつてやかましく言つていらつしやるのですが、そんなことは私にだめでございますつてお断わりばかりしておりますの、そしたら自分で直接お話しに行くつてよくおつしやるのです。お帰しはできませんわね。ぶしつけをなさるような方なら何ですが、そんな方じゃございません。物越しでお話しておあげになることだけを許してあげてくださいませね」

と言うと女王は非常に恥ずかしがつて、
「私はお話のしかたも知らないのだから」

と言いながら部屋の奥のほうへ膝行いざつて行くのがういういしく見

えた。命婦は笑いながら、

「あまりに子供らしくいらっしやいます。どんな貴婦人といひましても、親が十分に保護していただく間だけは子供らしくしていでよろしくても、こんな寂しいお暮らしをしていらっしやりながら、あまりあなたのように羞恥しゅうちの觀念の強いことはまちがっています」

こんな忠告をした。人の言うことにそむかれない内気な性質の女王は、

「返辞をしないでただ聞いてだけいてもいいというのなら、格子でもおろしてここにいていい」

と言った。

「縁側におすわらせすることなどは失礼でございます。無理なことは決してなさいませんでしよう」

体裁よく言つて、次の室との間の襖子からかみを命婦自身が確かに閉めて、隣室へ源氏の座の用意をしたのである。源氏は少し恥ずかしい気がした。人としてはじめて逢あう女にはどんなことを言つてよいかを知らないが、命婦が世話をしてくれるであろうと決めて座についた。

乳母のような役をする老女たちは部屋へはいつて宵よ惑いの目を閉じているころである。若い二、三人の女房は有名な源氏の君の来訪に心をときめかせていた。よい服に着かえさせられながら女王自身は何の心の動揺もなさそうであつた。男はもとよりの美貌ひぼうを目だたぬように化粧して、今夜はことさら艶えんに見えた。美の価値のわかる人などのいない所だのにと命婦は気の毒に思った。命婦には女王がただおおようにしているに相違ない点だけが安心だと思われた。会話に出過ぎた失策をしそうには見えないからである。自分の責めのがれにしたことで、気の毒な女王をいっそう不幸にしないだろうかと

いう不安はもっていた。源氏は相手の身柄を尊敬している心から利巧ぶりを見せる洒落気しゃれぎの多い女よりも、気の抜けたほどおおうなこんな人のほうが感じがよいと思っていたが、襖子の向こうで、女房たちに勧められて少し座を進めた時に、かすかな衣被香えびこうのにおいがしたので、自分の想像はまちがっていなかったと思ひ、長い間思ひ続けた恋であったことなどを上手うまいに話しても、手紙の返事をしない人からはまた口ずからの返辞を受け取ることができなかつた。「どうすればいいのです」

と源氏は歎息たんそくした。

「#ここから1字下げ」

「いくそ度君たびが沈黙しじまに負けぬらん物ない云いひそと云はぬ頼みに

「#ここで字下げ終わり」

言いきつてくださいませんか。私の恋を受けてくださるのか、受けてくださらないかを」

女王の乳母の娘で侍従という気さくな若い女房が、見かねて、女王のそばへ寄って女王らしくして言った。

「#ここから2字下げ」

鐘つきとどめんことはさすがにて答へまうきぞかつはあやなき

「#ここで字下げ終わり」

若々しい声で、重々しくものの言えない人が代人でないようにして言ったので、貴女きじよとしては甘ったれた態度だと源氏は思ったが、

はじめて相手にものを言わせたことがうれしくて、

「こちらが何とも言えなくなります、

「#ここから2字下げ」

云はぬをも云ふに勝ると知りながら押しこめたるは苦しかりけり」

「#ここで字下げ終わり」

いろいろと、それは実質のあることではなくても、誘惑的にもまじめにも源氏は語り続けたが、あの歌きりほかの返辞はなかった、こんな態度を男にとるのは特別な考えをもっている人なんだろうかと思うと、源氏は自身が軽侮されているような口惜しい気がした。その時に源氏は女王の室のほうへ襖子をあけてはいったのである。命婦はうかうかと油断をさせられたことで女王を気の毒に思うと、そこにもおられなくて、そしらぬふうをして自身の部屋のほうへ帰った。侍従などという若い女房は光源氏ということに好意を持っていて、主人をかばうことにもたいして力が出なかったのである。こんなふうには何の心の用意もなく結婚してしまう女王に同情しているばかりであった。女王はただ羞恥の中にうずもれていた。源氏は結婚の初めのうちはこんなふうである女がよい、独身で長く大事がられてきた女はこんなものであるうと酌量して思いながらも、手探りに知った女の様子に腑に落ちぬところもあるようだった。愛情が新しく湧いてくるようなことは少しもなかった。歎息しながらまだ暁方に帰ろうと源氏はした。命婦はどうなったかと一夜じゅう心配で眠れなくて、この時の物音も知っていたが、黙っているほうがよいと思つて、「お送りいたしましょう」と挨拶の声も立てなかった。

源氏は静かに門を出て行ったのである。

二条の院へ帰って、源氏は又寝をしながら、何事も空想したようにはいかないものであると思つて、ただ身分が並み並みの人でないために、一度きりの関係で退いてしまうような態度の取れない点を煩悶するのだった。そんな所へ頭中将が訪問してきた。

「たいへんな朝寝なんですね。なんだかわけがありそうだ」と言われて源氏は起き上がった。

「気楽な独り寝なものですから、いい気になって寝坊をしてみましたよ。御所からですか」

「そうです。まだ家へ帰っていないのですよ。朱雀院の行幸の日の楽の役と舞の役の人選が今日あるのだそうですから、大臣にも相談しようと思つて退出したのです。そしてまたすぐに御所へ帰ります」

頭中将は忙しそうである。

「じゃあいつしよに行きましょう」

こう言つて、源氏は粥や強飯の朝食を客とともに済ませた。源氏の車も用意されてあつたが二人は一つの車に乗つたのである。あなたは眠そうだなと中将は言つて、

「私に隠すような秘密をあなたはたくさん持つていそうだ」とも恨んでいた。

その日御所ではいろんな決定事項が多くて源氏も終日宮中で暮らした。新郎はその翌朝に早く手紙を送り、第二夜からの訪問を忠実に続けることが一般の礼儀であるから、自身で出かけられないまでも、せめて手紙を送つてやりたいと源氏は思つていたが、閑暇を得て夕方に使いを出すことができた。雨が降っていた。こんな夜にち

よつとでも行ってみようというほどにも源氏の心を惹くものは昨夜の新婦に見いだせなかった。

あちらでは時刻を計って待っていたが源氏は来ない。命婦も女王をいたましく思っていた。女王自身はただ恥ずかしく思っているだけで、今朝来るべきはずの手紙が夜になってまで来ないことが何の苦勞にもならなかった。

「#ここから2字下げ」

夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬにいぶせさ添ふる宵の雨かな

「#ここから1字下げ」

この晴れ間をどんなに私は待ち遠しく思うことでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

と源氏の手紙にはあった。来そうもない様子に女房たちは悲観した。返事だけはぜひお書きになるようにと勧めても、まだ昨夜から頭を混乱させている女王は、形式的に言えばいいこんな時の返歌も作れない。夜が更けてしまうからと侍従が気をもんで代作した。

「#ここから2字下げ」

晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ同じ心にながめせずとも

「#ここで字下げ終わり」

書くことだけは自身でなければならぬと皆から言われて、紫色の紙であるが、古いので灰色がかったのへ、字はさすがに力のある字で書いた。中古の書風である。一所も散らしては書かず上下そろ

えて書かれてあつた。

失望して源氏は手紙を手から捨てた。今夜自分の行かないことで女はさぞ煩悶はんもんをしているであろうとそんな情景を心に描いてみる源氏も煩悶はんもんはしているのだった。けれども今さらしかたのないことである、いつまでも捨てずに愛してやろうと、源氏は結論としてこう思ったのであるが、それを知らない常陸ひたちの宮家の人々はだれもだれも暗い気持ちから救われなかつた。

夜になってから退出する左大臣に伴われて源氏はその家へ行った。行幸の日を楽しみにして、若い公達きんたちが集まるとその話が出る。舞曲の勉強をするのが仕事のようになつていたころであつたから、どこの家でも楽器の音をさせているのである。左大臣の子息たちも、平生の楽器のほかの大筆おおひちりき、尺八などの、大きいものから太い声をたてる物も混ぜて、大がかりの合奏の稽古けいこをしていた。太鼓までも高欄の所へころがしてきて、そうした役はせぬことになつている公達が自身でたたいたりもしていた。こんなことで源氏も毎日一閑ひま暇がない。心から恋しい人の所へ行く時間を盗むことはできても、常陸の宮へ行つてよい時間はなくて九月が終わつてしまった。それでいよいよ行幸の日が近づいて来たわけで、試楽とか何とか大騒ぎするころに命婦みよつぶは宮中へ出仕した。

「どうしているだろう」

源氏は不幸な相手をあわれむ心を顔に見せていた。大輔たゆうの命婦はいろいろと近ごろの様子を話した。

「あまりに御冷淡です。その方でなくても見ているものがこれではたまりません」

泣き出しそうにまでなつていた。悪い感じも源氏にとめさせない

で、きれいに結末をつけようと願っていたこの女の意志も尊重しなかつたことで、どんなに恨んでいるだろうとさえ源氏は思った。またあの人自身は例の無口なままで物思いを続けていることであろうと想像されてかわいそうであつた。

「とても忙しいのだよ。恨むのは無理だ」

歎息たんそくをして、それから、

「こちらがどう思っても感受性の乏しい人だからね。懲らそうとも思つて」

こう言つて源氏は微笑を見せた。若い美しいこの源氏の顔を見ると、命婦も自身までが笑顔えがおになつていく気がした。だれからも恋の恨みを負わされる青春を持つていらつしやるのだ、女に同情が薄くて我儘わがままをするのも道理なのだと思つた。この行幸準備の用が少なくなつてから時々源氏は常陸の宮へ通つた。そのうち若紫を二条の院へ迎えたのであつたから、源氏は小女王を愛することに没頭していて、六条の貴女に逢うことも少なくなつていた。人の所へ通つて行くことは始終心になげながらもおつくうにばかり思えた。

常陸の女王のまだ顔も見せない深い羞恥ちゆうしを取りのけてみようとも格別しないで時がたつた。あるいは源氏がこの人を躡あわに見た刹那せつなから好きになる可能性があるとと言えるのである。手探りに不審な点があるのか、この人の顔を一度だけ見たいと思ふこともあつたが、引つ込みのつかぬ幻滅を味わわされることも思うと不安だつた。だれも人の来ることを思わない、まだ深夜にならぬ時刻に源氏はそつと行つて、格子の間からのぞいて見た。けれど姫君はそんな所から見えるものでもなかつた。几帳きちょうなどは非常に古びた物であるが、昔作られたままに皆きちんとかかつていた。どこからか隙見すきみができる

かと源氏は縁側をあちこちと歩いたが、隅の部屋にだけいる人が見えた。四、五人の女房である。食事台、食器、これらは支那製のものであるが、古くきたなくなつて見る影もない。女王の部屋から下げたそんなものを置いて、晩の食事をこの人たちはしているのである。皆寒そうであつた。白い服の何ともいえないほど煤けてきたなかつた物の上に、堅気らしく裳の形をした物を後ろにくくりつけている。しかも古風に髪を櫛で後ろへ押えた額のかつこうなどを見ると、内教坊（宮中の神前奉仕の女房が音楽の練習をしている所）や内侍所ではこんなかつこうをした者がいると思えて源氏はおかしかつた。こんなふうを人間に仕える女房もしているものとはこれまで源氏は知らなんだ。

「まあ寒い年。長生きをしているとこんな冬にも逢いますよ」
 そう言つて泣く者もある。

「宮様がおいになつた時代に、なぜ私は心細いお家だなどと思つたのだらう。その時よりもまたどれだけひどくなつたかもしれないのに、やっぱり私らは我慢して御奉公している」

その女は両一袖をばたばたといわせて、今にも空中へ飛び上がつてしまふように慄えている。生活についての剥き出しな、きまりの悪くなるような話ばかりするので、聞いていて恥ずかしくなつた源氏は、そこから退いて、今来たように格子をたたいたのであつた。

「さあ、さあ」

などと言つて、灯を明るくして、格子を上げて源氏を迎えた。侍従は一方で齋院の女房を勤めていたからこのごろは来ていないのである。それがいないのでいっそうすべての調子が野暮らしかつた。先刻老人たちの愁えていた雪がますます大降りになつてきた。すこ

い空の下を暴風が吹いて、灯の消えた時にも点け直そうとする者はない。某なにがしの院ものけの物怪の出た夜が源氏に思い出されるのである。荒唐のしかたはそれに劣らない家であつても、室の狭いのと、人間があの時よりは多い点だけを慰めに思えば思えるのであるが、ものすこい夜で、不安な思いに絶えず目がさめた。こんなことはかえつて女への愛を深くさせるものなのであるが、心を惹ひきつける何物をも持たない相手に源氏は失望を覚えるばかりであつた。やっと夜が明けて行きそうであつたから、源氏は自身で格子を上げて、近い庭の雪の景色けしきを見た。人の踏み開いた跡もなく、遠い所まで白く寂しく雪が続いていた。今ここから出て行ってしまふのもかわいそうに思われて言った。

「夜明けのおもしろい空の色でもいっしょにおながめなさい。いつまでもよそよそしくしていらつしやるのが苦しくてならない」

まだ空はほの暗いのであるが、積もつた雪の光で常よりも源氏の顔は若々しく美しく見えた。老いた女房たちは目の楽しみを与えられて幸福であつた。

「さあ早くお出なさいまし、そんなにいらつしやるのはいけません。素直になさるのがいいのでございますよ」

などと注意をすると、この極端に内気な人にも、人の言うことは何でもそむけないところがあつて、姿を繕いながら膝いざ行つて出た。

源氏はその方は見ないようにして雪をながめるふうはしながらも横目は使わないのでもない。どうだろう、この人から美しい所を発見することができたらうれしかろうと源氏の思うのは無理な望みである。すわつた背中の線の長く伸びていることが第一に目へ映つた。はつとした。その次に並みはずれなものは鼻だつた。注意がそれに

引かれる。普賢菩薩ふげんぼさつの乗った象という獣が思われるのである。高く長くて、先のほうが下に垂たれた形のそこだけが赤かった。それがいちばんひどい容貌かみじょうの欠陥だと見える。顔色は雪以上に白くて青みがあった。額かぶが腫はれたように高いのであるが、それでいて下方の長い顔に見えるというのは、全体がよくよく長い顔であることが思われる。瘦やせぎすなことはかわいそうなくらいで、肩のあたりなどは痛かろうと思われるほど骨が着物を持ち上げていた。なぜすっかり見ってしまったのであろうと後悔をしながらも源氏は、あまりに普通でない顔に気を取られていた。頭の形と、髪のかかりぐあいだけは、平生美人だと思っている人にもあまり劣っていないようで、裾すそが袿つちまきの裾をいっぱいにした余りがまだ一尺くらいも外へはずれていた。その女王の服装までも言うのはあまりにはしたくないようではあるが、昔の小説にも女の着ている物のことは真先まっさきに語られるものであるから書いてもよいかと思う。桃色の変色してしまったのを重ねた上に、何色かの真黒まっくろに見える袿つちまき、黒貂くろぎの毛の香のする皮衣を着ていた。毛皮は古風な貴族らしい着用品ではあるが、若い女に似合うはずのものでなく、ただ目だって異様だった。しかしながらこの服装でなければ寒気が堪えられぬと思える顔であるのを源氏は気の毒に思ってしまった。何ともものが言えない。相手と同じように無言の人に自身までがなった気がしたが、この人が初めからものを言わなかったわけも明らかにしようとして何かと尋ねかけた。袖そでで深く口を被おうているのもたまらなく野暮やぼな形である。自然一肱ひじが張られて練って歩く儀式官の袖が思われた。さすがに笑顔えがおになった女の顔は品も何もない醜さを現わしていた。源氏は長く見ていることがかわいそうになつて、思ったよりも早く帰って行こうとした。

「どなたもお世話をする人のないあなたと知って結婚した私には何も御遠慮なんかかならないで、必要なものがあつたら言ってくださいと私は満足しますよ。私を信じてくださらないから恨めしいのですよ」

などと、早く出て行く口実をさえ作って、

「#ここから2字下げ」

朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつららの結ばほるらん

「#ここで字下げ終わり」

と言ってみても、「むむ」と口の中で笑っただけで、返歌の出そうにない様子が気の毒なので、源氏はそこを出て行ってしまった。

中門の車寄せの所が曲がってよろよろになっていた。夜と朝とは荒廃の度が違つて見えるものである、どこもかしこも目に見える物はみじめでたまらない姿ばかりであるのに、松の木へだけは暖かそうに雪が積もっていた。田舎いなかで見るとような身にしむ景色けしきであることを源氏は感じながら、いつか品定めに葎いぐさの門の中ということを入言ったが、これはそれに相当する家であろう。ほんとうにあの人たちの言ったように、こんな家に可憐かれんな恋人を置いて、いつもその人を思っていたらおもしろいことであろう、自分の、思つてならぬ人と思う苦しみはそれによつて慰められるであろうかと思つて、これは詩的な境遇にいながらなんらの男を引きつける力のない女であると断案を下しながらも、自分以外の男はあの人を終世変わりない妻として置くことはできまい、自分があの人おつとの良人になったのも、気がかりにお思いになつたはずの父宮の靈魂が導いて行つたことであ

ろうと思つたのであつた。うずめられている橋たかはなの木の雪を隨身に払
 わせた時、横の松の木がうらやましそうに自力で起き上がつて、さ
 つと雪をこぼした。たいした教養はなくてもこんな時に風流を言葉
 で言いかわす人がせめて一人でもいないのだらうかと源氏は思つた。
 車の通れる門はまだ開けてなかつたので、供の者が鍵かぎを借りに行く
 と、非常な老人としよりの召使が出て来た。そのあとから、娘とも孫とも見
 える、子供と大人の間くらいの女が、着物は雪との対照であくまで
 きたなく汚よごれて見えるようなのを着て、寒そうに何か小さい物に火
 を入れて袖そでの中で持ちながらついて来た。雪の中の門が老人の手で
 開あかぬのを見てその娘が助けた。なかなか開かない。源氏の供の者
 が手伝つたのではじめて扉が左右に開かれた。

「#ここから2字下げ」

ふりにける頭かしらの雪を見る人も劣らずぬらす朝の袖かな

「#ここで字下げ終わり」

と歌い、また、「霰さんせつ雪はくふん白ぶん紛ふん、幼者形不蔽へえうしやはかたちを

おおはず」と吟じていたが、白楽天のその詩の終わりの句に鼻の
 ことが言つてあるのを思つて源氏は微笑された。頭中将があ自分の
 の新婦を見たらどんな批評をすることだらう、何の譬ひゆ喩ゆを用いて言
 うだらう、自分の行動に目を離さない人であるから、そのうちこの
 関係に気がつくであろうと思つたと源氏は救われがたい気がした。女
 王が普通の容貌きりようの女であつたら、源氏はいつでもその人から離れて
 行つてもよかつたであらうが、醜みにくい姿をはつきりと見た時から、か
 えつてあわれむ心が強くなつて、良人おとこらしく、物質的の補助なども

よくしてやるようになった。黒貂くろびるぎの毛皮でない絹、綾あや、綿、老いた女たちの着料になる物、門番の老人に与える物までも贈ったのである。こんなことは自尊心のある女には堪えがたいことに違いないが常陸ひたちの宮の女王はそれを素直に喜んで受けるのに源氏は安心して、せめてそうした世話をよくしてやりたいという気になり、生活費などものちには与えた。

灯影ほかげで見た空蝉うつせみの横顔が美しいものではなかったが、姿態の優美さは十分の魅力があつた。常陸ひたちの宮の姫君はそれより品の悪いはずもない身分の人ではないか、そんなことを思うと上品であるということは身柄によらぬことがわかる。男に対する洗練された態度、正義の観念の強さ、ついには負けて退却をしたなどと源氏は何かのこにつけて空蝉が思い出された。

その年の暮れの押しつまったところに、源氏の御所の宿直所このいどころへ大輔の命婦みよつぶが来た。源氏は髪を梳すかせたりする用事をさせるのには、恋愛関係などのない女で、しかも戯談たひひごの言えるような女を選んで、この人などがよくその役に当たるのである。呼ばれない時でも大輔はそうした心安さからよく桐壺きりつぼへ来た。

「変なことがあるのでございますがね。申し上げないでおりますのも意地が悪いようにとられることですし、困ってしまつて上がったのでございます」

微笑ほほえみを見せながらそのあとを大輔は言わない。

「なんだろう。私には何も隠すことなんかない君だと思っているのに」

「いいえ、私自身のことではございましたら、もつたないことです。あなたがあなた様に御相談に上がって申し上げます。この話だけは困つて

しまいました」

なお言おうとしないのを、源氏は例のようにこの女がまた思わせぶりを始めたと見ていた。

「常陸の宮から参ったのでございます」

こう言つて命婦は手紙を出した。

「じゃ何も君が隠さねばならぬわけもないじゃないか」

こうは言つたが、受け取つた源氏は当惑した。もう古くて厚ぼつたくなつた檀紙たんしに薰香くんこうのにおいだけはよくつけてあつた。ともかくも手紙の体ていはなしているのである。歌もある。

「#ここから2字下げ」

唐衣君からころもが心のつらければ袂たもとはかくぞそばちつつのみ

「#ここで字下げ終わり」

何のことかと思つていると、おおげさな包みの衣装箱いしょうばうを命婦は前へ出した。

「これがきまり悪くなくてきまりの悪いことつてございませんでしよう。お正月のお召めしにというつもりでわざわざおつかわしになつたようでございますから、お返しする勇氣も私にございません。私の所へ置いておきましても先様の志を無視することになるでしようから、とにかくお目にかかましてから処分をいたすことにしようと思つたのでございます」

「君の所へ留めて置かれたらたいへんだよ。着物の世話をしてくれる家族もないのだからね、御親切をありがたく受けるよ」

とは言つたが、もう戯談じぎだんも口から出なかつた。それにしてもまず

い歌である。これは自作に違いない、侍従がおれば筆を入れるところなのだが、そのほかには先生はないのだからと思うと、その人の歌作に苦心をする様子が想像されておかしくて、

「もつたいない貴婦人と言わなければならぬのかもしれない」

と言いながら源氏は微笑して手紙と贈り物の箱をながめていた。

命婦は真赤まっかになっていた。藤脂えんじの我慢のできないようないやな色に出た直衣のうしで、裏も野暮やぼに濃い、思いきり下品なその端々が外から見えているのである。悪感を覚えた源氏が、女の手紙の上へ無駄むだ書きをするようにして書いているのを命婦が横目で見てみると、

「#ここから2字下げ」

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花すあつむはなを袖そでに触れけん

「#ここで字下げ終わり」

色濃き花と見しかども、とも読まれた。花という字にわけがありそうだと、月のさし込んだ夜などに時々見た女王の顔を命婦は思い出して、源氏のいたずら書きをひどいと思いながらもしまいにはおかしくなった。

「#ここから1字下げ」

「くれなゐのひとはな衣いうすくともひたすら朽たす名をし立てずば

「#ここで字下げ終わり」

その我慢も人生の勤めでございますよ」

理解があるらしくこんなことを言っている命婦もたいした女では

ないが、せめてこれだけの才分でもあの人になればよかったと源氏は残念な気がした。身分が身分である、自分から捨てられたというような気の毒な名は立てさせたくないと思うのが源氏の真意だった。ここへ伺候して来る人の足音がしたので、

「これを隠そうかね。男はこんな真似まねも時々しなくてはならないのかね」

源氏はいまいましたそうに言った。なぜお目にかけたらう、自分までが浅薄な人間に思われるだけだったと恥ずかしくなり命婦はそつと去ってしまった。

翌日命婦が清涼殿に出ていると、その台盤所だいばんしょを源氏がのぞいて、「さあ返事だよ。どうも晴れがましくて堅くなってしまったよ」

と手紙を投げた。おおぜいいいた女官たちは源氏の手紙の内容をいろいろに想像した。「たたらめの花のごと、三笠みかさの山の少女をとめをば棄すてて」という歌詞を歌いながら源氏は行ってしまった。また赤い花の歌であると思うと、命婦はおかしくなって笑っていた。理由を知らない女房らは口々に、

「なぜひとり笑いをしていらつしやるの」と言った。

「いいえ寒い霜の朝にね、『たたらめの花のごと搔練かいら好むや』という歌のように、赤くなった鼻を紛らすように赤い搔練を着ていたのをいつか見つかったのでしょ」

と大輔の命婦が言うと、

「わざわざあんな歌をお歌いになるほど赤い鼻の人もここにはいないでしょう。左近さこんの命婦さんか肥後ひごの采女うねめがいつしよだったのですよ、その時は」

などと、その人たちは源氏の謎の意味に自身らが関係のあるようにもないようにも言って騒いでいた。

命婦が持たせてよこした源氏の返書を、常陸の宮では、女房が集まって大騒ぎして読んだ。

「#ここから2字下げ」

逢はぬ夜を隔つる中の衣手に重ねていとど身も沁みよとや

「#ここで字下げ終わり」

ただ白い紙へ無造作に書いてあるのが非常に美しい。

三十日の夕方に宮家から贈った衣箱の中へ、源氏が他から贈られた白い小袖の一重ね、赤紫の織物の上衣、そのほかにも山吹色とかいろいろな物を入れたのを命婦が持たせてよこした。

「こちらでお作りになったのがよい色じゃなかったというあてつけの意味があるのではないでしょうか」

と一人の女房が言うように、だれも常識で考えてそうとれるのであるが、

「でもあれだって赤くて、重々しいできばえでしたよ。まさかこちらの好意がむだになるということはないはずですよ」

老いた女どもはそう決めてしまった。

「お歌だって、こちらのは意味が強く徹底しておできになっていましたよ。御返歌は技巧が勝ち過ぎてますね」

これもその連中の言うことである。未摘花も大苦心をした結晶であつたから、自作を紙に書いておいた。

元三日が過ぎてまた今年は今踏歌であちらこちらと若い公達が歌

舞をしてまわる騒ぎの中でも、寂しい常陸の宮を思いやっていた源氏は、七日の白馬あおうまの節会せちえが済んでから、お常御殿を下がって、桐壺きりつぼで泊まるふうを見せながら夜がふけてから末摘花の所へ来た。これまでに変わってこの家が普通の家らしくなっていた。女王の姿も少し女らしいところが出来たように思われた。すっかり見違えるほどの人にできればどんなに犠牲の払いがあるであろうなどとも源氏は思っていた。日の出るころまでもゆるりと翌朝はとどまっていたのである。東側の妻戸をあけると、そこから向こうへ続いた廊がこわれてしまっているので、すぐ戸口から日がはいつてきた。少しばかり積もっていた雪の光も混じって室内の物が皆よく見えた。源氏が直衣のうしを着たりするのをながめながら横向きに寝た末摘花の頭の形もその辺の畳にこぼれ出している髪も美しかった。この人の顔も美しく見うる時が至つたらと、こんなことを未来に望みながら格子を源氏が上げた。かつてこの人を残らず見てしまった雪の夜明けに後悔されたことも思い出して、ずっと上へは格子を押し上げずに、脇息きよつてくをそこへ寄せて支えにした。源氏が髪の乱れたのを直していると、非常に古くなった鏡台とか、支那しな出来の櫛箱くしばこ、搔かき上げの箱などを女房が運んで来た。さすがに普通の所にはちよつとそろえてあるものでもない男専用の髪道具もあるのを源氏はおもしろく思った。末摘花が現代人風になったと見えるのは三十日に贈られた衣箱の中物がすべてそのまま用いられているからであるとは源氏の気づかないところであった。よい模様であると思った袿かひにだけは見覚えのある気がした。

「春になったのですからね。今日は声も少しお聞かせなさいよ、驚つくいすよりも何よりもそれが待ち遠しかったのですよ」

と言うと、「さへづる春は」(百千鳥囀る春は物ごとに改まれどもわれぞ古り行く)とだけをやつと小声で言った。

「ありがとう。二年越しにやつと報いられた」

と笑つて、「忘れては夢かとぞ思ふ」という古歌を口にしながら帰つて行く源氏を見送るが、口を被うた袖の蔭から例の末摘花が赤く見えていた。見苦しいことであると歩きながら源氏は思った。

二条の院へ帰つて源氏の見た、半分だけ大人のような姿の若紫がかわいかった。紅い色の感じはこの人からも受け取れるが、こんなになつかしい紅もあるのだつたと見えた。無地の桜色の細長を柔らかに着なした人の無邪気な身の取りなしが美しくかわいいのである。昔風の祖母の好みでまだ染めてなかつた齒を黒くさせたことによつて、美しい眉も引き立って見えた。自分のすることであるがなぜつまらぬいろいろな女を情人に持つのだろう、こんなに可憐な人とはかりいないでと源氏は思いながらいつものように難遊びの仲間になった。紫の君は絵をかいて彩色したりもしていた。何をしても美しい性質がそれにあふれて見えるようである。源氏もいっしょに絵をかいた。髪の良い女をかいて、鼻に紅をつけて見た。絵でもそんなのは醜い。源氏はまた鏡に写る美しい自身の顔を見ながら、筆で鼻を赤く塗つてみると、どんな美貌にも赤い鼻の一つ混じっていることは見苦しく思われた。若紫が見て、おかしがって笑つた。

「私がこんな不具者になったらどうだろう」

と言うと、

「いやでしょうね」

と言つて、しみ込んでしまわないかと紫の君は心配していた。源氏は拭く真似だけをして見せて、

「どうしても白くならない。ばかなことをしましたね。陛下はどうおっしゃるだろう」

まじめな顔をして言うと、かわいそうでならないように同情して、そばへ寄って硯の水入れの水を檀紙にしませて、若紫が鼻の紅を拭く。

「平仲の話のように墨なんかをこの上に塗ってはいけませんよ。赤いほうはまだ我慢ができる」

こんなことをしてふざけている二人は若々しく美しい。

初春らしく霞を帯びた空の下に、いつ花を咲かせるのかとたよりなく思われる木の多い中に、梅だけが美しく花を持っていて特別なすぐれた木のように思われたが、緑の階隠しのそばの紅梅はことに早く咲く木であったから、枝がもう真赤に見えた。

「#ここから2字下げ」

くれなるの花ぞあやなく疎まるる梅の立枝はなつかしけれど

「#ここで字下げ終わり」

そんなことをだれが予期しようぞと源氏は歎息した。末摘花、若紫、こんな人たちはそれからどうなったか。

「#ここから2字下げ」

(訳注) この巻は「若紫」の巻と同年の一月から始まっている。

「#ここで字下げ終わり」

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：門田裕志

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

紅葉賀

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）未雀院すざく

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）自然なま一怠なまける

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」青海の波しづかなるさまを舞ふ若き心

「#地から3字上げ」は下に鳴れども （晶子）

朱雀院すざくの行幸は十月の十幾日ということになっていた。その日の歌舞の演奏はことに選よりすぐって行なわれるという評判であったから、後宮ごうきゅうの人々はそれが御所ごしよでなくて陪観ばいかんのできないことを残念がっていた。帝みかども藤壺ふじつぼの女御にょごにお見せになることのできないことを遺

憾おぼしめに思召して、当日と同じことを試楽として御前でやらせて御覽になつた。

源氏の中将は青海波せいがいばを舞つたのである。二人舞の相手は左大臣家の頭中将かみづなだつた。人よりはすぐれた風采ふうさいのこの公子も、源氏のそばで見れば桜に隣みよまつた深山の木というより言い方がない。夕方前のさつと明るくなつた日光のもとで青海波は舞われたのである。地をする音楽もことに冴さえて聞こえた。同じ舞ながらも面おもてづかい、足の踏み方などのみごとさに、ほかでも舞う青海波とは全然別な感じであつた。舞い手が歌うところなどは、極楽かりようびんがの迦陵頻伽かいらうびんがの声と聞かれた。源氏の舞の巧妙さに帝は御落涙あそばされた。陪席した高官たちも親王方も同様である。歌が終わつて袖そでが下へおろされると、待ち受けたようににぎわしく起こる楽音に舞い手の頬ほおが染まって常よりもまた光る君と見えた。東宮の母君の女御は舞い手の美しさを認識しながらも心が平らかでなかつたのである。

「神様があの美貌びぼうに見入つてどうかなさらないかと思われるね、気味の悪い」

こんなことを言うのを、若い女房などは情けなく思つて聞いた。

藤壺の宮は自分にやましい心がなかつたらまして美しく見える舞であろうと見ながらも夢のような気があそばされた。その夜の宿直とらいの女御はこの宮であつた。

「今日の試楽は青海波が王だつたね。どう思いましたか」

宮はお返辞がしにくくて、

「特別に結構でございました」

とだけ。

「もう一人のほうも悪くないようだつた。曲の意味の表現とか、手

づかいかかに貴公子の舞はよいところがある。専門家の名人は上手であつても、無邪気な艶えんな趣をよう見せないよ。こんなに試楽の日に皆見てしまつては朱雀院の紅葉もみじの日の興味がよほど薄くなると思つたが、あなたに見せたかつたからね」
など仰せになつた。

翌朝源氏は藤壺の宮へ手紙を送つた。

「#ここから1字下げ」

どう御覧くださいましたか。苦しい思いに心を乱しながらでした。

「#ここから2字下げ」

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや

「#ここから1字下げ」

失礼をお許してください。

「#ここで字下げ終わり」

とあつた。目にくらむほど美しかった昨日の舞を無視することがおできにならなかつたのか、宮はお書きになつた。

「#ここから2字下げ」

から人の袖たふることは遠たけれど起たち居ゐにつけて哀れとは見き

「#ここから1字下げ」

一観衆として。

「#ここで字下げ終わり」

たまさかに得た短い返事も、受けた源氏にとっては非常な幸福で

あつた。支那しなにおける青海波の曲の起源なども知って作られた歌であることから、もう十分にまことに后らしい見識を備えていられると源氏は微笑して、手紙を仏の経巻のようにひろに拡げて見入っていた。

行幸の日は親王方も公卿くぎょうもあるだけの人が帝の供奉くぶさをした。必ずあるはずの奏楽の船がこの日も池を漕こぎまわり、唐の曲も高麗こうらいの曲も舞われて盛んな宴えん賀がだった。試楽の日の源氏の舞い姿のあまりに美しかったことが魔障まじょうの耽美心たんびしんをそそりはしなかったかと帝は御心配になつて、寺々で経をお読ませになつたりしたことを聞く人も、御親子の情はそうあることと思つたが、東宮の母君の女御だけはあまりな御関心ぶりだとねたんでいた。楽人は殿上役人からも地下じげからもすぐれた技倆を認められている人たちだけが選り整えられたのである。参議が二人、それから左衛門督さゑもんのかみ、右衛門督が左右の楽を監督した。舞い手はめいめい今日まで良師を選んでした稽古けいこの成果をここで見せたわけである。四十人の楽人が吹き立てた楽音に誘われて吹く松の風はほんとうの深山みやまおろしのようなようであつた。いろいろの秋の紅葉もみぢの散りかう中へ青海波の舞い手が歩み出た時には、これ以上の美は地上にないであろうと見えた。挿かさしにした紅葉が風のために葉数の少なくなつたのを見て、左大將がそばへ寄つて庭前の菊を折つてさし変えた。日暮れ前になつてさつと時雨ときぐれがした。空もこの絶妙な舞い手に心を動かされたように。

美貌の源氏が紫を染め出したころの白菊を冠かむりに挿さして、今日は試楽の日に超こえて細かな手までもおろそかにしない舞振りを見せた。終わりにちよつと引き返して来て舞うところなどでは、人が皆清い寒気をさえ覚えて、人間界のこととは思われなかった。物の価値のわからぬ下人げにんで、木の蔭かげや岩の蔭、もしくは落ち葉の中にうずもれ

るようにして見ていた者さえも、少し賢い者は涙をこぼしていた。承香殿じょうこうでんの女御を母にした第四親王がまだ童形どうけいで秋風楽をお舞いになつたのがそれに続いての見物みものだつた。この二つがよかつた。あとはもう何の舞も人の興味を惹ひかなかつた。ないほうによかつたかもしれない。今夜源氏は従三位じゆさんみから正三位に上つた。頭中將は正四位下が上になつた。他の高官たちにも波及して昇進するものが多いのである。当然これも源氏の恩であることを皆知つていた。この世でこんなに人を喜ばしうる源氏は前生ぜんしやうですばらしい善業ぜんごうがあつたのであろう。

それがあつてから藤壺の宮は宮中から実家へお帰りになつた。逢う機会をとらえようとして、源氏は宮邸の訪問にばかりかかずらつていて、左大臣家の夫人もあまり訪わなかつた。その上紫の姫君を迎えてからは、二条の院へ新たな人を入れたと伝えた者があつて、夫人の心はいつそう恨めしかつた。真相を知らないのであるから恨んでいるのがもつともであるが、正直に普通の人のように口へ出して恨めば自分も事実を話して、自分の心持ちを説明もし慰めもできるのであるが、一人でいるいろな忖度そんたくをして恨んでいるという態度がいやで、自分はいほかの人に浮気うわきな心が寄つていくのである。とにかく完全な女で、欠点といつては何もない、だれよりもいちばん最初に結婚した妻であるから、どんなに心の中では尊重しているかしのれない、それがわからない間はまだしかたがない。将来はきつと自分の思うような妻になしうるだろうと源氏は思つて、その人が少しのことで源氏から離れるような軽率な行為に出ない性格であることも源氏は信じて疑わなかつたのである。永久に結ばれた夫婦としてその人を思う愛にはまた特別なものがあつた。

若紫は馴れていくにしたがつて、性質のよさも容貌の美も源氏の心を多く惹いた。姫君は無邪気によく源氏を愛していた。家の者にも何人であるか知らずまいとして、今も初めの西の対を住居にさせて、そこに華麗な設備をば加え、自身も始終こちらに来ていて若い女王を教育していくことに力を入れているのである。手本を書いて習わせなどもして、今までよそにいた娘を呼び寄せた善良な父のようになつていた。事務の扱い所を作り、家司も別に命じて貴族生活をするのに何の不足も感じさせなかつた。しかも惟光以外の者は西の対の主の何人であるかをいぶかしく思つていた。女王は今も時々は尼君を恋しがつて泣くのである。源氏のいる間は紛れていたが、夜などまれにここで泊まることはあつても、通う家が多くて日が暮れると出かけるのを、悲しがつて泣いたりするおりがあるのを源氏はかわいく思つていた。二、三日御所にいて、そのまま左大臣家へ行つていたりする時は若紫がまつたくめいり込んでしまつていて、母親のない子を持つている気がして、恋人を見に行つても落ちてかぬ心になつていたのである。僧都はこうした報告を受けて、不思議に思いながらもうれしかった。尼君の法事の北山の寺であつた時も源氏は厚く布施を贈つた。

藤壺の宮の自邸である三条の宮へ、様子を知りたさに源氏が行くと王命婦、中納言の君、中務などという女房が出て応接した。源氏はよそよそしい扱いをされることに不平であつたが自分をおさえながらただの話をしている時に兵部卿の宮がおいでになつた。源氏が来ていると聞いてこちらの座敷へおいでになつた。貴人らしい、そして艶な風流男とお見えになる宮を、このまま女にした顔を源氏ばかりに考えてみてもそれは美人らしく思えた。藤壺の宮の兄君で、

また可憐な若紫の父君であることにことさら親しみを覚えて源氏はいろいろな話をしていた。兵部卿の宮もこれまでよりも打ち解けて見える美しい源氏を、婿であるなどとはお知りにならないで、この人を女にしてみたいなどと若々しく考えておいでになった。夜になると兵部卿の宮は女御の宮のお座敷のほうへはいっておしまいになった。源氏はうらやましくて、昔は陛下が愛子としてよく藤壺の御簾の中へ自分をお入れになり、今日のように取り次ぎが中に立つ話ではなしに、宮口ずからのお話が伺えたものであると思うと、今の宮が恨めしかった。

「たびたび伺うはずですが、参っても御用がないと自然一怠けることになります。命じてくださることがありましたら、御遠慮なく言っておつかわしくございましたら満足です」

などと堅い挨拶をして源氏は帰って行った。王命婦も策動のしようがなかった。宮のお気持ちをそれとなく観察してみても、自分の運命の陥穽であるものはこの恋である、源氏を忘れないことは自分を滅ぼす道であるということを超えて過去よりもまた強く思っておいでのなる御様子であったから手が出ないのである。はかない恋であるとなら消極的に悲しむ人は藤壺の宮であって、積極的に思いつめている人は源氏の君であった。

少納言は思いのほかの幸福が小女王の運命に現われてきたことを、死んだ尼君が絶え間ない祈願に愛孫のことを言っただけにすぎたその効験であろうと思うのであったが、権力の強い左大臣家に第一の夫人があることであるし、そこかしこに愛人を持つ源氏であることを思うと、真実の結婚を見るころになって面倒が多くなり、姫君に苦勞が始まるのではないかと恐れていた。しかしこれには特異性が

ある。少女の日にすでにこんなに愛している源氏であるから将来もたのもしいわけであると見えた。母方の祖母の喪は三か月であったから、師走しわすの三十日に喪服を替えさせた。母代わりをしていた祖母であつたから除喪のあとに派手はでにはせず濃くはない紅の色、紫、山吹ぶきの落ち着いた色などで、そして地質のきわめてよい織物の小袿こきを着た元日の紫の女王は、急に近代的な美人になつたようである。源氏は宮中の朝拝の式に出かけるところで、ちよつと西の対へ寄つた。

「今日からは、もう大人になりましたか」

と笑顔えがおをして源氏は言つた。光源氏の美しいことはいうまでもない。紫の君はもう雛ひなを出して遊びに夢中であつた。三尺の据柵すえだな二つにいろいろな小道具を置いて、またそのほかに小さく作つた家などを幾つも源氏が与えてあつたのを、それらを座敷じゆうに並べて遊んでいるのである。

「雛追なやらいをするといつて犬君いぬきがこれをこわしましたから、私よくしていますの」

と姫君は言つて、一所懸命になつて小さい家を繕おうとしている。

「ほんとうにそそっかしい人ですね。すぐ直させてあげますよ。今日は縁起を祝う日ですからね、泣いてはいけませんよ」

言い残して出て行く源氏の春の新装を女房たちは縁に近く出て見送つていた。紫の君も同じように見に立つてから、雛人形の中の源氏の君をきれいに装束させて真似まねの参内をさせたりしているのであつた。

「もう今年からは少し大人におなりあそばせよ。十歳とおより上の人は

お雛様遊びをしてはよくないと世間では申しますのよ。あなた様はもう良人おっとがいらつしやる方なんですから、奥様らしく静かにしてい
らつしやらなくてはなりません。髪をお梳すきするのもおうるさがり
になるようなことではね」

などと少納言が言った。遊びにばかり夢中になつてゐるのを恥じ
させようとして言ったのであるが、女王は心の中で、私にはもう良
人があるのだから、源氏の君がそうなんだ。少納言などの良人は皆
醜い顔をしている、私はあんなに美しい若い人を良人にした、こん
なことをはじめて思った。というのもも一つ年が加わつたせいかもしれ
ない。何ということなしにこうした幼稚さが御簾みすの外まで来る家
司しや侍たちにも知れてきて、怪しんではいたが、だれもまだ名ばか
りの夫人であるとは知らなんだ。

源氏は御所から左大臣家のほうへ退出した。例のように夫人から
は高いところから多情男を見くだしているというようなよそよそし
い態度をとられるのが苦しくて、源氏は、

「せめて今年からでもあなたが暖かい心で私を見てくれるようにな
つたらうれしいと思うのだが」

と言つたが、夫人は、二条の院へある女性が迎えられたというこ
とを聞いてからは、本邸へ置くほどの人は源氏の最も愛する人で、
やがては正夫人として公表するだけの用意がある人であろうとねた
んでいた。自尊心の傷つけられていることはもとよりである。しか
も何も気づかないふうで、戯談じやうだんを言いかけて行きなどする源氏に負
けて、余儀なく返辞をする様子などに魅力がなくなかなかつた。四歳よっす
ほどの年上であることを夫人自身でもきまらずに恥ずかしく思ってい
るが、美の整つた女盛りの貴女きじよであることは源氏も認めているので

ある。どこに欠点もない妻を持っていて、ただ自分の多情からこの人に怨みを負うような愚か者になっているのだとこんなふうにも源氏は思った。同じ大臣でも特に大きな権力者である現代の左大臣が父で、内親王である夫人から生まれた唯一の娘であるから、思い上がった性質にでき上がっていて、少しでも敬意の足りない取り扱いを受けては、許すことができない。帝の愛子として育った源氏の自負はそれを無視してよいと教えた。こんなことが夫妻の溝を作っているものらしい。左大臣も二条の院の新夫人の件などがあって、頼もしくない婿君の心をうらめしがりもしていたが、逢えば恨みも何も忘れて源氏を愛した。今もあらゆる歓待を尽くすのである。

翌朝源氏が出て行くこうとする時に、大臣は装束を着けている源氏に、有名な宝物になっている石の帯を自身で持って来て贈った。正装した源氏の形を見て、後ろのほうを手で引いて直したりなど大臣はしていた。沓も手で取らないばかりである。娘を思う親心が源氏の心を打った。

「こないいいのは、宮中の詩会があるでしょうから、その時に使いましょう」

と贈り物の帯について言うと、

「それにはまたもつといいのがございます。これはただちよつと珍しいだけの物です」

と言って、大臣はしいてそれを使わせた。この婿君を齋くことに大臣は生きがいを感じていた。たまさかにもせよ婿としてこの人を出入りさせていれば幸福感は十分大臣にあるであろうと見えた。

源氏の参賀の場所は数多くもなかった。東宮、一院、それから藤壺の三条の宮へ行った。

「今日はまたことにおきれいに見えますね、年がお行きになればなるほどごりっぱにおなりになる方なんですな」

女房たちがこうささやいている時に、宮はわずかな几帳の間から源氏の顔をほのかに見て、お心にはいろいろなことが思われた。御出産のあるべきはずの十二月を過ぎ、この月こそと用意して三条の宮の人々も待ち、帝もすでに、皇子女御出生についてのお心づもりをしておいでになったが、何ともなくて一月もたつた。物怪が御出産を遅れさせているのであるうかとも世間で噂をする時、宮のお心は非常に苦しかった。このことによつて救われない悪名を負う人になるのかと、こんな煩悶をされることが自然おからだにさわつてお加減も悪いのであつた。それを聞いても源氏はいろいろと思ひ合はすことがあつて、目だためように産婦の宮のために修法などをあちこちの寺でさせていた。この間に御病気で宮が亡くなつておしまひにならぬかという不安が、源氏の心をいつそう暗くさせていたが、二月の十幾日に皇子が御誕生になつたので、帝も御満足をあそばし、三条の宮の人たちも愁眉を開いた。なお生きようとする自分の心は未練で恥ずかしいが、弘徽殿あたりで言う詛いの言葉が伝えられている時に自分が死んでしまつてはみじめな者として笑われるばかりであるから、とそうお思ひになつた時からつとめて今は死ぬまいと強くおなりになつて、御衰弱も少しずつ恢復していった。

帝は新皇子を非常に御覧になりたがつておいでになつた。人知れぬ父性愛の火に心を燃やしながら源氏は伺候者の少ない隙をうかがつて行つた。

「陛下が若宮にどんなにお逢いになりたがつていらつしやるかもしれません。それで私がまずお目にかかりまして御様子でも申し上げ

たらよろしいかと思ひます」

と源氏は申し込んだのであるが、

「まだお生まれたての方というものは醜うございますからお見せし
たくございません」

という母宮の御挨拶で、お見せにならないのにも理由があつた。

それは若宮のお顔が驚くほど源氏に生き写しであつて、別のものは決して見えなかつたからである。宮はお心の鬼からこれを苦痛にしておいでになつた。この若宮を見て自分の過失に気づかぬ人はないであろう、何でもないことも捜し出して人をとがめようとするのが世の中である。どんな悪名を自分は受けることかとお思ひになると、結局不幸な者は自分であると熱い涙がこぼれるのであつた。源氏は稀まれに都合よく王命婦が呼び出された時には、いろいろと言葉を尽くして宮にお逢いさせてくれと頼むのであるが、今はもう何の*か*いもなかつた。新皇子拜見を望むことに対しては、

「なぜそんなにまでおっしゃるのでしょう。自然にその日が参るのではございませんか」

と答えていたが、無言で二人が読み合っている心が別にあつた。

口で言うべきことではないから、そのほつのはまた言葉にしにくかつた。

「いつまた私たちは直接にお話ができるのだらう」

と言つて泣く源氏が王命婦の目には気の毒でならない。

「#ここから1字下げ」

「いかさまに昔結べる契りにてこの世にかかる中の隔てぞ

「#ここで字下げ終わり」

わからない、わからない」

とも源氏は言うのである。命婦は宮の御一煩悶はんもんをよく知っていて、それだけ告げるのが恋の仲介なかだちをした者の義務だと思った。

「#ここから1字下げ」

「見ても思ふ見ぬはたいかに歎なげくらんこや世の人の惑ふてふ闇やみ

「#ここで字下げ終わり」

どちらも同じほどお気の毒だと思えます」

と命婦は言った。取りつき所もないように源氏が悲しんで帰って行くことも、度が重なれば邸やしきの者も不審を起こしはせぬかと宮は心配しておいでになって王命婦をも昔ほどお愛しにはならない。目に立つことをはばかって何ともお言いにはならないが、源氏への同情者として宮のお心では命婦をお憎みになることもあるらしいのを、命婦はわびしく思っていた。意外なことにもなるものであると歎なげかれたであろうと思われる。

四月に若宮は母宮につれられて宮中へおはいりになった。普通の乳児ちのみこよりはずっと大きく小児こどもらしくなっておいでになって、このころはもうからだを起き返らせるようにもされるのであった。紛らわしようもない若宮のお顔つきであったが、帝には思いも寄らぬことでおありになって、すぐれた子どもは似たものであるらしいと思召しめした。帝は新皇子をこの上なく御大切にあそばされた。源氏の君を非常に愛しておいでになりながら、東宮にお立てになることは世上の批難を恐れて御実行ができなかったのを、帝は常に終生の遺憾

事に思召して、長じてますます王者らしい風貌ふうぼうの備わっていくのを御覧になっては心苦しさに堪えないように思召したのであるが、こんな尊貴な女御から同じ美貌の皇子が新しくお生まれになったのであるから、これこそは瑕きずなき玉であると御一寵愛ごおひあひになる。女御の宮はそれをまた苦痛に思っておいでになった。源氏の中將が音楽の遊びなどに参会している時などに帝は抱いておいでになって、

「私は子供がたくさんあるが、おまえだけをこんなに小さい時から毎日見た。だから同じように思うのかよく似た気がする。小さい間は皆こんなものだろうか」

とお言いになって、非常にかわいくお思いになる様子が拝された。源氏は顔の色も変わる気がしておそろしくも、もったいなくも、うれしくも、身にしむようにもいろいろに思っただけ涙がこぼれそうだった。ものを言うようになかったころにお口をお動かしになるのが非常にお美しかったから、自分ながらもこの顔に似ているといわれる顔は尊重すべきであるとも思った。宮はあまりの片腹痛さに汗を流しておいでになった。源氏は若宮を見て、また予期しない父性愛の心を乱すもののあるのに気がついて退出してしまった。

源氏は二条の院の東の対たいに帰って、苦しい胸を休めてから後刻になつて左大臣家へ行こうと思っていた。前の庭の植え込みの中に何木となく、何草となく青くなっている中に、目だつ色を作つて咲いた撫子なでしこを折って、それに添える手紙を長く王命婦おうめいぶへ書いた。

「#ここから2字下げ」

よそへつつ見るに心も慰まで露けさまさる撫子の花

「#ここから1字下げ」

花を子のように思って愛することはついには不可能であることを知りました。

「#ここで字下げ終わり」

とも書かれてあった。だれも来ぬ隙があったか命婦はそれを宮のお目にかけて、

「ほんの塵ほどのこのお返事を書いてくださいませんか。この花片にお書きになるほど、少しばかり」

と申し上げた。宮もしみじみお悲しい時であった。

「#ここから2字下げ」

袖濡るる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまと撫子

「#ここで字下げ終わり」

とだけ、ほのかに、書きつぶしのもののように書かれてある紙を、喜びながら命婦は源氏へ送った。例のように返事のないことを予期して、なおも悲しくみくずおれている時に宮の御返事が届けられたのである。胸騒ぎがしてこの非常にうれしい時にも源氏の涙は落ちた。

じつと物思いをしながら寝ていることは堪えがたい気がして、例の慰め場所西の対へ行つて見た。少し乱れた髪をそのままにして部屋着の袷姿で笛を懐しい音に吹きながら座敷をのぞくと、紫の女王はさつきの撫子が露にぬれたような可憐なふうで横になっていた。

非常に美しい。こぼれるほどの愛嬌のある顔が、帰邸した気配がしてからすぐにも出て来なかった源氏を恨めしいと思うように向こう

に向けられているのである。座敷の端のほうにすわって、

「こちらへいらっしやい」

と言つても素知らぬ顔をしている。「入りぬる磯の草なれや」(みらく少なく恋ふらくの多き)と口ずさんで、袖を口もとにあてている様子にかわいい伶俐さが見えるのである。

「つまらない歌を歌っているのですね。始終見ていなければならぬと思うのはよくないことですよ」

源氏は琴を女房に出させて紫の君に弾かせようとした。

「十三絃の琴は中央の絃の調子を高くするのはどうもしっくりとしないものだから」

と言つて、柱を平調に下げて掻き合わせだけをして姫君に与えようと、もうすねてもいず美しく弾き出した。小さい人が左手を伸ばして絃をおさえる手つきを源氏はかわいく思つて、自身は笛を吹きながら教えていた。頭がよくてむずかしい調子などもほんの一度くらいで習い取つた。何ごとにも貴女らしい素質の見えるのに源氏は満足していた。保曾呂俱世利というのは変な名の曲であるが、それをおもしろく笛で源氏が吹くのに、合わせる琴の弾き手は小さい人であつたが音の間が違わずに弾けて、上手になる手筋と見えるのである。灯を点させてから絵などをいっしょに見ていたが、さつき源氏はここへ来る前に出かける用意を命じてあつたから、供をする侍たちが促すように御簾の外から、

「雨が降りそうでございます」

などと言つたのを聞くと、紫の君はいつものように心細くなつてめいり込んでいった。絵も見さしてうつむいているのがかわいくて、こぼれかかっている美しい髪をなでてやりながら、

「私がよそに行っている時、あなたは寂しいの」

と言うと女王はうなずいた。

「私だつて一日あなたを見ないでいるともう苦しくなる。けれどあなたは小さいから私は安心していてね、私が行かないといろいろな意地悪を言っておこる人がありますからね。今のうちはそのほうへ行きます。あなたが大人になれば決してもうよそへは行かない。人からうらまれたくないと思うのも、長く生きていて、あなたを幸福にしたいと思うからです」

などとこまごま話して聞かせると、さすがに恥じて返辞もしない。そのまま膝ひざに寄りかかって寝入ってしまったのを見ると、源氏はかわいそうになって、

「もう今夜は出かけないことにする」

と侍たちに言うと、その人らはあちらへ立つて行つて。間もなく源氏の夕飯が西の対へ運ばれた。源氏は女王を起こして、

「もう行かないことにしましたよ」

と言うと慰んで起きた。そうしていつしよに食事をしたが、姫君はまだはかないようなふうでろくろく食べなかつた。

「ではお寝やすみなさいな」

出ないということは嘘うそでないかと危あぶながつてこんなことを言うのである。こんな可憐かれんな人を置いて行くことは、どんなに恋しい人の所があつてもできないことであると源氏は思った。

こんなふう引き止められることも多いのを、侍などの中には左大臣家へ伝える者もあつてあちらでは、

「どんな身分の人でしょう。失礼な方ですわね。二条の院へどこのお嬢さんがお嫁かたづきになつたという話もないことだし、そんなふう

こちらへのお出かけを引き止めたり、またよくふざけたりしていらつしやるというのでは、りっぱな御身分の人とは思えないじゃありませんか。御所などで始まった関係の女房級の人を奥様らしく二条の院へお入れになって、それを批難さすまいとお思いになって、だれということを秘密にしていらつしやるのですよ。幼稚な所作が多いのですって」

などと女房が言っていた。

御所にまで二条の院の新婦の問題が聞こえていった。

「気の毒じゃないか。左大臣が心配しているそうだ。小さいおまえを婿にしてくれて、十二分に尽くした今日までの好意がわからない年でもないのに、なぜその娘を冷淡に扱うのだ」

と陛下がおっしゃっても、源氏はただ恐縮したふうを見せているだけで、何とも御返答をしなかった。帝は妻が氣に入らないのであろうとかわいそうに思召した。

「格別おまえは放縦な男ではなし、女官や女御たちの女房を情人にしている噂などもないのに、どうしてそんな隠し事をして鬪や妻に恨まれる結果を作るのだろう」

と仰せられた。帝はもうよい御年配であったが美女がお好きであった。采女や女蔵人なども容色のある者が宮廷に歓迎される時代であった。したがって美人も宮廷には多かつたが、そんな人たちは源氏さえその気になれば情人関係を成り立たせることが容易であったであろうが、源氏は見一馴れているせいかな女官たちへはその意味の好意を見せることは皆無であったから、怪しがってわざわざその人たちが戯談を言いかけることがあっても、源氏はただ冷淡でない程度にあしらっていて、それ以上の交際をしようとしないので物足ら

ず思う者さえあつた。よほど年のいった典侍ないしのすけで、いい家の出でもあり、才女でもあつて、世間からは相当にえらく思われていながら、多情な性質であつてその点では人を響ひび響きさせている女があつた。源氏はなぜこう年がいつても浮う気きがやめられないのであるうと不思議な気がして、恋の戯談を言いかけてみると、不似合ふにがひいにも思わず相手あてになつてきた。あさましく思いながらも、さすがに風変わりな衝動を受けてつい源氏は関係を作つてしまった。噂うわさされてもきまりの悪い不つりあいな老いた情人であつたから、源氏は人に知らせまいとして、ことさら表面は冷淡れんたんにしているのを、女は常に恨にくんでいた。典侍は帝のお髪くしあ上げの役を勤めて、それが終わったので、帝はお召めしかえを奉仕する人をお呼びになつて出てお行きになつた部屋には、ほかの者がいないで、典侍が常よりも美しい感じの受け取れるふうで、頭の形などに艶えんな所も見え、服装も派手はでにきれいな物を着ているのを見て、いつまでも若作りをするものだと思ひながら、どう思っているだろうと知りたい心も動いて、後ろから裳もの裾すそを引いてみた。はなやかな絵をかいた紙の扇で顔を隠すようにしながら見返つた典侍の目は、瞼まぶたを張り切らせようと故意に引き伸ばしているが、黒くなつて、深い筋のはいつたものであつた。妙に似合まわなない扇だと思つて、自身みづかのに替かへて源典侍げんてんじのを見ると、それは真赤まっかな地に、青で厚く森の色が塗られたものである。横のほうに若々わしくくない字であるが上手じょうずに「森の下草老いぬれば駒こまもすさめず刈かる人もなし」という歌が書かれてある。厭味いやみな恋歌などは書かずともよいのにと源氏は苦笑しながらも、

「そうじゃありませんよ、『大荒木の森こそ夏のかげはしるけれど盛んな夏ですよ』」

こんなことを言う恋の遊戯にも不似合いな相手だと思つと、源氏は人が見ねばよいがとばかり願われた。女はそんなことを思っていない。

「#ここから2字下げ」

君し来ば手馴れの駒に刈り飼はん盛り過ぎたる下葉なりとも

「#ここで字下げ終わり」

とても色気たつぷりな表情をして言う。

「#ここから1字下げ」

「笹分けば人や咎めんいつとなく駒一馴らすめる森の木隠れ

「#ここで字下げ終わり」

あなたの所はさしさわりが多いからうっかり行けない」

こう言つて、立つて行こうとする源氏を、典侍は手で留めて、

「私はこんなにまで煩悶をしたことはありませんよ。すぐ捨てられてしまうような恋をして一生の恥をここでかくのです」

非常に悲しそうに泣く。

「近いうちに必ず行きます。いつもそう思いながら実行ができないだけですよ」

袖を放させて出ようとするのを、典侍はまたもう一度追つて来て

「橋柱」(思ひながらに中や絶えなん)と言いかける所作までも、

お召かえが済んだ帝が襖子からのぞいておしまいになった。不つり合いな恋人たちであるのを、おかしく思召してお笑いになりながら、

帝は、

「まじめ過ぎる恋愛ぎらいだと言っておまえたちの困っている男もやはりそうでなかったね」

と典侍ないしのおすけへお言いになった。典侍はきまり悪さも少し感じたが、恋しい人のためには濡衣ぬれぎぬでさえも着たがる者があるのであるから、弁解はしようとしなかった。それ以後御所の人たちが意外な恋としてこの関係を噂わさした。頭中将かぶちゅうじょうの耳みみにそれがはいつて、源氏の隠し事はたいてい正確に察して知っている自分も、まだそれだけは気がつかなんだと思うとともに、自身の好奇心も起こってきて、まんまと好色な源典侍の情人の一人になった。この貴公子もさらにある若い男ではなかったから、源氏の飽き足らぬ愛を補う気で関係をしたが、典侍の心に今も恋しくてならない人はただ一人の源氏であった。困った多情女である。きわめて秘密にしていたので頭中将との関係を源氏は知らなんだ。御殿で見かけると恨みを告げる典侍に、源氏は老いている点にだけ同情を持ちながらもいやな気持ちがおさえ切れずに長く違いに行こうともしなかったが、夕立のしたあとの夏の夜の涼しさに誘われて温明殿うんめいでんあたりを歩いていると、典侍はその一室で琵琶びわを上手うまいに弾ひいていた。清涼殿の音楽の御遊びの時、ほかは皆男の殿上役人の中へも加えられて琵琶の役をするほどの名手であったから、それが恋に悩みながら弾くひ絃いとの音ねには源氏の心を打つものがあった。「瓜うり作りになりやしなまし」という歌を、美声ではなやかに歌っているのには少し反感が起こった。白楽天が聞いたという鄂州がくしゅうの女の琵琶もこうした妙味があったのであろうと源氏は聞いていたのである。弾きやめて女は物思いに堪えないふうであった。源氏は御簾みすぎわに寄よって催馬楽さいばらの東屋あずまやを歌っていると、「押し開い

て来ませ」という所を同音で添えた。源氏は勝手の違う気がした。

「#ここから2字下げ」

立ち濡るる人しもあらし東屋にうたてもかかると雨そそぎかな

「#ここで字下げ終わり」

と歌って女は歎息たんそくをしている。自分だけを対象としているのではなからうが、どうしてそんなに人が待たれるのであるかと源氏は思った。

「#ここから2字下げ」

人妻はあなわづらはし東屋のまやのあまりも馴れじとぞ思ふ

「#ここで字下げ終わり」

と言い捨てて、源氏は行ってしまいたかったのであるが、あまりに侮辱したことになると思つて典侍の望んでいたように室内へはいつた。源氏は女と朗らかに戯談じょうだんなどを言い合つているうちに、こうした境地も悪くない気がしてきた。頭中将は源氏がまじめらしくして、自分の恋愛問題を批難したり、注意を与えたりすることのあるのを口惜くちおしく思つて、素知らぬふうでいて源氏には隠れた恋人が幾人かあるはずであるから、どうかしてそのうちの一つの事実でもつかみたいと常に思つていたが、偶然今夜の会合を来合わせて見た。頭中将はうれしくて、こんな機会に少し威嚇おどして、源氏を困惑させて懲りたと言わせたいと思つた。それでしかるべく油断を与えておいた。冷やかに風が吹き通つて夜のふけかかった時分に源氏らが

少し寝入ったかと思われる気配を見計らって、頭中將はそつと室内へはいって行つた。自嘲的な思いに眠りなどにははいりきれなかつた源氏は物音にすぐ目をさまして人の近づいて来るのを知つたのである。典侍の古い情人で今も男のほう離れたがらないという噂のある修理大夫しゅりだゆうであろうと思つと、あの老人にとんでもないふしだらな關係を発見された場合の気まずさを思つて、

「迷惑になりそうだ、私は帰ろう。旦那だんなの来ることは初めからわかっていたらうに、私をごまかして泊とどませたのですね」

と言つて、源氏は直衣のうしだけを手でさげて屏風びよぶの後ろへはいつた。

中將はおかしいのをこらえて源氏が隠れた屏風を前から横へ畳み寄せて騒ぐ。年を取っているが美人型の華奢きゃしゃなからだつきの典侍が以前にも情人のかち合いに困つた経験があつて、あわてながらも源氏をあの男がどうしたかと心配して、床の上とこにすわつて慄ふるえていた。自分であることを気づかれないようにして去らうと源氏は思つたのであるが、だらしなくなつた姿を直さないで、冠かむりをゆがめたまま逃げる後ろ姿を思つてみると、恥な気がしてそのまま落ち着きを作らうとした。中將はぜひとも自分でなく思わせなければならぬと知つて物を言わない。ただ怒おこつたふうをして太刀たちを引き抜くと、

「あなた、あなた」

典侍は頭中將を拜まがんでいるのである。中將は笑い出しそうではなかつた。平生一派手はいでに作つてゐる外見は相当な若さに見せる典侍も年は五十七、八で、この場合は見得みえも何も捨てて二十前後はたちの公達きんたちの中にいて気をもんでいる様子は醜態そのものであつた。わざわざ恐ろしがらせよう自分でないように見せようとする不自然さがかえつて源氏に真相を教える結果になつた。自分と知つてわざとしてい

ることであると思うと、どうでもなれという気になった。いよいよ頭中将であることがわかるとおかしくなって、抜いた太刀を持つ腕をとらえてぐつとつねると、中將は見顕みあらわされたことを残念に思いながらも笑ってしまった。

「本気なの、ひどい男だね。ちよつとこの直衣ちうしを着るから」と源氏が言っても、中將は直衣を放してくれない。

「じゃ君にも脱がせるよ」

と言つて、中將の帯を引いて解いてから、直衣を脱がせようとすると、脱ぐまいと抵抗した。引き合っているうちに縫い目がほころんでしまった。

「#ここから1字下げ」

「包むめる名や洩もり出いでん引きかはしかくほころぶる中の衣に

「#ここで字下げ終わり」

明るみへ出ては困るでしょう」

と中將が言つと、

「#ここから2字下げ」

隠れなきものと知る知る夏衣きたるをうすき心とぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

と源氏も負けてはいないのである。双方ともだらしない姿になつて行つてしまった。

源氏は友人に威嚇おどされたことを残念に思いながら宿直所とこのところで寝てい

た。驚かされた典侍は翌朝残っていた指貫さしめきや帯などを持たせてよこした。

「#ここから1字下げ」

「恨みても云いひがひぞなき立ち重ね引きて帰りし波のなごりに

「#ここで字下げ終わり」

悲しんでおります。恋の楼閣のくずれるはずの物がくずれてしまいました

という手紙が添えてあった。面目なく思うのであろうと源氏はなおも不快に昨夜を思い出したが、気をもみ抜いていた女の様子にあわれんでやってよいところもあったので返事を書いた。

「#ここから2字下げ」

荒あれだちし波に心は騒がねどよせけん磯いそをいかが恨みぬ

「#ここで字下げ終わり」

とだけである。帯は中将の物であった。自分のよりは少し色が濃いようであると、源氏が昨夜の直衣に合わせて見ている時に、直衣の袖そでがなくなっているのに気がついた。なんとというはずかしいことだろう、女をあさる人になればこんなことが始終あるのであろうと源氏は反省した。頭中将の宿直所のほうから、

「#ここから1字下げ」

何よりもまずこれをお綴とじつけになる必要があるでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

と書いて直衣の袖を包んでよこした。どうして取られたのである
 うと源氏はくやしかった。中將の帯が自分の手にはいつていなかっ
 たらこの争いは負けになるのであったとうれしかった。帯と同じ色
 の紙に包んで、

「#ここから2字下げ」

中絶えばかごとや負ふと危ふさにはなだ縹の帯はとりてだに見ず

「#ここで字下げ終わり」

と書いて源氏は持たせてやった。女の所で解いた帯に他人の手が
 触れるとその恋は解消してしまうとも言われているのである。中將
 からまた折り返して、

「#ここから2字下げ」

君にかく引き取られぬる帯なればかくて絶えぬる中とかこたん

「#ここから1字下げ」

なんといつでも責任がありますよ。

「#ここで字下げ終わり」

と書いてある。昼近くになって殿上の詰め所へ二人とも行った。

取り澄ました顔をしている源氏を見ると中將もおかしくてならない。
 その日は自身も蔵人頭くわんづひのかみとして公用の多い日であったから至極まじめ
 な顔を作っていた。しかしどうかした拍子に目が合うと互いにほほ
 えまれるのである。だれもいぬ時に中將がそばへ寄って来て言った。

「隠し事には懲りたでしょう」

尻目しりめで見ている。優越感があるようである。

「なあに、それよりもせつかく来ながら無駄だった人が気の毒だ。まったくは君やつかいな女だね」

秘密にしようと言いつたが、それからのち中将はどれだけあの晩の騒ぎを言い出して源氏を苦笑させたかしのれない。それは恋しい女のために受ける罰でもないのである。女は続いて源氏の心を惹ひくうとしていろいろに技巧を用いるのを源氏はうるさがっていた。中将は妹にもその話はせずに、自分だけが源氏を困らせる用に使うほうに有利だと思っていた。よい外戚をお持ちになった親王方みかせも帝の殊寵しゅちゆうされる源氏には一目置いておいでになるのであるが、この頭中将だけは、負けていないでもよいという自信を持っていた。ことごとくに競争心を見せるのである。左大臣の息子むすこの中でこの人だけが源氏の夫人と同腹の内親王の母君を持っていた。源氏の君はただ皇子であるという点が違っているだけで、自分も同じ大臣といつても最大の権力のある大臣を父として、皇女から生まれてきたのである、たいして違わない尊貴さが自分にあると思うものらしい。人物も伶俐れいで何の学問にも通じたりっぱな公子であった。つまりぬ事までも二人は競争して人の話題になることも多いのである。

この七月に皇后の冊立さくりつがあるはずであった。源氏は中将から参議に上のぼった。帝が近く讓位をあそばしたい思召おほしめしがあつて、藤壺ふじつばの宮のお生みになった若宮を東宮にたくお思いになったが将来御後援をするのに適当な人がない。母方の御一伯父おじは皆親王で実際の政治に携たづねることのできないのも不文律になつていたから、母宮をだけでも後の位に据すえて置くことが若宮の強味になるであろうと思召し

て藤壺の宮を中宮ちゆうきゆうに擬しておいでになった。弘徽殿の女御がこれに平たいらかでないことに道理はあった。

「しかし皇太子の即位することはもう近い将来のことなのだから、その時は当然皇太后になりうるあなたなのだから、気をひろくお持ちなさい」

帝はこんなふうに女御を慰めておいでになった。皇太子の母君で、入内して二十幾年になる女御をさしおいて藤壺を后にあそばすことは当を得たことであるいはないかもしれない。例のように世間ではいろいろに言う者があった。

儀式のあとで御所へおはいりになる新しい中宮のお供を源氏の君もした。后と一口に申し上げて、この方の御身分は后腹の内親王であった。全まったい宝玉のように輝やくお后と見られたのである。それに帝の御一寵愛ちゆうあいもたいしたものであったから、満廷の官人がこの后に奉仕することを喜んだ。道理のほかまでの好意を持った源氏は、御輿みこしの中の恋しいお姿を想像して、いよいよ遠いはるかな、手の届きがたいお方になっておしまいになったと心に歎なげかれた。気が変になるほどであった。

「#ここから2字下げ」

つきもせぬ心の闇やみにくるるかな雲井に人を見るにつけても

「#ここで字下げ終わり」

こう思われて悲しいのである。

若宮のお顔は御生育あそばすにつれてますます源氏に似ておいきになった。だれもそうした秘密に気のつく者はないようである。何

をどう作り変えても源氏と同じ美貌ひばうを見つることはないわけであるが、この二人の皇子は月と日が同じ形で空にかかっているように似ておいでになると世人も思った。

「#ここから2字下げ」

(訳注) この巻も前二巻と同年の秋に始まって、源氏十九歳の秋までが書かれている。

「#ここで字下げ終わり」

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971 (昭和46)年8月10日改版初版発行

1994 (平成6)年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002 (平成14)年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

花宴

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）紫宸殿ししんでんの

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）皆たんにん一探韻を

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」春の夜のもやにそひたる月ならん手枕

「#地から3字上げ」かしぬ我が仮ぶしに （晶子）

二月の二十幾日に紫宸殿ししんでんの桜の宴があつた。玉座ぎょざの左右さゆうに中宮ちゆうぐうと皇太子の御見物の室が設けられた。弘徽殿こうきでんの女御にょごは藤壺ふじつぼの宮が中宮ちゆうぐうになっておいでになることで、何かのおりごとに不快を感じるのであるが、催し事の見物は好きで、東宮席で陪観はいくわんしていた。日がよく

晴れて青空の色、鳥の声も朗らかな気のする南庭を見て親王方、高級官人をはじめとして詩を作る人々は皆一探韻をいただいで詩を作った。源氏は、

「春という字を賜わる」

と、自身の得る韻字を披露したが、その声がすでに人よりすぐれていた。次は頭中将で、この順番を晴れがましく思うことであろうと見えたが、きわめて無難に得た韻字を告げた。声づかいに貫目があると思われた。その他の人は臆してしまったようで、態度も声もものにならぬのが多かった。地下の詩人はまして、帝も東宮も詩のよい作家で、またよい批評家でありになったし、そのほかにもすぐれた詩才のある官人の多い時代であったから、恥ずかしくて、清い広庭に出て行くことが、ちよつとしたことなのであるが難事に思われた。博士などがみすばらしい風采をしながらも場馴れて進退するのにも御同情が寄ったりして、この御覧になる方々はおもしろく思召された。奏せられる音楽も特にすぐれた人たちが選ばれていた。春の永日がようやく入り日の刻になるころ、春鶯囀の舞がおもしろく舞われた。源氏の紅葉賀の青海波の巧妙であったことを忘れがたく思召して、東宮が源氏へ挿の花を下賜あそばして、ぜひこの舞に加わるようにと切望あそばされた。辞しがたくて、一振りゆるゆる袖を反す春鶯囀の一節を源氏も舞ったが、だれも追随しがたい巧妙さはそれだけにも見えた。左大臣は恨めしいことも忘れて落涙していた。

「頭中将はどうしたか、早く出て舞わぬか」

次いでその仰せがあつて、柳花苑という曲を、これは源氏のよりも長く、こんなことを予期して稽古がしてあつたか上手に舞った。

それによつて中將は御衣ぎよいを賜わつた。花の宴にこのことのあるのを珍しい光栄だと人々は見ていた。高級の官人もしまいには皆舞つたが、暗くなつてからは芸の巧拙こうせつがよくわからなくなつた。詩の講ぜられる時にも源氏の作は簡単には済まなかつた。句ごとに讚美の聲が起こるからである。博士たちもこれを非常によい作だと思つた。こんな時にもただただその人が光になつている源氏を、父君陛下がおろそかに思召すわけではない。中宮はすぐれた源氏の美貌がお目にとまるにつけても、東宮の母君の女御がどんな心でこの人を憎みうるのであろうと不思議にお思ひになり、そのあとではまたこんなふうに源氏に関心を持つのもよろしくない心であると思召した。

「#ここから2字下げ」

大かたに花の姿を見ましかばつゆも心のおかれまじやは

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌はだれにもお見せになるはずのものではないが、どうして伝わっているのであろうか。夜がふけてから南殿の宴は終わった。

公卿こうけいが皆退出するし、中宮と東宮はお住居すまいの御殿へお帰りになつて静かになつた。明るい月が上つてきて、春の夜の御所の中が美しいものになつていった。酔いを帯びた源氏はこのままで宿直所しゆくちくじよへはいるのが惜しくなつた。殿上てんじやうの役人たちももう寝やすんでしまつてゐる。こんな夜ふけにもし中宮へ接近する機会を拾うことができたらと思つて、源氏は藤壺の御殿をそつとうかがつてみたが、女房を呼び出すような戸口も皆閉じてしまつてあつたので、歎息たんそくしながら、なお

物足りない心を満たしたいように弘徽殿の細殿の所へ歩み寄つてみた。三の口があいている。女御は宴会のあとそのまま宿直に上がっていたから、女房たちなどもここには少しよりいないふうがうかがわれた。この戸口の奥にあるくるる戸もあいていて、そして人音がない。こうした不用心な時に男も女もあやまつた運命へ踏み込むものだと思つて源氏は静かに縁側へ上がつて中をのぞいた。だれももう寝てしまつたらしい。若々しく貴女らしい声で、「朧月夜おぼろづきよに似るものぞなき」と歌いながらこの戸口へ出て来る人があつた。源氏はうれしくて突然一袖そでをとらえた。女はこわいと思つふうで、

「気味が悪い、だれ」

と言つたが、

「何もそんなこわいものではありませんよ」

と源氏は言つて、さらに、

「#ここから2字下げ」

深き夜の哀れを知るも入る月のおぼろげならぬ契りとぞ思ふ

「#ここで字下げ終わり」

とささやいた。抱いて行つた人を静かに一室へおろしてから三の口をしめた。この不謹慎な闖入者ちんにゆうしやにあきれている女の様子が柔らかに美しく感ぜられた。慄ふるえ声で、

「ここに知らぬ人が」

と言つていたが、

「私はもう皆に同意させてあるのだから、お呼びになつてもなんにもなりませんよ。静かに話しましょうよ」

この声に源氏であると知って女は少し不気味でなくなった。困りながらも冷淡にしたりはしないと女は思っている。源氏は酔い過ぎていたせいでこのままこの女と別れることを残念に思ったか、女も若々しい一方で抵抗をする力がなかったか、二人は陥るべきところへ落ちた。可憐な相手に心の惹かれる源氏は、それからほどなく明けてゆく夜に別れを促されるのを苦しく思った。女はまして心を乱していた。

「ぜひ言うてください、だれであるかをね。どんなふうにして手紙を上げたらいいのか、これきりとはあなただっと思って思わないでしょう」
などと源氏が言うつと、

「#ここから2字下げ」

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじと思ふ

「#ここで字下げ終わり」

という様子にきわめて艶な所があった。

「そう、私の言ったことはあなたのだれであるかを捜す努力を惜しんでいるように聞こえましたね」

と言つて、また、

「#ここから1字下げ」

「何れぞと露のやどりをわかむ間に小笹が原に風もこそ吹け

「#ここで字下げ終わり」

私との関係を迷惑にお思いにならないのだつたら、お隠しになる必要はないじゃありませんか。わざとわからなくするのですか」

と言いつつうちに、もう女房たちが起き出して女御を迎えに行くと、あちらから下がって来る者などが廊下を通るので、落ち着いていられずに扇だけをあとのしるしに取り替えて源氏はその室を出てしまった。

源氏の桐壺には女房がおおぜいいたから、主人が暁に帰った音に目をさました女もあるが、忍び歩きに好意を持たないで、

「いつもいつも、まあよくも続くものですね」

という意味を仲間で肱や手を突き合うことと言って、寝入ったふうを装っていた。寝室にはいつたが眠れない源氏であった。美しい感じの人だった。女御の妹たちであるうが、処女であったから五の君か六の君に違いない。太宰帥親王の夫人や頭中将が愛しない四の君などは美人だと聞いたが、かえってそれであつたらおもしろい恋を経験することになるのだらうが、六の君は東宮の後宮へ入れるはずだとか聞いていた、その人であつたら気の毒なことになつたといふべきである。幾人もある右大臣の娘のどの人であるかを知ることが困難なことであらう。もう逢うまいとは思わぬ様子であつた人が、なぜ手紙を往復させる方法について何ごとも教えなかつたのであるうなどとしきりに考えられるのも心が惹かれていといわねばならない。思いがけぬことの行なわれたについても、藤壺にはいつもあした隙がないと、昨夜の弘徽殿のつけこみやすかつたことと比較して主人の女御にいくぶんの軽蔑の念が起こらないでもなかつた。

この日は後宴であつた。終日そのことに携わっていて源氏はからの閑暇がなかつた。十三一絃の箏の琴の役をこの日は勤めたので

ある。昨日の宴よりも長閑な気分のどかに満ちていた。中宮は夜明けの時刻に南殿へおいでになったのである。弘徽殿の有明ありあけの月に別れた人はもう御所を出て行ったであろうかななどと、源氏の心はそのほうへ飛んで行っていた。気のきいた良清よしきよや惟光これみつに命じて見張らせておいたが、源氏が宿直所とくいじよのほうへ帰ると、

「ただ今北の御門のほうに早くから来ていました車が皆人を乗せて出てまいるところでございますが、女御さん方の実家の人たちがそれぞれ行きます中に、四位少将、右中弁などが御前から下がって来てついて行きますのが弘徽殿の実家の方々だと見受けました。ただ女房たちだけの乗ったのでないことはよく知れていまして、そんな車が三台ございました」

と報告をした。源氏は胸のとどろくのを覚えた。どんな方法によって何女なにじよであるかを知ればよいが、父の右大臣にその関係を知られて婿むことしてたいそうに待遇されるようになって、それでいいことかどうか。その人の性格も何もまだよく知らないのであるから、結婚をしてしまうのは危険である、そうかといってこのまま関係が進展しないことにも堪えられない、どうすればいいのかとつくづく物思いをしながら源氏は寝ていた。姫君がどんなに寂しいことだろう、幾日も帰らないのであるからとかわいく二条の院の人を思いやってもいた。取り替えてきた扇は、桜色の薄様を三重に張ったもので、地の濃い所に霞かすんだ月が描かいてあって、下の流れにもその影が映してある。珍しくはないが貴女きじよの手に使い馴ならされた跡がなんとなく残っていた。「草の原をば」と言った時の美しい様子が目から去らない源氏は、

「#ここから2字下げ」

世に知らぬこちこそすれ有明の月の行方を空にまがへて
「#ここで字下げ終わり」

と扇に書いておいた。

翌朝源氏は、左大臣家へ久しく行かないことも思われながら、二条の院の少女が気がかりで、寄ってなだめておいてから行こうとして自邸のほうへ帰った。二、三日ぶりに見た最初の瞬間にも若紫の美しくなったことが感ぜられた。愛嬌があつて、そしてまた凡人から見いだしがたい貴女らしさを多く備えていた。理想どおりに育て上げようとする源氏の好みにあつていくようである。教育にあたるのが男であるから、いくぶんおとなしさが少なくなりはせぬかと思われて、その点だけを源氏は危んだ。この二、三日間に宮中であつたことを語って聞かせたり、琴を教えたりなどして、日が暮れると源氏が出かけるのを、紫の女王は少女心に物足らず思つても、このごろは習慣づけられていて、無理に留めようなどとはしない。

左大臣家の源氏の夫人は例によつてすぐには出て来なかつた。いつまでも座に一人でいてつれづれな源氏は、夫人との間柄に一抹の寂しさを感じて、琴をかき鳴らしながら、「やはらかに寝る夜はなくて」と歌っていた。左大臣が来て、花の宴のおもしろかつたことなどを源氏に話していた。

「私がこの年になるまで、四代の天子の宮廷を見てまいりましたが、今度ほどよい詩がたくさんできたり、音楽のほうの才人がそろつていたりしまして、寿命の延びる気がするようなおもしろさを味わわせていただいたことはありませんでした。ただ今は専門家に名人が

多うございますからね、あなたなどは師匠の人選がよろしくてあのおできぶりだったのでしょうか。老人までも舞って出たい気がいたしましたよ」

「特に今度のために稽古などはしませんでした。ただ宮廷付きの中でのよい楽人に参考になることを教えてもらいななどしただけです。何よりも頭中将の柳花苑がみごとでした。話になって後世へ伝わる至芸だと思ったのですが、その上あなたがもし当代の礼讃に一手でも舞を見せてくださいましたら歴史上に残ってこの御代の誇りになったでしょうが」

こんな話をしていた。弁や中将も出て来て高欄に背中を押しつけながらまた熱心に器楽の合奏を始めた。

有明の君は短い夢のようなあの夜を心に思いながら、悩ましく日を送っていた。東宮の後宮へこの四月ごろはいることに親たちが決めているのが苦悶の原因である。源氏もまったく何人であるかの見分けがつかなかったわけではなかったが、右大臣家の何女であるかわからないことであつたし、自分へことさら好意を持たない弘徽殿の女御の一族に恋人を求めようと働きかけることは世間体のよろしくないことであろうとも躊躇されて、煩悶を重ねているばかりであつた。

三月の二十日過ぎに右大臣は自邸で弓の勝負の催しをして、親王方をはじめ高官を多く招待した。藤花の宴も続いて同じ日に行なわれることになっているのである。もう桜の盛りは過ぎているのであるが、「ほかの散りなんあとに咲かまし」と教えられてあつたか二本だけよく咲いたのがあつた。新築して外孫の内親王方の装着に用いて、美しく装飾された客殿があつた。派手な邸で何事も皆近代好

みであつた。右大臣は源氏の君にも宮中で逢つた日に來会を申し入れたのであるが、その日に美貌の源氏が姿を見せないのを残念に思つて、息子の四位少将を迎えに出した。

「#ここから2字下げ」

わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

「#ここで字下げ終わり」

右大臣から源氏へ贈つた歌である。源氏は御所にいた時で、帝にこのことを申し上げた。

「得意なのだね」

帝はお笑いになつて、

「使いまでもよこしたのだから行つてやるがいい。孫の内親王たちのために将来兄として力になつてもらいたいと願つている大臣の家だから」

など仰せられた。ことに美しく装つて、ずっと日が暮れてから待たれて源氏は行つた。桜の色の支那錦の直衣、赤紫の下襲の裾を長く引いて、ほかの人は皆正装の袍を着て出ている席へ、艶な宮様姿をした源氏が、多数の人に敬意を表されながらはいつて行つた。桜の花の美がこの時にわかにか減じてしまったように思われた。音楽の遊びも済んでから、夜が少しふけた時分である。源氏は酒の酔いに悩むふうをしながらそつと席を立つた。中央の寝殿に女一の宮、女三の宮が住んでおいでになるのであるが、その東の妻戸の口へ源氏はよりかかっていた。藤はこの縁側と東の対の間の庭に咲いてるので、格子は皆上げ渡されていた。御簾ぎわには女房が並んでい

た。その人たちの外へ出している袖口の重なりようの大きようさは踏歌の夜の見物席が思われた。今日などのことにつりあったことではないと見て、趣味の洗練された藤壺辺のことがなつかしく源氏には思われた。

「苦しいのにしいられた酒で私は困っています。もったいないことですがこちらの宮様にはかばっていただく縁故があると思いますから」

妻戸に添った御簾の下から上半身を少し源氏は中へ入れた。

「困ります。あなた様のような尊貴な御身分の方は親類の縁故などをおっしゃるものではございませんでしょう」

と言う女の様子には、重々しさはないが、ただの若い女房とは思われぬ品のよさと美しい感じのあるのを源氏は認めた。薫物が煙いほどに焚かれていて、この室内に起ち居する女の衣摺れの音がはなやかなものに思われた。奥ゆかしいところは欠けて、派手な現代型の贅沢さが見えるのである。令嬢たちが見物のためにこの辺へ出ているので、妻戸がしめられてあったものらしい。貴女がこんな所へ出ているというようにことに贅意は表されなかつたが、さすがに若い源氏としておもしろいことに思われた。この中のだれを恋人と見分けてよいのかと源氏の胸はとどろいた。「扇を取られてからき目を見る」(高麗人に帯を取られてからき目を見る)戯談らしくこう言つて御簾に身を寄せていた。

「変わった高麗人なのね」

と言う一人は無関係な令嬢なのであろう。何も言わずに時々一溜息の聞こえる人のいるほうへ源氏は寄つて行つて、几帳越しに手をとらえて、

「#ここから1字下げ」

「あづさ弓ゆみいるさの山にまどふかなほの見し月の影や見ゆると

「#ここで字下げ終わり」

なぜでしょう」

と当て推量に言くと、その人も感情をおさえかねたか、

「#ここから2字下げ」

心かたいる方なりませば弓張ゆみはりの月なき空に迷はましやは

「#ここで字下げ終わり」

と返辞をした。弘こきでん徽殿の月夜に聞いたのと同じ声である。源氏はうれしくてならないのであるが。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：小林繁雄

2003年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

葵

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）窮屈きゅうくつさ

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）皆一除のけさせた

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」恨めしと人を目におくこともこそ身の

「#地から3字上げ」おとろへにほかならぬかな （晶子）

天子が新しくお立ちになり、時代の空気が変わってから、源氏は何にも興味が持てなくなっていた。官位の昇進あがりした窮屈きゅうくつさもあつて、忍び歩きももう軽々しくできないのである。あちらにもこちらにも待つて訪とわれぬ恋人の悩みを作らせていた。そんな恨みの報いな

か源氏自身は中宮の御冷淡さを歎く苦しい涙ばかりを流していた。位をお退きになった院と中宮は普通の家の夫婦のように暮らしておいでになるのである。前の弘徽殿の女御である新皇太后はねたましく思召すのか、院へはおいでにならずに当帝の御所にばかり行っておいでになったから、いどみかかる競争者もなくて中宮はお氣樂に見えた。おりおりは音楽の会などを世間の評判になるほど派手にあそばして、院の陛下の御生活はきわめて御幸福なものであった。ただ恋しく思召すのは内裏においてになる東宮だけである。御後見をする人のないことを御心配になって、源氏へそれをお命じになった。源氏はやましく思いながらもうれしかった。

あの六条の御息所の生んだ前皇太子の忘れ形見の女王が齋宮に選定された。源氏の愛のたよりなさを感じている御息所は、齋宮の年少なのに托して自分も伊勢へ下つてしまおうかとその時から思っていた。この噂を院がお聞きになって、

「私の弟の東宮が非常に愛していた人を、おまえが何でもなく扱うのを見て、私はかわいそうでならない。齋宮なども姪でなく自分の内親王と同じように思っているのだから、どちらからいっても御息所を尊重すべきである。多情な心から、熱したり、冷たくなったりしてみせては世間がおまえを批難する」

と源氏へお小言をお言いになった。源氏自身の心にもそう思われることであつたから、ただ恐縮しているばかりであつた。

「相手の名譽をよく考えてやって、どの人をも公平に愛して、女の恨みを買わないようにするがいいよ」

御忠告を承りながらも、中宮を恋するあるまじい心が、こんなふうにお耳へはいつたらどうしようと恐ろしくなつて、かしこまりな

がら院を退出したのである。院までも御息所との関係を認めての仰せがあるまでになっているのであるから、女の名誉のためにも、自分のためにも軽率なことはできないと思つて、以前よりもいつその恋人を尊重する傾向にはなつてゐるが、源氏はまだ公然に妻である待遇はしないのである。女も年長である点を恥じて、しいて夫人の地位を要求しない。源氏はいくぶんそれをよいことにしている形で、院も御承知になり、世間でも知らぬ人がないまでになつてな
 お今も誠意を見せないと女は深く恨んでゐた。この噂が世間から伝わつてきた時、式部卿の宮の朝顔の姫君は、自分だけは源氏の甘いささやきに酔つて、やがては苦い悔いの中に自己を見いだす愚を学ぶまいと心に思うところがあつて、源氏の手紙に時には短い返事を書くことも以前はあつたが、それももう多くの場合書かぬことになつた。そうといつても露骨に反感を見せたり、輕蔑的な態度をとつたりすることのないのを源氏はうれしく思つた。こんな人であるから長い年月の間忘れることもなく恋しいのであると思つてゐた。左大臣家にいる葵夫人（この人のことを主にして書かれた巻の名を用いて書く）はこんなふう源氏の心が幾つにも分かれてゐるのを憎みながらも、たいしてほかの恋愛を隠そうともしない人には、恨みを言つても言いがないと思つてゐた。夫人は妊娠してゐて気分が悪く心細い氣になつてゐた。源氏はわが子の母にならうとする葵夫人にまた新しい愛を感じ始めた。そしてこれも喜びながら不安でならなく思ふ舅夫婦とともに妊婦の加護を神仏へ祈ることにとめてゐた。こうしたことのある間は源氏も心に余裕が少なくて、愛してはいながらも訪ねて行けない恋人の家が多かつたであらうと思われ。

そのころ前代の加茂かもの齋院さいいんがおやめになつて皇太后腹の院の女三の宮が新しく齋院に定まつた。院も太后もことに愛しておいでになつた内親王であるから、神の奉仕者として常人と違つた生活へおはいりになることを御親心に苦しく思召おほしめしたが、ほかに適当な方がなかつたのである。齋院就任の初めの儀式は古くから決まつた神事の一つで簡単に行なわれる時もあるが、今度はきわめて派手はでなふうに行なわれるらしい。齋院の御勢力の多少にこんなこともよるらしいのである。御禊ごけいの日に供奉くふする大臣は定員のほかに特に宣旨せんじがあつて源氏の右大将をも加えられた。物見車で出ようとする人たちは、その日を楽しみに思い晴れがましくも思つていた。

二条の大通りは物見の車と人とで隙すきもない。あちこちにできた棧敷さきは、しつらいの趣味のよさを競つて、御簾みすの下から出された女の袖口そでぐちにも特色がそれぞれあつた。祭りも祭りであるがこれらは見物する価値を十分に持つている。左大臣家にいる葵夫人はそうした所へ出かけるようなことはあまり好まない上に、生理的に悩ましいころであつたから、見物のことを、念頭に置いていながつたが、

「それではつまりません。私たちどうして見物に出ますのではみじめで張り合いがございません、今日はただ大将様をお見上げするこゝとに興味が集まつておりまして、労働者も遠い地方の人までも、はるばると妻や子をつれて京へ上つて来たりしておりますのに奥様がお出かけにならないのはあまりでございます」

と女房たちの言うのを母君の宮様がお聞きになつて、

「今日はちようどあなたの気分もよくなつてのことだから。出ないことは女房たちが物足りなく思うことだし、行つていらつしやい」

こうお言いになった。それでにわかとまわに供廻りを作らせて、葵夫人は御褌みそぎの行列の物見車の人となったのである。邸やしきを出たのはずっと朝もおそくなつてからだつた。この一行はそれほどたいそうにも見せないふうで出た。車のこみ合う中へ幾つかの左大臣家の車が続いて出て来たので、どこへ見物の場所を取ろうかと迷うばかりであつた。貴族の女の乗用らしい車が多くとまつていて、つまらぬ物の少ない所を選んで、じゃまになる車は皆一除のけさせた。その中に外見そとみは網代車あじろぐるまの少し古くなつた物にすぎぬが、御簾の下のとばりの好みもきわめて上品で、ずっと奥のほうへ寄つて乗つた人々の服装の優美な色も童女の上着の汗かざみ襟の端の少しづつ洩もれて見える様子にも、わざわざ目立たぬふうにして貴女きじよの来ていることが思われるような車くるまが二台あつた。

「このお車はほかのとは違う。除のけられてよいようなものじゃない」と言つてその車の者は手を触れさせない。双方に若い従者があつて、祭りの酒に酔つて気の立つた時にすることははなはだしく手荒いのである。馬に乗つた大臣家の老家従などが、

「そんなにするものじゃない」

と止めているが、勢い立つた暴力を止めることは不可能である。

齋宮さいくうの母君の御息所みやすどころが物思いの慰めになろうかと、これは微行で来ていた物見車であつた。素知らぬ顔をしていても左大臣家の者は皆それを心では知っていた。

「それくらいのことではいばらせないぞ、大将さんの引きがあると思ふのかい」

などと言うのを、供の中には源氏の召使も混じつていたのである

から、抗議をすれば、いつそう面倒めんどうになることを恐れて、だれも知らない顔を作っているのである。とうとう前へ大臣家の車を立て並べられて、御息所の車は葵夫人の女房が乗った幾台かの車の奥へ押し込まれて、何も見えないことになった。それを残念に思うよりも、こんな忍び姿の自身のだれであるかを見現わしてののしられていることが口惜くちおしくてならなかった。車の轆ながえを据すえる台なども脚あしは皆折られてしまつて、ほかの車の胴へ先を引き掛けてようやく中心を保たせてあるのであるから、体裁の悪さもはなはだしい。どうしてこんな所へ出かけて来たのかと御息所は思つのであるが今さらしかたもないのである。見物するのをやめて帰ろうとしたが、他の車を避よけて出て行くことは困難でできそうもない。そのうちに、

「見えて来た」

と言う声がした。行列をいうのである。それを聞くと、さすがに恨めしい人の姿が待たれるというのも恋する人の弱さではなからうか。

源氏は御息所の来ていることなどは少しも気がつかないのであるから、振り返つてみるはずもない。気の毒な御息所である。前から評判のあつたとおりに、風流を尽くした物見車にたくさんの女の乗り込んでいる中には、素知らぬ顔は作りながらも源氏の好奇心を惹ひくのもあつた。微笑ほほえみを見せて行くあたりには恋人たちの車があつたことと思われる。左大臣家の車は一目で知れて、ここは源氏もきわめてまじめな顔をして通つたのである。行列の中の源氏の従者がこの一団の車には敬意を表して通つた。侮辱されていることをまたこれによつても御息所はいたましいほど感じた。

「#ここから2字下げ」

影をのみみたらし川のつれなさに身のうきほどぞいとど知らるる
「#ここで字下げ終わり」

こんなことを思って、涙のこぼれるのを、同車する人々に見られることを御息所は恥じながらも、また常よりもいつそうきれいだつた源氏の馬上の姿を見なかつたならとも思われる心があつた。行列に参加した人々は皆一分相応ぶんに美しい装いで身を飾っている中でも高官は高官らしい光を負っていると見えたが、源氏に比べるとだれも見栄みはえがなかつたようである。大将の臨時の隨身を、殿上にも勤める近衛このえの尉じゆうがするようなことは例の少ないことで、何かの晴れの行幸などばかりに許されることであつたが、今日は蔵人くらひんどを兼ねた右近衛このえの尉じゆうが源氏に従っていた。そのほかの隨身も顔姿ともによい者ばかりが選ばれてあつて、源氏が世の中で重んぜられていることは、こんな時にもよく見えた。この人にはなびかぬ草木もないこの世であつた。壺装束つぼぢゆうといつて頭の髪の上から上着をつけた、相当な身分の女たちや尼さんなども、群集の中に倒れかかるようになって見物していた。平生こんな場合に尼などを見ると、世捨て人がどうしてあんなことをするかと醜く思われるのであるが、今日だけは道理である。光源氏を見ようとするのでからと同情を引いた。着物の背中を髪でふくらませた、卑しい女とか、労働者階級の者までも皆手を額に当てて源氏を仰いで見て、自身が笑えばどんなおかしい顔になるかも知らずに喜んでいた。また源氏の注意を惹ひくはずもないちよつとした地方官の娘なども、せいっぱいに装った車に乗って、気どつたふうで見物しているとか、こんないろいろな物で一条おおじの大路

はうずまっていた。源氏の情人である人たちは、恋人のすばらしさを眼前に見て、今さら自身の価値に反省をしいられた気がした。だれもそうであった。式部卿の宮は^{さじき}棧敷で見物しておいでになった。

まぶしい気がするほどきれいになっていく人である。あの美に神が心を惹^ひかれそうな気がすると宮は不安をさえお感じになった。宮の朝顔の姫君はよほど以前から今日までも忘れずに愛を求めてくる源氏には普通の男性に見られない誠実さがあるのであるから、それほどの志を持った人は少々欠点があっても好意が持たれるのに、ましてこれほどの美貌^{びぼう}の主であったかと思うと一種の感激を覚えた。けれどもそれは結婚をしてもよい、愛に報いようとまでする心の動きではなかった。宮の若い女房たちは聞き苦しいまでに源氏をほめた。

翌日の加茂祭りの日に左大臣家の人々は見物に出なかった。源氏に御^{みそぎ}褌の日の車の場所争いを詳しく告げた人があったので、源氏は御^{みやすどころ}息所に同情して葵夫人の態度を飽き足らず思った。貴婦人としての資格を十分に備えながら、情味に欠けた強い性格から、自身はそれほどに憎んではいなかったであろうが、そうした一人の男を巡って愛の生活をしている人たちの間はまた一種の愛で他を見るものであることを知らない女主人の意志に習って付き添った人間が御息所を侮辱したに違いない、見識のある上品な貴女である御息所はどんなにいやな気がさせられたであろうと、気の毒に思っただけで訪問したが、齋宮がまだ邸^{やしき}においでになるから、神への遠慮という口実で逢^あつてくれなかった。源氏には自身までもが恨めしくてならない、現在の御息所の心理はわかっていながらも、どちらもこんなに自己を主張するようなことがなくて柔らかに心が持てないのであるうか

と歎息たんそくされるのであった。

祭りの日の源氏は左大臣家へ行かずに二条の院にいた。そして町へ見物に出て見る気になっていたのである。西の対へ行つて、惟光これみつに車の用意を命じた。

「女連も見物に出ますか」

と言いながら、源氏は美しく装うた紫の姫君の姿を笑顔えがおでながめていた。

「あなたはぜひおいでなさい。私がいっしょにつれて行きましょね」

平生よりも美しく見える少女の髪を手でなでて、

「先を久しく切らなかつたね。今日は髪そぎによい日だろう」

源氏はこう言つて、陰陽道おんみょうじゆの調べ役を呼んでよい時間を聞いたりしながら、

「女房たちは先に出かけるといい」

と言つていた。きれいに装った童女たちを点見したが、少女らしくかわいくそろえて切られた髪すその裾が紋織はでの派手はかまな袴にかかつているあたりがことに目を惹ひいた。

「女王にょおうさんの髪は私が切つてあげよう」

と言つた源氏も、

「あまりたくさんで困るね。大人おとなになったらしまいはどんなにしろつと髪は思っているのだろう。」

と困つていた。

「長い髪の人といつても前の髪は少し短いものだけけれど、あまりそろい過ぎているのはかえつて悪いかもしれない」

こんなことも言いながら源氏の仕事は終わりになった。

「千尋」

と、これは髪そぎの祝い言葉である。少納言は感激していた。

「#ここから2字下げ」

はかりなき千尋の底の海松房の生ひ行く末はわれのみぞ見ん

「#ここで字下げ終わり」

源氏がこう告げた時に、女王は、

「#ここから2字下げ」

千尋ともいかでか知らん定めなく満ち干る潮ののどけからぬに

「#ここで字下げ終わり」

と紙に書いていた。貴女らしくてしかも若やかに美しい人に源氏は満足を感じていた。

今日も町には隙間なく車が出ていた。馬場殿あたりで祭りの行列を見ようとするのであったが、都合のよい場所がない。

「大官連がこの辺にはたくさん来ていて面倒な所だ」

源氏は言つて、車をやるのでなく、停めるのもなく、躊躇して
いる時に、よい女車で人がいっぱいに乗りにこぼれたのから、扇を出して源氏の供を呼ぶ者があつた。

「ここへおいでになりませんか。こちらの場所をお譲りしてもよろしいですよ」

という挨拶である。どこの風流女のすることであるうと思ひながら、そこは実際よい場所でもあつたから、その車に並べて源氏は車

を据えさせた。

「どうしてこんなよい場所をお取りになったかとうらやましく思いました」

と言うと、品のよい扇の端を折って、それに書いてよこした。

「#ここから2字下げ」

はかなしや人のかざせるあふひ故神ゆめのしるしの今日を待ちける

「#ここから1字下げ」

注連しめを張っておいでになるのですもの。

「#ここで字下げ終わり」

源典侍げんてんじの字であることを源氏は思い出したのである。どこまで若返りたいたのであろうと醜く思った源氏は皮肉に、

「#ここから2字下げ」

かざしける心ぞ仇あだに思ほゆる八十やそ氏人うぢになべてあふひを

「#ここで字下げ終わり」

と書いてやると、恥ずかしく思った女からまた歌が来た。

「#ここから2字下げ」

くやくも挿かきしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

「#ここで字下げ終わり」

今日の源氏が女の同乗者を持っていて、簾みすさえ上げずに来ている

のをねたましく思う人が多かった。御禊の日の端麗だった源氏が今日はいくつうにだふうに物見車の主になっている、並んで乗っているほどの人は並み並みの女ではないはずであるところなことを皆想像したものである。源典侍では競争者と名のつて出られても問題にはならないと思うと、源氏は少しの物足りなさを感じたが、源氏の愛人がいると思うと晴れがましくて、源典侍のようなあつかましい老女でもさすがに困らせるような戯談（じゆたん）もあまり言い出せないのである。

御息所（みやすどころ）の煩悶（はんもん）はもう過去何年かの物思いとは比較にならないほどのものになっていた。信頼のできるだけの愛を持っていない人と源氏を決めてしまいながらも、断然別れて齋宮について伊勢へ行ってしまふことは心細いことのようにも思われたし、捨てられた女と見られたくない世間体も気になった。そうかと言って安心して京にいくことも、全然無視された車争いの日の記憶がある限り可能なことではなかった。自身の心を定めかねて、寝てもさめても煩悶をするせいか、次第に心がからだから離れて行き、自身は空虚なものになつていくという気分を味わうようになって、病氣らしくなった。源氏は初めから伊勢へ行くことに断然不賛成であるとも言いつらせずに、

「私のようなつまらぬ男を愛してくださいましたあなたが、いやにおなりになって、遠くへ行ってしまうという気になられるのはもっともですが、寛大な心になってくださって変わらぬ恋を続けてくださることで前生（ぜんしやう）の因縁（いんげん）を全く（まこと）したいと私は願っている」

こんなふうにだけ言って留めているのであったから、そうした物思いも慰むかと思つて出た御禊川（みそぎがわ）に荒い瀬が立つて不幸を見たので

ある。

葵夫人は物怪がついたふうの容体で非常に悩んでいた。父母たちが心配するので、源氏もほかへ行くことが遠慮される状態なのである。二条の院などへもほんの時々帰るだけであった。夫婦の中は睦まじいものではなかったが、妻としてどの女性よりも尊重する心は十分源氏にあつて、しかも妊娠しての煩いであつたから憐みの情も多く加わつて、修法や祈祷も大臣家でする以外にいろいろとさせていた。物怪、生霊というようなものがたくさん出て来て、いろいろな名乗りをする中に、仮に人へ移そうとしても、少しも移らずにただじつと病む夫人にばかり添つていて、そして何もはげしく病人を悩まそうとするのでなく、また片時も離れない物怪が一つあつた。どんな修験僧の技術でも自由にすることのできない執念のあるのは、並み並みのものであるとは思われなかった。左大臣家の人たちは、源氏の愛人をだれかれと数えて、それらしいのを求めると、結局六条の御息所と二条の院の女は源氏のことには愛している人であるだけ夫人に恨みを持つことも多いわけであると、こう言つて、物怪に言わせる言葉からその主を知ろうとしても、何の得るところもなかった。物怪といつても、育てた姫君に愛を残した乳母というような人、もしくはこの家を代々敵視して来た亡魂とかが弱り目につけこんでくるような、そんなのは決して今度の物怪の主たるものではないらしい。夫人は泣いてばかりいて、おりおり胸がせき上がってくるようにして苦しがるのである。どうなることかとだれもだれも不安でならなかった。院の御所からも始終お見舞いの使いが来る上に祈祷までも別にさせておいでになつた。こんな光栄を持つ夫人に万一のことがなければよいとだれも思つた。世間じゅうが惜しんだ

り歎なげいたりしているこの噂うわさも御息所を不快な気分にした。これまでは決してこうではなかったのである。競争心を刺戟しげきしたのは車争いという小さいことにすぎないが、それがどれほど大きな恨みになっているかを左大臣家の人は想像もしなかった。

物思いは御息所の病をますます昂こつじさせた。齋宮をはばかりて、他の家へ行って修法などをさせていた。源氏はそれを聞いてどんなふうが悪いのかと哀れに思つて訪ねて行った。自邸でない人の家であつたから、人目を避けてこの人たちは逢つた。本意ではなくて長く逢いに来なかつたことを御息所の気も済むほどこまごまと源氏は語つていた。妻の病状も心配げに話すのである。

「私はそれほど心配しているのではないのですが、親たちがたいへんな騒ぎ方をしていますから、気の毒で、少し容体がよくなるまでは謹慎を表していようと思つただけなのです。あなたが心を大きく持つて見ていてくださつたら私は幸福です」

などと言う。女に平生よりも弱々しいふうの見えるのを、もつともなことに思つて源氏は同情していた。疑いも恨みも氷解したわけでもなく源氏が帰つて行く朝の姿の美しいのを見て、自分はとうていこの人を離れて行きうるものではないと御息所は思った。正夫人である上に子供が生まれるとなれば、その人以外の女性に持つている愛などはさめて淡うすいものになつていくであろう時、今のように毎日待ち暮らすことも、その辛抱しんぱうに命の続かなくなることであろうと、それでいてまた思われもして、たまたま逢つて物思いの決して少なくなはならない御息所へ、次の日は手紙だけが暮れてから送られた。

「#ここから1字下げ」

この間うち少し癒よくなつていたようでした病人にまたにわかには悪い

様子が見えてきて苦しんでいるのを見ながら出られないのです。

「#ここで字下げ終わり」

とあるのを、例の上手な口実である、と見ながらも御息所は返事を書いた。

「#ここから2字下げ」

袖濡るるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子の自らそ憂き

「#ここから1字下げ」

古い歌にも「悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」とございます。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。幾人かの恋人の中でもすぐれた字を書く人であると、源氏は御息所の返事をながめて思いながらも、理想どおりにこの世はならないものである。性質にも容貌にも教養にもとりどりの長所があつて、捨てることができず、ある一人に愛を集めてしまふこともできないことを苦しく思った。そのまた返事を、もう暗くなっていたが書いた。

「#ここから1字下げ」

袖が濡れるとお言いになるのは、深い恋を持つてくださらない方の恨みだと思えます。

「#ここから2字下げ」

あさみにや人は下り立つわが方は身もそばつまで深きこひぢを

「#ここから1字下げ」

この返事を口ずから申さないで、筆をかりてしますことはどれほど苦痛なことだかしれません。

「#ここで字下げ終わり」

などと言つてあつた。

葵の君の容体はますます悪い。六条の御息所の生霊であるとも、その父である故人の大臣の亡霊が憑ついてとも言われる噂うわさの聞きこえて来た時、御息所は自分自身の薄命うすなづかを歎なげくほかに人を咀くう心などはないが、物思いがつのればからだから離れることのあるという魂はあるいはそんな恨みを告げに源氏の夫人の病床へ出沒するかもしれないと、こんなふうふうに悟さとられることもあるのであつた。物思いの連続つづといつてよい自分の生涯せいがいの中に、いまだ今度ほど苦しく思ったことはなかつた。御禊みそぎの日の屈辱感から燃え立つた恨みは自分でももう抑制おさめられない火になつてしまつたと思つている御息所は、ちよつとでも眠ると見る夢は、姫君らしい人が美しい姿ですわつていゝる所へ行つて、その人の前では乱暴な自分になつて、武者ぶりついたり撲なぐつたり、現実の自分がなしうることでない荒々しい力が添そう、こんな夢で、幾度となく同じ筋を見る、情けないことである、魂がからだを離れて行つたのであろうかと思われる。失神状態に御息所がなつてゐる時ときもあつた。ないことも悪くわるくいふのが世間である、ましてこの際の自分は彼らの慢罵まんば欲よくを満足させるのによい人物であるうと思つと、御息所は名譽の傷つけられることが苦しくてならないのである。死んだあとにこの世の人へ恨みの残つた靈魂が現われるのはありふれた事実であるが、それさえも罪の深さの思われる悲しむべきことであるのに、生きてゐる自分がそつした悪名を負うとい

うのも、皆源氏の君と恋する心がもたらした罪である、その人への愛を今自分は根柢こんていから捨てねばならぬと御息所は考えた。努めてそうしようとしても実現性のないむずかしいことに違いない。

齋宮は去年にもう御所の中へお移りになるはずであったが、いろいろな障さわりがあつて、この秋いよいよ潔齋生活の第一歩をお踏み出しになることとなつた。そしてもう九月からは嵯峨さかの野の宮へおはいりになるのである。それとこれと二度ある御禊の日の仕度したくに邸ねの人々は忙殺されているのであるが御息所は頭をぼんやりとさせて、寝て暮らすことが多かつた。邸の男女はまたこのことを心配して祈祷を頼んだりしていた。何病というほどのことはなくて、ぶらぶらと病んでいるのである。源氏からも始終見舞いの手紙は来るが、愛する妻の容体の悪さは、自分でこの人を訪ねて来ることなどをできなくしているようであつた。

まだ産期には早いように思つて一家の人々が油断しているうちに葵の君はにわかにに生みの苦しみにもだえ始めた。病気の祈祷のほかにに安産の祈りも数多く始められたが、例の執念深い一つの物怪もののけだけはどうしても夫人から離れない。名高い僧たちもこれほどの物怪には出あつた経験がないと言つて困つていた。さすがに法力におさえられて、哀れに泣いている。

「少しゆるめてくださいな、大将さんにお話しすることがあります」
 そう夫人の口から言うのである。

「あんなこと。わけがありますよ。私たちの想像が当たりますよ」
 女房はこんなことも言つて、病床に添え立てた几帳きちょうの前へ源氏を導いた。父母たちは頼み少なくなつた娘は、良人おとこに何か言い置くこ

とがあるのかもしれないと思つて座を避けた。この時に加持をする僧が声を低くして法華經ほけきょうを読み出したのが非常にありがたい氣のすることであつた。几帳たの垂れ絹ぎぬを引き上げて源氏が中を見ると、夫人は美しい顔をして、そして腹部だけが盛り上がった形で寝ていた。他人でも涙なしには見られないのを、まして良人である源氏が見て惜しく悲しく思うのは道理である。白い着物を着ていて、顔色は病熱ではなやかになつてゐる。たくさん長い髪は中ほどで束ねられて、枕まくらに添えてある。美女がこんなふうでゐることは最も魅惑的なものであると見えた。源氏は妻の手を取つて、

「悲しいじゃありませんか。私にこんな苦しい思いをおさせになる」

多くものが言われなかつた。ただ泣くばかりである。平生は源氏に真正面から見られるととてもきまりわるそうにして、横へそらすその目でじつと良人を見上げているうちに涙がそこから流れて出るのであつた。それを見て源氏が深い憐あわれみを感じたことはいうまでもない。あまりに泣くを見て、残して行く親たちのことを考えたり、また自分を見て、別れの堪えがたい悲しみを覚えるのであろうと源氏は思った。

「そんなに悲しまないでいらつしやい。それほど危険な状態でないと私は思う。またたとえどうなつても夫婦は来世でも逢えるのだからね。御両親も親子の縁の結ばれた間柄はまた特別な縁で来世で再会ができるのだと信じていらつしやい」

と源氏が慰めると、

「そうじゃありません。私は苦しくてなりませんからしばらく法力をゆるめていただきたいとあなたにお願いしようとしたのです。私

はこんなふうにしてこちらへ出て来ようなどとは思わないのですが、物思いをする人の魂というものはほんとうに自分から離れて行くものなのです」

なつかしい調子でそう言ったあとで、

「#ここから2字下げ」

歎きわび空に乱るるわが魂を結びとめてよ下がひの棲

「#ここで字下げ終わり」

という声も様子も夫人ではなかった。まったく変わってしまったのである。怪しいと思つて考えてみると、夫人はすっかり六条の御息所になっていた。源氏はあさましかった。人がいろいろな噂をしても、くだらぬ人が言い出したこととして、これまで源氏の否定してきたことが眼前に事実となつて現われているのであつた。こんなことがこの世にありもするのだと思つと、人生がいやなものに思われ出した。

「そんなことをお言いになつても、あなたがだれであるか私は知らない。確かに名を言つてごらんさい」

源氏がこう言つたのちのその人はますます御息所そっくりに見えるた。あさましいなどという言葉では言い足りない悪感を源氏は覚えた。女房たちが近く寄つて来る気配にも、源氏はそれを見現わされはせぬかと胸がとどろいた。病苦にもだえる声が少し静まつたのは、ちよつと楽になつたのではないかと宮様が飲み湯を持たせておよこしになつた時、その女房に抱き起こされて間もなく子が生まれた。源氏が非常にうれしく思つた時、他の人間に移してあつたのが皆一

口惜しがって物怪は騒ぎ立った。それにまだ後産も済まぬのであるから少なからぬ不安があった。良人と両親が神仏に大願を立てたのはこの時である。そのせいであつたかすべてが無事に済んだので、叡山の座主をはじめ高僧たちが、だれも皆誇らかに汗を拭い拭い帰つて行つた。これまで心配をし続けていた人はほつとして、危険もこれで去つたという安心を覚えて恢復の曙光も現われたとだれもが思った。修法などはまた改めて行なわせていたが、今目前に新しい命が一つ出現したことに對する歡喜が大きくて、左大臣家は昨日に変わる幸福に満たされた形である。院をはじめとして親王方、高官たちから派手な産養の賀宴が毎夜持ち込まれた。出生したのは男子でさえもあつたからそれらの儀式がことさらはなやかであつた。

六条の御息所はそういう取り沙汰を聞いても不快でならなかつた。夫人はもう危いと聞いていたのに、どうして子供が安産できたのであろうと、こんなことを思つて、自身が失神したようにしていた幾日かのことを、静かに考えてみると、着た衣服などにも祈りの僧が焚く護摩の香が沁んでいた。不思議に思つて、髪を洗つたり、着物を変えたりしても、やはり改まらない。御息所は世間で言う生靈の説の否認しがたいことを悲しんで、人がどう批評するであろうかと、だれに話してみることもないだけに心一つで苦しんでいた。いよいよ自分の恋愛を清算してしまわないではならないと、それによつてまた強く思うようになった。

少し安心を得た源氏は、生靈をまざまざと目で見、御息所の言葉を聞いた時のことを思い出しながらも、長く訪ねて行かない心苦しさを感じたり、また今後御息所に接近してもあの醜い記憶が心にある間は、以前の感情でその人が見られるかということ自身は自身の心な

がらも疑わしくて、苦悶くもんをしたりしながら、御息所の体面を傷つけまいために手紙だけは書いて送った。産前の重かった容体から、油断のできないように両親たちは今も見て、心配しているのが道理なことことに思えて、源氏はまだ恋人などの家を微行で訪うようなことことをしないのである。夫人はまだ衰弱がはなはだしくて、病気から離れたとは見えなかったから、夫婦らしく同室で暮らすことはなくて、源氏は小さいながらもまばゆいほど美しい若君の愛に没頭していた。非常に大事がつているのである。自家の娘から源氏の子が生まれて、すべてのことが理想的になっていくと、大臣は喜んでいたのであるが、葵夫人あおいの恢復かいふくが遅々としてしているのだけを気がかりに思っていた。しかしあんなに重体でいたあとはこれを普通としなければならぬと思つてもいるであろうから、大臣の幸福感はたいして割引きしたものである。若君の目つきの美しさなどが東宮と非常によく似ているのを見ても、何よりも恋しく幼い皇太弟をお思いする源氏は、御所のそちらへ上がらないでいることに堪えられなくなつて、出かけようとした。

「御所などへあまり長く上がらないで気が済みませんから、今日私をはじめあなたから離れて行こうとするのですが、せめて近い所ところに行つて話をしてからにしたい。あまりよそよそし過ぎます。こんなのでは」

と源氏は夫人へ取り次がせた。

「ほんとうにそうでございますよ。体裁を気にあそばすあなた様さまがたのお間柄ではないのでございますから。あなた様が御衰弱ごじやくじやくしていらつしゃいまして、物越しなどでお話しになればいかがでしょう」

こう女房が夫人に忠告をして、病床の近くへ座を作ったので、源氏は病室へは行って行って話をした。夫人は時々返辞もするがまだずいぶん様子が弱々しい。それでも絶望状態になっていたところのことと思うと、夢のような幸福にいと源氏は思わずにはいられないのである。不安に堪えられなかったころのことを話しているうちに、あの呼吸も絶えたように見えた人が、にわかにもいろいろなことを言い出した光景が目には浮かんで来て、たまたまずいやな気がするので源氏は話を打ち切ろうとした。

「まああまり長話はよしましょう。いろいろと聞いてほしいこともありますかね。まだまだあなたはだるそうで気の毒だから」

こう言ったあとで、

「お湯をお上げするがいい」

と女房に命じた。病妻の良人らしいこんな気のつかい方をする源氏に女房たちは同情した。非常な美人である夫人が、衰弱しきつて、あるかないかのようになって寝ているのは痛々しく可憐であった。少しの乱れもなくはらはらと枕にかかった髪のはやしきは男の魂を奪うだけの魅力があった。なぜ自分は長い間この人を飽き足らない感情を持って見ていたのであるかと、不思議なほど長くじつと源氏は妻を見つめていた。

「院の御所などへ伺って、早く帰って来ましょう。こんなふうにして始終逢うことができればうれいでしょうが、宮様がじつと付いていらつしやるから、ぶしつけにならないかと思つて御遠慮しながら蔭で煩悶をしていた私にも同情ができるでしょう。だから自分でも早くよくなるうと努めるようにしてね、これまでのように私たちがでいっしょにいられるようになってください。あまりお母様にあな

たが甘えるものだから、あちらでもいつまでも子供のようにお扱いになるのですよ」

などと言い置いてきれいに装束した源氏の出かけるのを病床の夫人は平生よりも熱心にながめていた。

秋の官吏の昇任の決まる日であつたから、大臣も参内したので、子息たちもそれぞれの希望があつてこのごろは大臣のそばを離れまいとしているのであるから皆続いてそのあとから出て行つた。いる人数が少なくなつて、邸内が静かになつたところに、葵の君はにわか胸がせきあげるようにして苦しみ出したのである。御所へ迎えの使いを出す間もなく夫人の息は絶えてしまつた。左大臣も源氏もあわてて退出して来たので、除目の夜であつたが、この障りで官吏の任免は決まらずに終わつた形である。若い夫人の突然の死に左大臣邸は混乱するばかりで、夜中のことであつたから觀山の座主も他の僧たちも招く間がなかつた。もう危篤な状態から脱したものと、ただれの心にも油断のあつた隙に、死が忍び寄つたのであるから、皆一 呆然としてゐる。所々の慰問使が集まつて来ていても、挨拶の取り次ぎを託されるような人もなく、泣き声ばかりが邸内に満ちてゐた。大臣夫婦、故人の良人である源氏の歎きは極度のものではあつた。これまで物怪のために一時的な仮死状態になつたこともたびたびあつたのを思つて、死者として枕を直すこともなく、二、三日はなお病夫人として寝させて、蘇生を待つていたが、時間はすでに亡骸であることを証明するばかりであつた。もう死を否定してみる理由は何一つないことをだれも認めたのである。源氏は妻の死を悲しむとともに、人生の厭わしさが深く思われて、所々から寄せてくる甲問の言葉も、どれもうれしく思われなかつた。院もお悲しみになつて

お使いをくだされた。大臣は娘の死後の光栄に感激する涙も流しているのである。人の忠告に従い蘇生の術として、それは遺骸いがいに対して傷ましい残酷な方法で行なわれることまでも大臣はさせて、娘の息の出てくることを待っていたが皆だめであった。もう幾日かになるのである。いよいよ夫人を鳥辺野とりへのの火葬場へ送ることになった。こうしてまた人々は悲しんだのである。左大臣の愛嬢として、源氏の夫人として葬送の式つらなに列る人、念仏のために集められた寺々の僧、そんな人たちで鳥辺野がうずめられた。院はもとよりのこと、お后方、東宮から賜わった御使いが次々に葬場へ参着して弔詞を読んだ。悲しみにくれた大臣は立ち上がる力も失っていた。

「こんな老人になってから、若盛りの娘に死なれて無力に私は泣いているじゃないか」

恥じてこう言つて泣く大臣を悲しんで見ぬ人もなかつた。夜通しかかつたほどの大がかりな儀式であつたが、終局は煙にすべく遺骸を広い野に置いて来るだけの寂しいことになって皆早暁に帰つて行った。死はそうしたものであるが、前さきに一人の愛人を死なせただけの経験よりない源氏は今また非常な哀感を得たのである。八月の二十日過ぎの有明月ありあけづきのあるところで、空の色も身にしむのである。亡なき子を思つて泣く大臣の悲歎に同情しながらも見るに忍びなくて、源氏は車中から空ばかりを見ることになった。

「#ここから2字下げ」

昇のぼりぬる煙はそれと分わかかねどもなべて雲井の哀れなるかな

「#ここで字下げ終わり」

源氏はこう思ったのである。家へ帰っても少しも眠れない。故人と二人の長い間の夫婦生活を思い出して、なぜ自分は妻に十分の愛を示さなかったのであろう、信賴していてさえもらえば、異性に対する自分の愛は妻に帰るよりほかはないのだと暢氣のんきに思つて、一時的な衝動を受けては恨めしく思わせるような罪をなぜ自分は作ったのであろう。そんなことで妻は生涯せいがい心から打ち解けてくれなかつたのだなどと、源氏は悔やむのであるが今はもう何のかいのある時でもなかつた。淡鈍色うすびの喪服を着るのも夢のような気がした。もし自分が先に死んでいたら、妻はこれよりも濃い色の喪服を着て歎いているであらうと思つてもまた源氏の悲しみは湧わき上がってくるのであつた。

「#ここから2字下げ」

限りあればうす墨衣浅けれど涙ぞ袖そでを淵ふちとなしける

「#ここで字下げ終わり」

と歌つたあとでは念誦ねんずをしている源氏の様子は限りもなく艶えんであつた。経を小声で読んで「法界一三昧普賢大士さんまい」と言つている源氏は、仏勤めをし馴なれた僧よりもかえつて尊く思われた。若君を見ても「結び置かたみの子だになかりせば何に忍ぶの草を摘ままし」こんな古歌が思われていつそう悲しくなつたが、この形見だけでも残して行つてくれたことに慰んでいなければならぬとも源氏は思つた。左大臣の夫人の宮様は、悲しみに沈んでお寝やすみになつたきりである。お命も危あぶなく見えることにまた家の人々はあわてて祈禱きとうなどをさせていた。寂しい日はずんずん立つていつて、もう四十九日の

法会ほうえの仕度したくをするにも、宮はまったく予期あそばさないことであつたからお悲しかった。欠点の多い娘でも死んだあとでの親の悲しみはどれほど深いものかしのれない、まして母君のお失いになつたのは、貴女きじよとして完全に近いほどの姫君なのであるから、このお歎きは至極道理なことに申さねばならない。ただ姫君が一人であるということも寂しくお思いになつた宮であつたから、その唯一の姫君をお失いになつたお心は、袖そでの上に置いた玉の砕けたよりももつと惜しく残念なことでありになつたに違いない。

源氏は二条の院へさえもまったく行かないのである。専念に仏勤めをして暮らしているのであつた。恋人たちの所へ手紙だけは送つていた。六条の御息所みやすどころは左衛門さえもんの庁舎へ齋宮がおはいりになつたので、いっそう嚴重になつた潔斎的な生活に喪中の人の交渉を遠慮する意味に託たくしてその人へだけは消息もしないのである。早くから悲觀的に見ていた人生がいっそうこのごろいとわしくなつて、将来のことまでも考えてやらねばならぬ幾人かの情人たち、そんなものなければ僧になつてしまふがと思う時に、源氏の目に真先まっさきに見えるものは西の対の姫君の寂しがつている面影であつた。夜は帳台の中へ一人で寝た。侍女たちが夜の宿直とらいにおおぜいでそれを巡つてすわつていても、夫人のそばにいないことは限りもない寂しいことであつた。「時しもあれ秋やは人の別るべき有るを見るだに恋しきものを」こんな思いで源氏は寝ざめがちであつた。声のよい僧を選んで念仏をさせておく、こんな夜の明け方などの心持ちは堪えられないものであつた。秋が深くなつたこのごろの風の音ねが身にしむのを感じる、そうしたある夜明けに、白菊つすいろうが淡色を染めだした花の枝に、青がかった灰色の紙に書いた手紙を付けて、置いて行つた使いがあ

った。

「気どったことをだれがするのだらう」

と源氏は言つて、手紙をあけて見ると御息所の字であつた。

「#ここから1字下げ」

今まで御遠慮してお尋ねもしないでおりました私の心持ちはおわかりになつていらつしやることでしょうか。

「#ここから2字下げ」

人の世を哀れときくも露けきにおくるる露を思ひこそやれ

「#ここから1字下げ」

あまりに身にしむ今朝けさの空の色を見ていまして、つい書きたくなつてしまつたのです。

「#ここで字下げ終わり」

平生よりもいっそうみごとに書かれた字であると源氏はさすがにすぐに下へも置かれずにながめながらも、素知らぬふりの慰問状であると思うと恨めしかつた。たとえあのことがあつたとしても絶交するのは残酷である、そしてまた名誉を傷つけることになつてはならないと思つて源氏は煩悶はんもんした。死んだ人とはにかくあれだけの寿命だつたに違いない。なぜ自分の目はああした明らかかな御息所の生いき霊よを見たのであろうとこんなことを源氏は思った。源氏の恋が再び帰りがたいことがうかがわれるのである。齋宮の御潔齋中の迷惑にならぬであらうかとも久しく考えていたが、わざわざ送つて来た手紙に返事をしないのは無情過ぎると思つて、紫の灰色がかった紙にこう書いた。

「#ここから1字下げ」

ずいぶん長くお目にかかりませんが、心で始終思っているのです。謹慎中のこうした私に同情はしてくださるでしょうと思いました。

「#ここから2字下げ」

とまる身も消えしも同じ露の世に心置くらんほどぞはかなき

「#ここから1字下げ」

ですから憎いとお思になることなどもいつさい忘れておしまいなさい。忌中の者の手紙などは御覧にならないかと思ひまして私も御無沙汰ぶさたをしていたのです。

「#ここで字下げ終わり」

御息所は自宅のほうにいた時であつたから、そつと源氏の手紙を讀んで、文意にほめかしてあることを、心にとがめられていないでもない御息所はすぐに悟つたのである。これも皆自分の薄命からだと悲しんだ。こんな生靈つわものの噂うわさが伝わって行つた時に院はどう思召しめすだろう。前皇太弟とは御同胞といつても取り分けお睦むつまじかつた、齋宮の将来のことも院へお頼みになつて東宮はお薨かくれになつたので、その時代には第二の父になつてやろうという仰せがたびたびあつて、そのまままた御所で後宮生活をするようにとまで仰せになつた時も、あるまじいこととして自分は御辞退をした。それであるのに若い源氏と恋をして、しまいには悪名を取るようになるのかと御息所は重苦しい悩みを心にして健康もすぐれなかつた。この人は昔から、教養があつて見識の高い、趣味の洗練された貴婦人として、ずいぶん名高い人になつていたので、齋宮が野の宮へいよいよおは

いりになると、そこを風流な遊び場として、殿上役人などの文学好きな青年などは、はるばる嵯峨へまで訪問に出かけるのをこのごろの仕事にしているという噂が源氏の耳にはいると、もつともなことであると思つた。すぐれた芸術的な存在であることは否定できない人である。悲観してしまつて伊勢へでも行かれたらずいぶん寂しいことであろうと、さすがに源氏は思つたのである。

日を取り越した法会はもう済んだが、正しく四十九日まではこの家で暮らそうと源氏はしていた。過去に経験のない独り棲みをする源氏に同情して、現在の三位中将は始終一訪ねて来て、世間話も多くこの人から源氏に伝わつた。まじめな問題も、恋愛事件もある。滑稽な話題にはよく源典侍がなつた。源氏は、

「かわいそうに、お祖母様を安つぽく言つちやいけないね」

と言いながらも、典侍のことは自身にもおかしくてならないふうであつた。常陸の宮の春の月の暗かつた夜の話も、そのほかの互いの情事の素破抜きもした。長く語つていけるうちにそうした話は皆影をひそめてしまつて、人生の寂しさを言う源氏は泣きなどもした。

さつと通り雨がした後の物の身にしむ夕方に中将は鈍色の喪服の直衣指貫を今までのよりは淡い色のに着かえて、力強い若さにあふれた、公子らしい風采で出て来た。源氏は西側の妻戸の前の高欄にからだを寄せて、霜枯れの庭をながめている時であつた。荒い風が吹いて、時雨もばらばらと散るのを見ると、源氏は自分の涙と競うもののように思つた。「相逢相失両如夢へあひあひあひうしなふふたつながらゆめのごとし」、為雨為雲今不知へあめとやなるくもとやなるいまはしらず」と口ずさみながら頬杖をついた源氏を、女であれば先だつて死んだ場合に魂は必ず離れて行くまいと好色な心

に中將を思つて、じつとながめながら近づいて来て一礼してすわつた。源氏は打ち解けた姿でいたのであるが、客に敬意を表するため、直衣の紐ひもだけは掛けた。源氏のほうは中將よりも少し濃い鈍色にきれいな色の紅の単衣ひとえを重ねていた。こうした喪服姿はきわめて艶えんである。中將も悲しい目つきで庭のほうをながめていた。

「#ここから2字下げ」

雨となりしぐるる空の浮き雲をいづれの方と分わきてながめん

「#ここから1字下げ」

どこだかわからない。

「#ここで字下げ終わり」

と独言ひとりごとのように言っているのに源氏は答えて、

「#ここから2字下げ」

見し人の雨となりにし雲井さへいとど時雨しぐれに揺かきくらす頃ころ

「#ここで字下げ終わり」

というのに、故人を悲しむ心の深さが見えるのである。中將はこれまで、院の思召おほしめしと、父の大臣の好意、母宮の叔母君おほはである関係、そんなものが源氏をここに引き止めているだけで、妹を熱愛するとは見えなかった、自分はそれに同情も表していたつもりであるが、表面とは違った動かぬ愛を妻に持っていた源氏であつたのだとこの時はじめて気がついた。それによってまた妹の死が惜しまれた。ただ一人の人がいなくなつただけであるが、家の中の光明をことごと

く失ったようにだれもこのころは思っているのである。源氏は枯れた植え込みの草の中に竜胆りんとうや撫子なでしこの咲なでいているのを見て、折らせたのを、中將が帰ったあとで、若君の乳母めのとの宰相の君を使いにして、宮様のお居間へ持たせてやった。

「#ここから2字下げ」

草枯れの籬まがきに残る撫子を別れし秋の形見とぞ見る

「#ここから1字下げ」

この花は比較にならないものとあなた様のお目には見えるでございましょう。

「#ここで字下げ終わり」

こう挨拶あいさつをさせたのである。撫子にたとえられた幼児はほんとうに花のようであつた。宮様の涙は風の音にも木の葉より早く散るころであるから、まして源氏の歌はお心を動かした。

「#ここから2字下げ」

今も見てなかなか袖そでを濡ぬらすかな垣かきほあれにしやまと撫子

「#ここで字下げ終わり」

というお返辞があつた。

源氏はまだつれづれさを紛らすことができなくて、朝顔あそらの女王にょおうへ、情味のある性質の人は今日の自分を哀れに思つてくれるであろうという頼みがあつて手紙を書いた。もう暗かつたが使いを出したのである。親しい交際はないが、こんなふうに時たま手紙の来ることは

もう古くからのことで馴なれている女房はすぐに女王へ見せた。秋の夕べの空の色と同じ唐紙とうしに、

「#ここから2字下げ」

わきてこの暮くれこそ袖そでは露つゆけけれ物思ものふ秋はあまた経ぬれど

「#ここから1字下げ」

「神無月いつも時雨は降りしかど」というように。

「#ここで字下げ終わり」

と書いてあった。ことに注意して書いたらしい源氏の字は美しかった。これに対してもと女房たちが言い、女王自身もそう思ったので返事は書いて出すことになった。

「#ここから1字下げ」

このごろのお寂しい御起居は想像いたしながら、お尋ねすることもまた御遠慮されたのでございます。

「#ここから2字下げ」

秋霧に立ちおくれぬと聞きしより時雨しぐるる空もいかがとぞ思ふ

「#ここで字下げ終わり」

とだけであった。ほのかな書きようで、心憎さの覚えられる手紙であった。結婚したあとに以前恋人であった時よりも相手がよく思われることは稀まれなことであるが、源氏の性癖からもまだ得られない恋人のすることは何一つ心を惹ひかないものはないのである。冷静は冷静でもその場合場合に同情を惜しまない朝顔の女王とは永久に友

愛をかわしていく可能性があるとも源氏は思った。あまりに非凡な女は自身の持つ才識がかえって禍わざいにもなるものであるから、西の対の姫君をそうは教育したくないとも思っていた。自分が帰らないことでどんなに寂しがっていることであろうと、紫の女王のあたりが恋しかったが、それはちょうど母親を亡なくした娘を家に置いておく父親に似た感情で思うのであって、恨まれはしないか、疑ってはいないだろうかと不安なようなことはなかった。

すっかり夜になったので、源氏は灯ひを近くへ置かせてよい女房たちだけを皆居間へ呼んで話し合うのであった。中納言の君というのはずっと前から情人関係になっっている人であったが、この忌中はかえってそうした人として源氏が取り扱わないのを、中納言の君は夫人への源氏の志としてそれをうれしく思った。ただ主従としてこの人ともきわめて睦むつまじく語っているのである。

「このごろはだれとも毎日こうしていっしょに暮らしているのだから、もうすっかりこの生活に馴なれてしまった私は、皆といっしょにいられなくなったら、寂しくないだろうか。奥さんの亡なくなつたことは別として、ちょっと考えてみても人生にはいろいろな悲しいことが多いね」

と源氏が言うと、初めから泣いているものもあつた女房たちは、皆泣いてしまつて、

「奥様のことは思い出しますだけで世界が暗くなるほど悲しゅうございませうが、今度またあなた様がこちらから行っておしまいになつて、すっかりよその方におなりあそばすことを思いますと」

言う言葉が終わりまで続かない。源氏はだれにも同情の目を向けながら、

「すっかりよその人になるようなことがどうしてあるものか。私をそんな軽薄なものと見ているのだね。気長に見ていてくれる人があればわかるだろうがね。しかしまた私の命がどうなるだろう、その自信はない」

と言つて、灯を見つめている源氏の目に涙が光っていた。特別に夫人がかわいがっていた親もない童女が、心細そうな顔をしているのを、もつともであると源氏は哀れに思った。

「あてき」「#「あてき」に傍点」はもう私にだけしかかわいがつてもらえない人になつたのだね」

源氏がこう言うと、その子は声を立てて泣くのである。からだ相応な短い袖を黒い色にして、黒い汗衫に樺色の袴という姿も可憐であつた。

「奥さんのことを忘れない人は、つまらなくても我慢して、私の小さい子供といつしよに暮らしててください。皆が散り散りになつてしまつてはいつそう昔が影も形もなくなつてしまふからね。心細いよそんなことは」

源氏が互いに長く愛を持っていこうと行つても、女房たちはそうだろうか、昔以上に待ち遠しい日が重なるのではないかと不安でならなかつた。

大臣は女房たちに、身分や年功で差をつけて、故人の愛した手まわりの品、それから衣類などを、目に立つほどにはしないで上品に分けてやつた。

源氏はこうした籠居を続けていられないことを思つて、院の御所へ今日は伺うことにした。車の用意がされて、前駆の者が集まつて来た時分に、この家の人々と源氏の別れを同情してこぼす涙のよう

な時雨しぐれが降りそそいだ。木の葉をさつと散らす風も吹いていた。源氏の居間にいた女房は非常に皆心細く思つて、夫人の死から日がたつて、少し忘れていた涙をまた滝のように流していた。今夜から二条の院に源氏の泊まることを予期して、家従や侍はそちらで主人を迎えようと、だれも皆一仕度したくをととのえて帰ろうとしているのである。今日ですべてのことが終わるのではないが非常に悲しい光景である。大臣も宮もまた新しい悲しみを感じておいでになった。宮へ源氏は手紙で御一挨拶あいさつをした。

「#ここから1字下げ」

院が非常に逢あいたく思召おほしめすようですから、今日はこれからそちらへ伺うつもりでございます。かりそめにもせよ私がこうして外へ出かけたなりいたすようになってみますと、あれほどの悲しみをしながらよくも生きていたというような不思議な気がいたします。お目にかかりましてはいつそう悲しみに取り乱しそうな不安がございますから上がりません。

「#ここで字下げ終わり」

というのである。宮様のお心に悲しみがつのつて涙で目もお見えにならない。お返事はなかつた。しばらくして源氏の居間へ大臣が出て来た。非常に悲しんで、袖そでを涙の流れる顔に当てたままである。それを見る女房たちも悲しかった。人生の悲哀の中に包まれて泣く源氏の姿は、そんな時も艶えんであつた。大臣はやつともものを言い出した。

「年を取りますと、何でもないことにもよく涙が出るものですが、ああした打撃がやって来たのですから、もう私は涙から解放される時間といつてはございません。私がこんな弱い人間であることを人

に見せたくないものですから、院の御所へも伺候しないのでございます。お話のついでにあなたからよろしくお取りなしになっておいてください。もう余命いくばくもない時になって、子に捨てられましたことが恨めしゅうございます」

一所懸命に悲しみをおさえながら言うことはこれであった。源氏も幾度か涙を飲みながら言った。

「いつだれが死に取られるかしのれないのが人生の相であると承知しておりまして、目前にそれを体験しましたわれわれの悲しみは理窟で説明も何もできません。院にもあなたの御様子をよく申し上げます。必ず御同情をあそばすでしょう」

「それではもうお出かけなさいませ。時雨があとからあとから追っかけて来るようですから、せめて暮れないうちにおいでになるがよい」

と大臣は勧めた。源氏が座敷の中を見まわすと几帳の後ろとか、襖子の向こうとか、ずっと見える所に女房の三十人ほどが幾つものかたまりを作っていた。濃い喪服も淡鈍色も混じっているのである。皆心細そうにめいっただふうであるのを源氏は哀れに思った。

「御愛子もここにいられるのだから、今後この邸へお立ち寄りになることも決してないわけでない私どもはみずから慰めておりますが、単純な女たちは、今日限りこの家はあなた様の故郷にだけなってしまうのだと悲観しておりまして、生死の別れをした時よりも、時々おいでの節御用を奉仕させていただきました幸福が失われたようにお別れを悲しがっておりますのももつとも思われます。長くずっと来てくださるようなことはございませんでしたが、そのころ私はいつかはこうでない幸いが私の家へまわって来るものと信じた

り、その反対な寂しさを思ってみたりしたのですが、とにかく今日の夕方ほど寂しいことはございません」

と大臣は言ってもまた泣くのである。

「つまらない付度そんたくをして悲しがる女房たちですね。ただ今のお言葉のように、私はどんなことも自分の信頼する妻は許してくれるものと暢気のんきに思っております、わがままに外を遊びまわりまして御無沙汰さたをするようなこともありましたが、もう私をかばってくれる妻がいなくなったのですから私は暢気な心などを持っていられるわけもありません。すぐにまた御訪問をしましょう」

と言つて、出て行く源氏を見送ったあとで、大臣は今日まで源氏の住んでいた座敷、かつては娘夫婦の暮らした所へはいつて行った物の置き所も、してある室内の装飾も、以前と何一つ変わっていないが、はなはだしく空虚なものに思われた。帳台の前には硯すずりなどが出ていて、むだ書きをした紙などもあつた。涙をしいて払つて、目をみはるようにして大臣はそれを取つて読んでいた。若い女房たちは悲しんでいながらもおかしがつた。古い詩歌がたくさん書かれてある。草書そうしょもある、楷書かいしょもある。

「上手じょうずな字だ」

歎息たんそくをしたあとで、大臣はじつと空間をながめて物思わしいふうをしていた。源氏が婿でなくなったことが老大臣には惜しんでも惜しんでも足りなく思えるらしい。「旧枕故衾誰与共へきうちんこきんたれとともにせん」という詩の句の書かれた横に、

「#ここから2字下げ」

亡なき魂たまぞいとど悲しき寝し床とこのあくがれがたき心ならひに

「#ここで字下げ終わり」

と書いてある。「鴛鴦瓦冷霜花重へゑんあうかはらにひえてさうくわおもし」と書いた所にはこう書かれてある。

「#ここから2字下げ」

君なくて塵積ちりもりぬる床なつの露うち払ひいく夜一寝いぬらん

「#ここで字下げ終わり」

ここにはいつか庭から折らせて源氏が宮様へ贈ったのと同じ時の物らしい撫子なでしこの花の枯れたのがはさまれていた。大臣は宮にそれらをお見せした。

「私がこれほどかわいい子供というものがあるだろうかと思うほどかわいかった子は、私と長く親子の縁を続けて行くことのできない因縁の子だったかと思うと、かえってなまじい親子でありえたことが恨めしいと、こんなふうにして思っ忘れてようとするのですが、日がたつにしたがって堪えられなく恋しくなるのをどうすればいいかと困っている。それに大将さんが他人になっておしまいになることがどうしても悲しくてならない。一日二日と中があき、またずつとおいでにならない日のあったりした時でさえも、私はあの方にお目にかかれないことで胸が痛かったのです。もう大将を一家の人と見られなくなって、どうして私は生きていられるか」

とうとう声を惜しまずに大臣は泣き出したのである。部屋にいた少し年配な女房たちが皆同時に声を放って泣いた。この夕方の家中の光景は寒気さむけがするほど悲しいものであった。若い女房たちはあ

ちらこちらにかたまつて、それはまた自身たちの悲しみを語り合つていた。

「殿様がおつしやいますようにして、若君にお仕えして、私はそれを悲しい慰めにしようと思つていますけれど、あまりにお形見は小さい公子様ですわね」

と言う者もあつた。

「しばらく実家へ行つていて、また来るつもりです」

こんなふう希望している者もあつた。自分らどうしの別れも相当に深刻に名残惜しがつた。

院では源氏を御覧になつて、

「たいへん瘦やせた。毎日精進をしていたせいかもしれない」

と御心配をあそばして、お居間で食事をおさせになつたりした。

いろいろとおいたわりになる御親心を源氏はもつたいなく思った。

中宮ちゅうくうの御殿へ行くと、女房たちは久しぶりの源氏の伺候を珍しがつて、皆集まつて来た。中宮も命婦みよつぶを取り次ぎにしてお言葉があつた。

「大きな打撃をお受けになつたあなたですから、時がたちましてもなかなかお悲しみはゆるくなるようなこともないでしょう」

「人生の無常はもうこれまでにいろいろなことえんせいで教訓されて参つた私でございますが、目前にそれが証明されてみますと、厭世的えんせいにならざるをえませんで、いろいろと煩悶はんもんをいたしましたえんせいが、たびたびかたじけないお言葉をいただきましたことによりまして、今日までこうしていることができたのでございます」

と源氏は挨拶あいさつをした。こんな時でなくても心の湿つたふうのよく見える人が、今日はまたそのほかの寂しい影も添つて人々の同情を

惹いた。無紋の袍ほろに灰色の下襲したかさねで、冠かむりは喪中の人の用いる巻纒けんえいであった。こうした姿は美しい人に落ち着きを加えるもので艶えんな趣が見えた。東宮へも久しく御無沙汰ごぶさた申し上げていることが心苦しくてならぬというような話を源氏は命婦にして夜ふけになつてから退出した。

二条の院はどの御殿もきれいに掃除そうじができていて、男女が主人の帰りを待ちうけていた。身分のある女房も今日は皆そろつて出ていた。はなやかな服装をしてきれいに粧よそおっているこの女房たちを見た瞬間に源氏は、気をめいらせはてた女房が肩を連ねていた、左大臣家を出た時の光景が目に浮かんで、あの人たちが哀れに思われてならなかった。源氏は着がえをしてから西の対たいへ行った。残らず冬期の装飾に変えた座敷の中がはなやかに見渡された。若い女房や童女たちの服装も皆きれいにさせてあつて、少納言の計らいに敬意が表されるのであつた。紫の女王にょおうは美しいふうをしてすわっていた。

「長くお逢あいしなかつたうちに、とても大人になりましたね」

几帳きちようの垂れ絹を引き上げて顔を見ようとすると、少しからだを小さくして恥はずかしそうにする様子に一点の非も打たれぬ美しさが備わっていた。灯ひに照らされた側面、頭の形などは初恋の日から今まで胸の中へ最もたいせつなものとしてしまつてある人の面影と、これとは少しの違つたものでもなくなったと知ると源氏はうれしかった。そばへ寄つて逢えなかつた間の話など少ししてから、

「たくさん話はたまっていますから、ゆっくりと聞かせてあげたいのだけれど、私は今日まで忌いみにこもっていた人なのだから、気味が悪いでしょう。あちらで休息することにしてまた来ましょう。もうこれからはあなたとばかりいるのだから、しまいにはあなたからう

るさがられるかもしれませんよ」

立ちぎわにこんなことを源氏が言っていたのを、少納言は聞いてうれしく思ったが、全然安心したのではない、りっぱな愛人の多い源氏であるから、また姫君にとっては面倒な夫人が代わりに出現するのではないかと疑っていたのである。

源氏は東の対へ行つて、中将という女房に足などを撫でさせながら寝たのである。翌朝はすぐにまた大臣家にいる子供の乳母へ手紙を書いた。あちらからは哀れな返事が来て、しばらく源氏を悲しませた。つれづれな独居生活であるが源氏は恋人たちの所へ通つて行くことも気が進まなかった。女王がもうりっぱな一人前の貴女に完成されているのを見ると、もう実質的に結婚をしてもよい時期に達しているように思えた。おりおり過去の二人の間でかわしたことはないような戯談を言いかけても紫の君にはその意が通じなかった。

つれづれな源氏は西の対にばかりいて、姫君と扁隠しの遊びなどをして日を暮らした。相手の姫君のすぐれた芸術的な素質と、頭のよさは源氏を多く喜ばせた。ただ肉親のように愛撫して満足ができた過去とは違って、愛すれば愛するほど加わってくる悩ましさは堪えられないものになって、心苦しい処置を源氏は取った。そうしたことの前もあと女房たちの目には違って見えることもなかったのであるが、源氏だけは早く起きて、姫君が床を離れない朝があつた。女房たちは、

「どうしてお寝みになつたままなのでしよう。御気分がお悪いのじやないかしら」

とも言つて心配していた。源氏は東の対へ行く時に硯の箱を帳台の中へそつと入れて行つたのである。だれもそばへ出て来そうでな

い時に若紫は頭を上げて見ると、結んだ手紙が一つ枕まくらの横にあった。なにげなしにあげて見ると、

「#ここから2字下げ」

あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴なれし中の衣を

「#ここで字下げ終わり」

と書いてあるようであった。源氏にそんな心のあることを紫の君は想像もして見なかったのである。なぜ自分はその無法な人を信賴してきたのであろうと思うと情けなくてならなかった。昼ごろに源氏が来て、

「気分がお悪いって、どんなふうなのですか。今日は暮もいっしよに打たないで寂しいじゃありませんか」

のぞきながら言うとますます姫君は夜着を深く被かすいてしまうのである。女房が少し遠慮をして遠くへ退のいて行った時に、源氏は寄り添って言った。

「なぜ私に心配をおさせになる。あなたは私を愛していてくれるのだと信じていたのにそうじゃなかったのですね。さあ機嫌きげんをお直しなさい、皆が不審がりますよ」

夜着をめくると、女王は汗をかいて、額髪もぐっしよりと濡ぬれていた。

「どうしたのですか、これは。たいへんだ」

いろいろと機嫌をとつても、紫の君は心から源氏を恨めしくなっているふうで、一言もものを言わない。

「私はもうあなたの所へは来ない。こんなに恥かずかしい目にあわせ

るのだから」

源氏は恨みを言いながら硯箱をあけて見たが歌ははいっていなかった。あまりに少女らしい人だと可憐に思つて、一日じゅうそばについていて慰めたが、打ち解けようとしもない様子がいつそうこの人をおかしく思わせた。

その晩は亥の子の餅を食べる日であつた。不幸のあつたあとの源氏に遠慮をして、たいそうにはせず、西の対へだけ美しい檜破子詰めの物をいろいろに作つて持つて来てあつた。それらを見た源氏が、南側の座敷へ来て、そこへ惟光を呼んで命じた。

「餅をね、今晚のようにたいそうにしないでね、明日の日暮れごろに持つて来てほしい。今日は吉日じゃないのだよ」

微笑しながら言っている様子で、利巧な惟光はすべてを察してしまつた。

「そうでございますとも、おめでたい初めのお式は吉日を選びませんでは。それにいたしましたも、今晚の亥の子でない明晩の子の餅はどれほど作つてまいつたものでございましょう」

まじめな顔で聞く。

「今夜の三分の一くらい」

と源氏は答えた。心得たふうで惟光は立つて行つた。きまりを悪がらせない世馴れた態度が取れるものだと思つた。だれにも言わずに、惟光はほとんど手ずからといつてもよいほどにして、主人の結婚の三日の夜の餅の調製を家でした。源氏は新夫人の機嫌を直させるのに困つて、今度はじめて盗み出して来た人を扱うほどの苦心を要すると感じることによつても源氏は興味を覚えずにいられない。人間はあさましいものである、もう自分は一夜だつてこの人

と別れていられようとも思えないと源氏は思うのであった。命ぜられた餅を惟光はわざわざ夜ふけになるのを待って持って来た。少納言のような年配な人に頼んではきまり悪くお思いになるだろうと、そんな思いやりもして、惟光は少納言の娘の弁という女房を呼び出した。

「これはまちががなく御寢室のお枕もとへ差し上げなければならぬ物なのですよ。お頼みします。たしかに」

弁はちよつと不思議な気はしたが、

「私はまだ、いいかげんなごまかしの必要なような交渉をだれもしたことがありませんわ」

と言いながら受け取った。

「そうですよ、今日はそんな不誠実とか何とかという言葉を慎まなければならなかったのですよ。私ももう縁起のいい言葉だけを選んで使います」

と惟光は言った。若い弁は理由のわからぬ気持ちのまま、主人の寢室の枕もとの几帳の下から、三日の夜の餅のはいった器を中へ入れて行った。この餅の説明も新夫人に源氏が自身でしたに違いない。だれも何の気もつかなかったが、翌朝その餅の箱が寢室から下げられた時に、側近している女房たちにだけはうなずかれることがあった。皿などもいつ用意したかと思うほど見事な華足付きであった。餅もことにきれいに作られてあった。少納言は感激して泣いていた。結婚の形式を正しく踏んだ源氏の好意がうれしかったのである。

「それにしても私たちへそつとお言いつけになればよろしいのね。あの人不思議に思わなかったでしょうかね」

とささやいていた。

若紫と新婚後は宮中へ出たり、院へ伺候していたりする間も絶えず源氏は可憐な妻の面影を心に浮かべていた。恋しくてならないのである。不思議な変化が自分の心に現われてきたと思っていた。恋人たちの所からは長い途絶えを恨めしがった手紙も来るのであるが、無関心ではいられないものもそれらの中にはあっても、新婚の快い酔いに身を置いてある源氏に及ぼす力はきわめて微弱なものであつたに違いない。厭世的になつていゝといふふうを源氏は表面に作つていた。いつまでこんな気持ちが続くかしらぬが、今とはすっかり別人になりえた時に逢いたいと思つと、こんな返事ばかりを源氏は恋人にしていたのである。

皇太后は妹の六の君がこのごろもまだ源氏の君を思つていゝことから父の右大臣が、

「それもいい縁のようだ、正夫人が亡くなられたのだから、あの方も改めて婿にすることは家の不名誉では決してない」

と言つてゐるのに憤慨しておいでになつた。

「宮仕えだつて、だんだん地位が上がつていけば悪いことは少しもないのです」

こう言つて宮廷入りをしきりに促しておいでになつた。その噂の耳にはいる源氏は、並み並みの恋愛以上のものをその人に持つていたのであるから、残念な気もしたが、現在では紫の女王のほかに分ける心が見いだせない源氏であつて、六の君が運命に従つて行くのもしかたがない。短い人生なのだから、最も愛する一人を妻に定めて満足すべきである。恨みを買うような原因を少しでも作らないでおきたいと、こう思つてゐた。六条の御息所と先夫人の葛藤が源氏

を懲りさせたともいえることであつた。御息所の立場には同情されるが、同棲して精神的の融和がそこに見いだせるかは疑問である。これまでのような関係に満足していてくれれば、高等な趣味の友として自分は愛することができると源氏は思っているのである。これきり別れてしまふ心はさすがになかつた。

二条の院の姫君が何人であるかを世間がまだ知らないことは、實質を疑わせることであるから、父宮への発表を急がなければならぬいと源氏は思つて、装着の式の用意を自身の従属関係になつてゐる役人たちにも命じてさせていた。こうした好意も紫の君はうれしくなかつた。純粋な信頼を裏切られたのは自分の認識が不足だつたのであると悔やんでいるのである。目も見合わないようにして源氏を避けていた。戯談を言いかけられたりすることは苦しくてならぬふうである。鬱々と物思わしそうにばかりして以前とはすっかり変わった夫人の様子を源氏は美しいこととも、可憐なこととも思つていた。

「長い間どんなにあなたを愛して来たかもしれないのに、あなたのほうはもう私がきらいになつたというようにしますね。それでは私がかわいそうじゃありませんか」

恨みらしく言つてみることもあつた。

こうして今年が暮れ、新しい春になつた。元日には院の御所へ先に伺候してから参内をして、東宮の御殿へも参賀にまわつた。そして御所からすぐに左大臣家へ源氏は行つた。大臣は元日も家にこもつていて、家族と故人の話をし出しては寂しがらばかりであつたが、源氏の訪問にあつて、しいて、悲しみをおさえようとするのがさも堪えがたそうに見えた。重ねた一歳は源氏の美に重々しさを添えた

と大臣家の人は見た。以前にもまさってきれいでもあった。大臣の前を辞して昔の住居すまいのほうへ行くと、女房たちは珍しがって皆源氏を見に集まって来たが、だれも皆つい涙をこぼしてしまうのであった。若君を見るとしばらくのうちに驚くほど大きくなっていて、よく笑うのも哀れであった。目つき口もとが東宮にそっくりであるから、これを人が怪しまないであろうかと源氏は見入っていた。夫人のいたところと同じように初春の部屋が装飾してあった。衣服掛さおの棹さおに新調された源氏の春着が掛けられてあったが、女の服が並んで掛けられないことは見た目だけでも寂しい。

宮様の挨拶あいさつを女房が取り次いで来た。

「今日だけはどうしても昔を忘れていなければならぬと辛抱しんぼうしているのですが、御訪問くださいましたことでかえってその努力がむだになってしまいました」

それから、また、

「昔からこちらで作らせますお召し物も、あれからのちは涙で私の視力も曖昧あいまいなんですから不出来にばかりになりましたが、今日だけはこんなものでもお着かえくださいませ」

と言って、掛けてある物のほかに、非常に凝った美しい衣裳しんぷう――揃そろいが贈られた。当然今日の着料になる物としてお作らせになった下襲したかさねは、色も織り方も普通の品ではなかった。着ねば力をお落としになるであろうと思つて源氏はすぐに下襲をそれに変えた。もし自分自分が来なかつたら失望あそばしたであろうと思つと心苦しくてならないものがあつた。お返辞の挨拶は、

「春の参りましたしに、当然参るべき私がお目にかかりに出たのですが、あまりにいろいろなことが思い出されまして、お話を伺

いにながれません。

「#ここから2字下げ」

あまたとし今日改めし色ごろもきては涙ぞ降るここちする

「#ここで字下げ終わり」

自分をおさえる力もないのでございます」

と取り次がせた。宮から、

「#ここから2字下げ」

新しき年ともいはず降るものはふりぬる人の涙なりけり

「#ここで字下げ終わり」

という御返歌があった。どんなにお悲しかったことであろう。

「#ここから2字下げ」

(訳注) 源氏二十二歳より二十三歳まで。

「#ここで字下げ終わり」

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971 (昭和46)年8月10日改版初版発行

1994 (平成6)年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>)
で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

神

紫式部

與謝野晶子訳

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）五十鈴川

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）鈴鹿川—八十瀬の

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から3字上げ」

「#地から3字上げ」五十鈴川神のさかひへのがれきぬおも

「#地から3字上げ」ひあがりしひとの身のはて （晶子）

齋宮の伊勢へ下向される日が近づけば近づくほど御息所は心細くなるのであった。左大臣家の源氏の夫人がなくなったあとでは、世間も今度は源氏と御息所が公然と夫婦になるものと噂していたことであるし、六条の邸の人々もそうした喜びを予期して興奮していた

ものであるが、現われてきたことは全然反対で、以前にまさって源氏は冷淡な態度を取り出したのである。これだけの反感を源氏に持たれるようなことが夫人の病中にあつたことも、もはや疑う余地もないことであると御息所の心のうちでは思っていた。苦痛を忍んで御息所は伊勢行きを断行することにした。齋宮に母君がついて行くような例はあまりないことでもあつたが、年少でおありになるということに託して、御息所はきれいに恋から離れてしまおうとしていたのであるが、源氏はさすがに冷静ではいられなかつた。いよいよ御息所に行つてしまわれることは残念で、手紙だけは愛をこめてたびたび送っていた。情人として逢うようなことは思いもよらないようにもう今の御息所は思っていた。自分に逢つても恨めしく思った記憶のまだ消えない源氏は冷静にも別れうるであろうが、その人よりも多く愛している弱味のある自分は心を乱さないではいられないであろう、逢うことはこの上にいっそう苦痛を加えるだけであると思つて、御息所はしいて冷ややかに思つているのである。野の宮から六条の邸へそつと帰つて行つていゝこともあるのであるが、源氏はそれを知らなかつた。野の宮といえは情人として男の通つてよい場所でもないから、二人のためには相見るときのない月日がたつた。院が御大病といふのでなしに、時々発作的に悪くおなりになるようなことがあつたりして、源氏はいよいよ心の余裕の少ない身になつていたが、恨んでいるままに終わることは女のためにかわいそうであつたし、人が聞いて肯定しないことでもあろうからと思つて、源氏は御息所を野の宮へ訪問することにした。

九月七日であつたから、もう齋宮の出発の日は迫つていゝのである。女のほうも今はあわただしくてそうしていられないと言つて来

ていたが、たびたび手紙が行くので、最後の会見をすることなどはどうだろうと躊躇しながらも、物越して逢うだけにとめておけばいいであろうと決めて、心のうちでは昔の恋人の来訪を待っていた。

町を離れて広い野に出た時から、源氏は身にしむものを覚えた。もう秋草の花は皆衰えてしまつて、かれがれに鳴く虫の声と松風の音が混じり合い、その中をよく耳を澄まさないでは聞かれないほどの楽音が野の宮のほうから流れて来るのであつた。艶な趣である。

前駆をさせるのに睦じい者を選んだ十幾人と隨身とをあまり目立たせないようにして伴つた微行の姿ではあるが、ことさらにきれいに装うて来た源氏がこの野に行くことを風流好きな供の青年はおもしろがつていた。源氏の心にも、なぜ今までに幾度もこの感じのよい野中の路を訪問に出なかつたのであろうとくやしかつた。

野の宮は簡単な小柴垣を大垣にして連ねた質素な構えである。丸木の鳥居などはさすがに神々しくて、なんとなく神の奉仕者以外の者を恥ずかしく思わせた。神官らしい男たちがあちらこちらに何人かずついて、咳をしたり、立ち話をしたりしている様子なども、ほかの場所に見られぬ光景であつた。篝火を焚いた番所がかすかに浮いて見えて、全体に人少なな湿っぽい空気の感ぜられる、こんな所に物思いのある人が幾月も暮らし続けていたのかと思うと、源氏は恋人がいたましくてならなかつた。北の対の下目だたない所に立つて案内を申し入れると音楽の声はやんでしまつて、若い何人も女の衣摺れらしい音が聞こえた。取り次ぎの女があとではまた変わつて出て来たりしても、自身で逢おうとしないらしいのを源氏は飽き足らず思つた。

「恋しい方を訪ねて参るようなことも感情にまかせてできた私の時

代はもう過ぎてしまひまして、どんなに世間をはばかりて来ているか
 かしれませんような私に、同情してくださいますなら、こんなよそ
 よそしいお扱いはなさらないで、違つてくださつてお話ししたくて
 ならないことも聞いてくださいませんか」

とまじめに源氏が頼むと女房たちも、

「おっしゃることのほうがごもつともでございます。お気の毒なふ
 うにいつまでもお立たせしておきましては済みません」

ととりなす。どうすればよいかと御息所は迷つた。潔斎所けいさいじよにつ
 ている神官たちにどんな想像をされるかしのれないことであるし、心
 弱く面会を承諾することによつて、またも源氏の軽蔑けいべつを買うのでは
 ないかと躊躇ちゆうちゆはされても、どこまでも冷淡にはできない感情に負け
 て、歎息たんそくを洩もらしながら座敷の端のほうへ膝行ひざぎてくる御息所の様子
 には艶えんな品のよさがあつた。源氏は、

「お縁側だけは許していただけるでしょうか」

と言つて、上に上がつていた。長い時日を中にした会合に、無情
 でなかつた言いわけを散文的に言うのもきまりが悪くて、榊さかきの枝を
 少し折つて手に持つていたのを、源氏は御簾みすの下から入れて、
 「私の心の常磐ときわな色に自信を持つて、恐れのある場所へもお訪たずねし
 て来たのですが、あなたは冷たくお扱いになる」

と言つた。

「#ここから2字下げ」

神垣かみがきはしるしの杉すぎもなきものをいかにまがへて折れる榊さかきぞ

「#ここで字下げ終わり」

御息所はこう答えたのである。

「#ここから2字下げ」

少女おとめ子があたりと思へば榊葉かの香をなつかしみとめてこそ折れ

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は言ったのであった。潔斎所の空気に威圧されながらも御簾の中へ上半身だけは入れて長押ながしに源氏はよりかかっているのである。御息所が完全に源氏のものであって、しかも情熱の度は源氏よりも高かった時代に、源氏は慢心していた形でこの人の真価を認めようとはしなかった。またいやな事件も起こって来た時から、自身の心ながらも恋を成るにまかせてあった。それが昔のようにして語ってみると、にわかには大きな力が源氏をとらえて御息所のほうへ引き寄せるのを源氏は感ぜずにいらなかった。自分はこの人が好きであったのだという認識の上に立ってみると、二人の昔も恋しくなり、別れたのちの寂しさも痛切に考えられて、源氏は泣き出しってしまったのである。女は感情をあくまでもおさえていようとしながらも、堪えられないように涙を流しているのを見るといよいよ源氏は心苦しくなつて、伊勢行きを思いとどまらせようとすることに身を入れて話していた。もう月が落ちたのか、寂しい色に変わっている空をながめながら、自身の真実の認められないことで歎なげく源氏を見ては、御息所の積もり積もった恨めしさも消えていくことであろうと見えた。ようやくあきらめができた今になつて、また動揺することになつてはならない危険な会見を避けていたのであるが、予感したとおりに御息所の心はかき乱されてしまった。

若い殿上役人が始終二、三人連れで来てはこの文学的な空気に浸っていくのを喜びにしているという、この構えの中のながめは源氏の目にも確かに艶えんなものに見えた。あるだけの恋の物思いを双方で味わったこの二人のかわした会話は写しにくい。ようやく白んできた空がそこにあるということもわざとこしらえた背景のようである。

「#ここから2字下げ」

暁の別れはいつも露けきをこは世にしらぬ秋の空かな

「#ここで字下げ終わり」

と歌った源氏は、帰ろうとしてまた女の手をとらえてしばらく去りえないふうであった。冷ややかに九月の風が吹いて、鳴きからした松虫の声の聞こえるのもこの恋人たちの寂しい別れの伴奏のようである。何でもない人にも身にしむ思いを与えるこうした晩秋の夜明けにいて、あまりに悲しみ過ぎたこの人たちはかえって実感をよみ歌にすることができなかつたと見える。

「#ここから2字下げ」

大方おほかたの秋の別れも悲しきに鳴く音ねな添そへそ野のべ辺の松虫

「#ここで字下げ終わり」

御息所みやすどしるの作である。この人を永久につなぐことのできた糸は、自分の過失で切れてしまったと悔やみながらも、明るくなっていくのを恐れて源氏は去った。そして二条の院へ着くまで絶えず涙がこぼ

れた。女も冷静でありえなかった。別れたのちの物思いを抱いて弱々しく秋の朝に対していた。ほのかに月の光に見た源氏の姿をなお幻に御息所は見ているのである。源氏の衣服から散ったにおい、そんなものは若い女房たちを忌垣いがきの中で狂気にまでするのではないかと思われるほど今朝けさもほめそやしていた。

「どんないい所へだって、あの大将さんをお見上げすることのできない国へは行く気がしませんわね」

こんなことを言う女房は皆涙ぐんでいた。この日源氏から来た手紙は情がことにこまやかに出ていて、御息所に旅を断念させるに足る力もあつたが、官庁への通知も済んだ今になって変更のできることもなかった。男はそれほど思っていないことでも恋の手紙には感情を誇張して書くものであるが、今の源氏の場合は、ただの恋人とは決して思っていないかつた御息所が、愛の清算をしまつたふうに遠国へ行こうとするのであるから、残念にも思われ、気の毒であるとも反省しての煩悶はんもんのかなりひどい実感で書いた手紙であるから、女へそれが響いていったものに違いない。御息所の旅中の衣服から、女房たちのまで、そのほかの旅の用具もりっぱな物をそろえた饒別せんべつが源氏から贈られて来ても、御息所はうれしいなどと思うだけの余裕も心になかつた。噂うわさに歌われるような恋をして、最後には捨てられたということ、今度始まつたことのように口惜くちあしく悲しくばかり思われるのであつた。お若い齋宮は、いつのことともしれなかつた出発の日の決まつたことを喜んでおいでになつた。世間では、母君がついて行くことが異例であると批難したり、ある者はまた御息所の強い母性愛に同情したりしていた。御息所が平凡な人であつたら、決まてこうではなかつたことと思われる。傑出した人の

行動は目に立ちやすく、気の毒である。

十六日に桂川で齋宮の御禊みそぎの式があった。常例以上はなやかにそれらの式も行なわれたのである。長奉送使ちやうほうそうし、その他官庁から参列させる高官も勢名のある人たちばかりを選んであった。院が御後援者でいらせられるからである。出立の日に源氏から別離の情に堪えがたい心を書いた手紙が来た。ほかにまた齋いづきの宮のお前へといって、齋布ゆふにつけたものもあった。

「#ここから1字下げ」

いかずちの神でさえ恋人の中を裂くものではないと言います。

「#ここから2字下げ」

八洲やしまもる国みかみつ御神もころあらば飽かぬ別れの中をことわれ

「#ここから1字下げ」

どう考えましても神慮がわかりませんから、私は満足できません。

「#ここで字下げ終わり」

と書かれてあった。取り込んでいたが返事をした。宮のお歌を女別当べつとうが代筆したものであった。

「#ここから2字下げ」

国まつ神空にことわる中ならばなほざりことを先づやたださん

「#ここで字下げ終わり」

源氏は最後に宮中である式を見たくも思ったが、捨てて行かれる男が見送りに出るといふきまり悪さを思つて家にいた。源氏は齋宮

の大人びた返歌を微笑しながらながめていた。年齢以上によい貴女きじよになつておられる気がすると思つと胸が鳴った。恋をすべきでない人に好奇心の動くのが源氏の習癖で、顔を見ようとすれば、よくそれもできた齋宮の幼少時代をそのまままで終わったことが残念である。けれども運命はどうなつていくものか予知されないのが人生であるから、またよりよくその人を見ることのできる日を自分は待つていかもしれないのであるとも源氏は思った。見識の高い、美しい貴婦人であると名高い存在になつてゐる御息所の添つた齋宮の出発の列をながめようとして物見車ものみぐるまが多く出ている日であつた。齋宮は午後四時に宮中へおはいりになつた。宮の輿こしに同乗しながら御息所は、父の大臣が未来の后きさきに擬して東宮の後宮に備えた自分を、どんなにはなやかに取り扱つたことであつたか、不幸な運命のはてに、後の輿でない輿へわずかに陪乗して自分は宮廷を見るのであると思つと感慨が無量であつた。十六で皇太子の妃ひになつて、二十で寡婦になり、三十で今日また内裏だいりへはいつたのである。

「#ここから2字下げ」

そのかみを今日けふはかけじと思へども心のうちに物ぞ悲しき

「#ここで字下げ終わり」

御息所の歌である。齋宮は十四でおありになつた。きれいな方である上に、錦繡きんしゅうに包まれておいでになつたから、この世界の女人にょにんとも見えないほどお美しかった。齋王の美に御心みこころを打たれながら、別れの御櫛みくしを髪に挿さしてお与えになる時、帝みかどは悲しみに堪えがたくおなりになつたふうで悄然しよんとしておしまひになつた。式の終わるのを

八省院はっしょういんの前に待っている齋宮の女房たちの乗った車から見える袖そでの色いろの美しさも今度は特に目を引いた。若い殿上役人が寄って行って、個人個人の別れを惜しんでいた。暗くなってから行列は動いて、二条から洞院とういんの大路おおじを折れる所に二条の院はあったから、源氏は身にしむ思いをしながら、榊さかきに歌を挿さして送った。

「#ここから2字下げ」

ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川すずか一八十瀬やそせの波に袖は濡れじや

「#ここで字下げ終わり」

その時はもう暗くもあつたし、あわただしくもあつたので、翌日一逢坂山おつさかやまの向こうから御息所の返事は来たのである。

「#ここから2字下げ」

鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れ伊勢までたれか思ひおこせん

「#ここで字下げ終わり」

簡単に書かれてあるが、貴人らしさのある巧妙な字であつた。優しさを少し加えたら最上の字になるであろうと源氏は思った。霧が濃くかかつていて、身にしむ秋の夜明けの空をながめて、源氏は、

「#ここから2字下げ」

行くかたをながめやらんこの秋は逢坂山を霧な隔てそ

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を口ずさんでいた。西の対へも行かずに終日物思いをして源氏は暮らした。旅人になった御息所はまして堪えがたい悲しみを味わっていたことであろう。

院の御病気は十月にはいつてから御重体になった。この君をお惜しみしていないものはない。帝も御心配のあまりに行幸あそばされた。御衰弱あそばされた院は東宮のことを返す返す帝へお頼みになった。次いで源氏に及んだ。

「私が生きていた時と同じように、大事も小事も彼を御相談相手になさい。年は若くても国家の政治をとるのに十分資格が備わっていると私は認める。一国を支配する骨相を持っている人です。だから私は彼がその点で逆に誤解を受けることがあつてはならないと思つて、親王にしないで人臣の列に入れておいた。将来大臣として国務を任せようとしたのです。亡くなつたあとでも私のこの言葉を尊重してください」

前の帝、今の君主の御父として御希望を述べられた御遺言も多かつたが、女である筆者は気がひけて書き写すことができない。帝もこれが最後の御会見に院のお言いになることを悲しいふうで聞いておいでになつたが、御遺言を違えぬということを繰り返してお誓いになった。風采もごりつぱで、以前よりもいつそう美しくお見えになる帝に院は御満足をお感じになり、頼もしさもお覚えになるのであつた。高貴な御身でいらせられるのであるから、感情のままに父帝のもとにとどまつておいでになることはできない。その日のうちに遷幸されたのであるから、お二方のお心は、お逢いになつたあとに長く悲しみが残つた。東宮も同時に行啓になるはずであつたがたいそうになることを思召して別の日に院のお見舞いをあそばされ

た。御年齢以上に大人らしくなっておいでになる愛らしい御様子で、しばらくぶりでお逢いになる喜びが勝って、今の場合も深くおわかりにならず、無邪気にうれしそうにして院の前へおいでになったのも哀れであった。その横で中宮が泣いておいでになるのであるから、院のお心はさまざまにお悲しいのである。種々と御教訓をお残しになるのであるが、幼齡の東宮にこれがわかるかどうかと疑っておいでになる御心からそこに寂しさと悲しさがかもされていった。源氏にも朝家の政治に携わる上に心得ていねばならぬことをお教えになり、東宮をお援けせよということを繰り返し繰り返し仰せられた。夜がふけてから東宮はお帰りになった。遷啓に供奉する公卿の多さは行幸にも劣らぬものだった。御秘蔵子の東宮のお帰りになったのちの院の御心は最もお悲しかった。皇太后もおいでになるはずであったが、中宮がずっと院に添っておいでになる点が御不満で、躊躇あそばされたうちに院は崩御になった。御仁慈の深い君にお別れしてどんなに多数の人が悲しんだかしのれない。院の御位にお変わりあそばしただけで、政治はすべて思召しどおりに行なわれていたのであるから、今の帝はまだお若くて外戚の大臣が人格者でもなかったから、その人に政權を握られる日になれば、どんな世の中が現出するであろうと官吏たちは悲観しているのである。院が最もお愛しになった中宮や源氏の君はまして悲しみの中におぼれておいでになった。崩御後の御仏事なども多くの御遺子たちの中で源氏は目だつて誠意のある弔い方をした。それが道理ではあるが源氏の孝心に同情する人が多かった。喪服姿の源氏がまた限りもなく清く見えた。去年今年と続いて不幸にあっていることについても源氏の心は厭世的に傾いて、この機会に僧になろうかとも思うのであったが、いろいろ

るな絆ほどしを持つている源氏にそれは実現のできる事ではなかつた。

四十九日までには女御にょごや更衣こういたちが皆院の御所にこもっていたが、その日が過ぎると散り散りに別な実家へ帰って行かねばならなかつた。これは十月二十日のことである。この時節の寂しい空の色を見てはだれも世がこれで終わっていくのではないかと心細くなるころである。中宮は最も悲しんでおいでになる。皇太后の性格をよく知っておいでになって、その方の意志で動く当代において、今後はどんなつらい取り扱いを受けねばならぬかというお心細さよりも、またない院の御愛情に包まれてお過ごしになった過去をお忍びになる悲しみのほうが大きかつた。しかも永久に院の御所で人々とお暮らしになることはできずに、皆帰って行かねばならぬことも宮のお心を寂しくしていた。中宮は三条の宮へお帰りになるのである。お迎えに兄君の兵部卿へいぶしやうの宮がおいでになった。はげしい風の中に雪も混じって散る日である。すでに古御所ふるごしよになろうとする人少なさが感ぜられて静かな時に、源氏の大将が中宮の御殿へ来て院の御在世中の話を宮としていた。前の庭の五葉が雪にしおれて下葉の枯れたのを見て、

「#ここから2字下げ」

蔭かげひろみ頼みし松や枯れにけん下葉散り行く年の暮くれかな

「#ここで字下げ終わり」

宮がこうお歌いになった時、それが傑作でもないが、迫った実感
は源氏を泣かせてしまった。すっかり凍ってしまった池をながめな
がら源氏は、

「#ここから2字下げ」

さえわたる池の鏡のさやけさに見なれし影を見ぬぞ悲しき

「#ここで字下げ終わり」

と言った。これも思ったままを三十一字にしたもので、源氏の作としては幼稚である。王命婦^{おうみよつば}、

「#ここから2字下げ」

年暮れて岩井の水も氷とぢ見し人影のあせも行くかな

「#ここで字下げ終わり」

そのほかの女房の作は省略する。中宮の供奉^{くぶさ}を多数の高官がしたことなどは院の御在世時代と少しも変わっていないが、宮のお心持ちは寂しくて、お帰りになった御実家がかえって他家であるように思召されることによっても、近年はお許しがなくて御実家住まいがほとんどなかったことがおしのばれになった。

年が変わっても諒闇の春は寂しかった。源氏はことさら寂しくて家に引きこもって暮らした。一月の官吏の更任期などには、院の御代はいうまでもないがその後もなお同じように二条の院の門は訪客の馬と車でうずまったのだったのに、今年は目に見えてそうした来訪者の数が少なくなった。宿直をしに来る人たちの夜具類を入れた袋もあまり見かけなくなった。親しい家司たちだけが暢気に事務を取っているのを見ても、主人である源氏は、自家の勢力の消長と人々の信頼が比例するものであることが思われておもしろくなかった。

右大臣家の六の君は二月に尚侍ないしのかみになった。院の崩御によって前尚侍まへのかみが尼になったからである。大臣家が全力をあげて後援していることであつたし、自身に備わつた美貌びぼうも美質みしつもあつて、後宮の中に抜け出た存在を示していた。皇太后は実家においてになることが多くて、稀まれに参内になる時は梅壺うめつぼの御殿を宿所に決めておいでになった。それで弘徽殿こうきでんが尚侍そうじの曹司そうしになつていた。隣の登花殿とけいけいなどは長く捨てられたままの形であつたが、二つが続けて使用されて今ははなやかな場所になつた。女房なども無数に侍していて、派手はてな後宮生活こうきうせいかうをしながらも、尚侍の人知れぬ心は源氏をばかり思つていた。源氏が忍んで手紙を送つて来ることも以前どおり絶えなかつた。人目につくことがあつたらと恐れながら、例の癖で、六の君が後宮へはいつた時から源氏の情炎がさらに盛んになつた。院がおいでになつたころは御遠慮があつたであろうが、積年の怨みを源氏に酬むくいるのはこれからであると烈はげしい氣質の太后は思つておいでになつた。源氏に對して何かの場合に意を得ないことを政府がする、それが次第に多くなつていくのを見て、源氏は予期していたことではあつても、過去に経験しなかつた不快さを始終味わうのに堪えがたくなつて、人との交際もあまりしないのであつた。左大臣も不愉快であまり御所へも出なかつた。亡なくなつた令嬢へ東宮のお話があつたにもかかわらず源氏の妻にさせたことで太后は含んでおいでになつた。右大臣との仲は初めからよくなかつた上に、左大臣は前代にいくぶん専横的にも政治を切り盛りしたのであつたから、当帝の外戚として右大臣が得意になつていているのに対しては喜ばないのは道理である。源氏は昔の日に変わらずよく左大臣家を訪ねたずて行き故夫人の女房たちを愛護してやることを忘れなかつた。非常に若君を源氏の愛すること

にも大臣家の人たちは感激していて、そのためにまたいつそう小公子は大切にされた。過去の源氏の君は社会的に見てあまりに幸福過ぎた、見ていて目まぐるしい気がするほどであったが、このころは通っていた恋人たちとも双方の事情から関係が絶えてしまったのも多かつたし、それ以下の軽い関係の恋人たちの家を訪ねて行くようなことにも、もうきまりの悪さを感じる源氏であったから、余裕ができてはじめてのどかな家庭の主人あるじになっていた。兵部卿つひぶたけの宮の王女の幸福であることを言ってだれも祝った。少納言なども心のうちでは、この結果を得たのは祖母の尼君が姫君のことを祈った熱誠が仏に通じたのであろうと思っていた。父の親王も朗らかに二条の院に出入りしておいでのになった。夫人から生まれて大事がっついておいでになる王女方にたいした幸運もなく、ただ一人がすぐれた運命を負った女と見える点で、継母にあたる夫人は嫉妬しつとを感じていた。紫夫人は小説にある継娘ままこの幸運のようなものを実際に得ていたのである。

加茂の齋院は父帝の喪のために引退されたのであって、そのかわりに式部卿しきぶぎょうの宮の朝顔の姫君が職をお継ぎになることになった。伊勢へ女王が齋宮になって行かれたことはあっても、加茂の齋院はたいてい内親王の方がお勤めになるものであったが、相当した女御腹むすこの宮様がおいでにならなかつたか、この卜定ぼくじょうがあつたのである。源氏は今もこの女王に恋を持っているのであるが、結婚も不可能な神聖な職にお決まりになつた事を残念に思った。女房の中將は今もよく源氏の用を勤めたから、手紙などは始終やっているのである。當代における自身の不遇などは何とも思わずに、源氏は恋を歎なげいていた、齋院さいいんと尚侍なしのかみのために。帝は院の御遺言のとおり源氏を愛して

おいでになつたが、お若い上に、きわめてお気の弱い方でいらせられて、母后や祖父の大臣の意志によつて行なわれることをどうあそばすこともおできにならなくて、朝政に御不満足が多かつたのである。昔よりもいつそう恋の自由のない境遇にいても尚侍は文によつて絶えず恋をささやく源氏を持つていて幸福感がないでもなかつた。

宮中で行なわせられた五壇の御修法のために帝が御謹慎をしておいでになるころ、源氏は夢のように尚侍へ近づいた。昔の弘徽殿の細殿の小室へ中納言の君が導いたのである。御修法のために御所へ出入りする人の多い時に、こうした会合が、自分の手で行なわれることを中納言の君は恐ろしく思った。朝夕に見て見飽かぬ源氏と稀に見るのを得た尚侍の喜びが想像される。女も今が青春の盛りの姿と見えた。貴女らしい端嚴さなどは欠けていたかもしれぬが、美しく、艶で、若々しくて男の心を十分に惹く力があつた。もうついで夜が明けていくのではないかと思われる頃、すぐ下の庭で、

「宿直をいたしております」

と高い声で近衛の下士が言った。中少将のだれかがこの辺の女房の局へ来て寝ているのを知つて、意地悪な男が教えてわざわざ挨拶をさせによこしたに違いないと源氏は聞いていた。御所の庭の所々をこう言つてまわるのは感じのいいものであるがうるさくもあつた。また庭のあなたこなたで「寅一つ」（午前四時）と報じて歩いてい

る。

「#ここから2字下げ」

心からかたがた袖を濡らすかな明くと教ふる声につけても

「#ここで字下げ終わり」

尚侍のこう言う様子はいかにもはかなそうであった。

「#ここから2字下げ」

歎きつつ我が世はかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく

「#ここで字下げ終わり」

落ち着いておられなくて源氏は別れて出た。まだ朝に遠い暁月夜で、霧が一面に降っている中を簡単な狩衣姿で歩いて行く源氏は美しかった。この時に承香殿の女御の兄である頭中将が、藤壺の御殿から出て、月光の蔭になっっている立藪の前に立っていたのを、不幸にも源氏は知らずに来た。批難の声はその人たちの口から起こってくるであろうから。

源氏は尚侍とまた新しく作ることのできた関係によっても、隙をまったくお見せにならない中宮をこりっぱであると認めながらも、恋する心に恨めしくも悲しくも思うことが多かった。御所へ参内することも気の進まない源氏であったが、そのために東宮にお目にかからないことを寂しく思っていた。東宮のためにはほかの後援者がなく、ただ源氏だけを中宮も力にしておいでになったが、今になっても源氏は宮を御当惑させるようなことを時々した。院が最後まで秘密の片はしすらご存じなしにお崩れになったことでも、宮は恐ろしい罪であると感じておいでになったのに、今さらまた悪名の立つことになつては、自分とはかくも東宮のために必ず大きな不幸が起こるであろうと、宮は御心配になつて、源氏の恋を仏力で止めよ

うと、ひそかに祈禱^{きとう}までもさせてできる限りのことを尽くして源氏の情炎から身をかわしておいでになるが、ある時思いがけなく源氏が御寢所に近づいた。慎重に計画されたことであつたから宮様には夢のようであつた。源氏が御心^{みこころ}を動かそうとしたのは偽らぬ誠を盛つた美しい言葉であつたが、宮はあくまでも冷静をお失いにならなかつた。ついにはお胸の痛みが起こつてきてお苦しみになつた。命婦^{みよ}とか弁^{べん}とか秘密に与^{あずか}つている女房が驚いていろいろな世話をする。源氏は宮が恨めしくてならない上に、この世が真暗^{まつくら}になつた氣になつて呆然^{ぼうぜん}として朝になつてもそのまま御寢室にとどまつていた。御病氣を聞き伝えて御帳台のまわりを女房が頻繁^{ひんぱん}に往来することに、なつて、源氏は無意識に塗籠^{ぬいご}（屋内の蔵）の中へ押し入れられてしまった。源氏の上着などをそつと持つて来た女房も怖^{おそ}しがつていた。宮は未来と現在を御悲観あそばしたあまりに逆上^{さか}をお覚えになつて、翌朝になつてもおからだは平常のようになかつた。

兄君の兵部卿の宮とか中宮大夫などが参殿し、祈りの僧を迎えよつなどと言われているのを源氏は苦しく聞いていたのである。日が暮れるころにやっと御病悩はおさまつたふうであつた。源氏が塗籠で一日を暮らしたとも中宮様はご存じでなかつた。命婦や弁なども御心配をさせまいために申さなかつたのである。宮は昼の御座へ出ですわつておいでになつた。御一恢復^{かいふく}になつたものらしいと言つて、兵部卿の宮もお帰りになり、お居間の人数が少なくなつた。平生からごく親しくお使いになる人は多くなかつたので、そうした人たちが、そここの几帳^{きちょう}の後ろや襖子^{からかみ}の蔭^{かげ}などに侍していた。命婦などは、

「どう工夫^{くふう}して大将さんをそつと出してお帰ししましょう。またそ

ばへおいでになると今夜も御病気におなりあそばすでしょうから、
宮様がお気の毒ですよ」

などとささやいていた。源氏は塗籠の戸を初めから細目にあけて
あつた所へ手をかけて、そつとあけてから、屏風びょうぶと壁の間を伝つて
宮のお近くへ出て来た。ご存じのない宮のお横顔を蔭からよく見る
ことのできる喜びに源氏は胸をおどらせ涙も流しているのである。

「まだ私は苦しい。死ぬのではないかしら」

とも言つて外のほうをながめておいでになる横顔が非常に艶えんであ
る。これだけでも召し上がるようにと思つて、女房たちが持つて来
たお菓子あまの台がある、そのほかにも箱の蓋ふたなどに感じよく調理され
た物が積まれてあるが、宮はそれらにお気がないようなふうで、物
思いの多い様子をして静かに一所をながめておいでになるのがお美
しかった。髪の質、頭の形、髪のかかりぎわなどの美しさは西の対
の姫君とそっくりであつた。よく似たことなどを近ごろは初めほど
感ぜずにいた源氏は、今さらのように驚くべく酷似した二女性であ
ると思つて、苦しい片恋のやり場所を自分は持つているのだとい
う気が少しした。高雅な所も別人とは思えないのであるが、初恋の宮
は思ひなしか一段すぐれたものに見えた。華麗な気の放たれること
は昔にましたお姿であると思つた源氏は前後も忘却して、そつと静
かに帳台へ伝つて行き、宮のお召し物の襷つま先を手で引いた。源氏の
服の薫香くんこうの香がさつと立つて、宮は様子をお悟りになつた。驚きと
恐れに宮は前へひれ伏しておしまいになつたのである。せめて見返
つてもいただけないのかと、源氏は飽き足らずも思い、恨めしくも
思つて、お裾すそを手てに持つて引き寄せようとした。宮は上着を源氏の
手にとめて、御自身は外のほうへお退のきになろうとしたが、宮のお

髪はお召し物とともに男の手がおさえていた。宮は悲しくてお自身の薄倅はうけいであることをお思いになるのであったが、非常にいたわしい御様子に見えた。源氏も今日の高い地位などは皆忘れて、魂も顛倒てんとうさせたふうに泣き泣き恨みを言うのであるが、宮は心の底からおくやしそうでお返辞もあそばさない。ただ、

「私はからだは今非常によくはないのですから、こんな時でない機会がありましたら詳しくお話をしようと思います」

とお言いになっただけであるのに、源氏のほうでは苦しい思いを告げるのに千言万語を費やしていた。さすがに身に沁しんでお思われになることも混じっていたに違いない。以前になかったことではないが、またも罪を重ねることは堪えがたいことであると思召おぼしめす宮は、柔らかい、なつかしいふうは失わずに、しかも迫る源氏を強く避けておいでになる。ただこんなふうで今夜も明けていく。この上で力で勝つことはなすに忍びない清いけだか気高さの備わった方であつたから、源氏は、

「私はこれだけで満足します。せめて今夜ほどに接近するのをお許しくだすつて、今後も時々は私の心を聞いてくださいますなら、私はそれ以上の無礼をしようとは思いません」

こんなふうに言つて油断をおさせしようとした。今後の場合のため。

こうした深刻な関係でなくても、これに類したあぶない逢瀬おっせを作る恋人たちは別れが苦しいものであるから、まして源氏にここは離れがたい。夜が明けてしまったので王命婦と弁とが源氏の退去をいろいろに言つて頼んだ。宮様は半ば死んだようになっておいでになるのである。

「恥知らずの男がまだ生きているかとお思われしたくありませんから、私はもうそのうち死ぬでしょう。そしたらまた死んだ魂がこの世に執着を持つことで罰せられるのでしよう」

恐ろしい気がするほど源氏は真剣になっていた。

「#ここから1字下げ」

「逢ふことの難かたきを今日に限らずばなほ幾世をか歎なげきつつ経ん

「#ここで字下げ終わり」

どうなってもこうなっても私はあなたにつきまとい続けているのです

よ

宮は吐息といきをおつきになって、

「#ここから2字下げ」

長き世の恨みを人に残してもかつは心をあだとしらなん

「#ここで字下げ終わり」

とお言いになった。源氏の言葉をわざと軽く受けたようにしておいでになる御様子の優美さに源氏は心を惹ひかれながらも宮の御一輕けい蔑べつを受けるのも苦しく、わがためにも自重しなければならぬことを思つて帰った。

あれほど冷酷に扱われた自分はもうその方に顔もお見せしたくない。同情をお感じになるまでは沈黙をしているばかりであると源氏は思つて、それ以来宮へお手紙を書かないでいた。ずっともう御所へも東宮へも出ずに引きこもっていて、夜も昼も冷たいお心だとは

かり恨みながらも、自分の今の態度を裏切るように恋しさがつた。魂もどこかへ行っているようで、病気にさえかかったらしく感ぜられた。心細くて人間的な生活を捨てないからますます悲しみが多いのである、自分などは僧房の人になるべきであると、こんな決心をしようとする時にいつも思われるのは若い夫人のことであつた。優しく自分だけを頼みにして生きている妻を捨てえようとは思われないのであつた。

宮のお心も非常に動揺したのである。源氏はその時きり引きこもつて手紙も送つて来ないことで命婦などは気の毒がった。宮も東宮のためには源氏に好意を持たせておかねばならないのに、自分の態度から人生を悲観して僧になつてしまわれることになつてはならぬとさすがに思召すのであつた。そうといつてああしたことが始終あつては瑕を捜し出すことの好きな世間はどんな噂を作ることが想像される。自分が尼になつて、皇太后に不快がられている後の位から退いてしまおうと、こうこのごろになつて宮はお思いになるようになった。院が自分のためにどれだけ重い御遺言をあそばされたかを考へると何ごとも当代にそれが実行されていけないことが思われる。漢の初期の戚夫人が呂后に苛まれたようなことまでではなくても、必ず世間の嘲笑を負わねばならぬ人に自分はなるに違いないと中宮はお思いになるのである。これを転機にして尼の生活にはいるのがいちばんよいことであるとお考へになつたが、東宮にお逢いしないままで姿を変えてしまうことはおかわいそうなことであるとお思いになつて、目だため形式で御所へおはいりになつた。源氏はそんな時でなくても十二分に好意を表する慣わしであつたが、病気に托して供奉もしなかつた。贈り物その他は常に変わらないが、来ようとしな

いことはよくよく悲観しておいでになるに違いないと、事情を知っている人たちは同情した。

東宮はしばらくの間に美しく御成長しておいでになった。ひさびさ母宮とお逢いになった喜びに夢中になって、甘えて御覧になったりもするのが非常におかわいいのである。この方から離れて信仰の生活にはいれるかどうかと御自身で疑問が起こる。しかも御所の中の空気は、時の推移に伴う人心の変化をいちじるしく見せて人生は無常であるとお教えしないではおかなかつた。太后の復讐心ふくしゅうしんに燃えておいでになることも面倒めんどうであつたし、宮中への出入りにも不快な感を与える官辺のことも堪えられぬほど苦しくて、自分が現在の位置ちにいることは、かえつて東宮を危うくするものでないかなども煩悶はんもんをあそばすのであつた。

「長くお目にかからないでいる間まに、私の顔がすっかり変わってしまったら、どうお思いになりますか」

と中宮がお言いになると、じつと東宮はお顔を見つめてから、
「式部のようですか。そんなことはありませんよ」

とお笑いになった。たよりない御幼稚さがおかわいいそうで、
「いいえ。式部は年寄りですから醜いのですよ。そうではなくて、髪なんか式部よりも短くなって、黒い着物などを着て、夜居よいのお坊様のように私はなろうと思うのですから、今度などよりもっと長くお目にかかれませんか」

宮がお泣きになると、東宮はまじめな顔におなりになって、
「長く御所へいらつしやらないと、私はお逢いしたくてならなくなるのに」

とお言いになったあとで、涙がこぼれるのを、恥ずかしくお思い

になつて顔をおそむけになつた。お肩にゆらゆらとするお髪かみがきれいで、お目つきの美しいことなど、御成長あそばすにしたがつた。ただ源氏の顔が一つまたここにできたより思われないのである。お齒が少し朽ちて黒ばんで見えるお口に笑みえをお見せになる美しさは、女の顔にしてみたいほどである。こうまで源氏に似ておいでになることだけが玉の瑕きずであると、中宮がお思いになるのも、取り返しがたい罪で世間を恐れておいでになるからである。

源氏は中宮を恋しく思いながらも、どんなに御自身が冷酷であつたかを反省おさせする気で引きこもっていたが、こうしていればいほど見苦しいほど恋しかつた。この気持ちきもちを紛らそうとして、ついでに秋の花野もながめがてらに雲林院へ行つた。源氏の母君きりの桐壺つばの御息所みやすどころの兄君の律師りっしがいる寺へ行つて、経を読んだり、仏勤めもしようとして、二、三日こもっているうちに身にしむことが多かつた。木立ちは紅葉もみぢをし始めて、そして移ろうていく秋草の花の哀れな野をながめていては家も忘れるばかりであつた。学僧だけを選んで討論をさせて聞いたりした。場所が場所であるだけ人生の無常さばかりが思われたが、その中でなお源氏は恨めしい人に最も心を惹かれてひいる自分を発見した。朝に近い月光のもとで、僧たちがあ伽かを仏に供える仕度したくをするのに、からからと音をさせながら、菊とか紅葉とかをその辺いっばいに折り散らしている。こんなことは、ちよつとしたことではあるが、僧にはこんな仕事があつて退屈を感じる間もなかるうし、未来の世界に希望が持てるのだと思うとうらやましい、自分は自分一人を持てあましていないかなどと源氏は思っていた。律師が尊い声で「念仏衆生ねんぶつしゆじやう撰取せんしゆ不捨ふしや」と唱なえて勤行しんぎやうをしているのがうらやましくて、この世が自分に捨てえられない

理由はなかるうと思うのといっしょに紫の女王にょおうが気がかりになった
というのは、たいした道心でもないわけである。幾日かを外で暮ら
すというようなことをこれまで経験しなかった源氏は恋妻に手紙を
何度も書いて送った。

「#ここから1字下げ」

出家ができるかどうかと試みているのですが、寺の生活は寂しくて、
心細さがつのるばかりです。もう少しいて法師たちから教えてもら
うことがあるので滞留しますが、あなたは どうして いますか。

「#ここで字下げ終わり」

などと檀紙に飾り気もなく書いてあるのが美しかった。

「#ここから2字下げ」

あさぢふの露の宿りに君を置きて四方よもの嵐あらしぞしづ心なき

「#ここで字下げ終わり」

という歌もある情のこもったものであったから紫夫人も読んで泣
いた。返事は白い式紙しきしに、

「#ここから2字下げ」

風吹けば先まづぞ乱るる色かはる浅茅あさぢが露にかかるささがに

「#ここで字下げ終わり」

とだけ書かれてあった。

「字はますますよくなるようだ」

と独言ひとりごとを言って、微笑しながらながめていた。始終手紙や歌を書

き合っている二人は、夫人の字がまったく源氏のに似たものになっていて、それよりも少し艶えんな女らしいところが添っていた。どの点からいっても自分は教育に成功したと源氏は思っているのである。齋院のいられる加茂はここに近い所であったから手紙を送った。女房の中將あてのには、

「#ここから1字下げ」

物思いがつのつて、とうとう家を離れ、こんな所に宿泊していますことも、だれのためであるかとはだれもご存じのないことでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

などと恨みが述べてあった。当の齋院には、

「#ここから2字下げ」

かけまくも畏かしこけれどもそのかみの秋思ほゆる木綿ゆふだすき褌かかな

「#ここから1字下げ」

昔を今にしたいと思ひましてもしかたのないことですね。自分の意志で取り返しうるもののように。

「#ここで字下げ終わり」

となれなれしく書いた浅緑色の手紙を、榊さかきに木綿ゆづをかけ神々しんじゆうしくした枝につけて送ったのである。中將の返事は、

「#ここから1字下げ」

同じような日ばかりの続きます退屈さからよく昔のことを思い出してみるのでございますが、それによってあなた様を聯想れんそうすることもたくさんございます。しかしここでは何も現在へは続いて来ていな

いのでございます、別世界なのですから。

「#ここで字下げ終わり」

まだいろいろと書かれてあった。女王のは木綿ゆうの片はしに、

「#ここから2字下げ」

そのかみやいかがはありし木綿ゆふだすき禪心にかけて忍ぶらんゆゑ

「#ここで字下げ終わり」

とだけ書いてあった。齋院のお字には細かな味わいはないが、高雅で漢字のくずし方など以前よりももっと巧みになられたようである。ましてその人自身の美はどんなに成長していることであろうと、そんな想像をして胸をとどろかせていた。神罰を思わないように。

源氏はまた去年の野の宮の別れがこのころであったと思い出して、自分の恋を妨げるものは、神たちであるとも思った。むずかしい事情が間があればあるほど情熱のたかまる癖をみずから知らないのである。それを望んだのであったら加茂の女王との結婚は困難なことでもなかったのであるが、当時は暢のんき気きにしている、今さら後悔の涙を無限に流しているのである。齋院も普通の多情で書かれる手紙でないものを、これまでどれだけ受けておいでになるかしれないのであつて、源氏をよく理解したお心から手紙の返事もたまにはお書きになるのである。厳正にいえば、神聖な職を持っておいでになって、少し謹慎が足りないともいうべきことであるが。

天台の經典六十巻を読んで、意味の難解な所を僧たちに聞いたりなどして源氏が寺にとどまっているのを、僧たちの善行によってぶつ力りきでこの人が寺へつかわされたもののように思つて、法師の名誉で

あると、下級の輩までも喜んでいた。静かな寺の朝夕に人生を観じては帰ることがどんなにいやなことに思われたかしのれないのであるが、紫の女王一人が捨てがたい絆ほだしになつて、長く滞留せずずきよつに帰ろうとする源氏は、その前に盛んな誦経すきよつを行なつた。あるだけの法師はむろん、その辺の下層民にも物を多く施した。帰って行く時には、寺の前の広場のそこにそうした人たちが集まつて、涙を流しながら見送つていた。諒闇中りょうあんの黒い車に乗つた喪服姿の源氏は平生よりもすぐれて見えるわけもないが、美貌びぼうに心の惹ひかれぬ人もなかつた。

夫人は幾日かのうちに一段ときれいになつたように思われた。高雅に落ち着いている中に、源氏の愛を不安がる様子かの見えるのが可憐かんであつた。幾人かの人を思う幾つかの煩悶はんもんは外へ出て、この人の目につくほどのことがあつたのであろう、「色変はる」というような歌を詠よんできたのではないかと哀れに思つて、源氏は常よりも強い愛を夫人に感じた。山から折つて帰つた紅葉もみぢは庭のに比べるとすぐれて紅あかくきれいであつたから、それを、長く何とも手紙を書かないでいることによつて、また堪えがたい寂しさも感じている源氏は、ただ何でもない贈り物として、御所みよにおいてになる中宮ちゅうぐうの所へ持たせてやつた。手紙は命婦みよつむへ書いたのであつた。

「#ここから1字下げ」

珍しく御所へおはいりになりましたことを伺いまして、両宮様いずれへも御無沙汰ごぶさたしておりますので、その際にも上がつてみたかったです、しばらく宗教的な勉強をしようとその前から思い立っていました、日どりなどを決めていたものですから失礼いたしました。紅葉もみぢは私一人で見えては、錦を暗い所へ置いておく気がして

なりませんから持たせてあげます。よろしい機会に宮様のお目にかけてください。

「#ここで字下げ終わり」

と言うのである。実際珍しいほどにきれいな紅葉であったから、中宮も喜んで見ておいでになったが、その枝に小さく結んだ手紙が一つついていた。女房たちがそれを見つけ出した時、宮はお顔の色も変わって、まだあの心を捨てていない、同情心の深いりつばな人格を持ちながら、こうしたことを突発的にする矛盾があの人にある、女房たちも不審を起すに違いないと反感をお覚えになって、瓶に挿させて、庇の間の柱の所へ出しておしまいになった。

ただのこと、東宮の御上についてのことなどには信頼あそばされることを、丁寧に感情を隠して告げておよこしになる中宮を、どこまでも理智だけをお見せになると源氏は恨んでいた。東宮のお世話なことごとく源氏がしていて、それを今度に限って冷淡なふうにしてみせては人が怪しがるであろうと思って、源氏は中宮が御所をお出になる日に行った。まず帝のほうへ伺ったのである。帝はちょうどお閑暇で、源氏を相手に昔の話、今の話をいろいろとあそばされた。帝の御容貌は院によく似ておいでになって、それへ艶な分子がいくぶん加わった、なつかしみと柔らかさに満ちた方でましますのである。帝も源氏と同じように、源氏によって院のことを思い出しになった。尚侍との関係がまだ絶えていないことも帝のお耳にはいつていたし、御自身でお気づきになることもないのでなかったが、それもしかたがない、今はじめて成り立った間柄ではなく、自分の知るよりも早く源氏のほうがその人の情人であったのであるからと思召して、恋愛をするのに最もふさわしい二人であるから、や

むをえないともお心の中で許しておいでになつて、源氏をとがめようなどは、少しも思召さないのである。詩文のことで源氏に質問をあそばしたり、また風流な歌の話をおもしろくしたりするうちに、齋宮の下向の式の日のこと、美しい人だったことなども帝は話題にあそばした。源氏も打ち解けた心持ちになつて、野の宮の曙あけぼのの別れの身にしんだことなども皆お話しした。二十日の月がようやく照り出して、夜の趣がおもしろくなつてきたころ、帝は、

「音楽が聞いてみたいような晩だ」

と仰せられた。

「私は今晚中宮が退出されるそうですから御訪問に行つてまいりませう。院の御遺言を承つていまして、だれもほかにお世話をする人もない方でございますから、親切にしてさしあげております。東宮と私どもとの関係からお捨てしておけませんのです」

と源氏は奏上した。

「院は東宮を自分の子と思つて愛するようにと仰せなすつたからね、自分はどの兄弟よりも大事に思つているが、目に立つようにしてもと思つて、自分で控え目になっている。東宮はもう字などもりっぱなふうにお書きになる。すべてのことが平凡な自分の不名誉をあの方が回復してくれるだろうと頼みにしている」

「それはいろんなことを大人のようになさいますが、まだ何と申しても御幼齡ですから」

源氏は東宮の御勉強などのことについて奏上をしたのちに退出して行く時皇太后の兄である藤大納言の息子の頭の弁へんという、得意の絶頂にいる若い男は、妹の女御にょごのいる麗景殿れいけいでんに行く途中で源氏を見かけて、「白虹はくこう日を買けり、太子一懼おぢたり」と漢書の太子丹が刺

客を秦王しんのうに放った時、その天象てんしやうを見て不成功を恐れたという章句をあてつけにゆるやかに口ずさんだ。源氏はきまり悪く思ったがとがめる必要もなくそのまま素知らぬふうで行ってしまったのであった。「ただ今まで御前におりまして、こちらへ上がりますことが深更になりました」

と源氏は中宮に挨拶あいさつをした。明るい月夜になった御所の庭を中宮はながめておいでになって、院が御位みくらいにおいでになったころ、こうした夜分などには音楽の遊びをおさせになって自分をお喜ばせにしたことなどと昔の思い出がお心に浮かんで、ここが同じ御所の中であるようにも思召しがたかった。

「#ここから2字下げ」

九重ここのへに霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな

「#ここで字下げ終わり」

これを命婦みよつぶから源氏へお伝えさせになった。宮のお召し物の動く音などもほのかではあるが聞こえてくると、源氏は恨めしさも忘れてまず涙が落ちた。

「#ここから1字下げ」

「月影は見し世の秋に変はらねど隔つる霧のつらくもあるかな

「#ここで字下げ終わり」

霞かすみが花を隔てる作用にも人の心が現われるとか昔の歌にもあった

ようでございます」

などと源氏は言った。中宮は悲しいお別れの時に、将来のことをいろいろ東宮へ教えて行こうとあそばすのであるが、深くもお心にはいつていないらしいのを哀れにお思いになった。平生は早くお寝みになるのであるが、宮のお帰りあそばすまで起きていようと思召すらしい。御自身を残して母宮の行っておしまいになることがお恨めしいようであるが、さすがに無理に引き止めようともあそばさないのが御親心には哀れであるに違いなかった。

源氏は頭の弁の言葉を思うと人知れぬ昔の秘密も恐ろしくて、尚侍にも久しく手紙を書かないでいた。時雨が降りはじめたころ、どう思ったか尚侍のほうから、

「#ここから2字下げ」

木枯しの吹くにつけつつ待ちし間におぼつかなさの頃も経にけり

「#ここで字下げ終わり」

こんな歌を送ってきた。ちょうど物の身にしむおりからであったし、どんなに人目を避けてこの手紙が書かれたかを想像しても恋人の情がうれしく思われたし、返事をするために使いを待たせて、唐紙のはいつた置き柵の戸をあけて紙を選び出したり、筆を気にしたりして源氏が書いている返事はただ事であるとは女房たちの目にも見えなかった。相手はだれくらいだろうと肱や目で語っていた。

「#ここから1字下げ」

どんなに苦しい心を申し上げてもお返事がないので、そのかいのないのに私の心はすっかりめいり込んでいたのです。

「#ここから2字下げ」

あひ見ずて忍ぶる頃の涙をもなべての秋のしぐれとや見る

「#ここから1字下げ」

心が通うものでしたなら、通っても来るものでしたなら、空も寂しい色とばかりは見えないでしょう。

「#ここで字下げ終わり」

などと情熱のある文字が列つらねられた。こんなふうつらに女のほうから源氏を誘い出そうとする手紙はほかからも来るが、情のある返事を書くにとどまって、深くは源氏の心にしまないものらしかった。

中宮は院の御一周忌をお嘗みになったのに続いてまたあとに法華ほけぎ經の八講を催されるはずでいるいと準備をしておいでになった。

十一月の初めの御命日に雪がひどく降った。源氏から中宮へ歌が送られた。

「#ここから2字下げ」

別れにし今日けふは来れども見し人に行き逢あふほどをいつと頼まん

「#ここで字下げ終わり」

中宮のためにもお悲しい日で、すぐにお返事があった。

「#ここから2字下げ」

ながらふるほどは憂うれけれと行きめぐり今日はその世に逢こふ心地ちして

「#ここで字下げ終わり」

巧みに書こうともしてない字が雅趣に富んだ気高いものに見えるのも源氏の思いなしであろう。特色のある派手な字というのではないが決して平凡ではないのである。今日だけは恋も忘れて終日御父の院のために雪の中で仏勤めをして源氏は暮らしたのである。

十二月の十幾日に中宮の御八講があつた。非常に崇厳な仏事であつた。五日の間どの日にも仏前へ新たにささげられる経は、宝玉の軸に羅の絹の表紙の物ばかりで、外包みの装飾などもきわめて精巧なものであつた。日常の品にも美しい好みをお忘れにならない方であるから、まして御仏のためにあそばされたことが人目を驚かすほどの物であつたことはもつともなことである。仏像の装飾、花机の被いなどの華美さに極楽世界もたやすく想像することができた。初めの日は中宮の父帝の御一菩提のため、次の日は母后のため、三日目は院の御菩提のためであつて、これは法華経の第五巻の講義のある日であつたから、高官たちも現在の宮廷派の人々に斟酌をしていず数多く列席した。今日の講師にはことに尊い僧が選ばれていて「法華経はいかにして得し薪こり菜摘み水一汲み仕へてぞ得し」という歌の唱えられるころからは特に感動させられることが多かった。仏前に親王方もさまざまの捧げ物を持っておいでになつたが、源氏の姿が最も優美に見えた。筆者はいつも同じ言葉を繰り返しているようであるが、見るたびに美しさが新しく感ぜられる人なのであるからしかたがないのである。最終の日は中宮御自身が御仏に結合を誓わせられるための供養になつていて、御自身の御出家のことがこの儀式の場で仏前へ報告されて、だれもだれも意外の感に打たれた。兵部卿の宮のお心も、源氏の大將の心もあわてた。驚きの度をどの

言葉が言い現わしえようとも思えない。宮は式の半ばで席をお立ちになって簾中へおはいりになった。中宮は堅い御決心を兄宮へお告げになって、叡山の座主をお招きになって、授戒のことを仰せられた。伯父君にあたる横川の僧都が帳中に参ってお髪をお切りする時に人々の啼泣の声が宮をうずめた。平凡な老人でさえいよいよ出家するのを見ては悲しいものである。まして何の予告もあそばさず、たちまちに脱履の実行をなされたのであるから、兵部卿の宮も非常にお悲しみになった。参列していた人々も同情の禁ぜられない中宮のお立場と、この寂しい結末の場を拝して泣く者が多かった。院の皇子方は、父帝がどれほど御一愛寵なされたお后であつたかを、現状のお気の毒さに比べて考えては皆暗然としておいでになった。方々は慰問の御一挨拶をなされたのであるが、源氏は最後に残つて、驚きと悲しみに言葉も心も失つた気もしたが、人目が考えられ、やつと気を引き立てるようになしてお居間へ行つた。落ち着かれずに人々がうろつろしたことや、すすり泣きの声もひとまずやんで、女房は涙をふきながらあなたこなたにかたまっていた。明るい月が空にあつて、雪の光と照り合っている庭をながめても、院の御在世のことが目に浮かんできて堪えがたい気のするのを源氏はおさえて、「何が御動機になりました、こんなに突然な御出家をあそばしたのですか」

と挨拶を取り次いでもらった。

「これはただ今考えついたことではなかつたのですが、去年の悲しみがありました時、すぐにそういたしましたのでは人騒がせにもなりませんし、それでまた私自身も取り乱しなどしてはと思ひまして」

例の命婦がお言葉を伝えたのである。源氏は御簾の中のあらゆる

様子を想像して悲しんだ。おおぜいの女の衣摺きぬずりれなどから、身もだえしながら悲しみをおさえているのがわかるのであった。風がはげしく吹いて、御簾くまじりの中の薫香かんとくの落ち着いた黒方香くろほうかの煙も仏前ぶつぜんの名香のにおいもほのかに洩もれてくるのである。源氏の衣服の香もそれに混じって極楽が思われる夜であった。東宮のお使いも来た。お別れの前に東宮のお言いになった言葉などが宮のお心にまた新しくよみがえってくることによつて、冷静であろうとあそばすお気持ちも乱れて、お返事の御挨拶を完全にお与えにならないので、源氏がお言葉ことばを補った。だれもだれも常識を失っているといてもよいほど悲しみに心を乱しているおりからであるから、不用意に秘密のうかがわれる恐れのある言葉などは発せられないと源氏は思った。

「#ここから1字下げ」

「月のすむ雲井をかけたしたふともこのよの闇やみになほや惑はん

「#ここで字下げ終わり」

私にはそう思えますが、御出家のおできになつたお心持ちには敬服けいぷいたされます」

とだけ言つて、お居間に女房たちも多い様子であつたから源氏は捨てられた男の悲痛な心持ちを簡単な言葉にして告げることでもできなかった。

「#ここから1字下げ」

「大方おほかたの憂うれきにつけては厭いとへどもいつかこの世を背そむきはつべき

「#ここで字下げ終わり」

りっぱな信仰を持つようにはいつなれますやら」

宮の御挨拶は東宮へのお返事を兼ねたお心らしかった。悲しみに堪えないで源氏は退出した。

二条の院へ帰っても西の対へは行かずに、自身の居間のほうに一
人ぶ一臥しをしたが眠りうるわけもない。ますます人生が悲しく思わ
れて自身も僧になろうという心の起こってくるのを、そうしては東
宮がおかわいそうであると思ひ返しもした。せめて母宮だけを最高
の地位に置いておけばと院は思召したのであつたが、その地位も好
意を持たぬ者の苦しい圧迫のためにお捨てになることになった。尼
におなりになっては后きさきとしての御待遇をお受けになることもおでき
にならないであろうし、その上自分までが東宮のお力になれぬこと
になつてはならないと源氏は思うのである。夜通しこのことを考え
抜いて最後に源氏は中宮のために尼僧用のお調度、お衣服を作つて
さしあげる善行をしなければならぬと思つて、年内にすべての物を
調べたいと急いだ。王命婦おつみよつばもお供をして尼になつたのである。この
人へも源氏は尼用の品々を贈つた。こんな場合にりっぱな詩歌しいかがで
きてよいわけであるから、宮の女房の歌などが当時の詳しい記事と
ともに見いだせないのを筆者は残念に思う。

源氏が三条の宮邸を御訪問することも気楽にできるようになり、
宮のほうでも御自身でお話をあそばすこともあるようになった。少
年の日から思い続けた源氏の恋は御出家によつて解消されはしなな
つたが、これ以上に御接近することは源氏として、今日考えるべき
ことでなかつたのである。

春になつた。御所では内宴とか、踏歌とつかとか続いてはなやかなこと

ばかりが行なわれていたが中宮は人生の悲哀ばかりを感じておいでになって、後世ごせのための仏勤めに励んでおいでになると、頼もしい力もおのずから授けられつつある気もあそばされたし、源氏の情火から脱のがれえられたことにもお悦よろこびがあつた。お居間に隣となった念誦ねんずの室のほかにも、新しく建築された御堂みどうが西の対の前を少し離れた所にあつてそこではまた尼僧らしい嚴重な勤めをあそばされた。源氏が伺候した。正月であつても来訪者は稀まれで、お付き役人の幾人だけが寂さびしい恰好かっこうをして、力のないふうに事務を取つていた。白馬あまうまの節会せちえであつたから、これだけはこの宮へも引かれて来て、女房たちが見物したのである。高官が幾人となく伺候していたようなことはもう過去の事実になつて、それらの人々は宮邸を素通りして、向かい側の現太政大臣邸へ集まつて行くのも、当然といえれば当然であるが、寂しさに似た感じを宮もお覚えになつた。そんな所へ千人の高官にあたるような姿で源氏がわざわざ参賀に来たのを御覧になつた時は、わけもなく宮は落涙をあそばした。源氏もなんとなく身にしむふうにあたりをながめていて、しばらくの間はものが言えなかつた。純然たる尼君のお住居すまいになつて、御簾みすの縁ふちの色も几帳きちょうも鈍色にびであつた。そんな物の間から見えるのも女房たちの淡鈍色うすにびの服、黄色きつねな下襲したの袖口そでぐちなどであつたが、かえつて艶えんに上品に見えないこともなかつた。解けてきた池の薄氷にも、芽をだしそめた柳にも自然の春だけが見えて、いろいろに源氏の心をいたましくした。「音に聞く松まつが浦島うらしま今日ぞ見るうべ心ある海人あまは住みけり」という古歌を口ずさんでいる源氏の様子が美しかった。

「#ここから2字下げ」

ながめかる海人の住処すまかと見るからにまづしほたるる松が浦島

「#ここで字下げ終わり」

と源氏は言った。今はお座敷の大部分を仏に譲っておいでになつて、お居間は端のほうへ変えられたお住居すまいであつたから、宮の御座と源氏自身の座の近さが覚えられて、

「#ここから2字下げ」

ありし世の名残りなしろだになき浦島に立ちよる波のめづらしきかな

「#ここで字下げ終わり」

と取り次ぎの女房へお教えになるお声もほのかに聞こえるのであつた。源氏の涙がほろほろとこぼれた。今では人生を悟りきつた尼になつている女房たちにこれを見られるのが恥ずかしくて、長くはいずに源氏は退出した。

「ますますごりつばにお見えになる。あらゆる幸福を御自分のものにしていらつしやつたころは、ただ天下の第一の人であるだけで、それだけではまだ人生がおわかりにならなかつたわけで、ごりつばでもおきれいでも、正しい意味では欠けていらつしやるところがあつたのです。御幸福ばかりでなくおなりになつて、深味がおできになりましたね。しかしお気の毒なことですよ」

などと老いた女房が泣きながらほめていた。中宮もお心にいろいろな場合の過去の源氏の面影を思つておいでになつた。

春期の官吏の除目じもくの際にも、この宮付きになつていいる人たちは当然得ねばならぬ官も得られず、宮に付与されてある権利で推薦あそ

ばされた人々の位階の陞叙しょうじょもそのままに捨て置かれて、不幸を悲しむ人が多かった。尼におなりになったことで後の御位みくらいは消滅して、それとともに給封もなくなるべきであると法文を解釈して、その口実をつけて政府の御待遇が変わってきた。宮は予期しておいでになったことで、何の執着もそれに対して持つておいでにならなかつたが、お付きの役人たちにたより所を失つた悲しいふうの見える時などはお心にいささかの動揺をお感じにならないこともなかつた。しかも自分は犠牲になつても東宮の御即位に支障を起こさないように祈るべきであると、宮はどんな時にもお考えになつては専心に仏勤めをあそばされた。お心の中に人知れぬ恐怖と不安があつて、御自身みづかみの信仰によつて、その罪の東宮に及ばないことを期しておいでになつた。そうしてみずから慰められておいでになつたのである。源氏もこの宮のお心持ちを知つていて、ごもつともであると感じていた。一方では家司けいしとして源氏に属している官吏も除目じょくの結果を見れば不幸であつた。不面目な気がして源氏は家にばかり引きこもつていた。左大臣も公人として、また個人として幸福の去つてしまつた今日を悲観して致仕の表を奉つた。帝は院が非常に御信用あそばして、国家の柱石は彼であると御遺言あそばしたことを思召おもしめすと、辞表を御採用になることができなくて、たびたびお返しになつたが、大臣のほうではまた何度も繰り返して、辞意を奏上して、そしてそのまま出仕をしないのであつたから、太政大臣一族だけが榮えに榮えていた。国家の重鎮である大臣が引きこもつてしまつたので、帝も心細く思召されるし、世間の人たちも歎なげいていた。左大臣家の公子たちもりっぱな若い官吏で、皆順当に官位も上りつつあつたが、もうその時代は過ぎ去つてしまつた。三位中將さんみなどもこうした世の

中に気をめいらせていた。太政大臣の四女の所へ途絶えがちに通いは通っているが、誠意のない婿であるということに反感を持たれていて、思い知れというように今度の除目にはこの人も現官のままに置かれた。この人はそんなことは眼中に置いていなかった。源氏の君さえも不遇の歎きがある時代であるのだから、まして自分などはこう取り扱われるべきであるとあきらめていて、始終源氏の所へ来て、学問も遊び事もいっしょにしていた。青年時代の二人の間に強い競争心のあったことを思い出して、今でも遊び事の時などに、一方のすることをそれ以上に出ようとして一方が力を入れるというようなことがままあった。春秋の読経の会以外にもいろいろと宗教に關した会を開いたり、現代にいれられないでいる博士や学者を集めて詩を作ったり、韻ふたぎをしたりして、官吏の職務を閑却した生活をこの二人がしているという点で、これを問題にしようとしている人もあるようである。

夏の雨がいつやむともなく降ってだれもつれづれを感じるころである、三位中将はいろいろな詩集を持って二条の院へ遊びに来た。

源氏も自家の図書室の中の、平生使わない柵の本の中から珍しい詩集を選び出して来て、詩人たちを目だつようにはせず、しかもおおぜい呼んで左右に人を分けて、よい賭物を出して韻ふたぎに勝負をつけようとした。隠した韻字をあてはめていくうちに、むずかしい字がたくさん出てきて、経験の多い博士なども困った顔をする場合に、時々源氏が注意を与えることがよくあてはまるのである。非常な博識であった。

「どうしてこんなに何もかもおできになるのだらう。やはり前生の因に特別なもののある方に違いない」

などと学者たちがほめていた。とうとう右のほうに負けになった。それから二日ほどして三位中将が負けぶるまいをした。たいそうにはしないで雅趣のある檜破子弁当ひわりしが出て、勝ち方に出す賭物かけものも多く持参したのである。今日も文士が多く招待されていて皆席上で詩を作った。階前の薔薇ばらの花が少し咲きかけた初夏の庭のながめには濃厚な春秋の色彩以上のものがあつた。自然な気分の多い楽しい会であつた。中将の子で今年から御所の侍童に出る八、九歳の少年でもしろく笙しょうの笛を吹いたりする子を源氏はかわいがっていた。これは四の君が生んだ次男である。よい背景を持っていて世間から大事に扱われている子であつた。才があつて顔も美しいのである。主客が酔いを催したところにこの子が「高砂たかさじ」を歌い出した。非常に愛らしい。(「高砂の尾上おのへに立てる白玉椿しらたまひつばき、それもがと、ましもがと、今朝咲けさいたる初花あはなに逢はましもを云々」という歌詞である)源氏は服を一枚脱いで与えた。平生よりも打ち解けたふうの源氏はことさらにまた美しいのであつた。着ている直衣のうしも単衣ひとえも薄物であつたから、きれいな肌はだの色が透いて見えた。老いた博士たちは遠くからながめて源氏の美に涙を流していた。「逢はましものを小百合さゆり葉はの」という高砂の歌の終わりのところになって、中将は杯を源氏に勧めた。

「#ここから2字下げ」

それもがと今朝けさ開けたる初花あはなに劣らぬ君がにほひをぞ見る

「#ここで字下げ終わり」

と乾杯の辞を述べた。源氏は微笑をしながら杯を取った。

「#ここから1字下げ」

「時ならで今朝咲く花は夏の雨に萎れにけらし匂ふほどなく

「#ここで字下げ終わり」

すっかり衰えてしまったのに」

あとはもう酔ってしまったふうをして源氏が飲もうとしない酒を
中將は許すまいとしてしていた。席上でできた詩歌の数は多かつ
たが、こんな時のまじめでない態度の作をたくさん列ねておくこと
のむだであることを貫之も警告しているのであるからここには書か
ないでおく。歌も詩も源氏の君を讚美したものが多かった。源氏自
身もよい気持ちになって、「文王の子武王の弟」と史記の周公伝の
一節を口にした。その文章の続きは成王の伯父というのであるが、
これは源氏が明瞭に言えないはずである。兵部卿の宮も始終二条
の院へおいでになって、音楽に興味を持つ方であったから、よくい
つしよにそんな遊びをされるのであった。

その時分に尚侍が御所から自邸へ退出した。前から瘧病にかかっ
ていたので、禁厭などの宮中でできない療法も実家で試みようとし
てであった。修法などもさせて尚侍の病の全快したことで家族は皆
喜んでいた。こんなころである、得がたい機会であると恋人たちは
しめし合わせて、無理な方法を講じて毎夜源氏は違いに行った。若
い盛りのはなやかな容貌を持った人の病で少し瘦せたあとの顔は非
常に美しいものであった。皇太后も同じ邸に住んでおいでになるこ
ろであったから恐ろしいことなのであるが、こんなことあればあ
るほどその恋がおもしろくなる源氏は忍んで行く夜を多く重ねるこ

とになったのである。こんなにまでなつては気がつく人もあつたであらうが、太后に訴えようとはだれもしなかつた。大臣もむろん知らなかつた。

雨がわかには大降りになつて、雷鳴が急にはげしく起こつてきたある夜明けに、公子たちや太后付きの役人などが騒いであなたこなたと走り歩きもするし、そのほか平生この時間に出ていない人もその辺に出ている様子がうかがわれたし、また女房たちも恐ろしがつて帳台の近くへ寄つて来ているし、源氏は帰つて行くにも行かれぬことになつて、どうすればよいかと惑つた。秘密に携わつている二人ほどの女房が困りきつていた。雷鳴がやんで、雨が少し小降りになつたところに、大臣が出て来て、最初に太后の御殿のほうへ見舞いに行つたのを、ちょうどまた雨がさつと音を立てて降り出していたので、源氏も尚侍も気がつかなかつた。

大臣は軽輩がするように突然座敷の御簾みすを上げて顔を出した。

「どうだね、とてもこわい晩だったから、こちらのことを心配していたが出て来られなかつた。中将や宮の亮すけは来ていたかね」

などという様子が、早口で大臣らしい落ち着きも何もない。源氏は発見されたくないということに気をつかいながらも、この大臣を左大臣に比べて思つてみるとおかしくてならなかつた。せめて座敷の中へはいつてからものを言えばよかつたのである。尚侍は困りながらいざり出て来たが、顔の赤くなつていられるのを大臣はまだ病気がまつたく快よくはなつていないのかと見た。熱があるのであらうと心配したのである。

「なぜあなたはこんな顔色をしているのだらう。しつこい物怪もののけだからね。修法しゅうぼうをもう少しさせておけばよかつた」

こう言っている時に、淡お納戸色うすなんどの男の帯が尚侍の着物にまとい
ついできているのを大臣は見つけた。不思議なことであると思つて
いると、また男の懐中紙ふところがみにむだ書きのしてあるものが几帳きちょうの前に散
らかっているのも目にとまった。なんとという恐ろしいことが起こつ
ているのだらうと大臣は驚いた。

「それはだれが書いたものですか、変なものじゃないか。ください。
だれの字であるかを私は調べる」

と言われて振り返った尚侍は自身もそれを見つけた。もう紛らわ
す術すべはないのである。返事のできることもないのである。

尚侍が失心したようになっているのであるから、大臣ほどの貴人
であれば、娘が恥に堪えぬ気がするであらうという上品な遠慮がな
ければならないのであるが、そんな思いやりもなく、気短な、落ち
着きのない大臣は、自身で紙を手で拾った時に几帳すきの隙すきから、なよ
なよとした姿で、罪を犯している者らしく隠れようとせせず、のん
びりと横になっている男も見た。大臣に見られてはじめて顔を夜着
の中に隠して紛らわすようにした。大臣は驚愕きょうがくした。無礼ぶらいだと思つ
た。くやしくてならないが、さすがにその場で面と向かつて怒りを
投げつけることはできなかつたのである。目もくらむような気がし
て歌の書かれた紙を持って寝殿へ行ってしまった。尚侍は気が遠く
なつていくようで、死ぬほどに心配した。源氏も恋人がかわいそう
で、不良な行為によつて、ついに恐るべき糺弾きゅうだんを受ける運命がまわ
つて来たと悲しみながらもその心持ちを隠して尚侍をいろいろに言
つて慰めた。

大臣は思っていることを残らず外へ出してしまわねば我慢のでき
ないような性質である上に老いの癖ひがみも添そつて、ある点は斟酌しんしゃくして

言わないほうがよいなどという遠慮もなしに雄弁に、源氏と尚侍の不都合を太后に訴えるのであった。まず目撃した事実を述べた。

「この畳紙の字は右大将の字です。以前にも彼女は大将の誘惑にかつて情人関係が結ばれていたのですが、人物に敬意を表して私は不服も言わずに結婚もさせようと言っていたのです。その時にはいつこうに気がないふうを見せられて、私は残念でならなかったのですが、これも因縁であろうと我慢して、寛容な陛下はまた私への情誼うきで過去の罪はお許しくださるであろうとお願いして、最初の目的どおりに宮中へ入れましても、あの関係がありましたために公然と女御にょごにはしていただけないことでも、私は始終寂しく思っているのです。それにまたこんな罪を犯すではありませんか、私は悲しくてなりません。男は皆そうであるとはいうものの大将もけしからん方です。神聖な齋院に恋文を送っておられるというようなことを言う者もありましたが、私は信じることはできませんでした。そんなことをすれば世の中全体が神罰をこうむるとともに、自分自身もそのままではいられないことはわかっていられるだろうと思えますし、学問知識で天下をなびかしておいになる方はまさかと思つて疑いませんでした」

聞いておいでになつた太后の源氏をお憎みになることは大臣の比ではなかつたから、非常なお腹だちがお顔の色に現われてきた。

「陛下は陛下であつても昔から皆に軽蔑けいべつされていらつしやる。致仕の大臣も大事がつていた娘を、兄君で、また太子でおありになる方にお上げしようとはしなかつた。その娘は弟で、貧弱な源氏で、しかも年のゆかない人に婚めあわせるために取つておいたのです。またあの人も東宮の後宮こうきゆうに決まつていた人ではありませんか。それだのに誘

惑してしまつてそれをその時両親だつてだれだつて悪いことだと言つた人がありますか。皆大将をひいきにして、結婚をさせたがつておいでになつた。不本意なふうで陛下にお上げなすつたじゃありませんか。私は妹をかわいそうだと思つて、ほかの女御たちにょてに引けを取らせまい、後宮の第一の名譽を取らせてやろう、そうすれば薄情人人への復讐ふくしゅうができるのだと、こんな気で私は骨を折つていたのですが、好きな人の言うとおりになつていけるほうがあの人にはよいと見える。齋院を誘惑しようとかかつていふことなどはむろんあるべきことですよ。何事によらず当代を誑おろつてかかる人なのです。それは東宮の御代みよが一日も早く来るようにと願つていふ人としては当然のことでしょう」

きつい調子で、だれのこともぐんぐん悪くお言いになるのを、聞いていて大臣は、ののしられていふ者のほうがかわいそうになつた。なぜお話ししたろうと後悔した。

「でもこのことは当分秘密にしていただきましよう。陛下にも申し上げないでください。どんなことがあつても許してくださいださるだろうと、あれは陛下の御愛情に甘えていただけだと思う。私がいましめてやつて、それでもあれが聞きません時は私が責任を負います」

などと大臣は最初の意気込みに似ない弱々しい申し出をしたが、もう太后の御一機嫌きげんは直りもせず、源氏に対する憎悪ぞうおの減じることもなかつた。皇太后である自分もいっしょに住んでいる邸内に来て不謹慎きわまることをするのも、自分をいっそう侮辱して見せたい心なのであるうとお思いになると、残念だというお心持ちがつのるばかりで、これを動機にして源氏の排斥を企てようともお思いになつた。

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：小林繁雄

2003年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。